ISSN 0285-5712

紀　要　第36号

（論文）
縄文時代前～中期の長方形大型住居跡における地域色　1～14
－岩手県域の事例検討－　高木　晃

東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物（２）　15～34
金子　昭彦

岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（１）　35～78
－石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、古館Ⅱ遺跡、千苅遺跡資料を中心に－
米田　寛・高橋　静歩・河本　純一・佐々木あゆみ・酒井野々子

東北地方北部出土の施釉陶磁器　79～100
－城柵遺跡における性格の検討－　村田　淳

（研究ノート）
下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡出土掻器の変形過程について　101～106
村木　敬

県内出土の縄文土器胎土について（３）　107～116
河本　純一

三閉伊日記に描かれた鉄山跡　117～128
佐々木清文

（資料紹介）　129～134
軽米町大鳥Ⅰ遺跡墓壙出土の銭貨の成分分析　阿部　勝則

平成29年3月
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

序

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、出土資料の整理と記録保存を目的として調査報告書を刊行してまいりました。

また、これら資料の活用を図るため普及啓蒙事業や考古学関連分野の調査研究にも努めております。昭和 56年以降、研鑽の成果を広く公開するために紀要を刊行してまいりましたが、このたび第36号を発刊する運びとなりました。

本紀要には、論文等８編を収録いたしました。これらは、職員が野外の発掘調査や室内整理、報告書作成などの諸業務の合間に、個々の研究成果をまとめたものであります。本書が学術研究の基礎資料として、また地域史や社会教育の資料として広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、紀要の作成にあたり、ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成29年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　　菅　野　洋　樹

例　　言

1　この紀要は、埋蔵文化財の調査及び研究事業の一環として、考古学及び考古学関連分野の研究を推奨し、考古学をはじめとする学術振興に寄与するとともに、埋蔵文化財保護思想の普及を図ることを目的として作成したものである。

2　本紀要には、論文４編、研究ノート３編、資料紹介１編を収録している。

3　引用図面は、各執筆者がそれぞれ許可を得て掲載している。

4　本年度の編集委員の構成は、次のとおりである。

編集委員　文化財専門員　　北　村　忠　昭

編集委員　文化財専門員　　北　田　　勲

縄文時代前～中期の長方形大型住居跡における地域色

－岩手県域の事例検討－

高　木　　晃

縄文時代前・中期に盛行する長方形大型住居跡について、岩手県域で調査が行われた23遺跡88棟を対象として、個々の遺構が単独で有する属性の比較、集落内部での存在形態の検討を行った。その結果、概ね北緯40°以北に分布する円筒土器文化圏と以南の大木式土器文化圏での差異を確認し、北部では公共的性格、南部では複合居住施設として大型住居跡に異なった役割が与えられていた可能性があることを指摘した。

１．はじめに

縄文時代前期から中期前半にかけての東北地方では所謂長方形大型住居跡が盛行する。通常の住居跡と比較すると特段に大きい規模により、1970年代の発見当初から注目されてきた遺構である。その後岩手県を含む東北地方一円で検出事例が相次ぎ、現時点では500棟を超える数に達するとみられる（註１）。また、奥州市大清水上遺跡、遠野市綾織新田遺跡、秋田県大仙市上ノ山Ⅱ遺跡等、長方形大型住居跡が放射状、環状に配列される集落の存在が明らかとなり、当初から示されてきた「公共施設」「冬季の共同作業所」といった遺構の機能推論（渡辺1975）に加えて、複数世帯が同居する「複合居住施設」であるとする説が主張されている（武藤1989）。

この時代には北緯40°線付近を境界として東北地方を二分する、所謂、円筒土器文化圏と大木式土器文化圏が並立する状況がある。「文化」と称されている通り、両地域の独自性は土器に限らず、石器、土・石製品といった遺物から、集落構造や個々の遺構の特徴等に及び、特に縄文時代前期末頃にその差異が鮮明であるとして差し支えないであろう（岩手県博2005等）。長方形大型住居跡はその地域差を示す一つの要素として浮上してくるものと考える。

本稿では長方形大型住居跡の性格について、一律にどちらかに収斂されるものではなく、多分に地域的な特徴を持ち合わせた施設ではなかったかという仮定のもとに、岩手県域で検出された遺構の分析を行い、南北で異なる様相を示すかどうかの検討を行う。

２．大型住居跡に関する研究史

長方形大型住居跡は岩手県内においても北上市鳩岡崎遺跡をはじめとして、1980年代には内陸部を中心に検出事例が相次いだ。それらの変遷、系列関係の整理が進められ、遺構の性格については渡辺（1975）の所論をベースとして、共同作業の場とする見解が提出されてきた（相原1982、中村1982、三浦1990等）。

これに対し、武藤（1997・1998）は長方形大型住居跡の変遷を整理し類型化を行った上で、複数の炉跡、隔室構造の存在が複数の居住単位を示すこと、加えて東南アジアや北米等におけるロングハウスとの類似性の検討から、縄文時代の長方形大型住居跡は、多家族が居住する「複合居住施設」としての性格を持ったものであると論じた。

こういった大型住居跡の機能に対する論点は石井（1999）が適切に整理している。すなわち「長方形大形住居址に関して（中略）渡辺誠に代表される公共的施設説と、武藤康弘の主張する複合居住家屋説の２説に集約される」。同時に、公共施設とする場合の証明の難しさを指摘し、複合居住施設とする場合にも公共的機能が付加される点を無視できないことに加え、いずれにせよ遺構の時空間的分類整

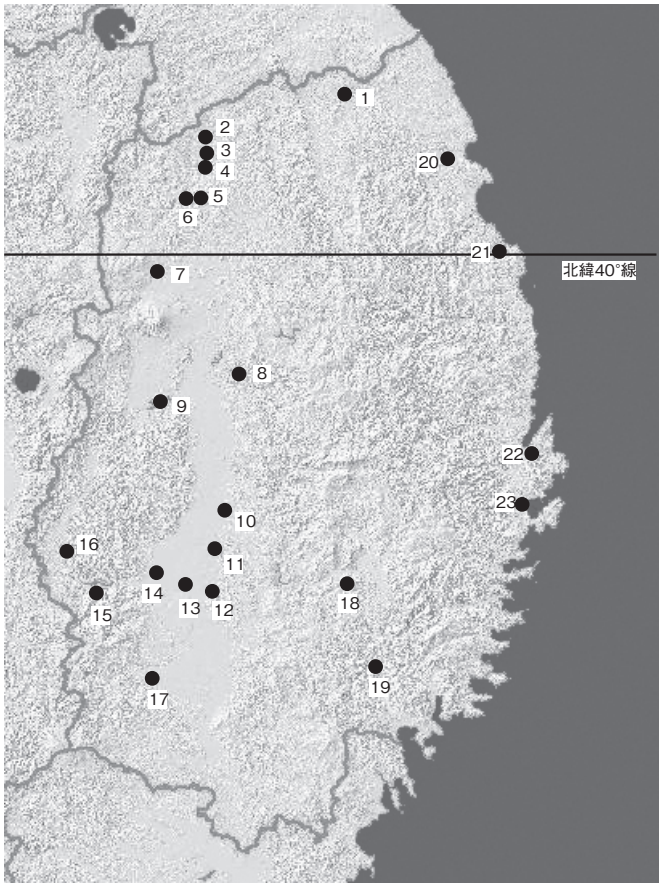
理が不可欠であるとした。

2011年には東北、北海道の大型住居跡を網羅した集成資料が発刊された(北日本縄文文化研究会2011)。長径８ｍ以上の規模を持つ大型住居跡を対象として、統一された記載項目によるデータベースとなっており、大型住居跡に関する議論の土台として極めて有用な資料である。加えて鈴木(2011)は同書に掲載された総論において、これまでの大型住居跡研究の現状に対する問題点を指摘し、特に住居以外の機能については論証が欠落した「思いつき解釈」であると厳しく断じた。また大型住居跡に頻繁に見られる拡張の事例を検討する中で、大家族制が大型住居が作られた背景にあると論じている。言うまでもなく、特定の公共施設的性格を想定した場合にはその立証は極めて難しいものであろうが、大型と小型住居の差異に着目する検討(須原2007、笹森2014等)、及び遺物出土状況の検討によってその糸口を掴める可能性があるものと考える。

３．分析の方法と対象遺構

岩手県内で検出・報告された縄文時代竪穴住居跡の中から、縄文前期初頭～中期中葉(大木８ｂ式段階)までに属する、プラン全長10mを超える88遺構を対象とする(註２)。10mの基準は、このクラスの場合に大型住居跡の持つ特性を備えるものに限定されること、該期の一般的な住居跡との機械的な区分を行う必要があることによる(註３)。

各遺構における次の諸属性についての集計を行った。対象とした属性は、分布、時期、規模、平面形状、柱穴配置、建替痕跡、炉配置、付属施設の各項目である。



№.	遺跡名	所在地（旧市町村名）	出典文献
1	大日向Ⅱ	軽米町	岩手県埋文(1986･1998)
2	荒谷Ａ	二戸市	岩手県埋文(1983)
3	中曽根	二戸市	二戸市教委(1981)
4	上里	二戸市	岩手県埋文(1983)
5	御所野	一戸町	一戸町教委(1993)
6	馬場平２	一戸町	一戸町教委(1983)
7	長者屋敷	八幡平市（松尾村）	岩手県埋文(1980･1982)
8	上八木田Ⅰ	盛岡市	岩手県埋文(1995)
9	塩ヶ森Ⅰ	雫石町	岩手県埋文(1982)
10	高畑	花巻市（石鳥谷町）	岩手県埋文(2004)
11	久田野Ⅱ	花巻市	花巻市教委(2008)
12	横町	北上市	北上市教委(2004･2008)
13	鳩岡崎	北上市（江釣子村）	岩手県教委(1982)･岩手県埋文(1996)
14	蟹沢館	北上市（和賀町）	北上市教委(1993)
15	峠山牧場Ⅰ	西和賀町（湯田町）	岩手県埋文(2000)
16	清水ヶ野	西和賀町（湯田町）	岩手県埋文(2001)
17	大清水上	奥州市（胆沢町）	岩手県埋文(2006)
18	綾織新田	遠野市	遠野市教委(2002)
19	館	住田町	岩手県埋文(2004)
20	外里	久慈市	久慈市教委(2011)
21	力持	普代村	岩手県埋文(2008)
22	赤前Ⅲ	宮古市	岩手県埋文(2016)
23	沢田Ⅰ	山田町	岩手県埋文(2000)

第１図　検討対象遺跡

第１表　遺構一覧

№.	遺跡名	遺構名	時期	長軸規模	短軸規模	平面形	主柱穴	周溝	炉	建て替え	その他
1	大日向Ⅱ	KI-1住	円筒下層a式	14m	6m±	長方形	中央寄り４対以上	あり	地床炉直列３基		テラス状
2	大日向Ⅱ	IJⅣ住	円筒下層d式	20.4m	9m	長方形	中央寄り５対	あり	土器埋設炉１基	６時期以上	並列溝状施設
3	大日向Ⅱ	NⅢ01住	円筒下層b式	13.8m	4.8m	長楕円形	壁際５対	あり	地床炉直列８基	６時期	
4	荒谷Ａ	If50住	大木8b式	18.3m	8m	長楕円形	壁際６対	あり	地床炉・石囲炉直列４基	８時期以上	
5	中曽根	155号址	前期前葉	12.8m	6.6m	長方形	中央３列４対	なし	未検出	なし	
6	中曽根	193号址	前期前葉	11.6m	8.5m	長方形	中央３列４対	なし	未検出	なし	
7	上里	G-16住	円筒上層a式	11m＜	6.6m	長楕円形	中央寄り４対以上	あり	土器埋設炉直列３基	３時期以上	
8	上里	I-19住	円筒下層d式	12m＜	7.5m＜	長楕円形	中央寄り４対以上	あり	未検出	５時期以上	並列溝状施設
9	上里	I-22住	円筒下層d式	13.8m	5.2m	長方形	中央寄り６対以上	あり	地床炉直列３基	３時期	並列溝状施設
10	御所野	GH68-01住	大木8a式	12m	7m	長方形	中央寄り３対	あり	地床炉・石囲炉直列５基		埋設土器２基
11	馬場平２	C3住	大木8b式	12.9m	6.9m	長方形	壁際４対	あり	地床炉直列４基	２時期	
12	馬場平２	C4住	大木8b式	15m	6.6m	長方形	壁際４対	あり	地床炉・石囲炉直列４基	なし	
13	馬場平２	C7住	大木8a式	12.8m	6.6m	長方形	中央寄り３対	あり	土器埋設炉・地床炉直列２基	２時期	
14	馬場平２	C9住	大木8a式	13m	7.7m	長方形	中央寄り３対	あり	地床炉不規則分布２基	２時期	
15	長者屋敷	FⅣ4住	前期前半	11.6m	8m	長方形	壁際５対	あり	地床炉直列	２時期以上	間仕切溝
16	長者屋敷	GⅣ3住	前期前半	13.4m	8.4m	隅丸長方形	壁際４対	あり	地床炉並列14基	６時期以上	
17	長者屋敷	GⅣ4住	前期前半	11m	7m	隅丸長方形	中央寄り５対	なし	地床炉直列５基	なし	
18	長者屋敷	GⅤ2住	前期後葉	12.8m	5.5m	隅丸長方形	中央寄り６対	あり	地床炉直列	なし	
19	長者屋敷	HⅢ12住	円筒下層b式	23m	8.2m	長楕円形		あり	地床炉直列10基以上	１０時期以上	
20	長者屋敷	JⅦ27住	前期末	27m	7.2m	長方形	中央寄り６対以上	なし	地床炉直列10基以上	４時期以上	
21	上八木田Ⅰ	ⅨD3j住	大木6式	10.1m	4.7m	長方形	壁際	あり	地床炉不規則分布８基	なし	
22	塩ヶ森Ⅰ	AD30住	大木7a式	13m	9.3m	楕円形		なし	土器埋設石囲炉		床面埋設土器３基
23	塩ヶ森Ⅰ	AI53-1住	大木6式	13.6m	4.3m	長方形		あり	地床炉１基		
24	塩ヶ森Ⅰ	AI53-2住	大木6式	13m	4.3m	長方形		あり	地床炉１基		
25	塩ヶ森Ⅰ	BI09住		14.3m	6m	長方形	壁際多数	あり	地床炉直列	３時期以上	
26	塩ヶ森Ⅰ	4I住	大木7a式	14.8m	5.2m	隅丸長方形	壁際５対	あり	地床炉・石囲炉直列		
27	塩ヶ森Ⅰ	4J住		13.3m	5.2m	長楕円形	壁際７対	なし	地床炉直列３基		
28	高畑	住居跡1	大木7a式	11.8m	4.6m＜	長方形	壁際？４対	あり	石囲炉直列３基	なし	
29	久田野Ⅱ	20号住	大木8b式	12.9m	11.4m	楕円形	中央寄り３対	あり	石囲炉１基	３時期	
30	横町	SI995	大木6式	14m＜	7.2m＜	長方形	中央寄り５対以上	なし	地床炉直列２基		
31	横町	SI996	大木6式	22m＜	8m＜	長方形	中央寄り８対	あり	地床炉直列３基		
32	横町	SI1027	大木6式	15.3m	3.5m＜	長方形	壁際５対	なし	地床炉不規則分布６基		
33	横町	SI1250	大木6式	24m	7m	長楕円形	壁際７対	あり	地床炉直列３基	３時期	建替縮小
34	横町	SI1259	大木6式	9.5m＜	4.5m＜	長方形	中央寄り４対	あり	地床炉直列５基	２時期	
35	横町	SI1600	大木6式	36m＜	9m＜	長方形	壁際１４対	あり	地床炉直列10基以上	３時期	
36	鳩岡崎	CJ24住	大木6式	23m＜	5m	長方形	壁際７対	あり	地床炉直列		
37	鳩岡崎	DE18住	大木7a式	23m＜	8.5m	長方形	中央寄り８対以上	あり	地床炉直列	５時期以上	テラス状
38	鳩岡崎	SI10住		15m＜	4m＜	隅丸長方形		あり	未検出	２時期	テラス状
39	鳩岡崎	SI13住	大木5式	25m＜	7m±	隅丸長方形	中央寄り７対	あり	地床炉直列９基	３時期	間仕切溝
40	蟹沢館	SI004	大木4式	10.6m	6.2m	長楕円形	壁際	なし	地床炉直列３基		
41	蟹沢館	SI011	大木3式	14.9m	6m	長楕円形	壁際	なし	地床炉不規則分布５基		
42	蟹沢館	SI013	大木6式	11.4m	6.3m＜	長楕円形	壁際	なし	地床炉直列９基		
43	峠山牧場Ⅰ	RA04住	大木6式	14m＜	4.7m	長方形	壁際５対	あり	地床炉１基		
44	峠山牧場Ⅰ	RA05住	大木6式	8.7m＜	5.4m	長方形	中央寄り	あり	地床炉直列３基	２時期以上	
45	峠山牧場Ⅰ	RA07住	大木6式	6.2m＜	4.6m	長方形	壁際	あり	地床炉直列４基	２時期	間仕切溝
46	峠山牧場Ⅰ	RA09住	大木6式	8.8m＜	4.6m	隅丸長方形	壁際	あり	地床炉直列５基		間仕切溝
47	清水ヶ野	2号住	大木6式	3.6m＜	5.2m	長方形	壁際	あり	地床炉１基		
48	清水ヶ野	3号住	大木6式	2.9m＜	3.5m	長方形	壁際	あり	地床炉１基		
49	大清水上	101号住	大木5式	16.6m＜	7.4m	長楕円形	中央寄り５対	あり	地床炉直列６基		テラス状
50	大清水上	102号住	大木6式	12.4m	5.9m	長楕円形	中央寄り４対	なし	地床炉直列３基	２時期	テラス状
51	大清水上	201号住	大木5式	17.4m	5.1m	長楕円形	中央寄り８対	なし	地床炉直列８基	２時期	テラス状
52	大清水上	202号住	大木5式	20.8m	5.8m	長方形	壁際５対	なし	地床炉直列４基	３時期	
53	大清水上	205号住	大木5式	16.2m	5.9m	長楕円形	壁際５対	あり	地床炉直列４基	３時期	
54	大清水上	207号住	大木5式	16.3m	5.7m	長方形	壁際８対	あり	地床炉直列９基	３時期	土玉一括出土
55	大清水上	301号住	大木5式	12.6m	6m	長方形	壁際５対	あり	地床炉直列４基	２時期	
56	大清水上	302号住	大木5式	9.8m	5.2m	長方形	壁際５対	あり	地床炉直列４基	２時期	
57	大清水上	303号住	大木5式	12.1m	6m	隅丸長方形	壁際５対	あり	地床炉直列４基	２時期	
58	大清水上	304号住	大木5式	14.2m＜	5.8m	長方形	壁際５対	あり	地床炉直列４基	２時期	
59	大清水上	305号住a	大木5式	16.7m	5.6m	長方形	壁際５対	あり	地床炉直列４基		
60	大清水上	305号住b	大木5式	10.6m	5.5m	長方形	壁際５対	あり	地床炉直列４基		
61	大清水上	401号住	大木5式	12.6m	5.5m	長方形	壁際６対	あり	地床炉直列２基	２時期	
62	大清水上	414号住	大木5式	13.1m	6.2m	長楕円形	壁際５対	あり	地床炉直列８基	３時期	
63	大清水上	421号住	大木5式	15.2m	5.8m	長方形	中央寄り６対	あり	地床炉直列５基	３時期	

No.	遺跡名	遺構名	時期	長軸規模	短軸規模	平面形	主柱穴	周溝	炉	建て替え	その他
64	大清水上	429号住	大木5式	11.5m	4.5m	長楕円形	壁際４対	あり	地床炉直列４基		
65	綾織新田	1号住	大木2a式	10m	4.5m	長方形	中央寄り８対	あり	地床炉直列４基	３時期	
66	綾織新田	2号住	前期中葉	13m	5.2m	長方形	中央寄り８対	あり	地床炉直列２基	３時期	
67	綾織新田	3号住	前期前葉	12.6m	6.2m	長方形	中央寄り８対	あり	地床炉直列連続	６時期	
68	綾織新田	5号住	前期前葉	10.8m	4.9m	長方形	中央寄り８対	あり	地床炉直列連続	２時期	
69	綾織新田	8号住	大木4式	10.2m	4.4m	長方形	中央寄り４対	あり	地床炉直列３基	２時期	
70	綾織新田	9号住	前期中葉	14.4m	5m	長方形	中央寄り４対	あり	地床炉不規則分布６基	２時期	
71	綾織新田	10号住	大木4式	13m	5.5m	長方形	中央寄り６対	あり	地床炉直列５基	２時期	
72	綾織新田	11号住	前期前葉	10m	4.8m	長方形	中央寄り４対	あり	地床炉不規則分布４基	２時期	
73	綾織新田	13号住	前期前葉	12.5m	5m	長方形	中央寄り６対	あり	地床炉並列５基	２時期	
74	館	SI18住	大木5式	12.5m	4.8m	長方形	中央寄り多数	あり	地床炉不規則分布５基		
75	館	SI23住	大木5式	11m＜	4.7m＜	長方形	中央寄り多数	あり	地床炉不規則分布２基		
76	館	SI24住	大木5式	10m	3.7m	長方形	中央寄り多数	あり	地床炉１基		
77	館	SI27住	大木5式	13m＜	5m	長方形	中央寄り多数	あり	地床炉直列５基	２時期	
78	外里	RA010住	大木8b式	11m±	6.9m	長楕円形	壁際５対	あり	石囲炉・地床炉不規則分布５基		
79	力持	BⅡd11住1～6号	中期前～中葉	11m＜	6.3m＜	隅丸長方形	中央寄り	あり	土器埋設石囲炉・石囲炉直列４基	６時期	
80	力持	CⅢc1住1号	中期前～中葉	11m＜	7m	隅丸長方形	壁際	あり	土器埋設石囲炉１基	４時期	
81	力持	CⅢe2住2号	中期前～中葉	12.4m	5.6m	長方形	中央寄り５対	あり	未検出	２時期	
82	力持	BⅡt22住1～4号	前期前～中葉	18m	5.8m	長方形	壁際６対	あり	地床炉直列10基以上	８時期	間仕切溝
83	力持	CⅡa23住1号	前期前～中葉	10m＜	4m	長方形	壁際４対	あり	地床炉直列３基	３時期	
84	赤前Ⅲ	SI01住	大木6～7a式	13.6m	5.2m	長楕円形	壁際５対	あり	地床炉直列２基	５時期	間仕切溝、テラス状、棟持柱
85	沢田Ⅰ	RA116住	大木2式	20m	8m	長方形	中央寄り９対	あり	地床炉直列10基以上	５時期	
86	沢田Ⅰ	RA201住	大木2式	11m＜	5m	長方形	壁際多数	あり	地床炉並列８基		
87	沢田Ⅰ	RA202住	大木2式	19m＜	5m	長方形	壁際多数	あり	地床炉不規則分布３基	２時期以上	石槍一括出土
88	沢田Ⅰ	RA211住	前期初頭	11m＜	4m	長方形	壁際・中軸線上多数	あり	地床炉１基	２時期以上	

対象遺跡の分布は第１図に示した通り、内陸部の馬淵川流域、北上川流域の南北に連なる低地帯に集中するが、近年の調査で三陸沿岸部や北上山地の盆地、河谷沿いに立地する遺跡が増加しつつある。今回は前述の地域差を抽出する目的から、北緯40°線付近を境界として南北に二分する。なお、境界に位置する長者屋敷遺跡、力持遺跡は、前期末段階において円筒土器を主体的に出土する遺跡として捉えていることにより北部に含めた。対象とした遺構の一覧を第１表に、また代表的な遺構の平面図を第２・３図に掲載した(註４)。

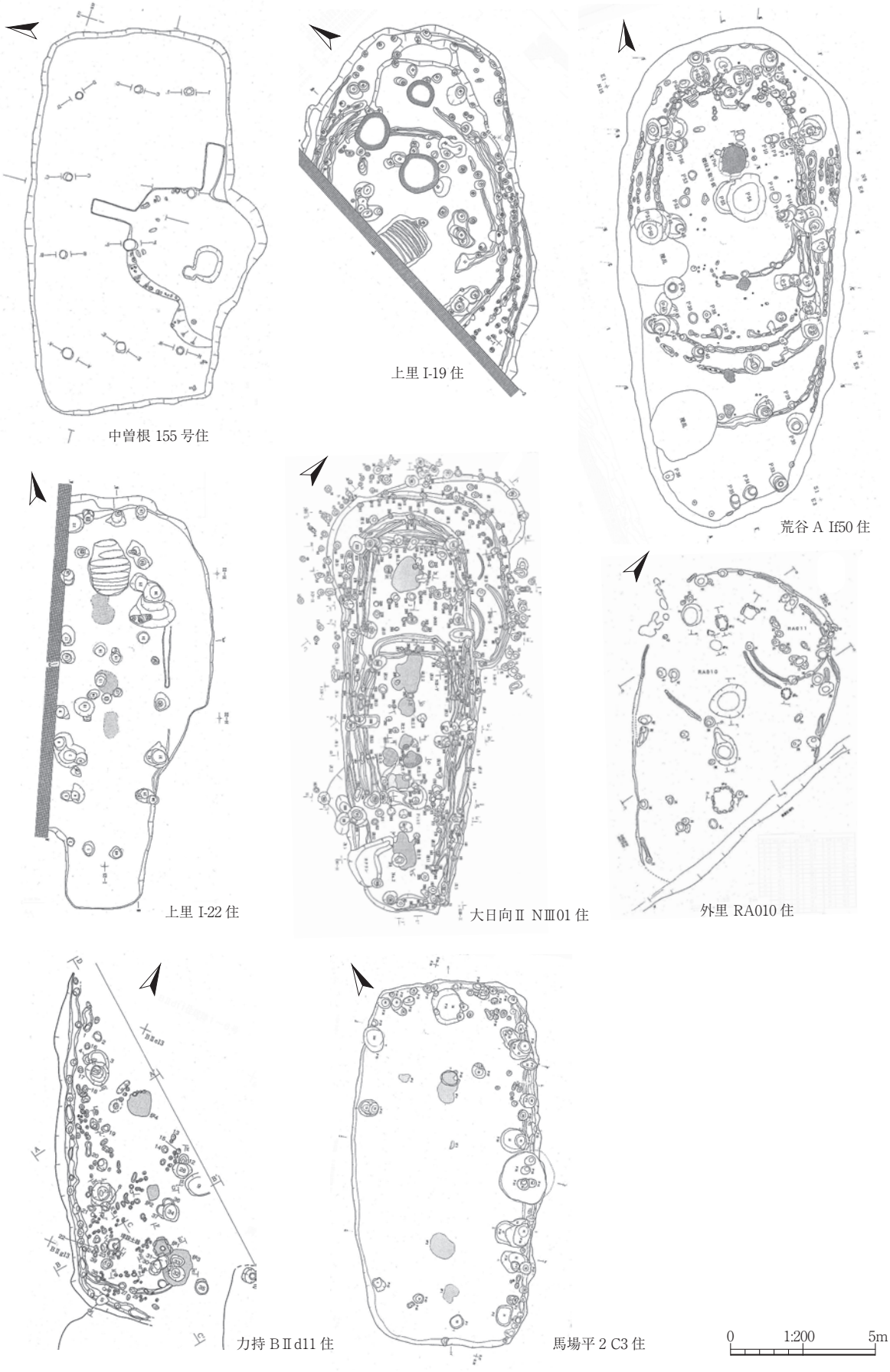
４．遺構属性の検討

(1) 規模

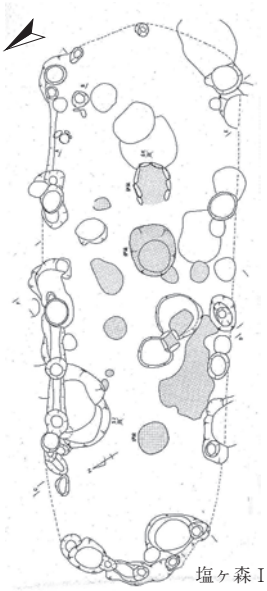
長軸方向の全長と最大幅を第４図①にプロットした。全長の数値は概ね10～15mの範囲に集中しており、全長値の分布状況を見る限り、18～20mを超すものは「特大型」と表現できる。このうち横町遺跡ＳＩ1600住(No.35)のみ飛び抜けて長大な規模を持つが、特大型でも概ね25m以下の範囲に収まるようである。全長と最大幅の長幅比率は一定せず、全長が10m台前半の数値であっても20m超であっても、最大幅はほぼ５～８m程度に収まる状況であり、全体規模を拡大する場合には長軸方向を広げる仕組みによってなされていることがうかがえる。

長幅の比率に関しては地域差を見い出すことができる。県南部では最大幅４～６m付近にある住居跡が多く、県北部では６～８m付近に集中する。最大幅の平均値は県南部で5.85m、県北部で6.93mとなっており、全長に比して北部では幅が広いという傾向を指摘できる。

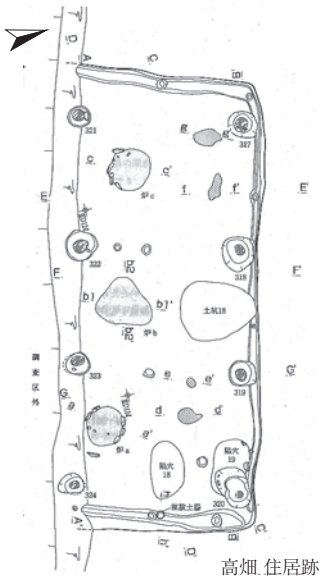
同じグラフを用いて長幅比率の時期的変化傾向を示す(第４図②)。一見して、前期前半段階から後半段階に向けて長軸方向へ拡大、中期に入って再び縮小するという大きな変化を辿ることが示されている。やや詳しく見ると、前期前半の県北部では中曽根遺跡193号址(No.６)、長者屋敷遺跡ＧⅣ３住(No.16)等といった、全長15m以下で最大幅６～８m程度という、規模の割に幅が広い遺構が複数まとまる。これらと時期的に併行するとみられる県南部綾織新田遺跡１～３号住(No.65～67)等では、全長がほぼ



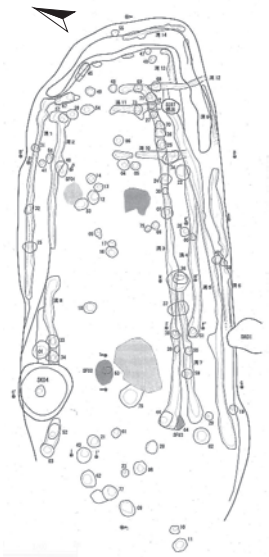
第２図　北部地域大型住居跡



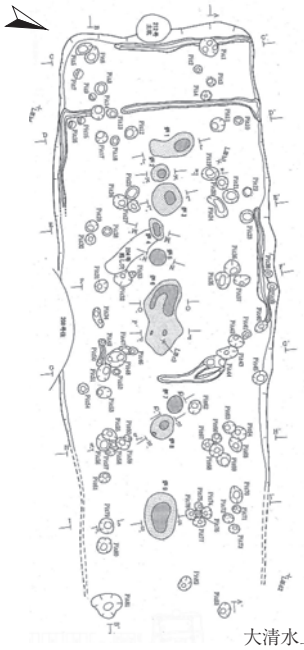
塩ヶ森Ⅰ 4I 住



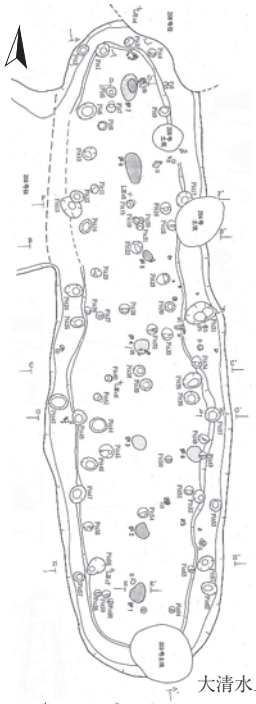
高畑 住居跡 1 号



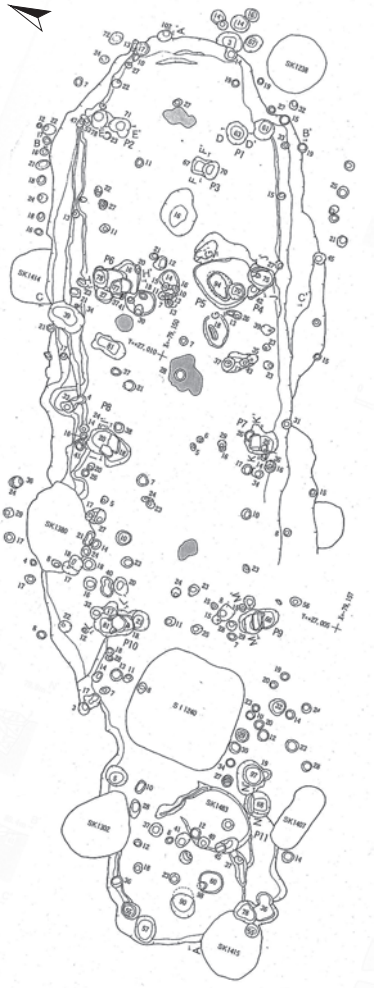
赤前Ⅲ SI01 住



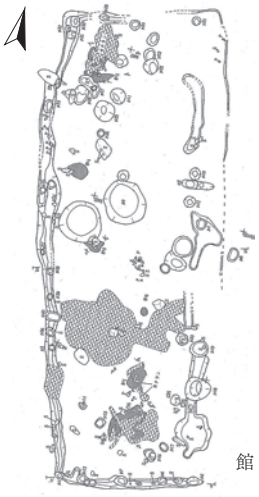
大清水上 207 号住



大清水上 201 号住



横町 SI1250 住



館 SI18 住

館 SI27 住

第３図　南部地域大型住居跡

等しい規模ながら、最大幅が５ｍ程度の数値を取るものが多く、県北部と比較して長幅比が大きいことが特徴となっている。前期後半に至り、南北の差はやや解消するものの全体としてはやはり県北部の方が若干幅広の傾向にある。中期段階では県南部の久田野Ⅱ遺跡20号住(№29)、塩ヶ森Ⅰ遺跡ＡＤ30住(№22)が突出して幅広の数値となるが、他は前期までと同様に県北部の住居跡が幅広タイプであるという傾向を指摘できる。久田野Ⅱ20号住は大木８ｂ式段階の遺構であり、これ以降の竪穴住居が複式炉を伴う円形、楕円形基調の形態に変化する様相を示すものと考えられる。

⑵　平面形

規模に関する分析と重複する部分もあるが、ここでは特に全体の形状に着目する。長方形大型住居跡の名称が示す通り、全体としては長方形を基調とする点は共通しており、長辺と短辺の平面形、またコーナーの平面形状により、長楕円形、隅丸長方形等のバリエーションに細分される状態と捉えられる。県南部に多い形状は、長辺が直線的でほぼ平行し、両端でも幅がさほど変わらないタイプが一般的であるのに対し、県北部では上里遺跡Ⅰ-19住(№８)等のように長辺が曲線的で、遺構中央に最大幅を持つ長楕円形タイプが目立つように見受けられる(註５)。また、館遺跡ＳⅠ18住(№74)、大清水上遺跡207号住(№54)といった、四隅が直角に近く曲がる長方形タイプは県南部に多い形状であり、宮城県嘉倉貝塚(宮城県教委2003)等の東北地方南部との関連が想定される特徴である。

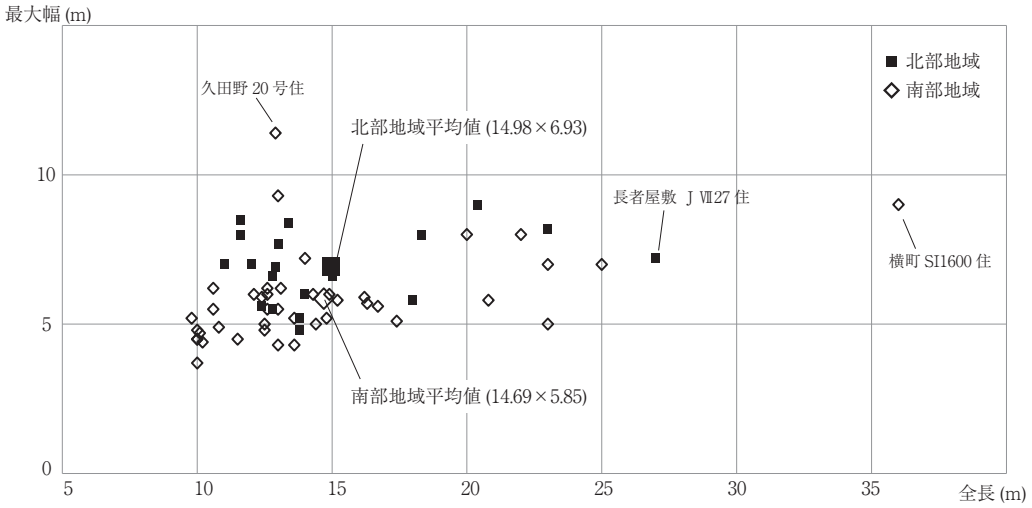
⑶　主柱穴配置

長方形大型住居跡の主柱穴は、中軸線を挟み線対称に配置される、梯子形の配置パターンが主流であることが特徴とされてきた。今回の集計によっても主柱穴が判明する住居跡ではこの配置が大多数を占めている。同一地点での重複が著しい住居跡では対の構成が明確にできないものもあるが、基本的には同様であると考えられる。

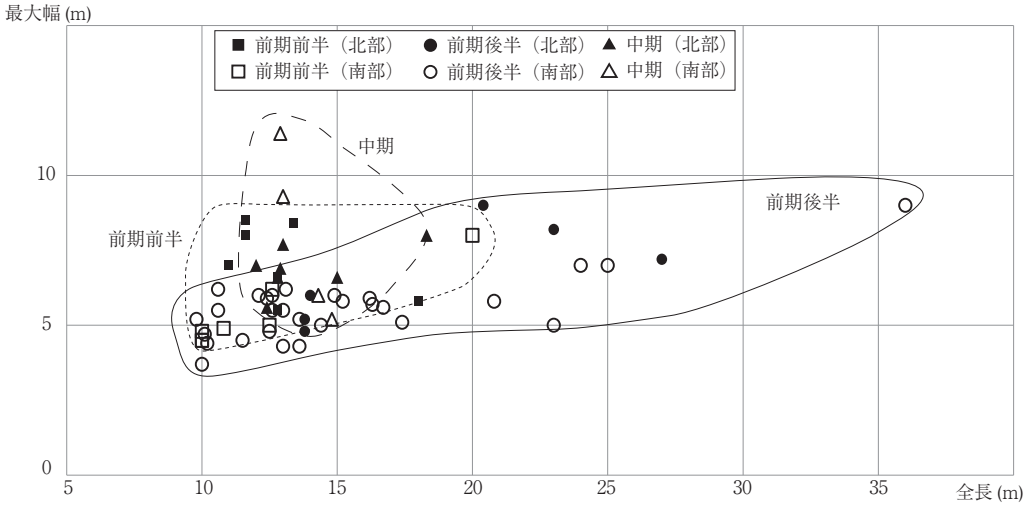
主柱穴が掘られる位置では、壁際に設けられる遺構、中央寄りに設けられる遺構の２通りがある。この点について、柱穴上端と住居壁の立ち上がりの間隔が50㎝を超すかどうかで２分し、壁際と中央寄りの区分を行った(第６図③)。全体で見れば拮抗した状況と捉えられるが、地域別に見ると北部地域では中央寄りが過半数、一方南部地域では壁際が過半数という逆転した結果となっている。全体形状が幅広となる遺構が多い北部、比較して幅が狭い遺構が多い南部という地域差を反映したものと見られる。

⑷　建て替え

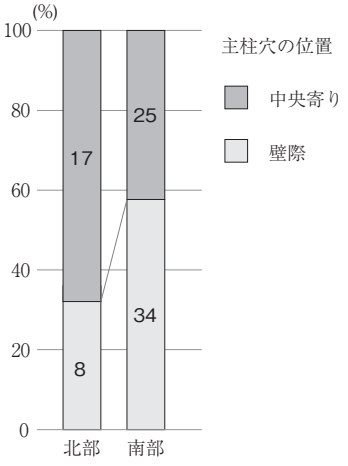
周溝が同一位置に複数掘られている場合、あるいは主柱穴が同一位置で複数切り合うケースについて、同一地点で拡張もしくは縮小の建て替えが行われているものと認識し､84棟について建て替えの最小回数を集計した(第４図④)。建て替えが行われた痕跡が全く見られない遺構は合計７棟にとどまり、全体の１割に満たない。１～２回の建て替えが行われている遺構が最も多く、合計37棟で44％に達する。３回以上の建て替えが行われ４時期分の建物が同一箇所で重複する遺構数については、北部地域では全体の４割を占めており、最大では長者屋敷遺跡ＨⅢ12住(№19)のように10回を超す建て替えが想定される住居跡が含まれている。これに対し、南部地域では鳩岡崎遺跡ＤＥ18住(№37)、綾織新田遺跡３号住(№67)、赤前Ⅲ遺跡ＳⅠ01住(№84)といった少数の事例を例外として、大部分は建て替えが２回までにとどまる傾向を指摘できる。この点は南北差の顕著な部分であると把握することができる。



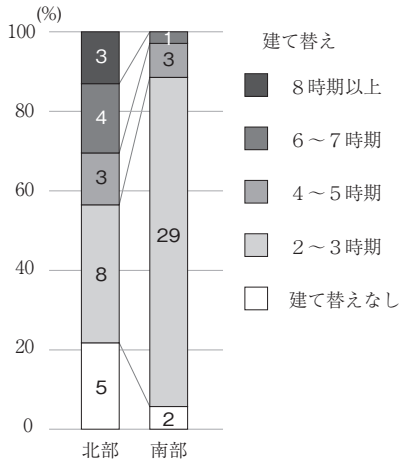
① 地域別遺構規模



② 時期別遺構規模

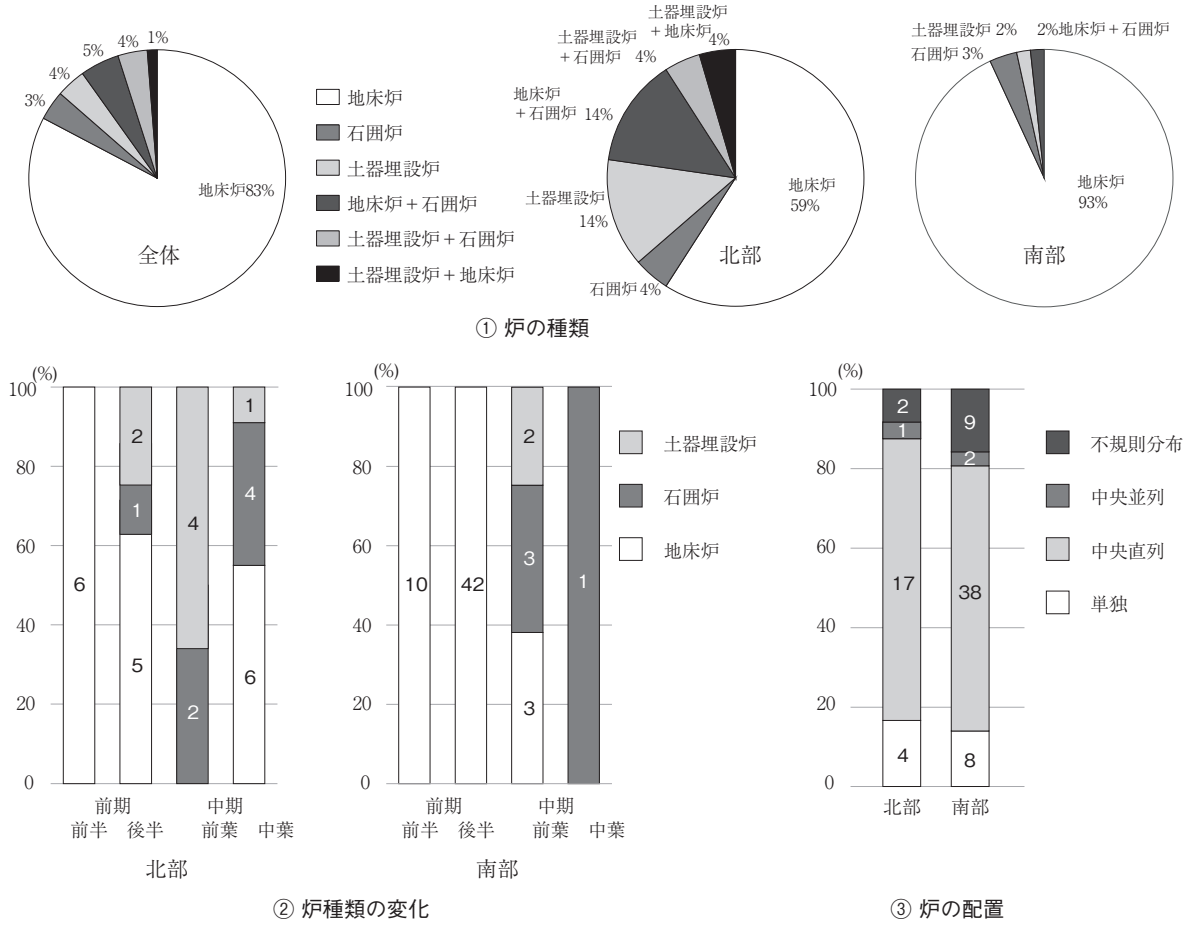


③ 地域別主柱穴配置



④ 地域別建替パターン

第４図　遺構分析(1)



第５図　遺構分析(2)

(5)　炉

全体として見れば、長方形大型住居跡では中軸線上に直列して複数の炉が配置される事例が多いのが特徴である。炉の種類には、地床炉、石囲炉、土器埋設炉、石囲内の土器埋設炉等の複数の種類があるが、全体を通じてみると地床炉が設置される住居跡が８割以上となっている(第５図①)。また地床炉と石囲炉、地床炉と土器埋設炉等、複数の種類の炉が同一の住居跡に設けられる事例が少数認められる。このケースは中軸線上の一方に石囲炉、もう一方に地床炉が配置される御所野遺跡ＧＨ68-01住(№10)、荒谷Ａ遺跡Ⅰｆ50住(№４)等を典型例として、県北部の中期段階を特徴付けるものと見なされる。

地域別に炉の種類を集計すると、北部では地床炉が約６割、その他の種類の炉や複数の組み合わせからなる住居跡が一定割合を占めるのに対し、南部では95％が地床炉のみを持つ住居跡という結果が得られる(第５図①)。特に横町遺跡、大清水上遺跡、綾織新田遺跡といった多数の長方形大型住居跡で構成される県南部の前期段階集落遺跡では、ほぼ全ての住居跡で直列する複数の地床炉が検出されており、地床炉の割合を引き上げる要因となっている。

炉種類の構成割合について時代別に変化を辿った結果では、県北部では前期後半段階に石囲炉、土器埋設炉が出現し、中期に入ると地床炉を凌駕する状態となるが、県南部では中期になってから石囲炉、土器埋設炉が作られるようになるという違いが見受けられる(第５図②)。地床炉以外の形態につ

いては県北部で先行して採用された状況と受け取れる。

住居跡内部での炉の配置については、前述のように中軸線上に沿って複数の炉が直列に配置される事例が南北ともに主流となっており、際だった地域差は認められない(第５図③)。不規則分布としたものの中には、同一地点での建て替えが行われ中軸線がずれたことにより、見かけ上炉の配置が直列しない状態となったものが含まれると考えられる。

⑹ 付属施設

付属施設として周溝(壁溝)、間仕切り構造、テラス状遺構等について検討を行った。周溝は74棟(84％)で検出されている。地域差、時代による変化は特に見出せない。周溝の有無は必ずしも規模とは相関せず、検出の困難さにも起因する可能性があるかもしれない。一方、同時代の小型の住居跡においては、周溝を伴う割合が大型住居跡より少ないと考えられることから、大型住居跡の構造から必然的に周溝が設けられたのではないかと考えられる。間仕切り構造は、溝が横断するものとして長者屋敷遺跡ＦⅣ４住(№15)、鳩岡崎遺跡ＳⅠ13住(№39)等６棟で検出されているが、他にも柱穴列で構成される間仕切りが設けられていた可能性がある。

テラス状遺構は鳩岡崎遺跡ＤＥ18住(№37)、横町遺跡ＳⅠ1600住(№35)、大清水上遺跡101号住(№49)等12棟で検出されている。このうち大日向Ⅱ遺跡ＫⅠ-1住(№１)以外の11棟は県南部の遺構であり、分布の偏在を指摘できる。

他に、床面中央部で長１～２ｍ、幅50㎝、深さ10㎝程の浅い溝が一定範囲の中で複数並列し、洗濯板状を呈する「並列溝状施設」が大日向Ⅱ遺跡ⅠⅠⅣ住(№２)、上里遺跡Ⅰ-19住(№８)、同Ⅰ-22住(№９)で検出されている。いずれも中軸線上に位置し、軸線と直交する溝の向きである点が共通する。この施設の具体的機能は明らかになっていないが、前期末段階の県北部に分布する大型住居跡に特有の施設であることは言えるだろう。

５．集落内での長方形大型住居跡

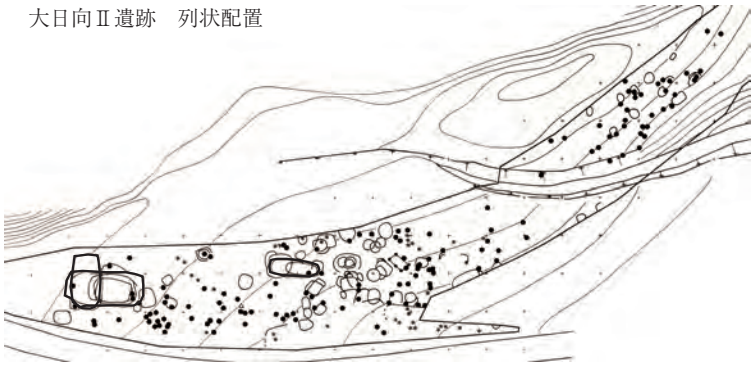
記載してきた長方形大型住居跡が、集落の中でどのように配置され、ひいては集落構成がどういうあり方を示すかについて考えてみたい。

まず、調査事例の多い前期後葉～中期前葉で比較すると、県北部では少数の長方形大型住居跡が列状に配置され、この周囲に通常規模の住居跡が展開する構成が一般的となる。内陸の大日向Ⅱ遺跡、上里遺跡、沿岸部の力持遺跡等に典型的に見られる。またこれは、同じ円筒土器文化圏に所在する秋田県北米代川流域や青森県域と共通する集落のあり方と見て差し支えないと考えられる。

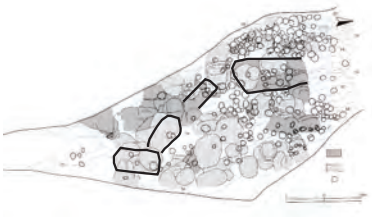
一方、県南部の内陸地域では長方形大型住居跡複数が集落中央の遺構空白域を中心として環状に配置される事例が特徴的である。典型的な大清水上遺跡、綾織新田遺跡をはじめとして、蟹沢館遺跡、峠山牧場Ⅰ遺跡でも同様の配置構成が取られている状態と見受けられる。隣接地域では秋田県南雄物川流域、山形県最上川流域、仙台平野との共通性が高く、大木式土器文化圏に通有のあり方と考えられる。

ただし、同地域に立地する鳩岡崎遺跡では、大木６式段階と大木７ａ式段階にそれぞれ単独の長方形大型住居跡と、その周囲に展開する少数の小型住居跡、多数の貯蔵穴群によって構成される点でこれらとは異なる構造を持っていたことに注意したい。鳩岡崎遺跡の集落構成については既に調査報告書において、共同作業による植物質食料の処理を主眼として営まれた可能性について示唆されており(相原1982)、また武藤(1998)も秋田県杉沢台遺跡と共に、貯蔵機能が極度に発達した時期の様相を示

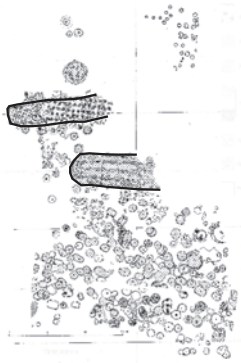
大日向Ⅱ遺跡　列状配置



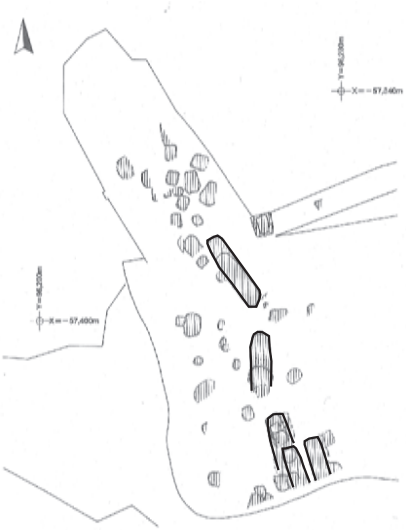
力持遺跡　列状配置



鳩岡崎遺跡　単独配置



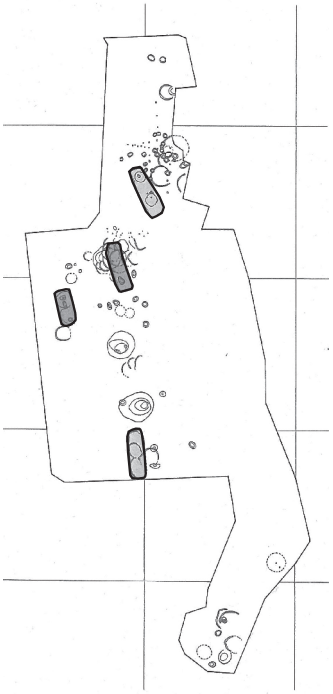
沢田Ⅰ遺跡　列状配置



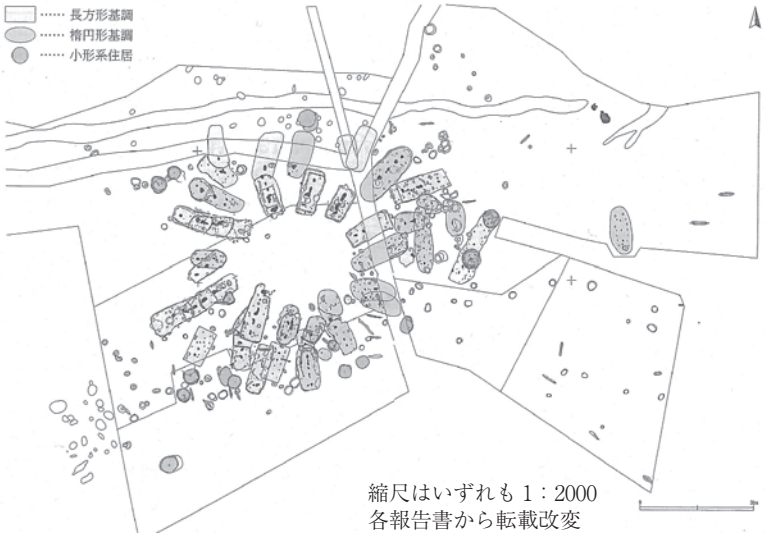
峠山牧場Ⅰ遺跡　環状配置

蟹沢館遺跡　環状配置

館遺跡　列状配置



大清水上遺跡　環状配置



縮尺はいずれも 1：2000
各報告書から転載改変

第６図　集落構成

すとしている。少なくとも鳩岡崎遺跡の遺構配置については、環状構造からの変化、大木３～５式段階の集落構成が大木６式段階に至り変化した状況が現れているものなのか、それとも県北部との関連を見いだすべきものなのか、検討を深める必要がある。

内陸部とは異なり、同じ県南部でも沿岸地域では異なる様相を見せる。館遺跡、沢田Ⅰ遺跡では長方形大型住居跡が直列の配置となり、県北部と同様の集落構造と捉えられる。いずれも比較的狭い谷底の平坦地にあるため、地形的な制約が影響している可能性も考えられるが、環状の配置が全く不可能な立地ではない。ここではひとまず、沿岸南部の地域的な特徴と捉えておきたい。

６．南北の地域差

前節までに記載してきた個々の遺構属性や集落構造における地域性については以下のようにまとめられる。

まず、規模・形状では各時期を通じて県北部ほど大きい数値を取り幅広の傾向にあること、これが平面形の違いに現れていること、柱穴の配置では県南部ほど主柱穴が壁際に設置される傾向が強いこと、建て替えの頻度は県南部に比較し北部ほど頻繁に行われたこと、炉の種類は県北部ほどバラエティーに富んでいることといった差異を確認した。加えて集落構造では小型住居跡に混じって少数の大型住居跡が列状配置を取る県北部と沿岸県南部、多数の大型住居跡が環状に配置される内陸県南部という顕著な違いがある。

また共通点として、長軸長15m付近を境界に規模が２分されること、主柱穴は中軸線を挟む対の配置となること、炉の配置は中軸線上に直列するものが大多数を占めること等が挙げられる。

上記の差異が何に起因しているのか。一つには冒頭で述べたように長方形大型住居跡に与えられた役割、機能の違いがあるのではないかと推測している。北部の特徴である同一地点での建て替えの多さ、幅が広く主柱穴と壁面の間に更に空間を持つ構造、多数の小型住居に混じって長方形大型住居が建てられていたという点から、これらは複合居住施設とするよりも共同施設、もしくは公共的性格を持った施設であったとするのが妥当ではなかろうか。未だ少数の事例しか発見されていないが、並列溝状施設の存在は、何らかの共同作業を行う目的で設置された可能性があると推測される。

一方、県南部内陸地方では、同規模の住居跡が同時併存、なおかつ集落中央の広場を中心とした配置が特徴であり、これは武藤(1998等)が論証したように複合居住家屋の可能性が高い施設と考えられる。ただし、単なる居住施設ではなく、北部と同様に共同施設的な機能も吟味すべきであろう。

両者の違いは、各種遺物、遺構に現れた円筒、大木両文化圏の独自性が、一見同じように見える長方形大型住居跡にも具現化されているものと見なしたい。

今回は、遺構の使用・居住に直結する属性と考えられる、床面の使用痕跡、炉の使用頻度、遺物出土状況についての検討が適わなかった。いずれも遺構の遺存度に左右されるものであり、また果たしてそこで行われた活動を示す指標となり得るかどうか、方法論としての困難性も想定されるが、隣接地も含めて考察を進めていきたいと考える。

本稿の作成にあたり以下の方々から御教示、御配慮をいただきました(順不同、敬称略)。文末になりますが記して感謝申し上げます。

佐々木勝　星雅之　佐藤淳一　須原拓　村田淳

註

⑴　2007年度までに報告された大型住居跡の集成（北日本縄文文化研究会 2011）では北海道道南と東北地方６県で合計 933 棟に及ぶ長径８ｍを超す竪穴住居跡がリストアップされているが、このうち長方形大型住居跡に限っても６割、500 棟を超す数になるとみられる。

⑵　2015年度までに報告書が発刊された遺跡に限定する。

⑶　長方形を呈する住居跡の全長を比較した場合には、全長５ｍ程度の通常規模の住居跡から 10 ～ 20 ｍ規模の大型住居跡まで連続的にプロットされ、明確な規模の断絶は見出し難いのが現状と捉えている。前述の集成（北日本縄文文化研究会 2011）や近年の論文では長径８ｍ以上を大型住居跡として区分する場合が多いが（武藤 1998、須原 2007 など）、ここではより大型住居跡の特徴を明確にする意図で全長 10 ｍ以上とした。

⑷　紙面の都合により一部しか掲載できなかったものである。各遺構の事例については北日本縄文文化研究会（2011）にまとめられているので合わせて参照されたい。なお、遺構図掲載の選択は任意である。

⑸　両端の幅と中央付近の幅の比率によって示すべきであろうが、今回は分析を果たせていない。

引用・参考文献

＜論文等＞

相原康二　　1982「所謂大型住居跡について」『江釣子村鳩岡崎遺跡　遺物・要約・分析鑑定結果編』岩手県第 70 集

阿部勝則・須原　拓　2011「岩手県の大型住居集成」『北日本縄文時代大型住居集成』p.283-371 北日本縄文文化研究会

石井　寛　　1999「縄文時代文化研究の成果と展望 (1) 遺構研究 大形住居址と大形建物跡」『縄文時代』第 10 号第 4 分冊 p.131-138

岩手県立博物館　2005『縄文北緯 40° －前・中期の北東北－』第 54 回企画展展示図録

小川　望　　1985「縄文時代の大形住居について (その１) －その定義と機能をめぐる若干の考察－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 4 号 p.189-214

小川　望　　1989「縄文時代の大形住居について (その２) －定義と機能に関する続論－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 7 号 p.95-113

北日本縄文文化研究会　2011『北日本縄文時代大型住居集成』

笹森健一　　2014「大型住居に伴う小型住居について」『土曜考古』第 36 号 p.65-94

菅谷通保　　1987「縄文時代特殊住居論批判 －「大形住居」研究の展開のために－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 6 号 p.155-166

鈴木克彦　　2011「縄文文化の大型住居の研究概説」『北日本縄文時代大型住居集成』p.1-26 北日本縄文文化研究会

須原　拓　　2007「縄文時代前期の大形住居について－大木式土器文化圏の事例を中心に－」『紀要』ＸＸⅥ p.25-42（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

中村良幸　　1982「大形住居」『縄文文化の研究』第 8 巻 p.134-146 雄山閣出版

三浦謙一　　1990「住まいの大きさ－大型住居跡の場合－」『季刊考古学』第 32 号 p.25-27

武藤康弘　　1989「複合居住家屋の系譜」『考古学徒民族誌 渡辺仁教授古希記念論文集』p.95-122 六興出版

武藤康弘　　1997「縄文時代前・中期の長方形大型住居の研究」『住の考古学』p.13-35 同成社

武藤康弘　　1998「縄文時代の大型住居－長方形大型住居の共時的通時的分析－」『縄文式生活構造』p.130-191 同成社

渡辺　誠　　1975『縄文時代の植物食』雄山閣出版

＜報告書＞　　※埋蔵文化財センター：「埋文」 教育委員会：「教委」と略　報告書シリーズ名称省略

一戸町教委　1983『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』第 4 集

一戸町教委　1993『御所野遺跡Ⅰ』第 32 集

岩手県教委　1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ＸＶ－２（江釣子村鳩岡崎遺跡)』第 70 集

岩手県埋文　1980『松尾村長者屋敷遺跡（Ⅰ)』第 12 集

岩手県埋文　1981『松尾村長者屋敷遺跡（Ⅱ)』第 20 集

岩手県埋文　1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡』第 31 集

岩手県埋文　1983『上里遺跡発掘調査報告書』第 55 集

岩手県埋文　1983『荒谷Ａ遺跡発掘調査報告書』第 57 集

岩手県埋文　1986『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第 100 集

岩手県埋文　1995『上八木田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第 227 集
岩手県埋文　1996『鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書』第 240 集
岩手県埋文　1998『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第６～８次調査－』第 273 集
岩手県埋文　2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第 318 集
岩手県埋文　2000『峠山牧場Ⅰ遺跡Ｂ地区発掘調査報告書』第 320 集
岩手県埋文　2001『清水ヶ野遺跡発掘調査報告書』第 351 集
岩手県埋文　2004『館遺跡発掘調査報告書』第 432 集
岩手県埋文　2004『高畑遺跡発掘調査報告書』第 439 集
岩手県埋文　2006『大清水上遺跡発掘調査報告書』第 475 集
岩手県埋文　2008『力持遺跡発掘調査報告書』第 510 集
岩手県埋文　2016『赤前Ⅲ遺跡発掘調査報告書』第 650 集
北上市教委　1993『蟹沢館遺跡発掘調査概報』第 14 集
北上市教委　2004『横町遺跡（縄文時代遺構図版編）』第 60 集
北上市教委　2008『横町遺跡（縄文時代本文編）』第 90 集
久慈市教委　2011『外里遺跡発掘調査報告書』第１集
遠野市教委　2002『新田Ⅱ遺跡』第 13 集
二戸市教委　1981『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
花巻市教委　2008『久田野Ⅱ遺跡－平成５年度～ 13 年度発掘調査報告書－』第６集
宮城県教委　2003『嘉倉貝塚』第 192 集

東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物(2)

金　子　昭　彦

東北地方・縄文時代晩期の土偶関連遺物のデータ・ベース化の続きである。悉皆調査の前提として、時期組成について見通しをつけるため、前稿から、時期の限られた遺跡を資料化しているが、今回は、砂沢式期の遺跡(第４表)、次いで、その他の時期の限られた遺跡の資料(第５表)を扱い、ここまでのまとめを行った。晩期初頭、晩期前葉、晩期中～後葉、弥生時代前期末を画期として、「関連遺物」が僅少多様→岩版主体→土版主体→動物形突起のように時期組成が変化することがわかった。また、岩手県盛岡市付近を境に北と南で様相が異なることが分かったが、今後の検討による部分が大きい。

１．はじめに

本稿は、土偶関連遺物として、“顔・人体らしきものを持つ遺物”、具体的には、土面、人体・人面付土器、岩偶、線刻礫・岩版、土版、正中線中空土版、美々４型中空動物形土製品、動物形土製品を悉皆的に収集することを目的とし、手始めとして、時期の限られた遺跡の資料を収集している。本稿の(1)は、『岩手県立博物館研究報告』第33号に掲載したが(金子　2016a)、第34号が予算の関係で印刷されなくなったので本誌に掲載していただいた(註１)。

２．表の見方(補足)

収集要領、記載要綱は、(1)と同じで、金子(2010a)冒頭で示したものを基本とする。前稿で扱わなかった点を以下に補足しておく。

番号(No.)は、第１表からの通し番号である。表内の遺跡は、同じ時期で同じ県の場合は概ね北～南に並べ、県は、青森→岩手→秋田→宮城の順に示している。前回資料として現れてこなかったので収集対象に明記しなかったが、動物形土製品の一種として動物形突起も含める。時期の欄。“砂併”は“砂沢式併行期”、“青木？”は“青木畑式？”“谷起古”は“谷起島式古段階”の略である。

掲載箇所欄で文献名を引用する際、発行機関・発行年(西暦)で示しているが、発行年は下二桁のみを記し、発行機関は、次のように略称している。○○県の教育委員会→県教、○○県の埋蔵文化財センター→県埋、○○県立博物館(青森県立郷土館含む)→県博、○○市町村の教育委員会→○○(市町村名)、二文字以上の市町村教育委員会、それ以外の機関→機関名の最初の二文字(財団法人等は除いて)。例えば、田舎館村→田舎、江釣子村→江釣である。ただし、弘前大学は弘大、八戸遺跡調査会は八調と略した。

図番号は、通しで示されている場合には、「○図△」の「○図」は原則として省略し、そうでなくても枠をはみ出す場合は略記した。備考欄で類例を引用した際の数字は、本稿(1)～の表番号である。

３．砂沢式併行期を中心とした遺跡

砂沢式併行期とは、東北地方北部太平洋側では、大洞Ａ´式新期～青木畑式期に相当するものである。前稿で述べたように(p.41)、この時期の単純に近い遺跡は多いが、「関連遺物」が出土している遺跡は少ない。これらは、表には示せないが、当該期の時期組成を考える上で重要な意味を内包している可能性が高いので、ここに紹介しておく。

青森県青森市沢山(1)遺跡では、晩期後葉～末の土器がまとまって出土し、主体は大洞 A2～A´式古期にある(青森山田高等学校　1994)。土偶４～５点出土し、石製品の出土はない。

青森県むつ市江豚沢遺跡では、弥生時代前期末砂沢式併行期の集落跡が確認された(高瀬編2012)。「埋土などからは、大洞A´式や二枚橋式の出土もみられた」とあるが(報告書抄録)、報告書中に確認できなかった。土偶６点、刺突文系土偶形容器に類似する土製品１点、石剣類２点出土している。

青森県八戸市櫛館遺跡では、弥生時代前期末の集落跡が検出されているが、当該期の土・石製品の出土はないようである(青森県教育委員会　2003)。弥生時代後期の竪穴住居跡も検出され、晩期前葉土器も出土し、弥生時代中期土器の出土は比較的多い。

岩手県二戸市中穴牛遺跡(二戸市埋蔵文化財センター　2012)は、105.3㎡の調査で全体に敷衍できるか分からないが、ほぼ青木畑式期の単純遺跡の可能性がある。完形に近い類遠賀川系土器が出土している。土・石製品は、玉類のみで17点、掲載された完形品16点では、石製丸玉(緑色)15、土製丸玉１点、石製の２点を除いて土坑墓あるいは埋設土器から出土している。

岩手県軽米町玉川向遺跡で、縄文時代晩期末～弥生時代前期末の集落跡が検出されている((財)岩手県文化振興事業団　2004)。精製土器は少なめで、当該期の土・石製品は、土偶２点のみである。

岩手県洋野町平内Ⅱ遺跡(洋野町教育委員会　2015)Ｃ区から２棟の竪穴住居跡が隣接して検出されている。粗製土器がほとんどだが、片方は前期末、もう片方は中期初頭と、建て替えてもう１棟に移った可能性が高い。遺構外からも出土土器は少なく、ほぼ粗製土器のみである。１点大洞Ａ１式土器の台の可能性のある破片があるが(報告書：第61図132)、本稿の対象時期では、弥生時代前期末以降にほぼ限られるようである。当該期の土・石製品の出土はない。

岩手県軽米町宮沢遺跡でも弥生時代前期末青木畑式期の竪穴住居跡が検出されているが((財)岩手県文化振興事業団　2001)、土器自体非常に少なく、当該期の土・石製品もないようである。

岩手県久慈市平沢Ⅰ遺跡では、晩期末大洞A´式古期の竪穴住居跡が１棟検出されている(久慈市教育委員会　2002)。遺跡全体で33,479㎡が調査されているが((財)岩手県文化振興事業団　1988、1996、久慈市教育委員会　1994、2002)、前後の時期を含めてもこれ１棟のみであり、当該期の遺構外出土土器もほとんどなく(久慈市教育委員会　2002：第133図79～第134図84、第161図３)、土・石製品の出土もない。晩期後葉大洞Ａ１式土器が１点見られる(久慈市教育委員会　2002：第161図１)。弥生時代後期の住居状遺構が２棟検出され、遺構外も含め出土土器は晩期末より多い((財)岩手県文化振興事業団　1988、久慈市教育委員会　2002)。

岩手県野田村蒲沢遺跡でも、弥生時代前期末の集落跡が検出されている(野田村教育委員会　2015)。東日本大震災に伴う集団移転事業に係る調査で、飛鳥～奈良時代の集落跡と重複していることもあるのか、土器も含め当該期の出土遺物は極めて少ないが、杓子形土製品の破片が１点出土している。

岩手県盛岡市向田遺跡では、弥生時代前期末(青木畑式期中心)の集落跡が検出されているが(盛岡市教育委員会　2003)、当該期の土・石製品の出土はないようである。晩期(大洞BC２～Ａ１式期)の土器はそれほど多くないが(報告書：第24図57～60、第47図83～89)、弥生時代中(報告書：第27図95、第48図)～後期の土器片は比較的多い。

岩手県宮古市向新田Ⅲ遺跡((公財)岩手県文化振興事業団　2016b)では、弥生時代前期末を主体とする集落跡(竪穴住居11棟)が検出されている。縄文時代前期集落跡と重複し、出土土器は、青木畑式新期～谷起島式古期も比較的多く見られ、大洞Ａ１式？(報告書：第33図137、第37図208)、大洞A´式古期(同：第29図69、第30図73、74、第38図218)も出土している。砂沢式土器の搬入品も認められるが(同：第29図64)、土・石製品は、石剣類の破片２点しかない(同：第45図350、351)。

岩手県宮古市上村貝塚では、弥生時代前期末～中期初頭？(青木畑式期中心？)の集落跡が検出され

ている(（財）岩手県文化振興事業団　1991)。当該期の土・石製品として、有角石斧(独鈷石？)１点、環状石斧(「石製紡錘車」)１点、碧玉製管玉１点出土している。資料収集対象期では、ほかに大洞Ｃ２～Ａ１式土器片が比較的多く出土しており、報告書第186図１の土製耳栓も、この時期に帰属すると思われる。弥生時代中期前葉土器片は僅かである(報告書：第145図17､18、第149図65､66)。

岩手県宮古市赤前Ⅳ八枚田遺跡(宮古市教育委員会　1999a)で、大洞Ａ´式新期の竪穴住居跡１棟検出されている。調査面積1,980㎡、古代の集落跡を主とし、弥生時代後期の竪穴住居跡も検出された。弥生時代前期の土器は少量で、後期よりも少ない。こうした状況によるものか、当該期の土・石製品は全く確認されない。

岩手県宮古市千鶏Ⅳ遺跡(宮古市教育委員会　1999b)では、弥生時代前期末の集落跡が検出された。縄文時代前～中期、後期前葉等との複合遺跡である。縄文時代晩期～弥生時代では、晩期中葉、弥生時代中期、後期土器も見られるが、弥生時代前期末が主体で、中でも青木畑式土器がほとんどを占める。しかし、弥生時代前期末の土・石製品は少ない。刺突文系の土偶３点以外は、縄文時代前期の可能性が高い欠損した石剣１点程度である(報告書：第70図22)。本遺跡は、近年(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが調査している。まだ報告書は刊行されていないが、弥生時代に関しては見るべき成果はないようである(（公財）岩手県文化振興事業団　2015：p.121､2016a：p.67)。

岩手県山田町沢田Ⅰ遺跡では、弥生時代前期末の集落跡が検出された(（財）岩手県文化振興事業団　2000)。中期初頭らしき土器も見えるが(報告書：第330図９、第331図４、９､10)、青木畑式期の単純に近い資料である。年度ごとに記述が分かれ、土器や土製品についてはまとめもなく、石製品についても非常に簡単なものしかないので把握しにくいが、当該期の土・石製品の出土はないようだ。

岩手県北上市物見崎遺跡では、弥生時代前期末(大洞Ａ´式新期に限定？)の集落跡が検出されている(（財）岩手県文化振興事業団　1990)。当該期の土・石製品は、土偶３点のみである(金子　2015a：第７表3687～3689)。弥生時代後期の土器片も僅かながら出土している。

岩手県北上市立花館遺跡では、弥生時代前期末土器のまとまりが見られ、該期の土偶２点出土しているが、その他の関連遺物の出土はない(（財）岩手県文化振興事業団　2010)。

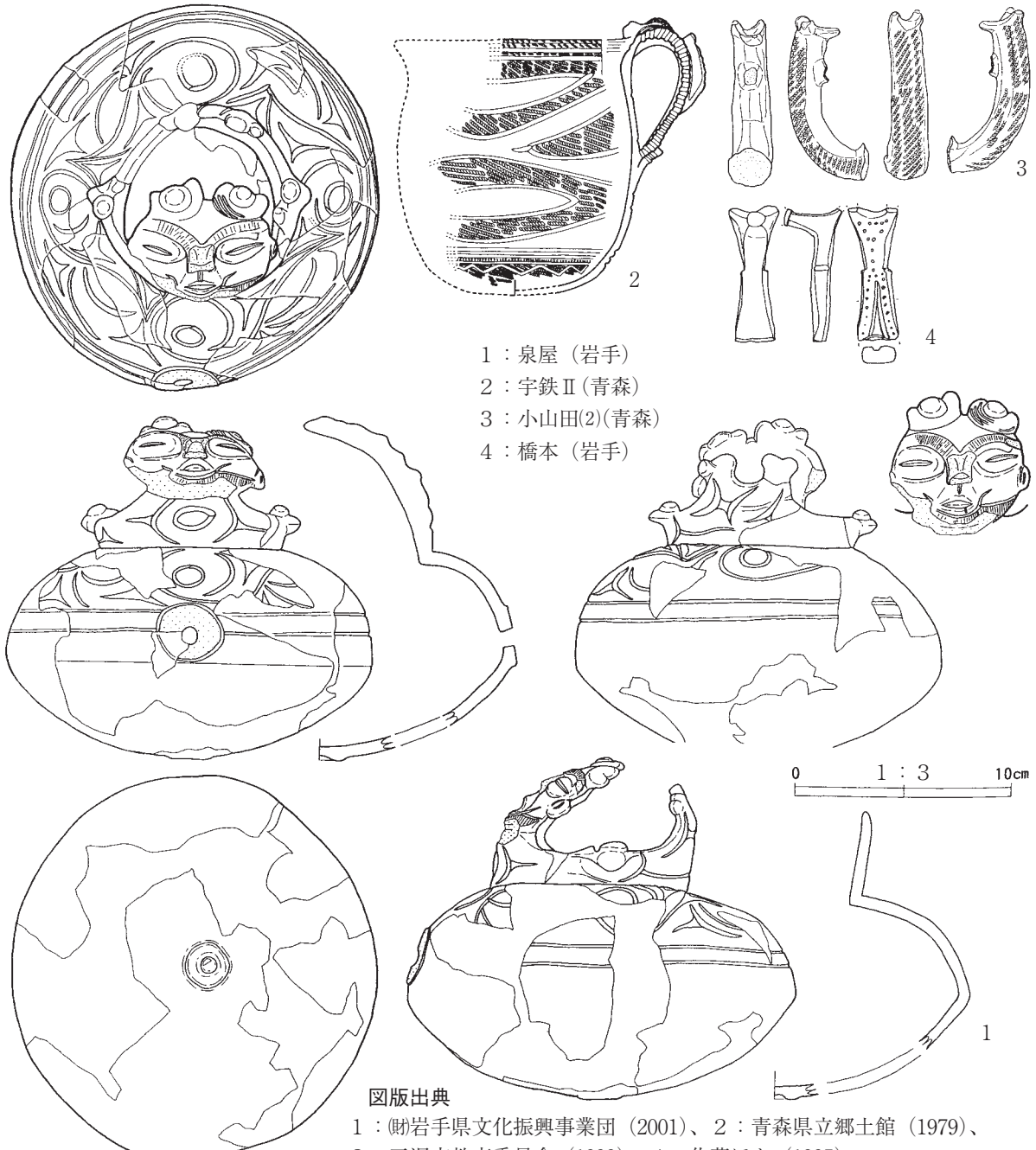
岩手県北上市立花南遺跡では、弥生時代前期末土器のまとまりが検出されている(（公財）岩手県文化振興事業団　2014)。青木畑式の単純なまとまりに近いが、１点大洞Ａ´式古期の土器が出土している(報告書：第20図148)。土偶８点、環状石製品１点、蛇紋岩の管玉１点、石棒未成品６点出土している。以前の調査では、晩期中～後葉土器も出土している(報告書：p.57)。

岩手県北上市境遺跡では、晩期末～弥生時代前期末の集落跡が検出され(（財）岩手県文化振興事業団　2010)、弥生時代後期の集落跡も検出された(（財）岩手県文化振興事業団　2009)。晩期末～弥生時代前期末の土・石製品では、土偶４点(金子　2015a：第７表3830～3833)のほかに不定形の土製品があるが定かでない(（財）岩手県文化振興事業団　2010：第44図236､237など)。石製管玉(（財）岩手県文化振興事業団　2010：第46図272)、石製平玉(同273)も、当該期の可能性が高い。石剣類の破片らしきもの(（財）岩手県文化振興事業団　2009：第94図377)１点も当該期か。資料収集対象期では、このほか、大洞 BC2式(（財）岩手県文化振興事業団　2009：第77図203､204)、大洞Ｃ１式(（財）岩手県文化振興事業団　2010：第80図372)、弥生時代中期前葉(（財）岩手県文化振興事業団　2009：第78図217)土器が出土しているが僅かである。

岩手県遠野市平倉観音遺跡では、弥生時代前期末青木畑式の土器がまとまって出土し(（財）岩手県文化振興事業団　2003)、中期初頭の土器も見られる(報告書：第18図16､17、第31図297、第32図300､301)。当該期の土・石製品は、土偶４点(金子　2015a：第７表3713～3716)のみである。

第４表　砂沢式期を中心とした遺跡（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	種　別	時　期	形態・系列・形状	残存率	現長cm	接合	付着物 赤	付着物 黒	材　質（つくり製作）	出土位置	遺跡 立地	遺跡 評価	掲載箇所	備　考
552	青	宇田野(2)	土版	砂沢	片端刻目列・楕円	一欠	7		○		貫通孔2		中段	半？	県教97図85-20	表裏正中線、左右多重コ線1段。註8
553	青	宇田野(2)	土版	砂沢	〃・隅丸方形	3/4	7.6						中段	半？	県教97図85-21	20とほぼ同じ文様だが、表裏片側コ線2段
554	青	宇田野(2)	土版	砂沢	〃・隅丸方形？	1/4	3						中段	半？	県教97図85-22	20、21とほぼ同じ文様で、上端のみ
555	青	宇田野(2)	土版	砂沢	隅丸。図天地逆？	1/4	4						中段	半？	県教97図85-23	左右多重コ字文下、土偶脇腹様区画内刺突
556	青	宇田野(2)	土版	砂沢	楕円形？・6類？	1/3	4						中段	半？	県教97図85-24	正中線挟んで左右多重コ字文。厚さ1.9cm
557	青	宇田野(2)	土版	砂沢	楕円形？・6類？	1/4	2.8						中段	半？	県教97図85-25	正中線挟んで左右多重コ字文、下端水平線
558	青	宇田野(2)	土版	砂沢	楕円形・6類？	1/2	3.5						中段	半？	県教97図85-26	557とほぼ同じだが、水平線正中線直交
559	青	宇田野(2)	土版	砂沢	長楕円形・片端刻目	完形	5.3				貫通孔2		中段	半？	県教97図85-27	552と同じ文様構造だが、コでなく斜線。註9
560	青	畑内	石偶？	砂併？	長胴、腕脚短い	完形	3.3				玉髄		低段	半？	県教99図156-2	弥生時代遺物集中区出土。調整剥離
561	青	畑内	土版？	砂併？	双頭？・6類？	1/5下	4.5				板状		低段	半？	県教97図95の3	「土偶の脚か胴」。多重平行線
562	青	畑内	動物形石	砂併	クマ・凝灰岩	脚欠	8.5				軽石混入		低段	半？	県教97図95の11	軽石脱落。108g。周囲弥生前期土器
563	岩	滝大神Ⅰ	動物突起	砂併？	クマ？・鉢類口縁	一欠	1.7						丘陵	半？	東和01→16図5	土器は小片。頭口のみ。顔内面向く。刺突多
564	岩	滝大神Ⅰ	動物突起	砂併？	クマ？・胴部縦位	完形	2						丘陵	半？	東和01→16図6	土器は小片。頭目のみ。
565	岩	滝大神Ⅰ	土版	砂併？	楕円形？・6類	小片	6.3				側面沈線		丘陵	半？	東和02→17図8	多重つ字文
566	岩	滝大神Ⅰ	土版	砂併？	楕円形？・6類	小片	6.3				側面沈線？		丘陵	半？	東和02→17図9	多重直線と多重方形弧文？
567	岩	滝大神Ⅰ	土版	砂併？	楕円形？・6類	小片	3				側面沈線？		丘陵	半？	東和02→17図10	多重直線
568	岩	滝大神Ⅰ	動物突起	青木？	クマ？・胴部縦位	欠損	1.7						丘陵	半？	東和02→13-108	土器は小片



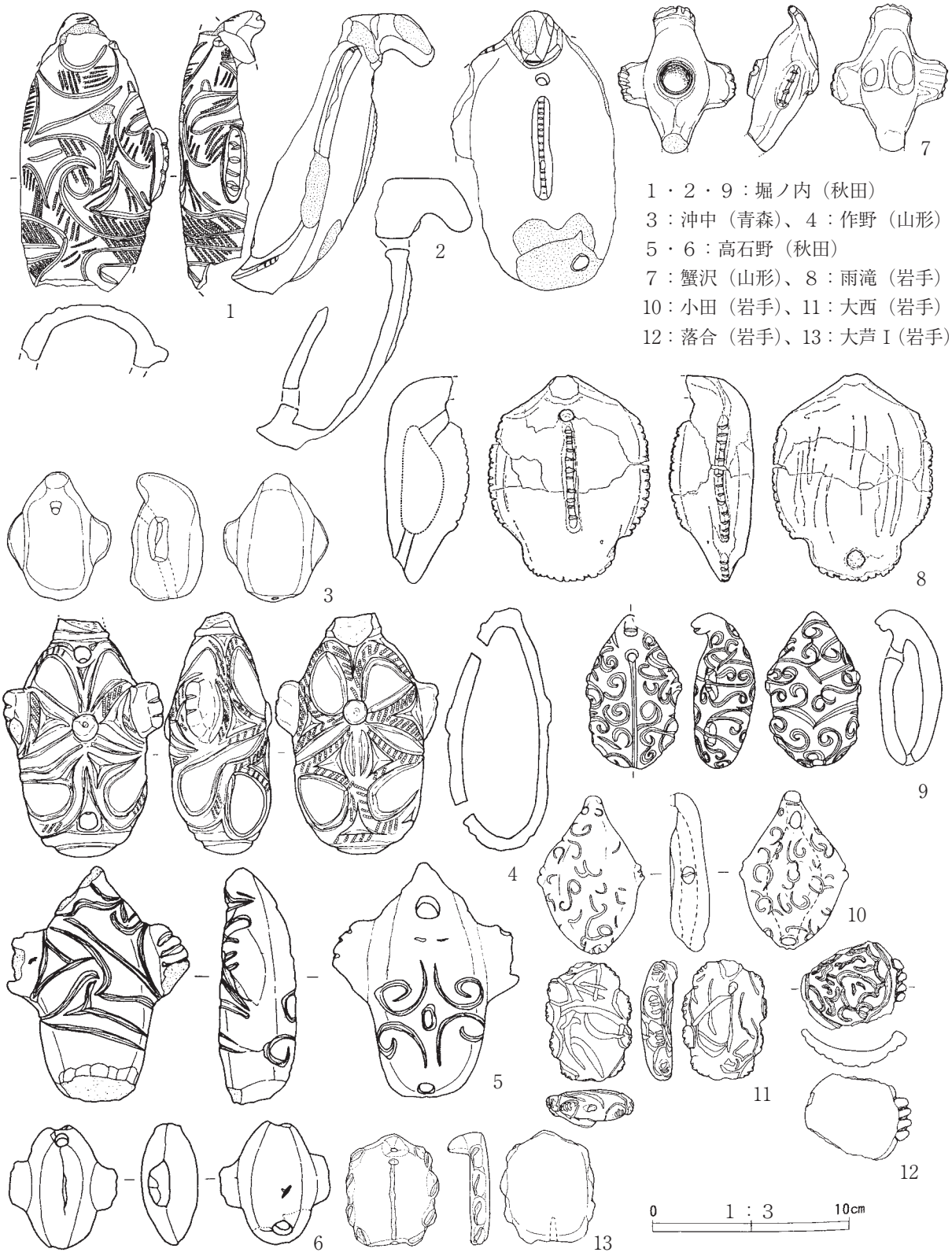
1：泉屋（岩手）
2：宇鉄Ⅱ（青森）
3：小山田(2)（青森）
4：橋本（岩手）

図版出典
1：㈶岩手県文化振興事業団（2001）、2：青森県立郷土館（1979）、
3：三沢市教育委員会（1999）、4：佐藤ほか（1995）

第１図　人面付注口土器と動物把手

第５表　その他の単純に近い遺跡（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	種別	時期	形態・系列・形状	残存率	現長cm	接合	付着物 赤	付着物 黒	材質（つくり製作）	出土位置	遺跡 立地	遺跡 評価	掲載箇所	備考
569	青	源常平	岩版	B1新	楕円形・非KO	完？	10.5				シルト岩	住床	段丘	小？	県教78→100-1	正中線上細刺突、その上刺突。肋骨状沈線
570	青	沖中	美々中空	B1？？	★無文・厚い	完？	6.6				ロ～尻貫孔		沖段	半？	三戸00→57図7	厚さ3.7cm。85.2g。本文参照
571	岩	泉屋	人面土器	B1新	注口土器突起人面	欠損	14.8	△					堤防	半？	県埋01→9082	最上部突起状に人面付。魚眼状三叉文。註10
572	青	木戸口	岩版	BC2？	長方形？・1b類？	小片	4.5				石質？		丘陵	小？	平賀83→46図66	浮き彫り文様。厚さ1.5cm
573	青	木戸口	線刻礫	〃？？	孔の開いた自然礫	完形	10				石質？		丘陵	小？	平賀83→45図65	不整おむすび形。表のみ線刻。多重半円線
574	岩	落合	正中中空	前葉	正中線隆帯刻目	小片	4.3				中空？		段丘	半？	盛岡03→22図6	「三角形土製品」。方形入組文？
575	岩	落合	美々中？	前葉？	円形基調？	1/4	5.4				中空？		段丘	半？	盛岡03→22図7	「ミニチュアの皿」。雑な沈刻文。ヒレ状突起？
576	青	杉沢	岩偶	BC2？	馬渕川型。乳大	1/5	5		○	割口	泥岩		低段	半？	県博97→27-182	右腕胸。胴黒付。彫去S字入組文。多重S字文
577	青	杉沢	岩版	BC2？	長方形？・1b類？	小片	4.1				泥岩		低段	半？	県博97→27-181	表採。沈線文。文様意匠不明
578	青	杉沢	岩偶	BC2？	馬渕川型。三角口	3/5	11.9				頁岩		低段	半？	弘大08→109図1	576類似文様。十腰内例からの変遷？
579	青	杉沢	岩偶	C1古？	馬渕川型。	1/9	6.5				頁岩		低段	半？	弘大08→109図2	★三戸高校調査品。
580	青	杉沢	岩版	BC2？	長方形？・2b類？	1/5	7.4		○		頁岩		低段	半？	弘大08→110図3	厚さ0.8cm。C字入組文。渦巻文
581	秋	桂の沢	岩版	C1？	楕円形？・3類？	1/3	9						段丘	半？	県教94→S72	多重C字文、裏面中央C字入組文。三叉文
582	秋	桂の沢	岩版	BC2？	長方形？・2類？	2/7	7.3						段丘	半？	県教94→S73	渦巻文。側面鋸歯文に三叉文？
583	岩	大西	美々中空	C1古？	板状・穿孔2	頭欠	6					土坑	堤？	小？	県埋03→405	正中線上、肛門？穿孔。雑沈線文
584	青	上尾駮(1)	土面	C1新？	鼻曲り「紐通孔」なし	3/5	14	△					低段	半？	県教88→165図9	口顎欠損。2グリッドにまたがって6片出土
585	岩	野沢Ⅳ	岩版？	C2？	厚い4.4cm・4類？	小片	3.7			表面	凝灰岩		中段	小？	県埋99→308	下と同じグリッド出土。平面形不明。渦巻文？
586	岩	野沢Ⅳ	岩版？	C2？	厚い4.5cm・4類？	1/5?	4.1				凝灰岩		中段	小？	県埋99→309	上と同じグリッド、同一個体？　一周文様
587	岩	野沢Ⅳ	岩版？	C2？	厚い5.1cm・4類？	4/5?	10.6				凝灰岩		中段	小？	県埋99→310	多重S字文
588	岩	野沢Ⅳ	土版	C2？	楕円形？・4類？	1/4	不明						中段	小？	県埋99→316	多重C字文？
589	岩	野沢Ⅳ	土版？？	C2？	文様あり	不明	不明						中段	小？	県埋99→317	4類？文様意匠不明。裏面剥落
590	岩	上野場3	土版	C2～A	小判形？・5類	1/4	9.2	△			人面意匠？		丘陵	小？	県埋06→34-262	正中線、対向多重C字文。裏無文？
591	岩	丸子館跡	土版	後～？	小判形？・5-6類？	1/5	4.4				(側面沈線)		低段	？	北上04→34-12	片面多重弧線二段、間刺突。片面多重線？
592	青	剣吉荒町	岩版	末前後	双頭・非KO？無文	5/6	不明	△					低段	註11	県博88→写36	片面正中線？別面不規則線、凹。磨き擦痕
593	青	剣吉荒町	岩版	A1？	楕円形？・5類？	1/7	不明	△	○				低段	註11	県博88→写37	工字文系三叉文
594	青	剣吉荒町	線刻礫？	不明		小片	不明						低段	註11	県博88→写38	「文様らしき刻線が部分的にみられる」
595	青	剣吉荒町	岩版	末～？	6類・断面板形	小片	不明						低段	註11	県博88→写39	コ字沈線。多重平行線？
596	青	剣吉荒町	線刻礫？	不明		小片	不明						低段	註11	県博88→写40	
597	青	剣吉荒町	岩版？	末～？	断面厚板形	小片	不明						低段	註11	県博88→写41	断面多重線
598	青	剣吉荒町	線刻礫？	不明	円形・紡錘形	略完	不明				凝灰岩		低段	註11	県博88→写42	片面深く太いT字線。両面中央凹。整形痕
599	青	剣吉荒町	土版	後～	小判形・6類	1/6	5		○				低段	註11	県教15→図30-1	表裏多重コ字文？　厚さ2cm
600	青	剣吉荒町	土版	後～	長方形？・6類	2/5	4.9		●		(側面沈線)		低段	註11	県教15→図30-2	片面正中線。表裏多重コ字文。下端刺突多
601	青	岩井大沼	土版	A2～	双頭・6類	略完	7.2		○		頭下貫通孔		段丘	小？	市浦01→246	表裏、正中線脇多重コ字文二段。
602	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形・6類？34g	完形	5.1				上貫通孔2		低？	半拠	弘前88→142図58	片面正中線。左右多重平行線。下端細刺突
603	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形・6類？33g	完形	5.2				上貫通孔2		低？	半拠	弘前88→142図59	上端刻目列。片面正中線。左右多重平行線
604	青	砂沢	土版	砂沢？	6類？	1/7	3.5						低？	半拠	弘前88→142図60	上端刻目列。多重平行線
605	青	砂沢	土版	砂沢？	双頭楕円・6類？	完形	5.4				上貫通孔2		低？	半拠	弘前88→142図61	表裏側面縦線。多重平行線。56g
606	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円四隅突出・6類	完形	5.6				上貫通孔2		低？	半拠	弘前88→142図62	表裏縦線。左右多重平行線。25g
607	青	砂沢	土版	砂沢？	超楕円形？・6類？	1/3?	6.5						低？	半拠	弘前88→143図63	表裏中央縦線。左右連続長いコ字文
608	青	砂沢	土版	砂沢？	6類？	1/4	2.1						低？	半拠	弘前88→143図64	上端側面刻目列。表裏縦線。左右多重平行線？
609	青	砂沢	土版	砂沢？	超楕円形？・6類？	1/5	3.5						低？	半拠	弘前88→143図65	上端刻目列、その下窪み刺突。多重コ文？
610	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形・6類？	5/6	5.7						低？	半拠	弘前88→143図66	多重コ文二段下細刺突、上片面窪み
611	青	砂沢	土版	砂沢？	下端平ら・6類？	2/5	3.1		○				低？	半拠	弘前88→143図67	文様側面にも。多重コ字文。下端刻目
612	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形・6類？	2/5	4.1						低？	半拠	弘前88→143図68	表裏多重コ字文何段も
613	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形？？・6類？	1/7	2.7						低？	半拠	弘前88→143図69	左右多重平行線？
614	青	砂沢	土版	砂沢？	四隅突出？・6類？	1/8	4.2						低？	半拠	弘前88→143図70	文様側面にも。多重コ字文間刺突。底平ら
615	青	砂沢	土版	砂沢？	6類	1/4	5						低？	半拠	弘前88→143図71	文様側面にも。表裏多重コ字文何段も
616	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形？・6類？	1/5	5						低？	半拠	弘前88→143図72	多重コ字文？　側面沈線
617	青	砂沢	土版	砂沢？	隅丸長方形・非KO	完形	4.8				上貫通孔2		低？	半拠	弘前88→143図73	小型。★表裏縄文。側面なし
618	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形？・6類？	1/7	5.4						低？	半拠	弘前88→143図74	表多重コ字文。★裏無文
619	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形・非KO	完形	3.7				上貫通孔2		低？	半拠	弘前88→143図75	小型。★表裏無文
620	青	砂沢	土版	砂沢？	小判型・6類？	1/4	5						低？	半拠	弘前91→88図119	表裏正中線、左右細長いつ字文多段
621	青	砂沢	土版	砂沢？	6類？	1/4	3.7		○				低？	半拠	弘前91→88図120	上端刻目列。多重線
622	青	砂沢	土版	砂沢？	6類？	破片	2.7						低？	半拠	弘前91→88図121	多重コ字文？
623	青	砂沢	土版	砂沢？	文様あり	小片	2.6				貫通孔？		低？	半拠	弘前91→88図122	沈線。刺突
624	青	砂沢	土版	砂沢？	角張る？・6類？	小片	2.9		○				低？	半拠	弘前91→88図123	多重沈線。下端刺突多
625	青	砂沢	土版	砂沢？	楕円形？・刺突	小片	2.7						低？	半拠	弘前91→88図124	片面刺突多。裏面無文？
626	青	砂沢	動物形？	砂沢？	イノシシ？の顔	小片	5						低？	半拠	弘前88→144図76	接合面から剥離。目剥落。刺突多。牙沈線
627	青	砂沢	動物突起	砂沢？	クマ？・蓋の摘み	完？	1.4						低？	半拠	弘前88→135図5	P238。蓋は破片で内面ミガキ
628	青	砂沢	〃？	砂沢？	クマ？・蓋の周囲	欠？	1.5						低？	半拠	弘前88→135図6	P95。4単位？　目？大。刺突多。蓋は破片
629	岩	金附	岩偶	谷起古	片面無文・6字文	4/5	7				凝灰岩		堤防	半拠	県埋06→489-15	6字文下、T字文。時期→層から。註12
630	岩	金附	土版	後葉？	隅丸長方形・5類	1/4	6.2				左上隅貫孔		堤防	半拠	県埋06→121	正中線上窪み。多重C字文雑
631	岩	金附	土版	後葉？	隅丸長方形・5類	1/2	8	△			左上隅貫孔		堤防	半拠	県埋06→122	表裏正中線、脇多重C字文二段、間刺突。雑
632	岩	金附	動物形	青木?	イノシシ?・装身具？	略完	4.7				脇腹貫通孔		堤防	半拠	県埋06→118	鼻長い。鼻孔2。背中隆帯刻目。体刺突。12g
633	岩	金附	動物形	谷起？	雑で種不明	4/7	6.4				脇貫通孔		堤防	半拠	県埋06→119	頭四肢欠損。背中黒斑。時期→層
634	岩	金附	動物突起	～弥前	鉢口唇横・種不明	完形	1.5				波頂部		堤防	半拠	県埋06→120	刺突、沈線で目鼻口。酸化鉄付着。土器小片
635	岩	金附	動物突起	～弥前	鉢口唇横・種不明	完形	3				平縁		堤防	半拠	〃108図265	上面縄文。耳口刻目。土器破片。2単位？
636	岩	金附	動物突起	青木？	壺？胴縦・種不明	欠損	2						堤防	半拠	〃361図3241	上面三角刺突多。土器小片。時期→土器文様
637	岩	金附	動物突起	A´古？	鉢口唇横・種不明	完形	2				平縁		堤防	半拠	〃389図3624	無文。土器破片。時期→土器文様
638	青	八戸城跡	土偶容器	弥前末	刺突文土偶形壷	略完	15.1		○		首～胴のみ	住床	海段	小？	八調02→15図	刺突文×皮袋状壷。炭化物付着。50.2g
639	岩	蔵屋敷	岩偶	弥中？	糸巻状	完形	9				流紋岩		低段	半？	江釣83→68図3	結髪と体一体化？腕無？逆6字文。99g
640	青	垂柳	動物突起	弥中中	クマ？・蓋の摘み	略完	1.3						沖積	半？	田舎09→230	突起全体Y字形。刺突。土器は小片
641	青	垂柳	動物突起	弥中中	クマ？・蓋の摘み	略完	2.5						沖積	半？	田舎09→231	突起全体三角形。刺突。土器は破片
642	青	小山田(2)	動物形？	弥中？	全容不明	破片	2.5		●				丘陵	小？	三沢99→106図9	「熊等」。背中？刺突列。「後ろ脚L字状屈曲」
643	青	小山田(2)	動物把手	弥中？	カップ形把手？	略完	8.5			註13			丘陵	小？	三沢99→106図10	把手のみ略完。「キツネ等」。背縄文。双頭



1・2・9：堀ノ内（秋田）
3：沖中（青森）、4：作野（山形）
5・6：高石野（秋田）
7：蟹沢（山形）、8：雨滝（岩手）
10：小田（岩手）、11：大西（岩手）
12：落合（岩手）、13：大芦Ⅰ（岩手）

図版出典

1・2・9：秋田県教育委員会（2008）、3：三戸町教育委員会（2000）、4：山形県教育委員会（1984）、
5・6：琴丘町教育委員会（1983）、7：小杉（1996）、8：小杉（1986）、10：大迫町教育委員会（1979）、
11：㈶岩手県文化振興事業団（2006）、12：盛岡市教育委員会（2003）、13：㈶岩手県文化振興事業団（1999）

第２図　美々４型中空動物形土製品

岩手県大船渡市上甲子遺跡で、弥生時代前期末の集落跡が検出された(㈶岩手県文化振興事業団1997)。弥生時代中期(報告書：第53図352)、後期(報告書：第56図410～413)土器も出土し、僅かながら晩期中～後葉らしき粗製土器片も見られる(報告書：第53図368)。当該期の土・石製品は、土偶１点(同一個体片７)、中央に孔の開いた円盤状土製品１点、緑色凝灰岩の平玉１点である。

岩手県大船渡市萱中Ⅲ遺跡では、晩期後半の土器も出土しているが、ピークは弥生時代前期末にある(㈶岩手県文化振興事業団　1998)。資料収集対象期では、他に、晩期初頭(報告書：第14図31)、弥生時代後期(報告書：第15図68～第16図72)なども出土しているが、僅かである。弥生時代前期末の土・石製品では、土偶が９点出土し、石剣類も２点見られるが当該期に帰属するか不明である。

岩手県一関市細田遺跡では、晩期後葉～弥生時代前期末の土器がまとまっているが、ピークは、大洞Ａ´式古期にあり、青木畑式はやや少なく、大洞 A1式土器は僅かである(㈶岩手県文化振興事業団　1999)。晩期末～弥生時代前期の土製品では、土偶26点(金子　2015a：第７表3979～3994)のほか、スタンプ形様土製品１点等当該期に帰属するか不明な土製品が数点ある。石製品では、独鈷石１点、石剣類１点？、砂岩製丸玉(角張る)１点出土している。土偶の中には、双頭で動物形土製品の可能性のあるものも存在する(報告書：第44図422)。

岩手県旧東山町熊穴洞穴遺跡でも、弥生時代前期末(大洞Ａ´式新期)土器のまとまりが見られるが(岩手県立博物館　1985)、墓地なので、あまり参考にならないかもしれない。出土土器も多くなく、土製品は紡錘車１点のみである。試掘調査だが、青森県東通村前坂下(3)遺跡で弥生時代前期末の竪穴住居跡が検出されている(青森県教育委員会　1982)。当該期の土・石製品は出土していない。調査面積が少なく全体像は不明だが、参考までに掲げておく。

宮城県旧一迫町青木畑遺跡では、調査で弥生時代前期末の土器がまとまって出土し(宮城県教育委員会　1982)、ほぼ青木畑式に限定され、土偶が４点出土した。「調査以前の採集遺物」ということで割愛したが、動物形土製品(報告書：第39図17)も、出土土器の偏りから、当該期の可能性が高い。

前稿で述べたように、当該期の単純に近い遺跡は確かに多かったが、土偶は出土していても「関連遺物」を出土した遺跡は意外に少なかった。以下、第４表の補足をする。

・青森県弘前市宇田野(2)遺跡(第４表552～559)(青森県教育委員会　1997)

砂沢遺跡の南約２㎞に位置する。弥生時代の土坑墓が５基検出され、谷部分から土器等がまとまって出土している。墓の１基からは石鏃28点(23点黒曜石)出土し、２基からは赤色顔料が検出されている。当該期の掲載土器は、砂沢式に限られるようで、新期が多いか。平安時代の集落と重複し、土製品にはどちらに帰属するか不明なものもある。土製勾玉は、１点が平安時代の住居床面から出土し、もう１点はそれと形状が極めて似ているため、どちらも平安時代のものとして扱った。

当該期の遺物と考えられるのは、土偶19点、土版８点、スプーン状土製品３点、石剣類１点、多頭石斧１点、石製玉類17点のうち１点は勾玉、その他は平玉で、ヒスイ製15点が連珠状に遺構外から出土している。石冠１点は、出土層位などから円筒下層式期に伴うとされ(報告書：p.175)、石剣類も、その可能性があるのかもしれない。掲載土器の量の割に土偶、土版の点数は多い。土版は、多重コ字文を持つものが多く、稲野彰子氏の６類(稲野　1983)に相当すると思われるが、片端側頭部の刻目列やその下の装飾帯など文様装飾がより豊富である。

・青森県旧南郷村畑内遺跡(第４表560～562)(青森県教育委員会　1994、1995、1997、1999～2003)

ダム建設に伴い66,000㎡が調査された。遺跡の主体は、縄文時代前期～中期前葉円筒式期、弥生時代、江戸時代で、特に円筒式期集落が主体である。弥生時代では、中～後期の集落跡も検出されているが、前期の集落跡とは地点を異にする。立地も異なり、中～後期では斜面、前期では平坦地にある。

資料収集対象期では、他に、大洞Ｂ１式？(青森県教育委員会　2001：図222の326)、大洞BC２式(青森県教育委員会　2001：図222の331、青森県教育委員会　2002：図120の３、８ほか)や大洞Ｃ１式(青森県教育委員会　1994：第120図下ほか)、Ｃ２式(青森県教育委員会　2002：図120の12)、Ａ１式(青森県教育委員会　2001：図223の335、青森県教育委員会　2003：図55ほか)やＡ２式(青森県教育委員会　2001：図223の340ほか)土器も出土している。大洞BC２式、Ａ１土器片は比較的多く見られるが、他は少ない。

弥生時代前期では、大洞Ａ´式新期、青木畑式両方ともあるが、前者が多いか。竪穴住居跡が８棟検出された割に出土遺物は少ないように思われる。住居数は多いが小規模集落にすべきか悩むが、類遠賀川系土器が多数出土している点が気になる。特に青森県教育委員会(1997)図87は、九州北部・瀬戸内西部との関連が窺われており(報告書：p.141)、半拠点集落と位置づけるのが妥当なようだ。

当該期の土・石製品は、土偶12点(金子　2015a：第７表3626～3637)、石偶？１点、土版？１点、動物形石製品１点(クマ)である。石剣類も出土しているが、全て縄文時代前期のものと判断した。土偶は全て刺突文土偶なのが興味深い。なお､“美々中空”１点が、弥生遺物集中地点から出土しているが(青森県教育委員会　2003：図58の92)、晩期前葉である。

・岩手県旧東和町滝大神Ⅰ遺跡(第４表563～568)(東和町教育委員会　2001､2002)

調査面積150㎡で、遺物出土量は不明である。掲載土器は、僅かに大洞Ｃ２式中期(東和町教育委員会　2001：第５図１、２)や大洞 A1式と思われる土器(東和町教育委員会　2001：第９図71～73､2002:第12図80～84)も含むが、縄文時代晩期末大洞Ａ´式古期～弥生時代前期末がほとんどを占める。一部谷起島式まで下がりそうな資料も見られるが、青木畑式が主体を占める。

土偶は11点出土しており、残りの良いものは結髪土偶が多く、大洞Ａ´式新期もあるが(東和町教育委員会　2002：第17図１)、青木畑式期が主体を占めるようだ。土版３点、動物突起３点で、その他は、花弁平玉？１点(東和町教育委員会　2002：第17図13)、石製品は、石製丸玉(玉髄)１点のみである(東和町教育委員会　2002：第19図34)。

４．その他の単純に近い遺跡(第５表)

上記以外で比較的時期が限られ、時期が推測可能な遺跡の関連遺物を古いものから見ていく。

⑴後期末～晩期前葉(晩期初頭主体)

いずれも後期からの継続遺跡である。

・青森県三戸町沖中遺跡(第５表570)(三戸町教育委員会　2000)

縄文時代後期末～晩期前葉の集落跡が検出され、出土土器は晩期初頭が主体を占める。表に示した“美々中空”(第２図３)は、無文で、一見新しそうに見えるが(金子　2001：第23図)、これらと違って厚みがあり、古い時期の特徴のようで(第２図)、後期末～晩期前葉と判断した(註２)。

土製品には、鐸形土製品が含まれるなど、注意を要する。だるま状で蛙が想定されている動物形土製品１点(報告書：第57図６)は、後期末の可能性も高いが、類例がなく今回は割愛しておく。土偶の中にも、後期中～後葉と思われるものがある(同：第57図３)。これらを除くと、土偶は４点で、大洞B1式新期の遮光器土偶の祖形の一つと思われる屈折像土偶２点(同：第57図１、２)、後期末の中空土偶と考えられるもの(同：第57図５)、同じく後期末の「赤ん坊」完形土偶(同：第57図４)となる。土製耳飾７点(報告書第58図19は括れがないので除外)のうち約半分は、形と文様から晩期に帰属する可能性が高く(報告書：第58図14？､15､17､18)、残りは後期末と思われる。

・岩手県平泉町泉屋遺跡第16・19・21次調査区（第５表571）

縄文時代後期後葉～晩期前葉の土器が出土しており、本遺跡の場合も晩期初頭が中心である（(財)岩手県文化振興事業団　2001）。ただし、第19・21次調査区には、大洞Ｃ２～Ａ１式土器が出土し、晩期末～弥生時代前期末の可能性のある破片も見られる。また、いずれの調査区からも、縄文時代後期前～中葉大湯式土器が比較的まとまって出土しているので、土・石製品の同定に注意を要する。

土偶は２点出土しているが（註３）、両方とも後期後葉～末で、１点（報告書第２分冊：第92図787＝788）は瘤付土器第Ⅱ段階に位置づけられる（金子　2016c：p.２）。表に示した人面付土器１点（第１図１）のほか、石剣類は、21点中８点しか掲載されていないので不明な点があるが、特に第２分冊で図示されたものが後期末～晩期前葉である可能性は十分ある。その他の土・石製品は、装飾品と考えられるもののみで、土製耳飾は６点出土している。後期前～中葉にも径の小さな耳栓がよく見られるが、報告書第２分冊第93図796、798も、後期後葉以降と考えて良さそうで（金子　2009a、2010c、2012）、全て後期後葉～晩期前葉とみられ、同800、801は、文様から晩期初頭の可能性が高い。腕輪の部品の可能性が高い弧状土製品が２点出土している（報告書第１分冊第115図9085、第２分冊第94図803）。9085は本製品でない可能性も残すが、文様装飾の系統的変遷から両方とも晩期前葉の可能性がある（金子　2009b）。以上のほか、時期は特定できないが、緑色凝灰岩製の勾玉１点、有孔石製品が10点出土した。有孔石製品は８点のみの掲載だが、石英安山岩製（１点は凝灰岩）長径２～３㎝の長楕円形で二つの貫通孔を持つ類型が、同じグリッド（５×５ｍ）から４点出土している。

⑵晩期初頭

・青森県旧浪岡町源常平遺跡（第５表569）（青森県教育委員会　1978）

大洞Ｂ１式新期と大洞Ａ１式期の集落跡が検出されている。本稿に関係する時期では、大洞Ｃ２式（報告書：図93－23）、弥生時代中期土器も出土している（報告書：図88－11）。調査区中央、台地中央から検出された土坑墓群は、出土土器がなく時期不明だが、検出状況と出土した時期が限定されるひょうたん小玉から、大洞Ａ１式期の集落に帰属するものと推定した（金子　2006：p.34）。したがって、土坑墓から出土した多数の玉類も、この時期と判断され、土坑墓に隣接する平安時代住居から出土した玉（報告書：図100－４）も、この時期の混入と考えた。

岩版の時期に帰属すると判断できる土・石製品は、ないようである。

⑶晩期前葉

・青森県旧平賀町木戸口遺跡（第５表572～573）（平賀町教育委員会　1983）

縄文時代晩期前葉の集落跡で、竪穴住居跡と土坑墓が検出されている。竪穴住居跡内に弧状の配石が見られるが、筆者は、他の類例から住居壁面の存在を考える（註４）。土坑墓は、不整円形で、粗製深鉢が横倒しの状態で出土し、土器内部にはベンガラが見られ、骨粉も認められたそうである。

晩期前葉大洞BC２式土器のほとんどは、竪穴住居を中心とした遺構内から出土し、遺構外からはほとんど出土していない（報告書:p.51）、遺構外には、僅かながら、大洞A1式土器片が見られ（報告書:第15図７）、住居上方には「大洞Ａ式に相当する包含層」も認められている（報告書：p.93）。このほか、本稿に関係する時期では、弥生時代中期土器片が出土している（報告書：第36図１、２）。「調査以前の出土遺物」として報告された中には、大洞B2式土器が目立ち、大洞A1式の可能性のある壷（報告書：第53図１）も見える。

遺跡自体は、縄文時代後期前葉を主体とするため、出土土製品のほとんどは、この時期に属する。晩期の土偶として３点が掲載されている。報告書第37図７は、大型中空の脚で足の指が明瞭に表現されていることから晩期後葉の可能性が高い。第37図10は、後期前葉ではなさそうだが、特定できない。

第37図９は、大洞 BC２式期の大型遮光器土偶の中空胴部片である。石製品は、表に掲げたもの以外は、時期の特定が難しいが、長径２～３㎝の長楕円形で二つの貫通孔を持つ類型（報告書：第46図68）は、上述の岩手県泉屋遺跡でも認められたもので、晩期前葉の可能性が高いであろう。その他、より小さい二穴の石製装飾品１点、石刀破片１点、完形の石冠１点、円盤状石製品３点が晩期に所属する石製品として報告されている。

「出土した土器の量に比較し土製品の出土がきわめて少量であることが特徴的で遺跡の性格を反映しているかのようである」とまとめられた（報告書：p.98）。土器も、「朱塗りのものが少なく、精製土器と称せられる優美なものも比較的少ないという特徴も見られる」「土器自体にもその素朴さ、地域性といった特色も看取され比較的質素な土器が多く」（報告書：p.97）、「これらの特色は木戸口遺跡における大洞ＢＣ式期そのものの文化内容などの一面を反映している」（同上）のかもしれない。

⑷晩期前～中葉

・岩手県盛岡市落合遺跡（第５表574～575）（盛岡市教育委員会　2003）

縄文時代後期後葉～晩期初頭（報告書：第11図１～４、第14図19、24）、晩期中葉大洞Ｃ１式土器（報告書：第16図42、46？、47？）が僅かに見られるが、掲載土器のほとんどは、大洞Ｂ２～ BC２式である。ただし、報告書には「後期末葉から晩期中葉（大洞Ｂ～Ｃ１式期）の遺物が多量に出土している」（報告書：p.38）とあるのに、掲載土器が少ないのがやや気になる。

５点出土した土偶のうち１点は、縄文時代後期と判断した（報告書：第22図５）。４点は遮光器土偶のみのようだが、大洞Ｃ１式古期の可能性を示すものが意外に多い（金子　2014：第６表2771～2774）。第５表574は正中線中空土版に間違いないが、575（第２図12）は、美々４型中空動物形土製品かどうか定かではない。写真図版がないため確認できず、むしろ、円形であることから、その可能性は低いかもしれない。ただ、報告書の記述を読む限り、574についても中空土製品の一部という認識がないので、その可能性に全く配慮してないのではと懸念されたため、あえて取り上げたものである。臼形の環状耳栓が１点出土しているが、当該期のものか。石剣類が３点出土しているが、報告書第23図３は後期の可能性が高いか。円盤状石製品が11点出土している。

・青森県三戸町杉沢遺跡（第５表576～580）（青森県立郷土館　1997、弘前大学　2008）

小規模ながら三回の学術調査が行われ、調査区はいずれも近接した場所に設定されている。最初の三戸高等学校の調査も略報が出されているようだが、文献未見のため割愛した。

三戸高等学校の調査では、大洞Ｂ～Ａ式土器が出土し、大洞Ｃ２～Ａ式も多数出土した由だが（弘前大学　2008：p.5）、その後の調査では、大洞ＢＣ式～Ｃ１式に著しく偏り、大洞Ｂ、Ａ式は非常に少なく、大洞Ｃ２式は細片のみなのかほぼ見えない。その他、縄文時代後期中葉の終わり～晩期初頭大洞Ｂ１式土器も、細片を主体として出土している（弘前大学　2008：第106～107図）。弘前大学（2008）によると、大洞Ａ´式土器も出土しているとのことだが（p.134）、確認できなかった。第38図98のことだとすれば、大洞Ａ式ではないだろうか。

青森県立郷土館の調査は、点々とトレンチ状に合計19.45㎡行われた。表に示した、岩偶１点、岩版１点のほか、土偶１点、円盤状石製品２点出土している。土偶は、小型遮光器土偶で、顔が横に広がっていることから大洞Ｃ１式期の可能性が高い。

弘前大学の調査は、青森県立郷土館の調査区の周囲51㎡行われた。土偶は４点出土し、大型遮光器土偶２、小型遮光器土偶２で、いずれも大洞 BC２～Ｃ１式古期と思われる。表に示した岩偶１点（三戸高校調査品除く）、岩版１点、その他の土･石製品については、詳細な時期は不明だが、石剣類４点、不整形のボタン状石製品類似品１点、円盤状石製品７点、スプーン状土製品１点出土している。報告

書によれば、石製品は、共伴した土器から「すべて晩期前葉、すなわち大洞ＢＣ式～Ｃ１式期に属するものと考えられ、型式学的にみても矛盾はない」され（報告書：p.127）、土製品についても同様だが「中実土偶は形態からみて後期のものである可能性がある」とされる（報告書：p.126）。

・秋田県旧森吉町桂の沢遺跡（第５表581～582）（秋田県教育委員会　1994）

出土量の割に報告書には十分な記載がなく概報程度であり、どの程度実態を示しているのか不明である。当該期では、大洞Ｂ２式らしい土器も見られるが（報告書：第24図121）、大洞 BC２式～Ｃ２式古期がほとんどである。晩期以外の土器も多く、特に後期後半は多数掲載されており、土・石製品の時期判断に迷う。特に土偶は後期のものが多く、晩期は大型遮光器土偶が３点のみのようである（金子　2011a：第２表1617～1619）。表に示したように岩版が２点出土している。石剣類は８点掲載され、２点は晩期のものとわかるが（報告書：第44図 S64、S66。S70も？）、１点は確実に後期のものである（報告書：第44図 S68）。ボタン状石製品１点（報告書：第45図 S75）は、大洞Ｃ１式期のもので（金子　2010b）、弧状土製品らしき遺物（報告書：第32図216）も、大洞Ｃ１式か（金子　2009b）。土製耳飾は全て後期で、当該期と言えるものはなさそうである。

・岩手県旧石鳥谷町大西遺跡（第５表583）（（財）岩手県文化振興事業団　2006）

Ｃ区から晩期前～中葉の土坑が数基検出されている。「晩期前～中葉」としたのは、出土土器が極めて過渡的な様相を示し、まだ「羊歯状文」状を呈する文様が見られるためで、実際には一括性が高く大洞Ｃ１式古期に位置づけられよう。

表に示した美々４型中空動物形土製品（第２図11）は、穿孔が二箇所見られ、通常は内部で繋がっているのだが、報告書では読み取れない。板状を呈し、当該期の類例（金子　2001：第23図）から外れていることは確かである。通常出土する拠点集落ではない遺跡から出土した意味を内包しているのであろうか。当該期の土・石製品は、ほかに、円盤状石製品が、同じ土坑から３点、その他の土坑から１点出土しているのみである。

⑸晩期中葉

・青森県六ヶ所村上尾駮⑴遺跡（第５表584）（青森県教育委員会　1988）

縄文時代前期末～中期初頭の集落跡が主体で、次いで平安時代の集落跡、縄文時代晩期の土坑となり、土坑は墓を主とするが、副葬品は石製玉がほとんどで、晩期の土器は遺構外から主に出土している。本稿の対象となる時期では、晩期中～後葉がほとんどで、掲載された精製土器は大洞Ｃ１式新期が多めか。その他、わずかに縄文時代後期後葉～末、弥生時代中期の土器が出土している。

土偶は７点掲載され、大洞Ｃ１式からＡ１式期まで満遍なく見られる（金子　2011a：第２表1249～1253、2016：第12表4513、4514）。このほか、遮光器土偶の破片が２点出土しているそうである（報告書：p.250）。「晩期の土製品」として掲載されたものは、ほかに、石棒状土製品１点、土製耳飾（Ｃ２ネジ系）１点、装身具らしい土製品１点があるが、耳飾以外は類例が少なく時期は特定できない。「晩期の石製品」には、石剣類が15点あるが、他の時期のものも含んでいるようである（報告書：第166図21？、第167図33）。

・岩手県旧滝沢村野沢Ⅳ遺跡（第５表585～589）（（財）岩手県文化振興事業団　1999）

縄文時代晩期中葉大洞Ｃ２式期の集落跡が検出されている。出土土器も、この時期が多数を占めるが、縄文時代後期中葉も比較的多いので、注意を要する。本稿の対象期では、大洞Ｃ２式前半土器がほとんどを占めるが、僅かに大洞Ｂ２式も見られる。

土偶は５点出土しているが、そのうち報告書第37図313は後期中葉である。大洞Ｃ２式期は４点と思われるが、315も後期かもしれない（金子　2014：第６表2767～2770）。表に示したように、岩版３点、

土版２点出土しており、文様から大洞Ｃ２式期の可能性が高いが、形(特に厚さ)が一般的なそれと異なっている。石剣類は５点出土している。大洞Ｃ２式期が主体と思われるが、特定は難しい。なお、土版が掲載されている報告書第37図のスケールが２／３になっているが、スケールの位置から、これが上に掲載されている311の土偶だけに当てはまるのか、この図版全体に当てはまるのか不明で、計測できない(註５)。掲載図の大きさから、岩版と同じ１／２で掲載されているように思われる。岩版には計測表があるのだが、土版にはないので推測もできない。

⑹**晩期中～後葉**

・**岩手県軽米町上野場３遺跡**(第５表590)((財)岩手県文化振興事業団　2006)

大洞Ｃ２式土器がまとまって出土したが、大洞Ａ１式も見られる(報告書：第32図240)。縄文時代後期後葉の竪穴住居跡が検出され、その続きで大洞Ｂ１式土器も認められる(報告書：第23図123)。土器の出土量の割に土偶は多く､13点出土したそうだが、大洞Ｃ２式然とした土偶は少なく、時期のはっきりしないものが多い(金子　2016b：第８表4103～4113)。土版は、表に示したものを含め７点出土したそうだが、他の５点の掲載品は当該期の土版ではないと判断した。報告書第34図264は、板状で両面に文様が見られ、それらしいが、隆帯を持っており、土偶の破片ではないだろうか。写真図版20の263も、当該期中空土偶の肩あるいは腰の破片だろうか。石剣類は３点出土して２点掲載され、報告書第46図412は、出土位置から当該期の可能性が高いが、もう１点は不明である。

⑺**晩期中葉～弥生時代中期**

・**岩手県北上市丸子館跡**(第５表591)(北上市教育委員会　2004)

中世城館に壊され詳細は不明だが、竪穴状遺構？、炉跡や土器埋設遺構、土坑が検出され、なおかつ出土土器が、晩期中葉～弥生時代中期まで継続しており、特に晩期末は比較的まとまっていることから、それなりの格の遺跡と思われる。弥生時代後期土器片も出土している。

当該期では、大洞Ｃ２式以後の弥生時代中期中頃まで見られるが、比較的まとまっているのは晩期後葉大洞 A1式～弥生時代前期末青木畑式期までのようである。この時期と思われる土・石製品には、土偶４点(報告書実測図版34の９も土偶と判断)？、土版１点、石剣類14点？、環状石製品１点、独鈷石１点がある。

⑻**晩期後葉～弥生時代前期末**

・**青森県旧名川(現南部)町剣吉荒町遺跡**(第５表592～600)

これまで５回調査され、そのうち後の３回は、報告書が刊行されている(名川町教育委員会　1984、青森県立郷土館　1988、青森県教育委員会　2015)。最初の２回は、慶應義塾大学が調査し、２回目の1966年度調査分の土器の一部が紹介されている(安藤ほか　2009)。註11に記したように、大洞 A1～A´新期の土器が見られるが、青木畑式の時期はないようである。地点による出土土器の違いが指摘され、一つの遺跡として扱うことに慎重な意見もあることから(安藤ほか　2009：p.75)、以下調査報告書別に記す。

名川町教育委員会調査地点では、土偶２点出土し、刺突文土偶の肩と大洞Ａ１式新期の結髪土偶１点(報告書：第11図５)である。

青森県立郷土館調査地点では、土偶８点、岩版・線刻礫７点(以上)出土し、その他、石冠１点、石剣類破片２点が掲載されている(青森県立郷土館　1988)。表の補足｡「三角形の突起状の土製品」(報告書：p.81)は、土器の脚なので割愛した。写真図版32の43～46は、線刻礫等の可能性があり、特に45と46は整形して平坦面を作り出していて(報告書：p.84)、その可能性は大であるが、写真のみであり詳細不明なので割愛した。石製品が掲載されている報告書図60にはスケールが入っておらず観察表も

ないので大きさ不明である。

青森県教育委員会調査地点は、青森県立郷土館調査地点の北側に隣接する。土偶５点、土版２点出土した(青森県教育委員会　2015)。

・青森県市浦村岩井・大沼遺跡(第５表601)(市浦村教育委員会　2001)

調査面積が900㎡と狭いためか、掲載土器は少なく、また小片が中心で、全容は掴み難いが、報告者の言うとおり(報告書：p.44)、大洞Ａ２式～Ａ´式古期と思われる。土版１点のほか、スプーン状土製品の破片１点出土している。

⑼晩期末～弥生時代中期

弥生時代中期にも単純に近い遺跡が多く見られるが、前期末と同様、関連遺物を出土する遺跡は少ない。その意味するところは重要であると思われるので、前章と同様紹介しておくことにする。

青森県旧脇野沢村瀬野遺跡では、弥生時代中期前葉二枚橋式土器がまとまって出土しているが、土・石製品は、土偶２点？、管玉破片１点、土製装身具？(「土版」)１点のみである(東北考古学会　1982)。

青森県旧川内町板子塚遺跡では、弥生時代中期後葉念仏間式期を中心とした土坑墓が多数検出された。出土土器は、弥生時代中期前葉や僅かながら後期の土器も見られ、長期にわたるようだ。「縄文晩期に属すと考えられる土器」も掲載されているが、明確な土器はほとんどない。副葬品は、石鏃、石製玉類が中心で、コハク製大珠やヒスイ勾玉も出土した。指輪状の環状赤色顔料も認められる。黒曜石製品28点のうち24点が北海道産で、また石鏃を多量に副葬する点など、続縄文文化の影響が強い。出土土製品は円盤状土製品のみで、石製品は、方解石２点のほかは、玉類など装身具のみである。

青森県旧三厩村宇鉄Ⅱ遺跡では、弥生時代中期前～中葉の墓域が検出され、多くの玉類が出土し(青森県立郷土館　1979)、続縄文文化の影響を強く受け、カップ形の土器(第１図２)や石銛、魚形石器が出土し、収集対象期では、上記のほか大洞A1式土器が１点見られる(報告書：第49図４)。土・石製品は、装身具以外は土偶１点のみである(報告書：第13図３)。「動物形土製器」とされるもの(報告書：第13図４)は、写真でもそれらしく見えない(通常の把手の一部か)。装身具は、調査時の寄贈品も含めると、ヒスイ製勾玉１点、丸玉２点のうち調査品はヒスイ製、362点の管玉は全て碧玉製で、うち356点が第14号土壙墓から出土した。その他凝灰岩製無文の垂飾品が１点ある。

青森県田舎館村垂柳遺跡の東に隣接する高樋⑶遺跡では、水田跡が検出され、弥生時代中期中葉の土器が出土しているが、当該期の土・石製品の出土はなかったようである(田舎館村教育委員会　2002)。

青森県深浦町津山遺跡では、弥生時代中期前葉五所式期の竪穴住居跡が２棟検出され、当該期の土偶２点出土した(青森県教育委員会　1997)。本稿の対象期では、ほかに大洞Ｂ２式の注口土器が出土している(報告書：図129の12)。

秋田県旧若美町横長根Ａ遺跡では、弥生時代中期前半の竪穴住居跡１棟、土坑が検出されている(若美町教育委員会　1984)。比較的まとまって出土している該期の土器は、横長根Ａ式と認定され、五所式併行期より新しく、時期幅を有するらしい(佐藤　2015：p.410)。土偶10点、スプーン形土製品２点出土している。本稿の対象期では、ほかに大洞BC2～Ｃ１式土器が50点ほど掲載されている。

岩手県旧滝沢村湯舟沢遺跡３区では、弥生時代中期前葉の集落跡(住居約15棟)が検出され、まとまった数の土器が出土しているが(滝沢村教育委員会　1986)、縄文時代後期前葉の集落跡、弥生時代後期の集落跡(住居３棟)も検出され、また、瘤付土器第Ⅳ段階～大洞Ｃ１式土器も比較的まとまって出土し、大洞Ａ１～Ａ´式新期土器も見られ(報告書：第140図20～23、第121図43)、単純ではない。土製

耳飾１点(報告書：第159図５)は、縄文時代後期前葉のものである。土偶が５点出土しているが、報告書第159図４は晩期前葉、その他(報告書：第95図10、第159図１～３)はいずれも晩期後葉～弥生時代前期末であろう。土製紡錘車１点(報告書:第159図19)は、弥生時代後期のものである。その他の土・石製品は、円盤状土製品しか掲載されていない。

岩手県旧水沢市橋本遺跡では、少量の晩期後半土器を含むようだが(佐藤ほか　1992：p.20、1995：p.27)、弥生時代中期後葉土器がまとまって出土した。土偶が４点出土している。佐藤(1995)第７図141(本稿第１図４)は、「土偶の部分とも考えられるが、詳細は不明である」(佐藤ほか　1995：p.28)とされた土製品である。今回、仕事で実見する機会を得て、これは動物形把手なのではないかと考えるに至った。実見する前に後述する小山田(2)遺跡の実測図を見ていたからである(第１図３)。上面図が描かれていないので、その類似に気づけないが、どちらも両耳を立て鼻先が尖る動物を表現しているのがわかる。ただし、小山田⑵例は土器本体への接続部が鼻先とは別に設置されているのに対し、橋本例は鼻先がそのまま土器本体へ接続するようになっているため、より抽象的で、「偶然動物にも見えるに過ぎない」という批判も十分に可能である。そのため、本稿では資料として掲げなかった。ちなみに、本遺跡出土土偶に比べ、この土製品は胎土に挟雑物を含まず硬く緻密であり、土器の把手としての機能を十分に果たせたと考え、小山田⑵例との差は、中期前葉と中期後葉という時期の隔たりによるものと推測する。しかし、この種の把手は、第１図２のような続縄文土器にしばしば見られるカップ状の器種に付くと考えられるが、小山田⑵遺跡はともかく、橋本遺跡のような南で、続縄文土器の影響が認められるだろうか。実際、掲載土器(佐藤ほか　1992、1995)には、それらしい例は見当たらない。この点も、資料として掲げなかった理由の一つである。なお、実見は、来年度岩手県立博物館企画展に伴うもので、便宜を図っていただいた奥州市埋蔵文化財調査センターに謝意を表する。

円盤状土製品４点のほかに、不明土製品がもう１点出土しているようだが(佐藤ほか　1995：p.28)、具体的な言及がない。以上のほかに、環状石製品が１点出土している。

以上と第５表から、弥生時代中期を主体とする遺跡では、土偶、動物形突起・把手以外の「関連遺物」は、ほぼ出土しないことが分かる。このことから、弥生時代前期末以前から中期の継続遺跡で、多量に土版等の土偶、動物形突起・把手以外の「関連遺物」が出土した場合は、その時期は前期末以前に帰属させられる可能性が高い。

・青森県弘前市砂沢遺跡(第５表602～628)(弘前市教育委員会　1988、1991)

弥生時代前期末の水田が発見され、縄文時代晩期末大洞Ａ´式～弥生時代中期前葉五所式の土器がまとまって出土しているが、主体は砂沢式である。本稿の対象期では、大洞Ｃ２式の注口土器も出土している(報告書図版編：第135図１＝P234)。縄文時代後期後葉の竪穴住居跡も検出され、当該期の土偶も出土している。

土偶は、竪穴住居から出土した縄文時代後期後葉５点を除き、84点掲載されているが、そのうち縄文時代中期末～後期初頭が１点(弘前市教育委員会　1988：第136図１)、後期後葉が１点(弘前市教育委員会　1991：第89図138)、縄文時代後期後葉土器口縁部の突起１点(弘前市教育委員会　1988：第137図９)を除いた81点が当該期の土偶ということになる(註６)。土偶自体は弥生時代中期以降まで存続するが、本遺跡の場合中期に下ると明瞭に確認できた資料はなく、ほぼ全て砂沢式期に属すると考える(金子　2015a)。なお、以上のほかに、土偶の一部かとされた資料が十点ほどあるが(弘前市教育委員会　1991：pp.185～186)、実見しておらず、写真も不鮮明で判断できないので、割愛した。

表に示したように、土版は24点出土し、上述のように、弥生時代中期に土版が残存する可能性は低いことから、全て砂沢式期の可能性が高い。表に示した動物形土製品が１点ある。この時期にクマで

なくイノシシというのが興味深い。接合面から剥離している点から全容が気になる。全身像ではなく、動物形突起なのかもしれない。蓋に付いた動物形突起（クマ？）については、表に２点掲げたが、報告書ではあまり注視されていないため、もっと多く存在する可能性が高い。

その他、スプーン状土製品１点、石剣類16点、独鈷石（ツルハシ状）１点、多頭石斧１点、石製玉類は12点出土し、未成品３点を除くと、丸玉４点（「臼玉」含む）、平玉２点、管玉３点出土している。碧玉製の管玉１点、コハク製平玉１点含まれる。土製丸玉４点出土し、石に孔を開けたものが２点出土した。以上のほかに、不定型の「不明」とされた土製品の破片が数点出土している（弘前市教育委員会1991：pp.185～186）。弘前市教育委員会（1991）第88図126は、垂飾品か。

・青森県八戸市八戸城跡（第５表638）（八戸遺跡調査会　2002）

弥生時代前期末の竪穴住居跡が１棟検出され、その床面から土偶と土偶形容器が発見された。土器は、小片のみで少なく、弥生時代前期末と後期が出土しているが、報告者は前期の住居と判断している（報告書：p.43）。近世の城跡である上に古代の集落跡でもあり、弥生時代の痕跡は薄い。

土偶形容器は、ほぼ完形の状態で「炉と北西壁との中間あたりの床面から正面を上にして出土した」（報告書：p.20）。土偶形ではあるが、頭と下半身はなく、文字通り首の上が口縁となり、ウエストが底となる。土偶は刺突文土偶で、「住居床面や炉に散在して出土した」（報告書：p.20）。他に、縄文～弥生時代の土・石製品はない。

・岩手県北上市金附遺跡（第５表629～637）（（財）岩手県文化振興事業団　2006）

縄文時代晩期末～弥生時代中期前半の集落跡が検出され、後背湿地に形成された捨て場から大量の土器や石器の素材、未成品が出土した。自然堤防上には、縄文時代中期末の竪穴住居跡や後期中葉を中心とした土坑も検出され、この間を繋ぐ時期の土器片も僅かながら出土している。そうした意味では、単純に近い遺跡とはとても言えないが、出土量に極端な違いが認められ、ほとんど全て晩期末～弥生時代中期と言っても過言ではない。さらに、上記のように、弥生時代中期まで残るのは土偶と動物形突起等の一部に限られるので、実際には、ほとんどの関連遺物が晩期末～弥生時代前期末に限定される。また、東北地方北部太平洋側では、弥生時代中期の初めにいったん土偶は消滅したと考えられ（金子　印刷中）、本遺跡の中期前半の土偶はないに等しいはずなので、土偶も、晩期末～弥生時代前期末にほぼ限定される。

土偶は、後期中葉とあまりに不確実なものを除くと、約92点が当該期と判断される（金子　2015a：第７表3738～3829）。土版は、土器の出土量に比例せず、より古い５類で、晩期末を下らないと推測される。いずれも雑なつくりで、粘土まくれ痕が沈線を埋めている。

表に示したように、動物形土製品２点、動物形突起が４点出土し、これらの中には弥生時代中期まで下るものがあるかもしれない。「スタンプ状」土製品としたものは、当該期にしばしば見られるスプーン状土製品の柄の部分の可能性が高い。２点出土している。土製花弁平玉１点（報告書：第401図18）も（金子　2011c）、土製三角玉１点（報告書：第401図19）も、この時期であろう（金子　2011b）。報告書第401図20の土製垂飾１点も、文様から当該期であろう。石製管玉３点、勾玉４点、丸玉７点、そのほか玉類未成品も、この時期の可能性がある。環状石製品４点、その未成品61点、独鈷石未成品31点、石冠未成品２点、石剣類未成品219点なども当該期であろう。

・岩手県旧江釣子村蔵屋敷遺跡（第５表639）（江釣子村教育委員会　1983）

弥生時代前期末青木畑式～中期前葉谷起島式土器が掲載されている。谷起島式は新段階（石川2005）まで認められる（報告書第61図７）。

岩偶以外に、土偶の足１点、「腕輪」とされる不明土製品１点が掲載されている。土偶の足は、図か

ら判断すると不整形で、異なる土製品の可能性も考えられ、まして当該期に帰属するかどうか気になるが、写真が不掲載で判断できない。「腕輪」は、スプーン状土製品の柄に似るが、湾曲が強い。

・青森県田舎館村垂柳遺跡（第５表640～641）（田舎館村教育委員会　1993、2009ほか）

古くから注目された遺跡で、東北大学の調査で焼米200粒以上発見され、青森県教育委員会の調査により東北地方で初めて弥生時代の水田跡が確認された（青森県教育委員会　1985）。国史跡指定に伴い、前後に田舎館村教育委員会により継続調査が行われたが、その報告書は、岩手県の埋蔵文化財センター、県立博物館に全てはそろっておらず（註７）、今回は確認できた範囲での収集である。特に、本稿に関係する範囲では、クマ意匠の把手を持つ漆塗りの柄杓の報告記載が確認できず、資料に含めることができなかった。そうした意味で、以下の組成も全体像を示していないことをお断りしておく。

土偶は12点以上出土している（金子　2015a：第７表3328～3339）。表に示したように蓋のクマ形突起２点以上、玉類は比較的多く、田舎館村教育委員会（2009）には、石製管玉11点、石製丸玉１点、石製平玉２点、土製花弁平玉４点、土製平玉３点掲載されている。石製管玉にはコハク製が１点ある。その他、有孔石製品や未成品が24点あり、丸玉？未成品にはヒスイ製のものが１点ある。青森県教育委員会（1997）にも、コハク製平玉が１点掲載されている。また、『青森県史資料編考古３　弥生～古代』（青森県教育委員会　2005）に、新潟県佐渡島産の管玉が出土したとあるが（p.94）、掲載箇所を特定できなかった。なお、田舎館村教育委員会（2009）には土製耳飾が１点掲載されているが（第90図259）、当該期のものとは思われない。形の上からは、縄文時代後期前～中葉かと推測されるが、やや大きいか。

・青森県三沢市小山田⑵遺跡（第５表642～643）（三沢市教育委員会　1999）

弥生時代中期前葉馬場野Ⅱ式期の竪穴住居跡２棟検出され、遺構外も含め土器が比較的まとまって出土しているが、住居内は粗製土器がほとんどである。住居跡からは500粒を超える炭化米が出土している。弥生時代前期末青木畑式らしい土器片も見られるが（報告書：第105図31）、他に資料収集対象期に該当する土器はない。当該期の土・石製品には、動物形土製品？１点、動物形把手１点、住居と遺構外から出土し同一個体と考えられるヒスイ製有孔石製品２点がある。環状石製品が１点出土しているが、出土層から縄文時代早期中葉貝殻文期の方に帰属するようである。

５．ここまでのまとめ

まず、前稿「第１表秋田県の時期の限られた遺跡」で、地域を限って（できるだけ地域差を混在させないようにして）時期による変化傾向を探った。その結果、晩期中葉大洞Ｃ２式期を境に岩版主体→土版主体へ変化することがわかった。次に、前稿「第２表大洞 BC２式期を中心とした遺跡」、「第３表大洞Ｃ２式期を中心とした遺跡」、本稿「第４表砂沢式期を中心とした遺跡」で、そうした傾向が正しいか確認すると共に、時期の限られた各地の遺跡を比較検討することによって、地域差を見通そうと試みた。まず、岩版→土版という時期的な変化は概ね正しく、さらに砂沢式期を境に土版→動物形突起等という変化も看取され、岩版→土版→動物形突起という変遷を示すことがわかった。ただし、砂沢式期以降は、「関連遺物」はほとんど見られなくなり、動物形突起も僅かに見られるに過ぎない。

次に、地域差を中心とした検討結果について述べる。第２表の大洞 BC２式期から、岩版が多いという時期的傾向は、東北地方中部、概ね盛岡市付近までに限られ、それ以南では岩版は稀になり、「関連遺物」自体ほとんど見られないことがわかった。ただし、福島県いわき市薄磯貝塚などでは多数の線刻礫が出土していて（いわき市教育委員会　1988）、東北地方南部はまた別の傾向が認められるようであり、注意を要する。さらに、岩手県南部は、大洞Ｃ２式期（前稿第３表）に至るまで、美々４型中空動物形土製品と正中線中空土版が顕著に認められる。しかし、少なくとも、美々４型土製品は、出

現期から初期まで、北海道～東北地方の日本海側に顕著で(金子　2001)(本稿第２図)、取り上げた資料が偏っているためである可能性があり、この分布についても注意を要する。

第３表の大洞Ｃ２式期では、第２表大洞 BC２式期で認められた南限が、より南下し、岩手県北上市付近まで北部と同様の傾向が見られる。さらに、数は非常に少ないが、岩版や線刻礫は、宮城県北部まで一般的である。こうした現象をどう理解するかは、本研究がもう少し進んで前後の時期の様相が掴めてこないと難しい。また、理解しがたいのが、大橋遺跡の岩版の多さである。線刻礫だけでなく５類もまとまった数が認められるのである。上記で掴んだ傾向から判断すれば、安堵屋敷遺跡の出土傾向(第３表342～363)こそが､この地域のあり方としてふさわしいのではないかと思われるのだが、両遺跡とも、出土土器の時期が偏り多数の土偶が出土した点は共通する。

第４表の砂沢式期。第５表も参考にすれば、津軽地方は、この時期まで土版が多数見られる。

第２～４表のように時期ごとにまとまりはしないが、比較的短期の単純に近いまとまりを示す遺跡を集めたのが、本稿第５表である。第１～４表の検討結果を検証的に検討するため作成した。これまで検討できなかった晩期初頭の事例が僅かだが見られる。三例だけで傾向を掴むのには無理があるが、岩版がまだ主体ではないことは言えそうである。岩版が主体になるのは、稲野彰子氏(1983)の言う１類が誕生してからのことなのであろう。したがって、晩期前葉を境に､「関連遺物」が僅少多様→岩版主体という変化が予測される。それ以外については、概ね上記で掴んだ傾向が当てはまっていると言えそうだが､第５表592～600の剣吉荒町遺跡が気になる。既に土版が主流になっていて良いはずだが、岩版類が比較的多い。ただし、主体は非ＫＯ類なので、他で不掲載になりがちな類を積極的に報告したためだけかもしれない。

第２表の検討の中でも若干ふれたが、ここまで、宮城、山形、福島県東北地方南部の遺跡を扱えていない。それは、意図的なものではなく資料の性質によるものである。宮城県では、ここまで扱ってきた短期の遺跡は存在するのだが､「関連遺物」を出土した遺跡が少なく、取り上げられなかったのである。山形、福島県は、逆に､「関連遺物」は比較的目にするのだが、短期の遺跡が少なく、やはり取り上げられなかった。今後の集成を待つことになる。

土偶と「関連遺物」ということで検討しているが、土偶に匹敵する数が見られるのは、岩版・土版だけであることが改めて分かった。組成を考える際には、この三つあるいは二つの遺物が基軸になる。

前稿からここまで、短期で時期の特定しやすい遺跡出土の「関連遺物」を扱ってきたが、思った以上に資料が少なく、時期組成について十分な見通しを得ることができなかった。そこで、次稿では､「関連遺物」多数出土遺跡を集成する。上記岩手県金附遺跡の土版のような例外もあるが､「関連遺物」の出土数も概ね出土土器の量に比例するので、ある程度時期の判断は付き時期組成の傾向を探ることはできるのではないかと考える。その見通しを基に、その後悉皆的な収集に入り、収集された「関連遺物」の時期に見当をつけていく。

註

⑴今後多くの雑誌が電子ジャーナル化していくとは思うが、文系の論文の場合理系のそれのように短くまとめられないので、印刷媒体が必要だと考える。長いので、画面上だと読むのに時間がかかり、逐一印刷するのも手間である。何より、その論文を読む必要があるかどうか“瞥見”するのは印刷物の方が早い。環境破壊や温暖化につながるのなら、あきらめるが、そうでないなら印刷媒体も残して欲しいと思う。ただし、発行から時間が経ち最初から読む必要があるとわかっている場合は、電子ジャーナルの方が便利である。保管場所の削減にも繋がる。ちなみに、本稿の⑶は、印刷費が確保できれば『岩手県立博物館研究報告』第 35 号以降に掲載したいと考えているが、今のところ何とも言えない。

⑵したがって、新しく位置づけた金子（2001）第 23 図２の岩手県手代森遺跡例は、再検討が必要かもしれない。

⑶報告書第２分冊第 93 図 786 は、写真を見る限り土偶ではないと思う。

⑷例えば、岩手県雫石町桜沼遺跡例（雫石町教育委員会　1975）。いわゆる壁は認められず、列石が円環状に認められ、中央に石囲炉がある。岩手県旧松尾村釜石遺跡では、環状列石として扱われているが、中央の石囲炉には焼土も認められ、住居跡と考えるのが自然である（江坂　1963）。直径 12 ｍは規模として確かに大きいが、晩期の大型住居にないわけでもない。例えば、岩手県旧安代町曲田Ⅰ遺跡ＧⅢ－ 016 Ａ住居跡が相当する（(財) 岩手県埋蔵文化財センター　1985）。

⑸“大きさ”も大切な属性の一つなので、あまりに大きくて図版の枠に収まらない場合や小さくて潰れてしまう場合を除き、一つの報告書の同じ種類の遺物の中で無闇に縮尺を変えないでいただきたいと思う。そして、やむを得なく変更する場合は、読者が間違わないよう明示していただきたい。縮尺を細かく変更するのは、使用者の側に立つことの少ない、研究者でない報告書作成初心者に良く見られる傾向ではある。

⑹この他、報告書（弘前市教育委員会　1991：第 16 表）では、弘前市教育委員会（1988）第 136 図３も後期とされているが、筆者実見により、図は天地裏表逆で、刺突文土偶と判断した。実見は、岩手県立博物館の企画展に伴う資料調査によるもので、弘前市教育委員会に謝意を表する。弘前市教育委員会（1991）第 86 図 105 も、後期とされている。これについては実見していないが、弥生土偶の可能性も残す。

⑺両機関合わせても、第２年次～第４年次の報告書が配架されていない。該当報告書は、田舎館村教育委員会（2009）等報告書の奥付上や『青森県史資料編考古３　弥生～古代』（青森県教育委員会　2005）参照。

⑻片端側面の刻目列と多重コ字文の間に別の装飾帯があり、片面には半長楕円形を描くように刺突列、片面には弧状の窪みが認められる。左右一対の貫通孔は、その下、多重コ字文の最上部に施される。59 ｇ。

⑼ただし、片端側面刻目列と多重文様の間の装飾帯には、文様ではなく、片端は１本、片端は３本の水平直線が施される。厚さ 1.1㎝、16 ｇ。

⑽５×５ｍの「グリッドから破片がまとまって出土したが、土圧でつぶれた状態でなくばらばらの状態であった」（報告書：第１分冊 p.176）。破片は図上復元できるくらいにはまとまっているが（第１図１）、欠損部分も多く「注口部分の破片はみつかっていない」（同上）。注口部は、基部接合面から剥離している。土器は、二段作りの注口土器の祖形で、上段は未発達で低い。算盤玉のような下段はまだ高く、注口下は無文である。底面にはリング状の突起があり、胴部上半は、帯状文と魚眼状三叉文が４単位施される。上段は、正面に魚眼状三叉文、その反対側の文様は、欠損により不鮮明である。側面は、低いため明瞭な文様は施されず、ほぼ突起のみである。正面の魚眼状三叉文の上に、人面が板状に斜め上を見る形で取り付けられている。顔は、鼻と顎部分が剥落している。眉と目は、遮光器前夜大洞Ｂ１式新期のそれである。額上に大ぶりの突起が付く。

⑾通常の晩期末～弥生時代前期を主体とする遺跡と異なり、晩期後葉大洞Ａ１式土器の出土も多く、その後大洞Ａ´式新期まで減少することはなく、その継続性は明らかで、この点から、半拠点集落ではなく拠点集落と判断した。晩期後葉以降の継続的な拠点集落は珍しく、他には、青森県砂沢遺跡、岩手県金附遺跡、岩手県谷起島遺跡が相当する程度か。

⑿６字文は陰刻が浅いがＴ字文は深く、その違いはナゾリの数が多いか少ないかである。

⒀「下側の折れた断面の約２／３に煤とは異なる黒色の付着物が見られ、アスファルトの可能性もある」（報告書：p.116）

参考文献

青森県教育委員会　1978『源常平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 39 集

1982『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 71 集

1985『垂柳遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 88 集

1988『上尾駁 (1) 遺跡Ｃ地区』青森県埋蔵文化財調査報告書第 113 集

1994『畑内遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 161 集

1995『畑内遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 178 集

1995『板子塚遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 180 集

1997『畑内遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 211 集

1997『宇田野⑵遺跡・宇田野⑶遺跡・草薙⑶遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 217 集

1997『垂柳遺跡・五輪野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 219 集

1997『津山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 221 集

1999『畑内遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 262 集

2000『畑内遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 276 集

2001『畑内遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 308 集

2002『畑内遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 326 集

2003『楢館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 342 集

2003『畑内遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 345 集

2015『剣吉荒町遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 558 集

青森県立郷土館　1979『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第６集　考古－３
1988『名川町剣吉荒町遺跡（第２地区）発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第 22 集　考古－７
1997『馬渕川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告第 40 集　考古－ 11
青森山田高等学校考古学研究会　1994『撚糸文』第 21 号（特集青森市沢山 (1) 遺跡の出土遺物）
秋田県教育委員会　1994『桂の沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 247 集
2008『堀ノ内遺跡』秋田県文化財調査報告書第 432 集
安藤弘道ほか　2009『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』（平成 18 ～ 20 年度科学研究費補助金（基礎研究（Ｃ））研究成果報告書）
石川日出志　2005「弥生中期谷起島式に後続する磨消縄文土器群」『岩手考古学』第 17 号　岩手考古学会
田舎館村教育委員会　1993『垂柳遺跡発掘調査報告書⑻』田舎館村埋蔵文化財調査報告書９集
2002『高樋⑶遺跡発掘調査報告書』田舎館村埋蔵文化財調査報告書 11 集
2009『垂柳遺跡発掘調査報告書⒀』田舎館村埋蔵文化財調査報告書 16 集
稲野彰子　1983「岩版」『縄文文化の研究第９巻　縄文人の精神文化』雄山閣
（福島県）いわき市教育委員会　1988『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第 19 冊
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1985『曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第 87 集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 125 集
1990『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 157 集
1991『上村貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 158 集
1996『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 264 集
1997『上甲子遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 254 集
1998『萱中Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 286 集
1999『細田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 283 集
1999『野沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 294 集
1999『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 306 集
2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 318 集
2001『宮沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 358 集
2001『泉屋遺跡第 16・19・21 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 399 集
2003『平倉観音遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 448 集
2004『玉川向遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 426 集
2006『上野場３遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 477 集
2006『大西遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 479 集
2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 482 集
2009『境遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 539 集
2010『境遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 568 集
2010『平成 21 年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 571 集（立花館遺跡）
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2014『立花南遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 621 集
2015『平成 26 年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 647 集
2016a『平成 27 年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 661 集
2016b『向新田Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 657 集
岩手県立博物館　1985『熊穴洞穴遺跡発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第１冊
江坂輝弥　1963「岩手県岩手郡釜石遺跡」『日本考古学年報６（昭和 28 年度）』誠文堂新光社
江釣子村教育委員会　1983『江釣子遺跡群―昭和 57 年度発掘調査報告―』（蔵屋敷遺跡）
大迫町教育委員会　1979『小田遺跡発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告第４集
金子昭彦　2001『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史４　同成社
2004「結髪土偶と刺突文土偶の編年」『古代』第 114 号　早稲田大学考古学会
2006「東北地方北部における縄文晩期の『装飾品』⑴」『紀要』ＸＸＶ　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2009a「縄文晩期・東北北部の土製耳飾」『縄文時代』第 20 号　縄文時代文化研究会
2009b「東北地方・縄文晩期における弧状土製品」『物質文化』87 号　物質文化研究会
2010a「東北地方・縄文晩期の土偶⑴」『紀要』ＸＸⅨ　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2010b「北日本・縄文晩期のボタン状製品」『岩手考古学』第 21 号　岩手考古学会
2010c「縄文晩期・東北北部の土製耳飾（続）」『縄文時代』第 21 号　縄文時代文化研究会
2011a「東北地方・縄文晩期の土偶⑵」『紀要』ＸＸＸ　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2011b「北日本・縄文晩期の三角玉ほかの装飾品」『岩手考古学』第 22 号　岩手考古学会
2011c「北日本・縄文晩期の花弁丸玉、平玉」『縄文時代』第 22 号　縄文時代文化研究会
2012「東北地方北部の縄文土製耳飾」『縄文時代』第 23 号　縄文時代文化研究会
2014「東北地方・縄文晩期の土偶⑷」『紀要』第 33 号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2015a「東北地方・縄文晩期の土偶⑸」『紀要』第 34 号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2015b「縄文土偶の終わり」『考古学研究』第 62 巻第２号　考古学研究会
2016a「東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物⑴」『岩手県立博物館研究報告』第 33 号
2016b「東北地方・縄文晩期の土偶⑹」『紀要』第 35 号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2016c「瘤付土器に伴う土偶の系列」『青森県考古学』第 24 号　青森県考古学会
印刷中「弥生時代の縄文土偶」『青森県考古学』第 25 号　青森県考古学会
北上市教育委員会　2004『丸子館跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 61 集
久慈市教育委員会　1994『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第 18 集
2002『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書Ⅳ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第 30 集
小杉　康　1986「千葉県江原台遺跡及び岩手県雨滝遺跡出土の亀形土製品」『明治大学考古学博物館館報』No.2
1996「２⑶土製品」『考古学雑誌』第 82 巻第２号（特集日本考古学における型式学⑴）
日本考古学会
（秋田県山本郡）琴丘町教育委員会　1983『高石野遺跡発掘調査概報』
佐藤祐輔　2015「Ⅳ７　東北」『弥生土器』考古調査ハンドブック 12　ニューサイエンス社
佐藤嘉広ほか　1992「岩手県水沢市橋本遺跡出土土器について」『岩手県立博物館研究報告』第 10 号
1995「岩手県水沢市橋本遺跡出土資料について（補遺）」『岩手県立博物館研究報告』第 13 号
三戸町教育委員会　2000『沖中遺跡・沖中⑵遺跡』三戸町埋蔵文化財調査報告書第１集
（青森県）市浦村教育委員会　2001『岩井・大沼遺跡』市浦村埋蔵文化財調査報告書第 12 集
雫石町教育委員会　1975『桜沼遺跡調査概報』
高瀬克範編　2012『江豚沢Ⅰ』江豚沢遺跡調査グループ
滝沢村教育委員会　1986『湯舟沢遺跡』滝沢村文化財調査報告書第２集
東北考古学会　1982『瀬野遺跡』
東和町教育委員会　2001『町内遺跡発掘調査報告書Ⅹ　滝大神Ⅰ遺跡』東和町文化財調査報告書第 28 集
2002『町内遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ　滝大神Ⅰ遺跡Ⅱ』東和町文化財調査報告書第 33 集
名川町教育委員会　1984『剣吉荒町遺跡発掘調査報告書』
二戸市埋蔵文化財センター　2012『中穴牛遺跡』二戸市埋蔵文化財センター調査報告書第 11 集
野田村教育委員会　2015『蒲沢遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第５集
八戸遺跡調査会　2002『八戸城跡Ⅱ』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第３集
（青森県）平賀町教育委員会　1983『木戸口遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第 12 集
弘前市教育委員会　1988『砂沢遺跡発掘調査報告書―図版編―』
1991『砂沢遺跡発掘調査報告書―本文編―』
弘前大学人文学部　2008『青森県三戸郡三戸町杉沢遺跡発掘調査報告書』日本考古学研究室研究報告６
洋野町教育委員会　2015『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第２集
（青森県）三沢市教育委員会　1999『小山田⑵遺跡　天狗森⑶遺跡』三沢市埋蔵文化財調査報告書第 17 集
宮城県教育委員会　1982『青木畑遺跡』宮城県文化財調査報告書第 85 集
宮古市教育委員会　1999a『赤前Ⅲ遺跡　赤前Ⅳ八枚田遺跡　赤前Ⅴ柳沢遺跡　赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡　小堀内Ⅲ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 53
1999b『千鶏Ⅳ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 54
盛岡市教育委員会　2003『盛岡市内遺跡群―平成 14 年度発掘調査概報―』（落合遺跡）
2003『向田遺跡』
山形県教育委員会　1984『作野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 83 集
（秋田県）若美町教育委員会　1984『横長根Ａ遺跡』

岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（１）

－石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、古館Ⅱ遺跡、千苅遺跡資料を中心に－

米田　寛・高橋静歩・河本純一・佐々木あゆみ・酒井野々子

古墳時代～平安時代の赤彩土器の集成を行い、遺跡分布、土器編年、赤彩土器観察、顔料分析、胎土観察を実施した。結果、県内各地域の土器製作技術で作られていることが判明し、古代赤彩文化について岩手県内陸南部からの一方向的な拡散とは捉え難いとの結論を得た。

１．はじめに

赤彩土器は､東北北部地域における古代社会考察を行う上で重要な資料である。これまでの研究は、主に資料豊富な岩手県内陸部を中心に進展した(杉本1998・2001・2002等)。赤彩土器のうち、７世紀後半～９世紀の赤彩球胴甕が蝦夷の儀器(杉本1998)と位置付けられたことで、広く識者に認識されるようになり、県内外での集成と検討(高橋静2007)も行われた。また、東日本大震災復興関連発掘調査によって太平洋沿岸部においても資料蓄積が進み、県外でも新資料が確認され、古代赤彩土器の出土する分布領域が拡大した。そこで現状を鑑み、本論では新資料を中心に古代赤彩土器に関する再検討を試みる。なお資料検討に際し、赤彩土器分析では高橋論文(高橋静前掲)の分析方法を踏襲し、それに新資料を追加して再検討を加え、一部の資料について肉眼及び低倍率法による胎土観察と赤色顔料のＸ線回折分析を実施した。本稿は、２節分布論、３節編年、６節製作実験、７節Ｘ線回折分析を米田、４節色調･顔料塗布面の検討を高橋、５節胎土観察を河本で分担執筆した。まとめは意見調整し、米田が執筆した。

2-1．分布論的検討

岩手県内については、５世紀後半～９世紀前半までを対象とした。岩手県外については７～９世紀の特徴的な資料について対象とする。

(ａ)岩手県内陸部

岩手県内陸部については、これまでの赤彩土器の論考に示された分布傾向と小地域間の関係性(杉本前掲、高橋静前掲)に変更はない。県北部～県中央部では一戸町大平遺跡、滝沢市湯舟沢Ⅲ遺跡、盛岡市台太郎遺跡・志波城跡・野古Ａ遺跡・新堰端遺跡で確認されている。県南部では花巻市法領遺跡・古館Ⅱ遺跡・熊堂古墳群・下坂井Ⅰ遺跡、北上市本宿羽場遺跡・塚遺跡・鳩岡崎遺跡・鳩岡崎上遺跡・藤沢遺跡・岩崎台地遺跡・牡丹畑遺跡・菅田遺跡・妻川遺跡・立花南遺跡・本宿Ⅲ遺跡・八幡遺跡・尻引遺跡・秋子沢遺跡・千苅遺跡・中村遺跡・江釣子古墳群五条丸支群、金ケ崎町上餅田遺跡・石田遺跡、奥州市佐野原遺跡・石田Ⅰ・Ⅱ遺跡・膳性遺跡・石田遺跡・中半入遺跡・沢田遺跡・新川Ⅲ遺跡・宮地遺跡で確認されている。

内陸北部～中央部にかけての赤彩土器出土数は微増に留まる。雫石川流域の平野部に展開する集落遺跡で出土しており、特に古代集落調査の豊富な志波城跡周辺の分布密度が高い。

内陸南部は分布密度が非常に高く、平野部の集落遺跡と墓域で出土する。古墳出土資料が一定量存在することから赤彩土器が祭祀的性格を持つこと(杉本前掲、高橋静前掲)、赤彩土器の器種構成等から北上市域と花巻市域は同グループに位置付けられる(高橋静前掲)。

花巻市域では豊沢川流域に纏まりがあり、特に古館Ⅱ遺跡(７世紀後半～８世紀前半の集落跡)の赤

彩土器出土量が多い。器種は壺が多く、坏・高坏がそれに次ぐ。2007年の集成で、稗貫地域は計67点の赤彩土器が確認されている(高橋静前掲)。

北上市域では北上川沿いと和賀川流域の集落で出土している。2007年の集成でも和賀地域で計50点の赤彩土器が確認されていたが、近年の千苅遺跡・中村遺跡の発掘調査によって新資料が激増している(註１)。千苅遺跡・中村遺跡は北上川沿いの自然堤防上に立地する８世紀後半～９世紀の集落遺跡である。８世紀後半、奥州市域では、北上川沿いに集落形成が進むと指摘されている(高橋千2016)。この現象は北上市域においても連動した現象の可能性があり、千苅・中村・立花南など大規模な集落遺跡が存在する。集落内では土器焼成遺構が数多く調査され、焼成時の破損を示す焼けハジケ痕のある資料も豊富である。その他の赤彩土器出土遺跡については高橋の論考(高橋静前掲)に詳しい。

金ケ崎町と奥州市域では「石田」地名に所在する遺跡で資料が蓄積している。金ケ崎町石田遺跡は、宿内川流域の上餅田遺跡から分離・再登録された遺跡で、７世紀前半の竪穴建物から脚付鉢が出土している。また、７世紀後半～８世紀前半の竪穴建物からも壺と坏に顔料塗布された資料が出土している。奥州市胆沢区石田Ⅰ・Ⅱ遺跡は胆沢川流域に位置する古墳時代中期～平安時代まで継続する大規模集落で、５世紀後半～６世紀の古墳群を伴う沢田遺跡に隣接する。市町村合併によって奥州市が誕生する以前に水沢市石田遺跡、同石田Ⅱ遺跡、胆沢町石田Ⅰ遺跡、胆沢町石田Ⅱ遺跡が存在していたが、奥州市胆沢区石田Ⅰ・Ⅱ遺跡と奥州市水沢区石田遺跡に整理統合された。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡では５世紀後半～６世紀と７世紀後半～８世紀前半の資料中に赤彩土器が含まれている。一方、奥州市石田遺跡からは８世紀後半の赤彩壺が出土している。奥州市では石田Ⅰ・Ⅱ遺跡のほか、胆沢扇状地低位段丘面に位置する中半入遺跡(５世紀後半～６世紀)、膳性遺跡(７世紀)、沢田遺跡(５世紀後半～６世紀)でも赤彩土器が出土している。

(ｂ)岩手県沿岸部

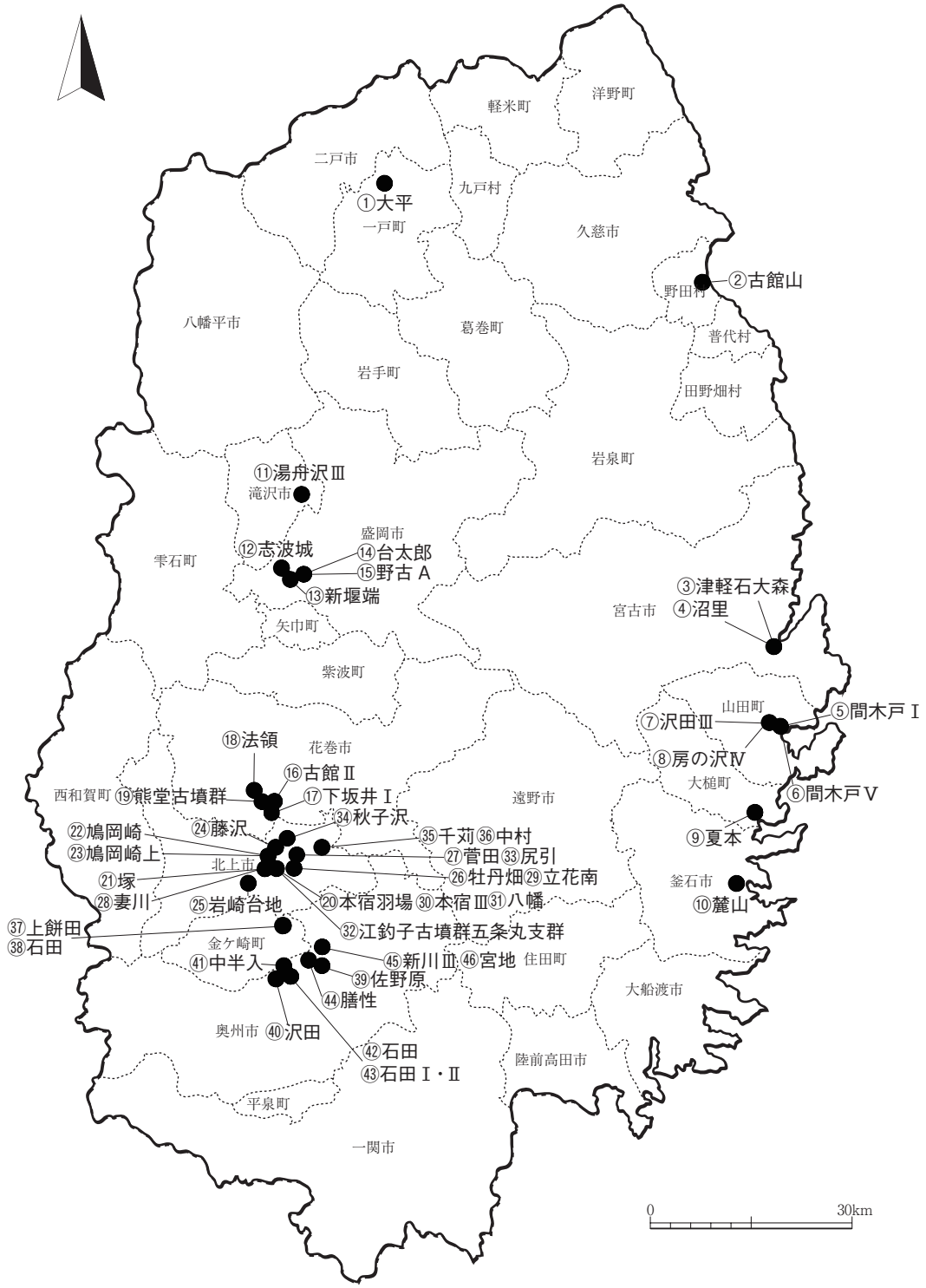
岩手県沿岸部では中部地域に偏った分布であるが、北部でも散見される。中部地域の赤彩土器は宮古市津軽石大森遺跡・沼里遺跡、山田町間木戸Ⅰ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡・房の沢Ⅳ遺跡・沢田Ⅲ遺跡、大槌町夏本遺跡、釜石市麓山遺跡から出土している。北部では野田村古舘山遺跡で出土している。器種は主に壺である。

宮古市津軽石大森遺跡は宮古湾に注ぐ津軽石川河口の平野部に位置する。赤彩土器は重複する竪穴建物群内から、ほぼ完形で口縁～頸部に縦位条線を等間隔に均等配置した小型壺が出土している。時期は器形と建物重複関係から7世紀後半～８世紀前半で、沿岸中部における古代土器様相としては７世紀後半に位置付けた(米田･佐藤2016)。宮古市沼里遺跡は2014年度調査で赤彩土器が出土している。報告書刊行を待って改めて検討したい。

山田町内の赤彩土器出土遺跡は山田湾に注ぐ関口川流域に分布している。間木戸Ⅴ遺跡からは壺片が出土している。古代製鉄に伴う排滓層よりも下位層から出土した。製鉄炉の形状とＡＭＳ年代測定値から８世紀後半の年代が推定されており、壺片は８世紀後半以前と推測される。壺片の赤彩部は細い縦位条線を２～３条一単位としている。また、間木戸Ⅰと沢田Ⅲ遺跡は現在整理作業中であり、報告書の刊行を待って改めて検討したい。沢田Ⅲ遺跡に隣接する房の沢Ⅳ遺跡は、７～８世紀の群集墳を伴う遺跡で、７世紀後半～８世紀前半の壺が出土している。

大槌町夏本遺跡は、大槌湾に注ぐ大槌川流域に位置する８～９世紀の集落遺跡で、製鉄関連遺構を伴う。赤彩土器は壺１個体で、口縁部内面に点丸と四角形の文様、口縁～頸部外面に太い縦位条線を等間隔に描き、胴部は全面に顔料塗布される。器形から８世紀中頃と考える。

釜石市麓山遺跡は、大槌湾に注ぐ鵜住居川流域に位置する集落遺跡で、９世紀前半の資料に伴って



1	大平	11	湯舟沢Ⅲ	21	塚	31	八幡	41	中半入
2	古館山	12	志波城	22	鳩岡崎	32	江釣子古墳群五条丸支群	42	石田
3	津軽石大森	13	新堰端	23	鳩岡崎上	33	尻引	43	石田Ⅰ・Ⅱ
4	沼里	14	台太郎	24	藤沢	34	秋子沢	44	膳性
5	間木戸Ⅰ	15	野古Ａ	25	岩崎台地	35	千苅	45	新川Ⅲ
6	間木戸Ⅴ	16	古館Ⅱ	26	牡丹畑	36	中村	46	宮地
7	沢田Ⅲ	17	下坂井Ⅰ	27	菅田	37	上餅田		
8	房の沢Ⅳ	18	法領	28	妻川	38	石田		
9	夏本	19	熊堂古墳群	29	立花南	39	佐野原		
10	麓山	20	本宿羽場	30	本宿Ⅲ	40	沢田		

第１図　岩手県赤彩土器出土遺跡

壺片が出土している。口縁～頸部に３条一対と考えられる縦位条線を２箇所以上、胴部は全面に顔料塗布される。胴部は一部ミガキ状の光沢がある。この光沢は塗布時に顔料の密着度を向上させる技術的痕跡(高橋静前掲)である。岩手県沿岸部での赤彩土器流通量が少ないため、８世紀製作の伝世品か９世紀製作品か判断できないが、麓山遺跡資料の存在から沿岸部においても平安時代に赤彩土器を使用していると言える。

野田村古舘山遺跡は野田湾に注ぐ泉沢川流域に位置する７世紀を主体とする集落で、２号竪穴住居(７世紀前半)から壺２個体が出土している。

(ｃ)７～９世紀の岩手県隣県の主な赤彩土器遺跡

青森県は八戸市田面木遺跡、秋田県は横手市釘貫遺跡、東成瀬村トクラ遺跡で出土している。釘貫遺跡では７世紀末～８世紀初頭と報告されたSI105-2から赤彩壺が出土している。この壺は胴部形態が算盤玉状で外面に顔料塗布面が残る。トクラ遺跡は７世紀後半～８世紀前半の高坏が2016年度発掘調査現地説明会で公表された。坏身に横位、脚部にほぼ等間隔の太縦位条線文様を持つ(註２)。

宮城県は古墳文化に関わる遺跡が数多くある。ここでは本論と関わりの深い栗原市上戸遺跡・伊治城跡・泉谷館跡の資料について取り上げる。泉谷館跡では７世紀前半の内面黒色付着物が残存する赤彩壺が出土している。伊治城と上戸遺跡では８世紀後半の縦位条線文様をもつ壺片が出土している。

東京都多摩市上っ原遺跡では９世紀第３～４四半期の甲斐型坏を伴う竪穴建物から赤彩壺が出土している。建物内出土土師器は東北地方北部の特徴を有しており、カマド煙道も東北北部で主体の長煙道タイプで、蝦夷の移民の住居と捉えられている(平野2013)。

２-２．時期別分布傾向

大まかな時期別の分布傾向を示す(第２図)。

(ａ)５世紀後半～６世紀

該期の遺跡が、二戸市、滝沢市、盛岡市、北上市、奥州市、久慈市、野田村、宮古市、山田町、陸前高田市で確認されているが、赤彩土器出土遺跡は岩手県内陸南部の奥州市胆沢区に偏る。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡・中半入遺跡・沢田遺跡・膳性遺跡がある。隣県では秋田県横手市田久保下遺跡の土壙墓出土赤彩土器、青森県田向冷水遺跡竪穴住居出土資料がある。

(ｂ)７世紀前半

該期の遺跡は、前時期と同様に内陸南部を中心に展開するが、沿岸北部にも存在する。赤彩土器は金ケ崎町石田遺跡から脚付鉢、沿岸北部の野田村古舘山遺跡で壺が出土している。また、宮城県栗原市泉谷館跡から壺が出土している。

(ｃ)７世紀後半～８世紀前半

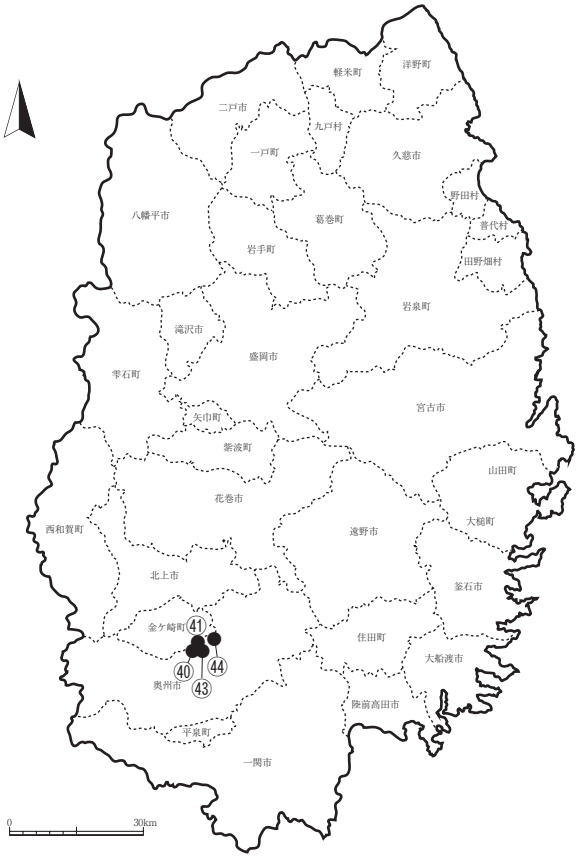
遺跡数は前時期に比べて増加している。岩手県内陸部では北部・中央部・南部、沿岸部では中部で赤彩土器を有する遺跡が存在する。また秋田県横手市・東成瀬村も該期の赤彩土器がある。

(ｄ)８世紀後半～９世紀

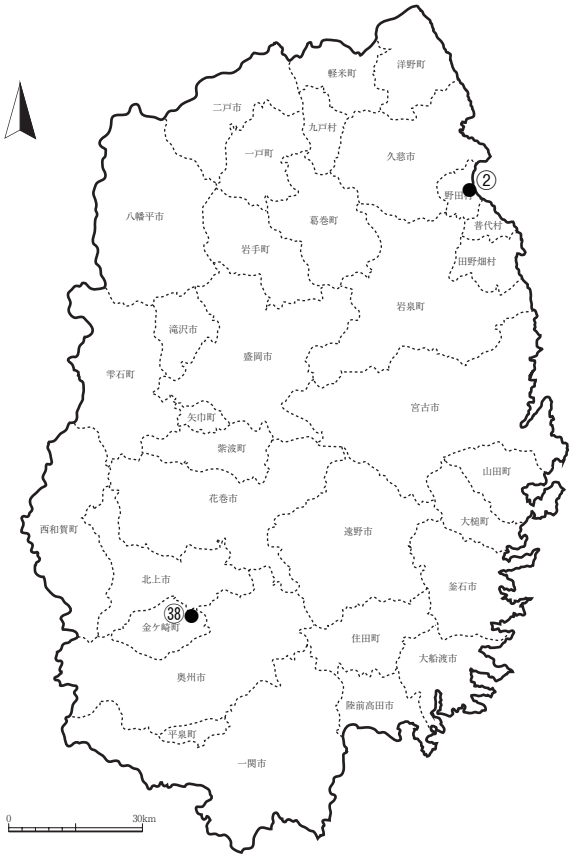
該期の赤彩土器は内陸南部、特に北上市域に多いが、前時期に分布していた地域では引き続き存在しており、さらに東京都多摩市や宮城県栗原市など広範囲となる。

以上、岩手県内陸部と沿岸部、岩手県隣県の赤彩土器分布状況を概観した。第1・２図のように岩手県内陸部では南部地域に集中する。古墳時代資料は奥州市・金ケ崎町・北上市・花巻市・野田村に分布し、奈良時代以降は北上市域に集中する傾向がある。岩手県沿岸部では中部域に集中するが、北

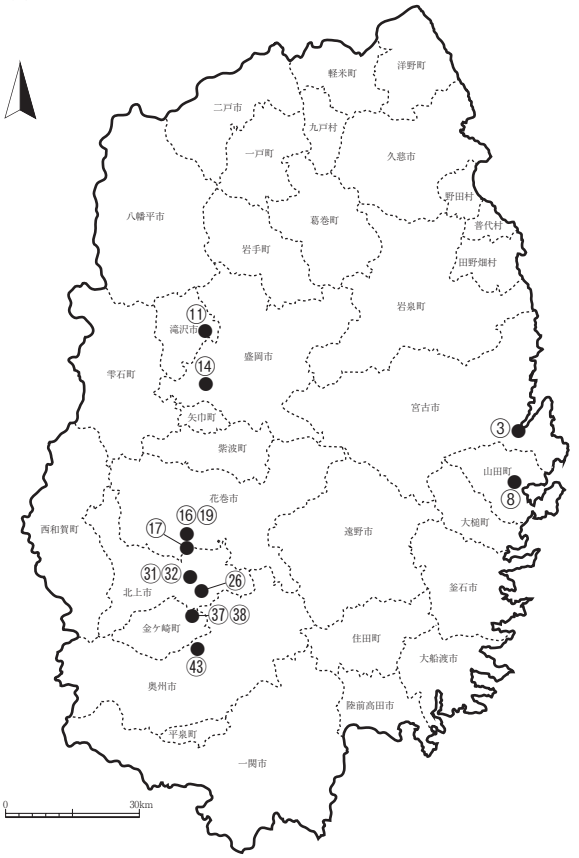
(a) 5 世紀後半～ 6 世紀



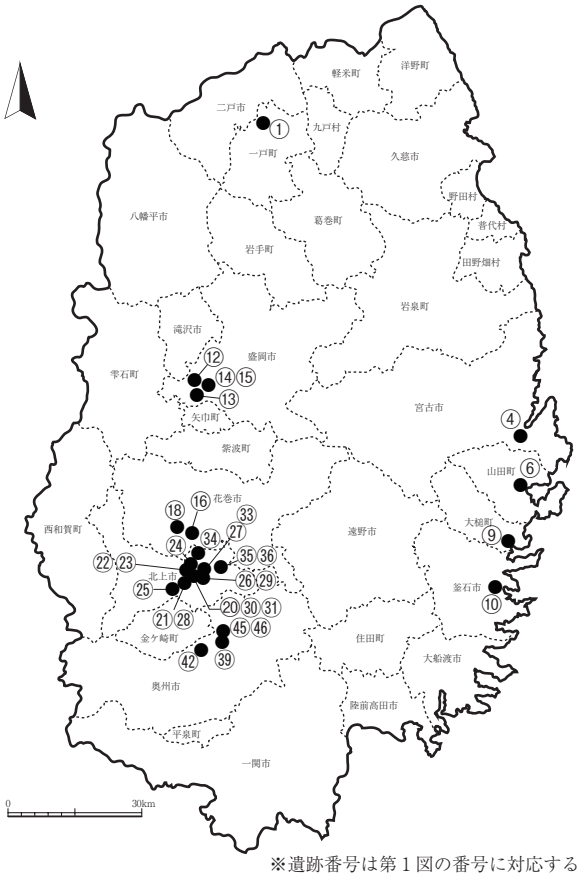
(b) 7 世紀前半



(c) 7 世紀後半～ 8 世紀前半



(d) 8 世紀後半～ 9 世紀



※遺跡番号は第 1 図の番号に対応する

第２図　赤彩土器出土遺跡 (時期別分布)

部でも微量出土している。岩手県外資料については隣県の資料についてのみ把握した。青森県八戸市、秋田県横手盆地、宮城県栗原市など古墳時代～奈良時代の遺跡数が多い地域で局所的に確認されている。また、蝦夷の儀器(杉本1998)の代表と認識されている口縁～頸部に縦位条線を描く赤彩土器に限れば、遠方では東京都多摩市でも確認されている。

立地では大規模集落形成可能で水資源豊富な河川下流域の氾濫平野部にまとまる傾向にあるが、秋田県東成瀬村トクラ遺跡のように山間部でも局所的に確認されている。

3．編年の検討

石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、古館Ⅱ遺跡、金ケ崎町石田遺跡、千苅遺跡を中心に検討する。

近年の東北北部地域の古墳時代後期～奈良時代の土器様相については、辻秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』(辻ほか2007)が成果であり、岩手県については内陸南部(高橋千晶2007)、内陸中部(八木2007)、青森県南部～岩手県北部(宇部2007)で報告されており、これらに追加して八戸市域の土器様相を再構築した編年案(宇部2013)と宮城県北部･沿岸部の編年案(佐藤2007)との対比を意図した岩手県沿岸中部の編年案(米田・佐藤前掲)がある。また岩手県内の４～８世紀土師器の集成によって一部の遺跡で年代観が示されている(集落遺跡検討会2004)。赤彩土器については杉本編年の２期７細分案(杉本2001・2002)と高橋編年の３期区分(高橋静前掲)がある。これらの編年を参照して赤彩土器の編年案を提示する。集成の結果、５世紀後半から９世紀の傾向を示すこととした。赤彩土器文化自体は縄文時代以来継続しており、弥生時代についても北上市千苅遺跡、青森県八戸市田向冷水遺跡などで良好な資料が存在する。岩手県内の古墳時代前期の赤彩土器様相が不明であるが、古墳時代中期には奥州市中半入遺跡、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、沢田遺跡で赤彩土器が出土しており、いずれは縄文時代から赤彩土器文化の連続性を保証する資料が確認されるであろう。

(ａ)５世紀後半～６世紀初頭(第３図)

TK23～47段階の遺跡が奥州市を中心に確認されており、赤彩土器は奥州市中半入遺跡、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、沢田遺跡等で出土している。今回はTK23段階の須恵器瑞を伴う良好な資料として石田Ⅰ・Ⅱ遺跡34号竪穴建物跡資料、TK47段階として石田Ⅰ・Ⅱ遺跡１号竪穴建物跡資料を基準とした。34号竪穴は建物南壁に張出ピットを有する特徴的な建物である。容器に転用された甕内部に内外面ほぼ全面赤彩の壺が収められていた(註３)。また、建物内から複数の赤彩坏が出土している。１号竪穴建物跡では複数の坏類が折り重なった状態で出土し、その中に赤彩土器が１点含まれている。

ＡＭＳ年代測定値では、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡34号竪穴(IAAA-122036)と沢田遺跡(IAAA-120338)から５世紀後半～６世紀前半(１σ)が得られている。

(ｂ)６世紀前葉～後半(第３図)

宮城県北部･沿岸部の佐藤編年二段階、岩手県内陸南部の高橋編年二段階、岩手県沿岸中部の米田･佐藤編年一・二段階の年代に当たる。なお、各氏の段階設定資料が異なるため、全時期を通じて段階内様相は必ずしも一致しない。また、東北北部の土器編年を東北南部の視点で見ると年代的に古い位置づけとなることが指摘されている(杉本2001)が、筆者は傾斜編年が成立する具体的要因(例えば、鎖国体制や隣接地域間で全く異なる食料基盤と食事様式等)を未だ追及できていないので、ひと先ず宮城県北部・沿岸部の佐藤編年との対応を試み、その年代観を示す。

本段階に伴う赤彩土器は少ない。東北地方南部の住社式併行期に該当するが、赤彩土器の伴わない資料も含めると北上市猫谷地遺跡 JJ24竪穴住居跡、奥州市石田Ⅰ・Ⅱ遺跡４・47号竪穴建物跡、沢田遺跡４号墳、膳性遺跡Ｄ-８住居址、久慈市平沢Ⅰ遺跡ＧⅡ-１住居跡、中田遺跡等の土器群が該当

する。その様相は甑の出現率が高く、坏が口縁部外反(坏Ｂ－佐藤前掲、八木前掲、宇部前掲、米田･佐藤前掲、坏Ｂ１－高橋千前掲)を主体、大型甕が底部を厚手に作り、底部から口縁に向かって屈曲がほぼなく開く器形や砲弾型(甕Ａ１・二段階－高橋千前掲、甕Ａ５―米田・佐藤前掲等)が主体である。この中で赤彩土器は膳性遺跡で内外面赤彩の椀、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡47号竪穴建物跡から坏と小型壺が出土している(註４)。ＡＭＳ年代測定値では久慈市中田遺跡(IAAA-40986・40987)で６世紀後半～７世紀(１σ)、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡47号竪穴床面(IAAA-122037)で５世紀後半～６世紀前半(１σ)の年代が得られている。

(ｃ)７世紀前半(第４図)

宮城県北部・沿岸部の佐藤編年三～四段階、岩手県内陸南部の高橋編年三～四段階、岩手県沿岸中部の米田・佐藤編年三段階、赤彩土器の杉本編年Ⅰ－１期の年代に当たる。本論では７世紀中頃を７世紀前半に含めて記載する。

前段階と比べて坏の口縁部外反資料主体に変化はないが、口縁内弯資料も一定量含まれる。坏類は黒色処理されており、甕は胴部下位で一旦乾燥させる工程を踏むため下膨れ状となる長胴型(甕Ａ３－佐藤前掲、高橋千前掲、米田・佐藤前掲、長胴甕Ｂ２－八木前掲、長胴甕Ｂ－宇部前掲)が出現している。７世紀前半の土器様相は７世紀中頃に近づくと坏類の法量分化が明瞭となり小型坏を伴うと考える。７世紀前半の中でもより後出の資料については宮古市津軽石大森遺跡７・11号竪穴建物跡資料が該当する。

赤彩土器は、宮城県栗原市泉谷舘跡の壺２個体、金ケ崎町石田遺跡 SI15出土脚付鉢(本論では口径20㎝前後以上の特大型坏を鉢と器種認定する)、野田村古舘山遺跡の壺２個体がある。

泉谷館跡の赤彩壺は口縁部を欠損するが、外面を頸部～底面までハケ調整後に顔料塗布する。また胴部最大径のある胴部中位に赤彩部が剥落した横位帯がある。なお、泉谷館跡出土壺内部には漆と考えられる黒色物が底面に残存する。

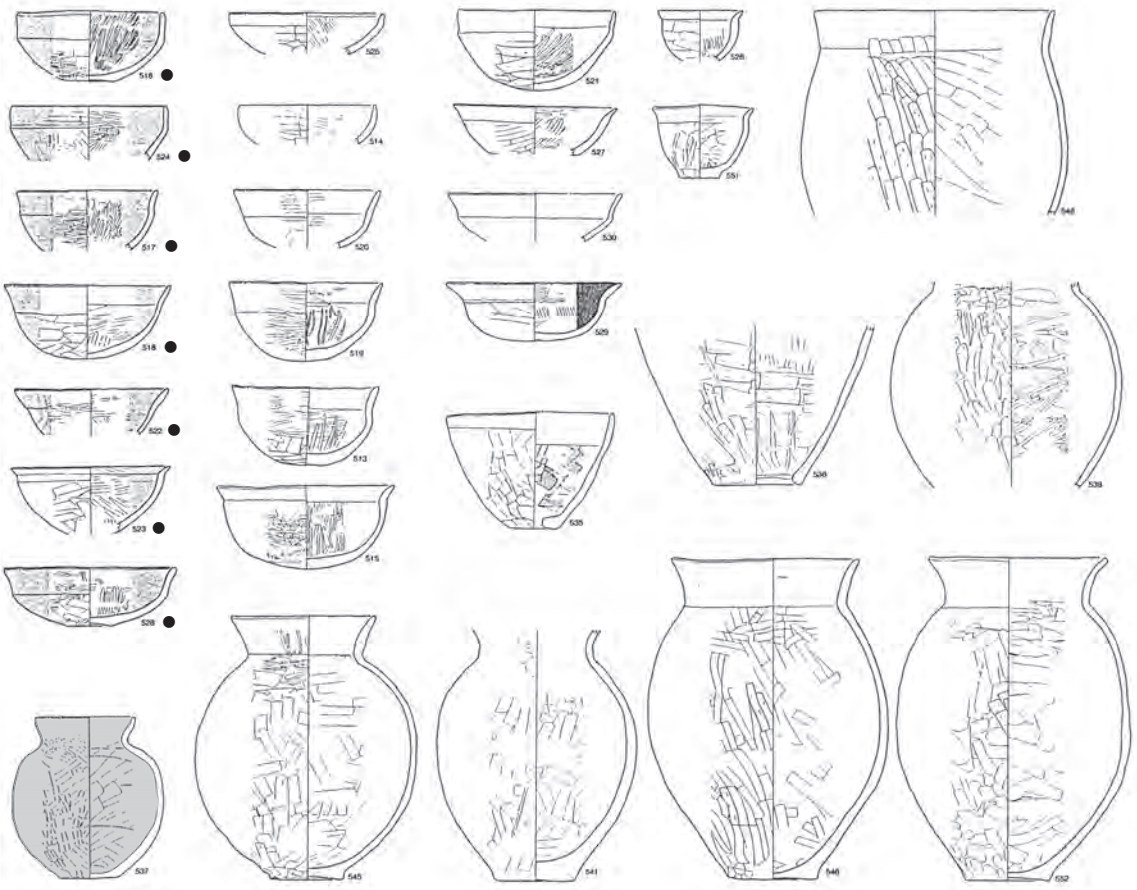
石田遺跡の脚付鉢は、胴部外面に横位に巡る赤色太線が描かれている。報文で SI15に隣接する７世紀前半の様相とされた SI16には、この脚付鉢とほぼ同口径・同形態で外面体部～底部の調整方法を除けばほぼ同手法の鉢が出土している。SI15・SI16の土器様相は類似しており、どちらも７世紀前半と捉えられる。

古舘山遺跡２号竪穴住居資料は、６世紀代の様相を色濃く残すが、坏の内面黒色処理率の高さと破片資料ながらも砲弾型甕とは異なる器形の胴下部に膨らみを持つ甕(米田・佐藤前掲：甕Ａ３)が伴うことから７世紀前半と認識した。２号竪穴住居出土赤彩壺は２個体あり、口縁受口状で内弯する。１個体は頸部に格子目状沈線文様をもつ。

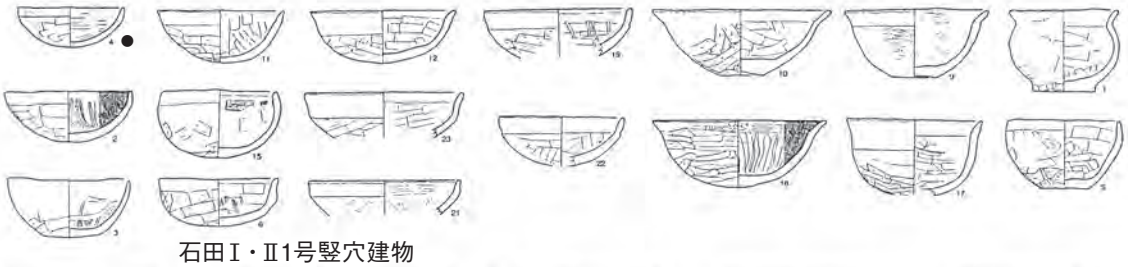
土器様相からは７世紀前半の中でも古相を古舘山遺跡と泉谷舘跡、新相を石田遺跡に位置付ける。７世紀前半は赤彩と頸部沈線文様で手法は異なるものの、集落で使われる一般的な土器の器面に文様を描く意識が醸成された時期と捉えられる。前時期までの器面全体を顔料塗布する手法は引き続き主体を占めるが、後続時期ではさらに発展した赤彩文様が出現する。したがって赤彩土器文化における東北北部地域の独自性は、７世紀前半の中でも後出の時期に始まったと考える。東北地方において７世紀前半は栗囲土器様式圏の成立期であるが、様式圏内での活発な地域間交流による多種の刺激が、小地域の独自色表現を促したと考える。

ＡＭＳ年代測定値では宮古市津軽石大森遺跡22号竪穴(IAAA-132458・132459)、(IAAA-132460マリーン補正値)で７世紀代(１σ)の年代が得られている。

5世紀後半～6世紀初頭

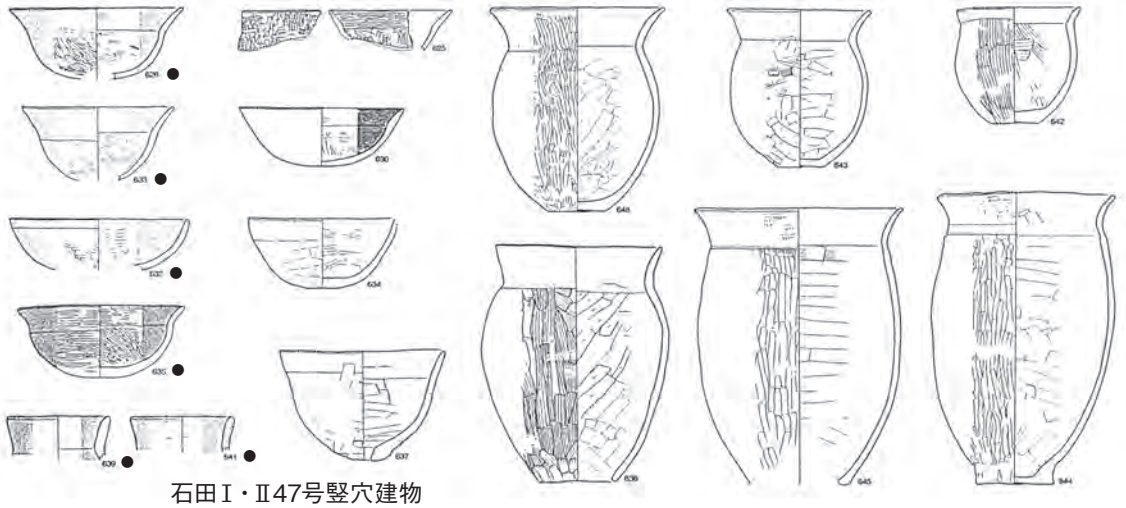


石田Ⅰ・Ⅱ34号竪穴建物



石田Ⅰ・Ⅱ1号竪穴建物

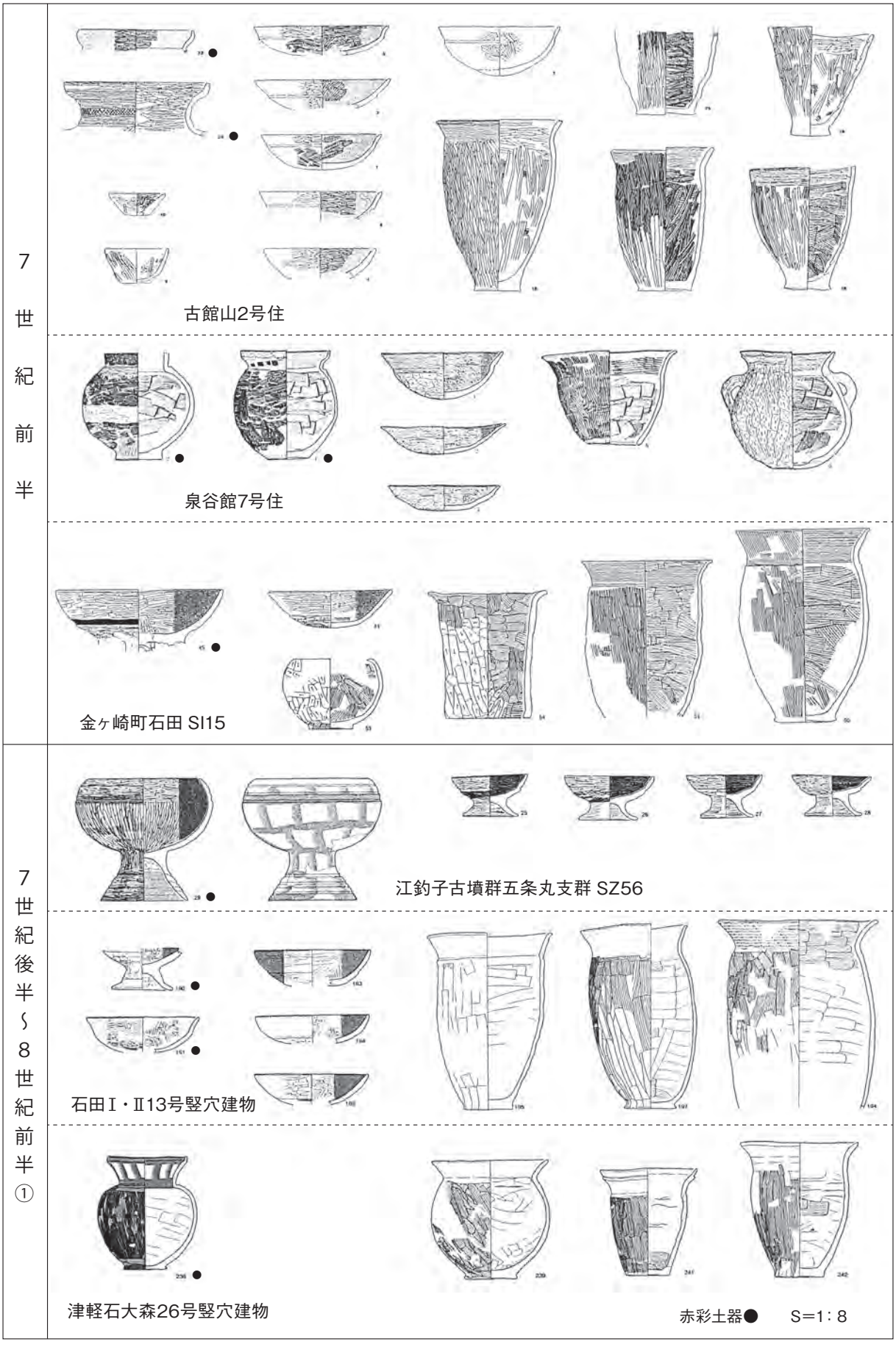
6世紀前葉～後半



石田Ⅰ・Ⅱ47号竪穴建物

赤彩土器● S=1：8

第３図　時期別赤彩土器様相(1)



第４図　時期別赤彩土器様相(2)

（ｄ）７世紀後半～８世紀前半（第４・５図）

宮城県北部・沿岸部の佐藤編年四～六段階、岩手県内陸南部の高橋編年四～六段階、岩手県沿岸中部の米田・佐藤編年四～五・六段階、赤彩土器の杉本編年Ⅰ－３～Ⅱ－１期、高橋編年１期の年代に当たる（註５）。坏類の変遷は、７世紀後半段階で口縁内弯の丸底主体に、口縁内弯で平底・平底風丸底（坏Ｃ・Ｆ）が加わり、８世紀に平底・平底風丸底主体となり僅かに丸底が伴うと考える。しかし、検討対象の赤彩土器を伴う竪穴建物資料については資料的制約から７世紀後半と８世紀前半に区分困難な場合が多い。また、東北北部の土器様相は、東北南部で設定されている須恵器編年に立脚した７世紀末～８世紀初頭の様相を前後の段階と区分し難い状況にある。須恵器出土数の少ないことが主な原因であり、実際八戸市域では７世紀後半～８世紀前半を一つの段階（宇部編年第３段階）とする（宇部2013）など、分離困難な地域もある。本論では坏の形状等から７世紀的様相と８世紀的様相に二分可能な資料以外は、積極的に７世紀と８世紀を分離しない。

資料は北上市江釣子古墳群五条丸支群 SZ56、奥州市石田Ⅰ・Ⅱ遺跡13・16・17・18号竪穴建物跡、宮古市津軽石大森遺跡26号竪穴建物跡、金ケ崎町石田遺跡 SI02･04、金ケ崎町上餅田遺跡18号住居跡、花巻市熊堂古墳群 SI01・B区溝、花巻市古館Ⅱ遺跡Ｃ05住・Ｃ21住・Ｄ16-2住・Ｄ17-1住・Ｄ17-2住・Ｄ17-3住・Ｄ17-4住・Ｄ22住・Ｅ07住・Ｅ16-1住・Ｅ18住・Ｆ15-1住等がある。

五条丸支群 SZ56では小型高坏４個体とともに格子目状文様の脚付鉢が出土している。器形的には７世紀前半～８世紀前半で、共伴する高坏に法量分化や小型品の出現等が認められるので本時期に位置付ける。また同遺構から８世紀代の底部ヘラ切り無調整の須恵器坏が出土している。

石田Ⅰ・Ⅱ遺跡13号竪穴建物跡は７世紀後半のＡＭＳ年代測定値が得られている。口縁内弯丸底坏主体で、口縁外反や平底風丸底が微量含まれる。赤彩土器は高坏と坏で、高坏は外面全面顔料塗布、内面黒色処理される。坏は口縁外反で、内外面に顔料塗布される。16号竪穴建物跡出土壺は小型短頸壺で、内外面全面を顔料塗布する。伴出する坏類は口縁内弯の丸底坏で、高坏も同形態の坏部である。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡の当該期資料は、器面外面のほぼ全面に顔料塗布される資料が多く、壺に特徴的な条線文様は描かれていない。この傾向は金ケ崎町石田遺跡 SI02資料でも同様である。

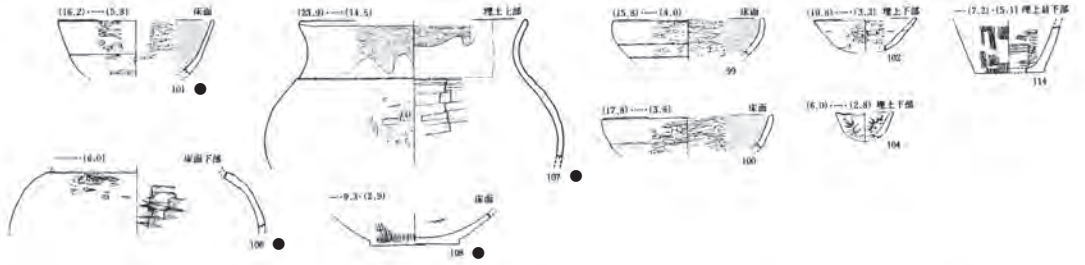
津軽石大森例は小型の須恵器模倣壺（壺Ａ－佐藤前掲、米田・佐藤前掲）と考える。この時期の須恵器模倣壺は小型品が多く、宮城県東松島市赤井遺跡出土の漆容器として搬入された壺Ａも存在し、７世紀末～８世紀初頭に位置付けられている（佐藤前掲）。津軽石大森例は、外面ハケ調整後に口縁部に等間隔で縦位条線を描き、胴部外面を顔料塗布する。

石田遺跡 SI02は坏と壺が出土している。坏は口縁内弯・体部有段の丸底坏で、壺は外面のみ顔料塗布する。SI04出土の壺は、肩の張る津軽石大森遺跡例と類似器形で内外面ハケ調整である。隣接する上餅田遺跡でも18号住居跡から全面顔料塗布の壺が出土している。

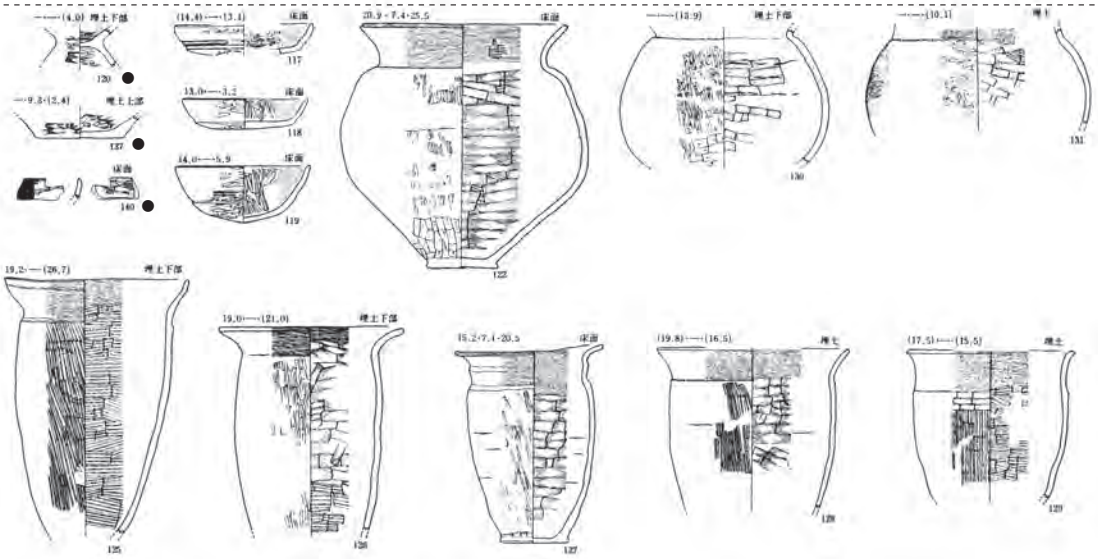
古館Ⅱ遺跡資料のうち、複数の赤彩土器出土住居跡の年代観が提示されている（酒井2004）。C05住居跡では有段口縁内弯坏主体で、丸底と平底の数量がほぼ同じとなる７世紀後半～末頃の様相をもつ。同様相は D16-1・D16-2住居跡資料で、非赤彩で碇型の小型須恵器模倣壺も出土している。赤彩土器は外面塗布資料で占められる。C21住居跡は平底坏が主体となる８世紀的様相であり、赤彩壺は口縁部縦位の太条線をほぼ等間隔に描いている。E18住居跡についても同様相である。

７世紀後半～８世紀前半の赤彩土器は、外面全面塗布と線描が混在している。津軽石大森遺跡資料の存在から、壺類口縁部に特徴的に描かれる縦位条線は７世紀後半から描かれる。脚付鉢については７世紀前半の金ケ崎町石田遺跡で線描文様を採用しており、その延長線上に本時期の格子目文様をもつ五条丸支群資料が位置付けられる。赤彩土器の装飾効果を狙った多彩な文様が本時期に派生してい

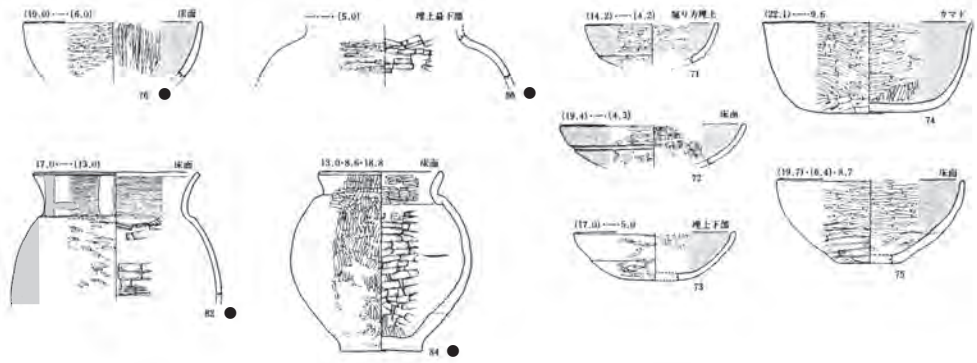
7世紀後半～8世紀前半②



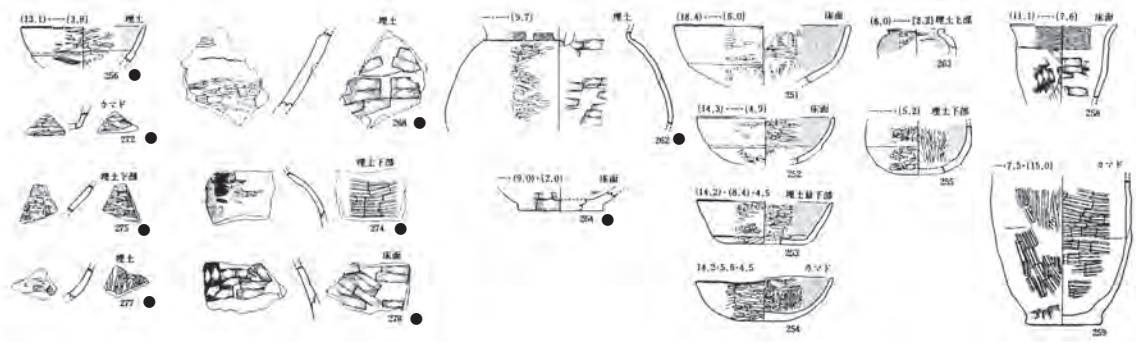
古館ⅡD16-1住



古館ⅡD16-2住



古館ⅡC21住



古館ⅡE18住

赤彩土器●　　S=1：8

第５図　時期別赤彩土器様相(3)

くと捉えておきたい。

ＡＭＳ年代測定値は、奥州市石田Ⅰ・Ⅱ遺跡13号竪穴(IAAA-122040)から７世紀後半(１σ)、同24号竪穴建物(IAAA-122029・122030・122031・122032)から７世紀後半～８世紀前半(１σ)、宮古市津軽石大森26号竪穴(IAAA-132462)から７世紀前半(１σ)、山田町間木戸Ⅱ遺跡26号竪穴建物(IAAA-131450)から７世紀末～８世紀初頭(１σ)を得ている。

(ｅ)８世紀後半～９世紀(第６・７図)

平安時代初頭までの編年案に対比すると、宮城県北部・沿岸部の佐藤編年七～八段階、岩手県内陸南部の高橋編年七～八段階、岩手県沿岸中部の米田・佐藤編年七段階、赤彩土器編年の杉本編年Ⅱ-２～４期、高橋編年２～３期の年代に当たる。本論では８世紀中葉頃と認識される資料を８世紀後半として検討する。

土器様相は、坏が口縁内弯の平底土器(坏Ｃ・Ｆ)で占められ、甕が頸部段の顕著でないものが出現している。甕の底径は前時期より大きく寸胴タイプが増加している。壺は胴部が膨らみ胴部上半に最大径のある球胴型が増加する。平安時代初頭頃の指標とされる須恵器坏の回転糸切技術の導入もこの時期に含まれる。

赤彩土器は、奥州市石田遺跡 Dd03竪穴住居、北上市千苅遺跡 SI09・10・13・24・27・31・33・39・40・59・68・76・87・89・91、同 SX28・72・132、中村遺跡、花巻市古館Ⅱ遺跡 E16-1住居跡、山田町間木戸Ⅴ遺跡、大槌町夏本遺跡、釜石市麓山遺跡などが該当する。器種は壺主体である。壺は前時期に須恵器模倣と考えられる小型壺(壺Ａ)への顔料塗布が見られたが、本時期では中～大型の球胴型(壺Ｄ)への顔料塗布が主体となり、壺Ａは少ない。また本時期の赤彩壺は、口縁～頸部に数条一対の縦位条線文様と胴部外面顔料塗布が主体である。

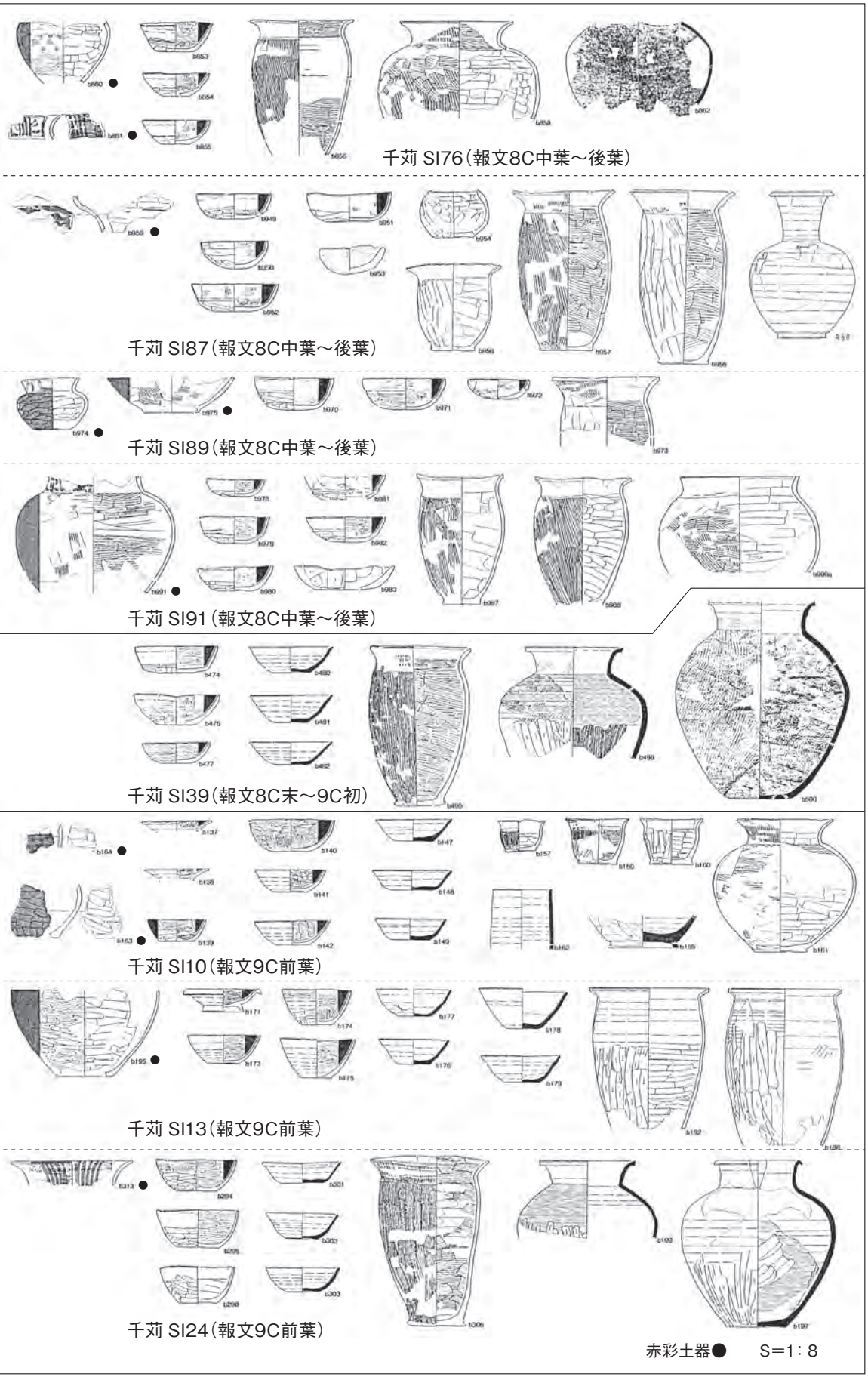
夏本遺跡の赤彩壺は器形から本時期としたが、高橋静編年１期と捉えられており、文様の等間隔配置など前時期の特徴を留める。８世紀中葉と考える。

千苅遺跡の赤彩土器は、報文で８世紀中葉～後葉(SI76･87･89･91)、８世紀末～９世紀初頭(SI39)、９世紀前葉(SI10･13･24)、９世紀中葉～後葉(SI09･27)、９世紀末～10世紀前葉(SI31･33･40)である。焼成遺構出土資料では SX72・132資料が８世紀後半の様相の土器を伴っている。SX28は９世紀代の須恵器片を伴い、焼成遺構を廃棄穴として再利用した場所で、赤彩土器の９世紀代製作痕跡とは断定できない(註６)。

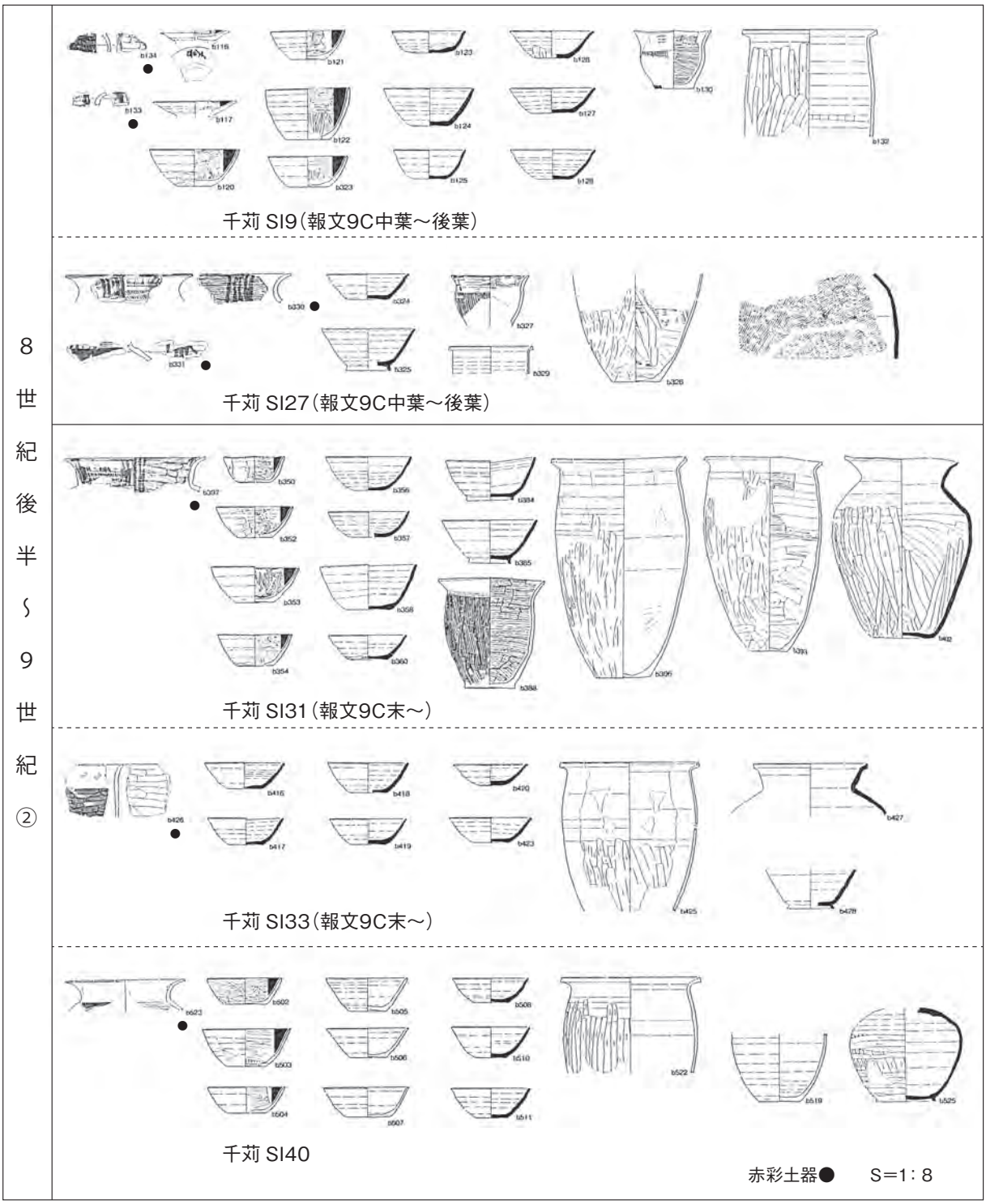
古館Ⅱ遺跡 E16-1住居跡は甕の口縁部屈曲の弱い資料が主体である。口縁～頸部縦位条線の赤彩壺が２個体出土している。縦位条線は数条を１単位としており、前時期と線描手法が異なり、胴部中央に最大径を有する前時期に多い器形に線描きされている。前時期の伝世品の可能性もある。なお、数条一対の縦位条線文様は、現状の資料蓄積状況からは一先ず８世紀後半の特徴と理解しておく。この縦位条線文様は、千苅遺跡のほか、中村遺跡、麓山遺跡、東京都上っ原遺跡資料の存在から９世紀資料中にも確認されている。

本時期の壺資料は、夏本遺跡(８世紀中葉)、千苅遺跡 SI76・87・89・91(８世紀中葉～後葉)、千苅遺跡 SI39(８世紀末～９世紀初頭)、奥州市石田遺跡 Dd03竪穴住居・麓山遺跡・千苅遺跡 SI10・13・24(９世紀前葉)、千苅遺跡 SI09・27(９世紀中葉～後葉)、千苅遺跡 SI31・33・40(９世紀末～10世紀前葉)と変遷する。しかし本時期の赤彩壺は同時期の須恵器壺の模倣形態で肩の張った口縁の開く器形が主体で、150年間分の年代幅で見ても顕著な器形変化は認められない。文様の特徴からは、前時期の赤彩条線の太さや等間隔配置を踏襲する夏本遺跡資料を古手に、千苅資料の縦位集合条線の出現をそれ以降に位置付ける。

8世紀後半～9世紀①



第６図　時期別赤彩土器様相(4)



第７図　時期別赤彩土器様相(5)

（ｆ）小結

岩手県内の古代赤彩土器文化は、古墳時代中期のＴＫ23～47段階以降継続する。赤彩土器は７世紀後半から増加し、８世紀後半に北上市域で大量に製作され、９世紀末まで流通している。概ね杉本の成果（杉本2001・2002）と同じ結論が得られた。顔料塗布は土器外面塗布が全時期を通じて行われ、線描文様は脚付鉢に７世紀前半、壺に７世紀後半から描かれる。８世紀前半までの条線文様は太い傾向にあり、等間隔に描かれる。８世紀後半～９世紀の壺口縁～頸部縦位条線は細く、２～５本一対を単

位とし３～４単位描かれる。県内における古墳～平安時代の赤彩土器文化は、縦位条線という線描文様を７世紀後半から確立し、以後独自性をもって展開していく。

４．色調・顔料塗布面の検討

本節では、赤彩土器の分布地域を代表する遺跡から出土した新資料を中心に観察し、顔料の色調・顔料塗布面の地域ごとの様相についての検討を行う(註７)。

(ａ)観察と分類

①観察資料の選定

観察対象は、新資料の中でも赤彩土器がまとまって出土した遺跡の資料、赤彩土器の僅少分布域である岩手県沿岸部の資料を選定した。また、新資料との比較検討のため、前回観察(高橋静前掲)した赤彩土器の主要分布域である花巻市域の資料を改めて観察した。観察資料は以下のとおりである。

北上市千苅遺跡：32点
金ケ崎町石田遺跡：８点
奥州市石田Ⅰ・Ⅱ遺跡：66点
宮古市津軽石大森遺跡：１点
山田町間木戸Ⅴ遺跡１点
花巻市古館Ⅱ遺跡：57点
花巻市法領遺跡：１点
花巻市熊堂古墳群：２点

②－１観察方法

赤彩土器の観察方法は、前回観察で用いた方法(高橋静前掲)を踏襲した。観察項目は以下のとおりである(註８)。

ⅰ)赤色顔料塗布の範囲、赤彩文様
ⅱ)赤色顔料の色調(註９)
ⅲ)赤色顔料の質感
ⅳ)被熱等による使用痕の有無
ⅴ)赤色顔料塗布の段階と器面調整

赤色顔料の質感は、土器の表面に吸着した顔料の様子を観察した。前回は、顔料に混ぜ込まれた粘土と水分(註10)の割合に着目したが、今回は含有物質粒(ベンガラ等や粘土)の細かさと赤色顔料塗布面の厚さにも着目して観察した。さらに、赤色顔料が土器製作過程のどの段階で塗布されたのかと、その後の器面調整についても観察項目に加えた。

②－２観察結果

ⅰ)赤色顔料塗布の範囲・赤彩文様

赤彩土器の器種は、坏、高坏、皿、鉢、脚付鉢、壺、甕がある。

坏、高坏、皿、鉢、脚付鉢は、内外面塗布されるもの、外面塗布されて内面黒色処理されるものがある。内外面塗布される資料は、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡から出土しており、前項編年案の５世紀後半～６世紀初頭、６世紀前葉～後半、７世紀後半～８世紀前半に位置付けられた資料に該当する。外面塗布されて内面黒色処理される資料は、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、金ケ崎町石田遺跡(以下、本節では石田遺跡と表記)は、熊堂古墳群、古館Ⅱ遺跡から出土しており、前項編年案の７世紀後半～８世紀前半に位置付けられた資料に該当する。その他に脚付鉢の外面に幅１㎝程度の太い条線が施されるものがある。これは

石田遺跡 SI15出土で、前項編年案の７世紀前半に位置付けられている。

年代観に照らし合わせれば、坏類への赤色顔料塗布は、内外面塗布から外面塗布・内面黒色処理へ移行すると考えられる。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡47号竪穴建物出土の№635は、赤色顔料塗布後に内面黒色処理が施されており、内外面塗布から外面塗布・内面黒色処理への移行段階に位置付けられる。

壺類は、塗布だけのものと、口縁部～頸部に条線が施されるものに大別される。塗布だけのものは、内外面塗布と外面口唇部～胴部と内面口縁部～頸部に塗布されるものに細分される。内外面塗布される資料は、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡から出土しており、前項編年案の５世紀後半～６世紀初頭、６世紀前葉～後半、７世紀後半～８世紀前半に位置付けられた資料に該当する。外面口唇部～胴部と内面口縁部～頸部に塗布される資料は、石田遺跡、古館Ⅱ遺跡から出土しており、前項編年案の７世紀後半～８世紀前半に位置付けられた資料に該当する。

口縁部～頸部に条線が施される資料は、幅１～２cm程度の太い縦位条線が一定間隔で施されるものと、幅0.5㎜程度の細い縦位条線が２～５本一組で一定間隔に施されるものがある。さらに、点や横位条線を組み合せるもの、口唇部塗布の有無によっても細分される。なお、これらの資料の胴部は外面塗布される。

幅１～２cm程度の太い縦位条線が一定間隔で施される資料は、津軽石大森遺跡、古館Ⅱ遺跡から出土しており、前節編年案の７世紀後半～８世紀前半に位置付けられた資料に該当する。細条線組と認識できる幅0.5㎜程度の細い縦位条線が２～５本一組で一定間隔に施される資料は、古館Ⅱ遺跡、千苅遺跡、間木戸Ⅴ遺跡から出土しており、前項編年案の８世紀後半～９世紀に位置付けられる。

年代観に照らし合わせれば、壺類への赤色顔料塗布は、①内外面塗布→②外面口唇部～胴部と内面口縁部～頸部に塗布→③口縁部～頸部に太い条線＋胴部外面塗布→④口縁部～頸部に細い条線＋胴部外面塗布へと移行すると考えられる。なお、古館Ⅱ遺跡Ｄ16-１住出土№106とＥ18住出土№274は、幅１cm弱の条線が２本１組で描かれている。これらは、７世紀後半～末頃に位置付けられており、その条線幅と条線組から８世紀後半に増加する細条線組への移行段階に位置付けられる。

このように赤色顔料が塗布される範囲や文様は多様にあり、いくつかのグループに分類することが可能である。しかし、前節でも触れられているとおり、北上市中村遺跡や山田町沢田Ⅲ遺跡など報告書未刊の新資料が多数存在する。そのため、分類方法を見直す必要もあると思われるので、新資料の報告書刊行後、改めて赤色顔料塗布の範囲や文様の分類を試みたい。

ⅱ）顔料の色調

ⅱ－１）分類

赤色顔料の色調は10R暗赤色、10R赤色、10R赤褐色、2.5YR暗赤褐色、2.5YR赤褐色、2.5YRにぶい赤褐色、2.5YR明赤褐色、5YR赤褐色、5YR明赤褐色、5YRにぶい赤褐色、5YR橙、7.5YR橙色、7.5YRにぶい褐色がみられた。なお、色調分類は、前回ア～イ類に分類したもの（高橋静前掲）に基づくが、今回は赤褐色に含まれる色調が多いため、イ類について赤褐色の中でも赤色に近いものをａ、橙色に近いものをｂに細分する。

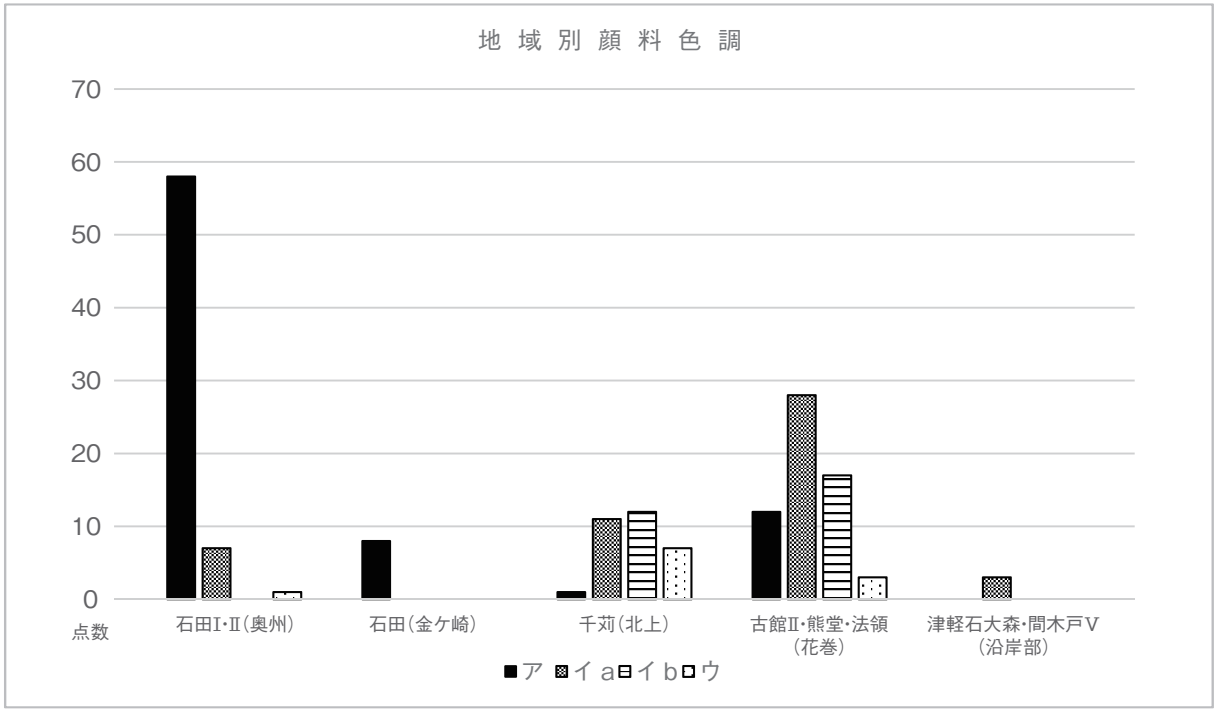
表１　色調分類

分　類		色　調
ア		赤色（7.5R赤～10R暗赤、赤、赤褐）
イ	a	赤褐色（2.5YR暗赤褐色、赤褐色、明赤褐色、にぶい赤褐色）
	b	明赤褐色（5YR赤褐色、明赤褐色、にぶい赤褐色）
ウ		橙色（2.5YR橙～7.5YR橙、にぶい褐色）

ⅱ－２）比較検討

５世紀後半～６世紀の赤彩土器がある石田Ⅰ・Ⅱ遺跡はア類赤色主体である。７世紀～８世紀前半

の資料がある石田遺跡、古館Ⅱ遺跡、法領遺跡、熊堂古墳群、津軽石大森遺跡はイａ類赤褐色が主体で、ア類赤色がそれに次ぐ。８世紀後半～９世紀の資料がある千苅遺跡、間木戸Ⅴ遺跡ではア類赤色が少なく、イａ類明赤褐色～ウ類橙色が主体となる。このように赤色顔料の色調は、５世紀後半～６世紀は赤色、７～８世紀前半は赤色～赤褐色、８世紀後半～９世紀は明赤褐色～橙色へと移り変わり、時期によって違いが見られる。千苅遺跡の赤彩土器は顔料の成分分析が実施され、赤色の濃い酸化鉄である赤鉄鉱と褐色酸化鉄の磁赤鉄鉱が確認された(岩文振埋2016、本論７節)。赤彩土器に使用される顔料は、時期が新しくなるにつれて赤色の濃い顔料だけでなく、赤色の薄い顔料も使用された可能性がある。



ⅲ)顔料の質感

ⅲ－１)分類

赤色顔料を塗布する際は土器に密着させるため、ベンガラ等に粘土と水を混ぜたと考えられる。質感分類は、前研究で赤色顔料と混合する粘土と水分の割合からカ～キ類に分類した。今回は観察項目を、顔料の含有物質(ベンガラや混ぜ込まれた粘土等)の粒の細かさと顔料塗布の厚さの２項目を追加して分類する。分類は以下の表２のとおりである。

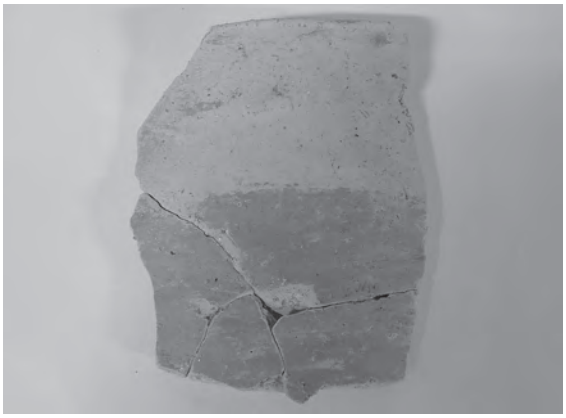
表２　質感分類

項目１	ドベ（粘土と水分）の割合	項目２	含有物質粒の細かさ	項目３	顔料塗布の厚さ
カ	粘土、水分ともに多い	Ⅰ	粗い	a	厚い
キ	粘土多く、水分少ない				
ク	粘土少なく、水分多い	Ⅱ	細かい	b	薄い
ケ	粘土、水分ともに少ない				

【項目１－ドベ(粘土と水分)の割合】

カは粘土と水分の割合が程よく、濃厚な質感がある。キは器面に厚く付着しており、粘土が多いため、擦れた質感もある。クは水分が多いため、伸びがよく、薄づきである。器面に顔料が染み込んでいるものもある。ケは粘土と水分の割合が不十分で、擦れている。摩耗の可能性もある。

カ：粘土、水分ともに多い（例：古館Ⅱ遺跡 C21 住№86）



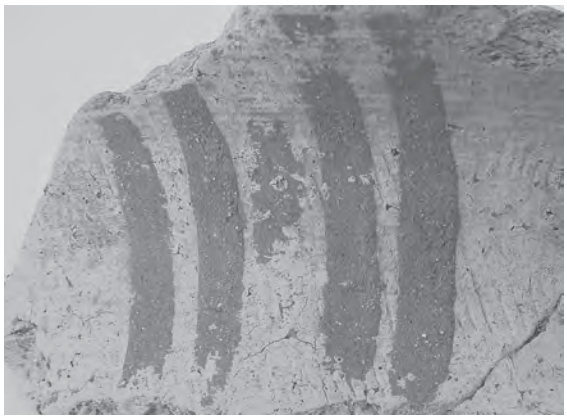
キ：粘土多く、水分少ない（例：千苅遺跡 SI91№991）

ク：粘土少なく、水分多い
（例：石田Ⅰ・Ⅱ遺跡 12 号溝№668）

ケ：粘土、水分ともに少ない
（例：古館Ⅱ遺跡 C05 住№39）

【項目２－含有物質粒の細かさ】

Ⅰはベンガラ等もしくは粘土粒が粗いものである。対してⅡは細かいものである。



Ⅰ：粗い（例：千苅遺跡 SI27№330）

Ⅱ：細かい（例：古館Ⅱ遺跡 F15 住№292）

【項目３－顔料塗布の厚さ】

ａは器面に厚く顔料を塗るもの、ｂは薄く塗るものである。

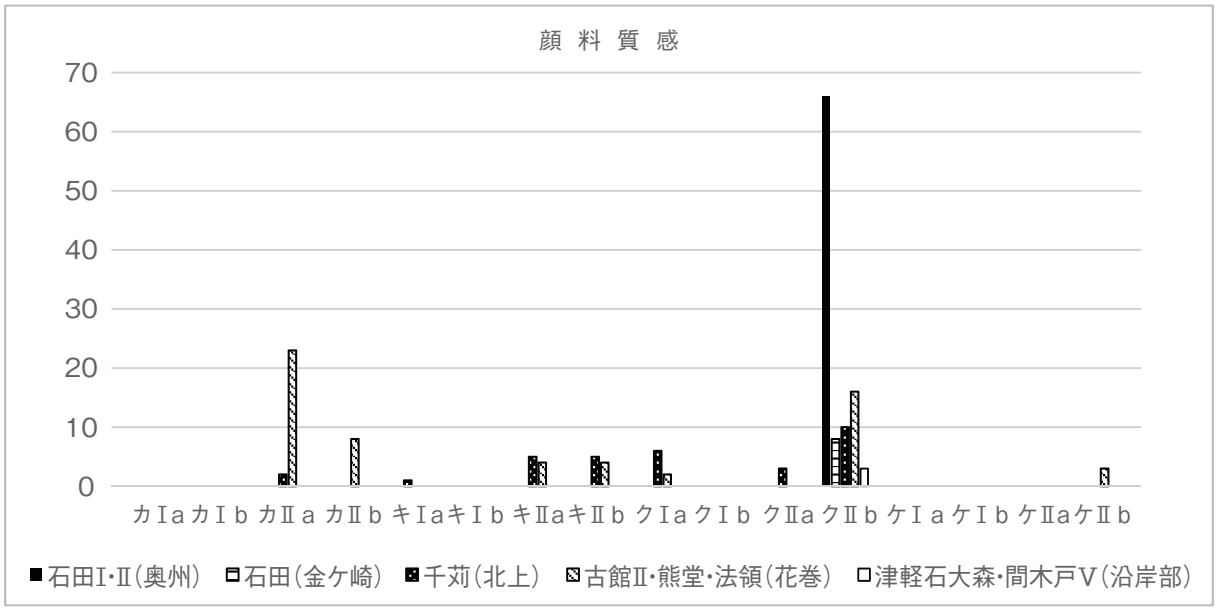
ａ：厚い（例：古館Ⅱ遺跡 D17-4 住№183）

ｂ：薄い（例：石田Ⅰ・Ⅱ遺跡 34 号住№516）

ⅲ－２）比較検討

石田Ⅰ・Ⅱ遺跡と石田遺跡は、全てクⅡｂ類である。この２遺跡の赤色顔料は、さらりとした質感で薄塗りである。特に、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡の赤彩土器は赤色顔料の遺存状態があまり良くない。花巻市域の遺跡ではカⅡａ類が最も多く、次いでクⅡｂ類、カⅡｂ類となる。花巻市域の赤彩土器は、薄塗りの資料も一定量あるが、何度も塗り重ねられて厚くなり、濃厚な質感が特徴である。千苅遺跡はクⅡｂ類が最も多く、次いでクⅠａ類、キⅡａ類、キⅡｂ類、クⅡａ類が同等に見られ、多様な質感である。千苅遺跡の赤色顔料中には細粒の砂が含まれるものがあり、他の遺跡の顔料よりもザラザラとした質感である。千苅遺跡の赤彩土器は、口縁部～頸部に細い縦位条線が施されるものが大半を占めることから、条線を描きやすいように水分量が多い流動性のある質感のものが多いと考えられる。沿岸では、全てクⅡｂ類である。口縁部～頸部に縦位条線が施されものであることから千苅遺跡と同様と考えられる。

年代観に照らし合わせると、古い時期の赤彩土器はさらりとして薄塗りで、時期が新しくなるにつれて質感が多様になると考えられる。また、７世紀後半～８世紀前半の赤彩土器がある石田遺跡、古



館Ⅱ遺跡、津軽石大森遺跡の資料は、遺跡によって質感の傾向が異なる。このことから質感の違いは時期差だけでなく、地域差にも関係すると考えられる。

ⅳ)使用痕の有無

ススやコゲ等の黒色付着物がある資料は、古館Ⅱ遺跡Ｄ－22号住出土の壺№195のみである。この資料はカマド付近から出土している。その他の資料で、ススやコゲのような付着物が付いた資料はいくつかあるが、割れ口にも黒色付着物が付いており、全て二次被熱である。赤彩土器を火にかけて使用するのは例外と考えられる。

ⅴ)赤色顔料塗布の段階と器面調整

赤色顔料が塗布されるタイミングは、焼成前である。これまでの資料で、焼成後に塗布されたものは今のところ確認していない。

塗布後の器面調整は、赤彩土器の中で顔料塗布面に光沢のある資料を前回の観察(高橋静前掲)で確認している。今回は石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、石田遺跡、千苅遺跡において確認した。顔料塗布後ミガキ調整の施された部分は赤色顔料の剥落が少ない。このミガキ調整は、口縁部～頸部に文様が施される壺の場合、胴部塗布面に施され、線描き部分には施されない。また、弱い光沢がみられる資料も確認した。それは赤色顔料を強く塗り付けているためと考えられる。顔料塗布後ミガキ調整は、顔料を器面に密着させるための技術と考えられるが、５世紀後半～６世紀の石田Ⅰ・Ⅱ遺跡でも確認されており、その時期から存在する技術の可能性がある。なお、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡では顔料塗布後に暗文を意識した放射状のミガキ調整が施されるものもあるが、それは顔料を器面に密着させることを意図したものではないと考える。

(ｂ)地域ごとの様相

①岩手県内陸部

石田Ⅰ･Ⅱ遺跡の資料は、５世紀後半～６世紀前半と７世紀後半～８世紀前半の坏、高坏、鉢、壺、甕である。坏類が主体を占め、壺類は少ない。赤色顔料塗布資料は、坏が内外面塗布されるものと外面塗布され内面黒色処理されるものがある。壺と甕は、内外面塗布されるものと外面塗布されるものがある。条線等の文様が描かれるものは見られない。赤色顔料の色調は、色調分類のア類赤色が主体である。顔料の質感は全ての資料がクⅡｂ類である。細粒の含有物質で、さらりとした質感の顔料が薄く塗られている。また、焼成前に赤色顔料塗布後ミガキ調整が施されている資料を確認した。その部分は赤色顔料が良好に残存する。これらの中には、暗文を意識した放射状のミガキ調整が施されているものがあるが、赤色顔料を器面に密着させることを意図したものではない。また、赤色顔料を強く塗り付けた資料も見られた。この資料は、赤色顔料塗布後ミガキ調整が施されたものよりも光沢が弱い。その他に、焼成によって赤色顔料が消失したと見られるもの(34号竪穴№523､63号竪穴№722、76～78号竪穴№823、遺構外№836)、赤色顔料塗布後に黒色処理が施されたものがある(47号竪穴№635)。

石田Ⅰ・Ⅱ遺跡の赤彩土器は今回観察した資料の中で、最も古い時期の資料が含まれる。赤色顔料の発色は他の遺跡に比べても良好であるが、赤色顔料の遺存状態が不良で黒斑やススが付着する資料が多い。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡の赤彩土器の製作技術は、今のところ途上段階にあると捉えておきたい。

石田遺跡の資料は、７世紀前半の坏、脚付鉢、壺である。赤色顔料塗布は、坏が外面塗布され、内面は黒色処理されるものがある。脚付鉢は外面段の直上に幅１㎝程度の太い横位条線が１本巡る。壺は口縁部～体部外面に塗布される。赤色顔料の色調は全てア類赤色である。顔料の質感は全てクⅡｂ

類である。含有物質が細粒でさらりとした質感があり、薄く塗られているがしっかりと器面に密着している。外面に光沢がみられるものが２点あり、焼成前に赤色顔料塗布後ミガキ調整が施された可能性がある。また、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡資料の色調と質感が類似する。

花巻市域の資料は、７世紀後半～８世紀前半の坏、高坏、壺と８世紀後半～９世紀の壺である。赤色顔料塗布は、坏と高坏は外面全体に塗布され、内面は黒色処理が施される。壺は、口縁部内外面～胴部外面が塗布されるものと、口縁部に縦位条線や点などの模様を描き、胴部外面を塗布されるものがある。後者には、口唇部端面の塗布が有るものと無いものがあり、さらに一定間隔で幅１～２㎝程度の太い縦位条線を描くものと､幅0.5㎜程度の条線を数本単位で描くものがある。赤色顔料の色調は、イａ類赤褐色が主体である。次いで、ア類赤色、イｂ類明赤褐色となる。赤色傾向と赤褐色傾向のものがあるが､いずれも発色が良好のものが多い。顔料の質感は､含有物質が細粒で濃厚な質感があり、厚く塗布されるものが特徴的に見られる。焼成前に赤色顔料を塗布後ミガキ調整が施されている。古館Ⅱ遺跡の赤彩土器顔料塗布面は他の遺跡の資料に比べて光沢が強い。それは濃厚な質感の顔料を厚く塗り重ねることで、塗布後に綿密なミガキ調整を施すことを可能にしたと考えられる。しかし、８世紀後半～９世紀に位置付けられた壺は、千苅遺跡の壺と類似した色調と質感であり、塗布後磨き調整が施されるが、強い光沢は見られない。以上のことから、綿密で強い光沢が見られるほどのミガキ調整が施されるのは７世紀後半～８世紀前半の特徴と考えられる。

千苅遺跡の資料は、８世紀後半～９世紀の壺、鉢もしくは甕があり、壺が主体を占める。赤色顔料塗布は、古代住居出土の皿は、内外面塗布され(註11)、鉢もしくは甕は、胴部外面塗布される。壺は口縁部に一定間隔で幅0.5㎝程度の細い縦位条線を３～５本一組の単位で描き、胴部外面が塗布されるものが主体である。口縁部の条線は外面のみと、内外面に描かれるものがあり、口唇部は塗布が有るものと無いものがある。赤色顔料の色調は、イａ類赤褐色～ウ類橙色があり、全体的に明るい色調である。顔料の質感はクⅡｂ類が最も多く、次いでクⅠａ類、キⅡａ類、キⅡｂ類、クⅡａ類が同等にみられ、多様な質感がある。また、含有物質に細粒の砂が含まれるものが見られた。多様な質感があり、厚塗りのものと擦れているものが混在し、塗布にムラが見られる。また、焼成前に赤色顔料塗布後ミガキ調整が胴部外面に施された資料を確認した。

千苅遺跡の赤彩土器は色調が赤褐色から橙色まであり、古い時期の資料に比べて赤色が薄いが、器面の色調が白っぽく目立つような黒斑やススが付着したものは少ない。そのため赤色が薄くても十分に発色が良いと感じられる。８世紀後半以降、北上市域を中心に赤彩壺が激増するが、たくさんの赤彩土器を生産するために、赤色の薄い顔料でも土器の胎土を白色化させることで対応したのではないだろうか。土器に黒斑やススが付かないように焼成するなど、この時期の赤彩土器の製作技術は高いと現状では捉えておきたい。

②岩手県沿岸部

津軽石大森遺跡の資料は、７世紀後半～８世紀前半の壺である。赤色顔料塗布は、口縁部の内外面に幅１㎝程度の太い縦条線が一定間隔で描かれ、胴部外面が塗布される。顔料の色調はイａ類赤褐色である。顔料の質感はクⅡｂ類である。さらりとした質感でやや薄塗りである。外面に光沢はなく、赤色顔料塗布後ミガキ調整は施されていない。器面ハケ調整後に赤色顔料が塗布され、焼成されたとみられる。

間木戸Ⅴ遺跡の資料は、８世紀後半～９世紀の壺の口縁部破片である。赤色顔料塗布は、内外面に幅0.5㎜程度の細い縦位条線が３～４本単位で一定間隔に描かれるものと思われる。顔料の色調はイａ類である。顔料の質感はクⅡｂ類である。さらりとした質感で薄塗りである。

沿岸部の赤彩土器は内陸部に比べて少ない。７世紀後半～８世紀前半の壺では、内陸部では見られない特徴的な赤彩文様が描かれるものがあり、赤色顔料塗布後ミガキ調整は施されないようである。赤色顔料の色調や質感では、内陸部の資料と大きな違いは今のところ見られない。

（ｃ）小結

以上、赤彩土器の観察から分布地域を代表する遺跡の赤彩土器を概観し、地域ごとの様相を検討した。その結果、赤色顔料塗布の範囲や文様・色調・質感は、時期や地域によって違いがあることが確認された。赤色顔料塗布の範囲や文様は、7 世紀～８世紀前半の赤彩土器に線描き文様が施され始め、赤彩文様に地域色が見られるが、８世紀後半以降は北上市域を中心に口縁部～頚部に細い条線が施されるものに集約される。赤色顔料の色調は、赤色から赤褐色、明赤褐色、橙色へと移行し、質感はさらりとして薄く塗られるものもあれば、濃厚で厚く塗られるものも見られた。また、赤色顔料塗布後ミガキ調整は、５世紀後半～６世紀の石田Ⅰ・Ⅱ遺跡でも確認されており、その時期から存在する技術の可能性がある。そして、花巻市域の７世紀後半～８世紀前半を主体とする赤彩土器でその技術が綿密に施されることが確認された。赤彩土器は、各地域でそれぞれの技術によって製作されていたものと考えられる。

５．胎土観察

（ａ）観察資料

津軽石大森遺跡・間木戸Ⅴ遺跡・古館Ⅱ遺跡・法領遺跡・熊堂古墳群・千苅遺跡・石田Ⅰ・Ⅱ遺跡から出土した土師器について胎土の観察を行った。今回観察を行った資料の多くは赤彩土器であるが、一部それ以外の土師器も比較資料として観察している。

（ｂ）観察方法および胎土分類

①観察方法

ニコン社の携帯型実体顕微鏡ファーブル（倍率 20 倍）を用いて、土器胎土を観察した（註 12)。観察の際には、土器の断面だけでなく、器表面も観察し、総合的に土器の胎土を評価している。断面だけでは、観察面積が少なく、含まれる砂粒の種類・大きさ・量を評価するのが難しいからである。

②胎土分類（表３・４）

表３・４に示したように、Ａ～Ｈ類という土器の胎土に含まれる砂粒の種類による分類と、０～ 2-類というその大きさによる分類を設けた（註 13)。

ただし今回は、赤彩土器の製作に用いられた材料について、それを概括的に把握することをまず第一の目的として、大半の資料については含まれる砂粒の種類だけを情報として抽出するという、簡易な観察をおこない、その結果を表７に記載した。そして、一部の資料についてのみ、含まれる砂粒の大きさや含有量も詳細に観察し、その結果は表６に記載した。

（ｃ）観察結果（表５、写真１・２）

ここでは、比較的まとまった観察点数を得ることのできた、以下３遺跡について述べる。

①石田Ⅰ・Ⅱ遺跡

当遺跡では、５～８世紀にかけての土師器を観察した。５～６世紀に帰属する土師器（５世紀後半～６世紀が主体）では、赤彩土器の坏 44 点、壺・甕７点、また比較資料として赤色顔料が塗布され

表３　砂粒・混和材の種類による胎土分類

分類	特徴
Ａ類	黒色光沢粒（角閃石または輝石）を一定量含む土器。
Ｂ類	雲母を一定量含む土器。
Ｃ類	頁岩・チャートを一定量含む土器。
Ｄ類	火成岩を一定量含む土器（凝灰岩を含む土器についても当分類に含める）。
Ｅ類	腐り礫を一定量含む土器。
Ｆ類	上記以外の有色砂粒を一定量含む土器。
Ｇ類	海綿骨針を一定量含む土器。
Ｈ類	上記のような特徴的な砂粒・混和材を含まず、ほぼ無色鉱物（石英・長石）だけからなる土器。

※ 黒色光沢粒と雲母をともに含めばAB類、チャートと火成岩をともに一定量含めばCD類と、上記の分類記号を足し合わせた分類を適宜設定し、土器胎土観察表に記載している。
なお、一定量とは、観察した土器片中にその砂粒・混和材が不偏的に含有されており、少なくとも2cm^{2}中に1粒は0.5mm以上でその存在が認められる量を指す。

表４　砂粒・混和材の大きさによる胎土分類

分類	特徴
２－類	2.0mm～2.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
１＋類	1.5mm～2.0mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.0mm以上のものはほとんど含まれていない。
１－類	1.0mm～1.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。1.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
０類	1.0mm未満の砂粒・混和材で構成されている、および肉眼ではそれらを確認できない土器。

ていない土師器の坏１点、甕２点を観察した。５～６世紀の赤彩土器の坏では、Ａ類とした黒色光沢粒を含む土器が 44 点中 42 点と最も多く、次に多いものはＧ類（海綿骨針を含む土器）で３点存在している（写真１－２）。このほかＤ類（火成岩または凝灰岩を含む土器）が２点、Ｃ類（頁岩･チャートを含む土器）・Ｈ類（ほぼ石英・長石だけからなる土器）が各１点存在している。

同時期の赤彩土器の壺・甕についても、Ａ類が７点中６点と最も多く、このほかＥ類（腐り礫を含む土器、写真１－３）・Ｈ類が各１点存在している。また、同時期の赤色顔料が塗布されていない土師器について、坏ではＡ類（写真１－１）、甕ではＡ類（写真１－４）とＥ類が存在している。十分な観察点数を得られていないが、含まれる砂粒の種類という点では、赤色顔料が塗布されたものとされていないもので、およびそれぞれの器種ごとで、使用される材料が大きく異なっていたということはなさそうである。

７～８世紀に帰属する土師器（７世紀後半～８世紀前半が主体）では､赤彩土器の坏 10 点､壺２点、高坏２点、鉢１点を観察した。赤彩土器の坏では、Ａ類が 10 点中９点と最も多く、このほかＦ類（その他の有色砂粒を含む土器）・Ｈ類が各１点存在している。なお、壺は２点ともＡ類、高坏は２点ともＨ類、鉢はＡ類であった。前時期と同様に、含まれる砂粒の種類という点では、器種が異なっていても、使用される材料が大きく異なっていたということはなさそうである。

以上のように、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡で出土した土師器は、どの時期も器種や赤色顔料を塗布しているか否かの違いに関わらず、およそ似た材料を使用している。含まれる砂粒の多くは、黒色光沢粒および石英・長石であり、他の砂粒は少ない。ただし、その少ない中でも海綿骨針を含む土器が認められた点は注意すべきである。海綿骨針を一定量含むものは３点、極少量でも含むものならば 10 点存在している。後に述べる２つの遺跡では、ほぼ存在しなかったものであるので、海綿骨針を含む土器が少数ながらでも存在していることは、当遺跡出土土師器の特徴として捉えておくのが良いだろう。

②古館Ⅱ遺跡

当遺跡では、７～８世紀に帰属する赤彩土器（７世紀後半～８世紀前半が主体）の坏 20 点、壺 36 点、高坏２点、また比較資料として赤色顔料が塗布されていない土師器の甕１点を観察した。赤彩土器の坏では、Ａ類が 20 点中 16 点と最も多く、次に多いものはＦ類（写真２－７）で７点存在してい

表５　砂粒・混和材の含有状況

遺跡および時期・器種 ＼ 胎土	石田Ⅰ・Ⅱ遺跡			古館Ⅱ遺跡		千苅遺跡
	５～６世紀		７～８世紀	７～８世紀		８～９世紀
	坏	壷・甕	坏	坏	壷	壷
Ａ類：黒色光沢粒を含む	42/44	6/7	9/10	16/20	16/36	27/29
Ｂ類：　雲母　を含む	0/44	0/7	0/10	0/20	0/36	1/29
Ｃ類：頁岩・チャートを含む	1/44	0/7	0/10	0/20	1/36	9/29
Ｄ類：火成岩・凝灰岩を含む	2/44	0/7	0/10	0/20	1/36	12/29
Ｅ類：腐り礫を含む	0/44	1/7	0/10	2/20	15/36	1/29
Ｆ類：その他有色砂粒を含む	0/44	0/7	1/10	7/20	17/36	3/29
Ｇ類：海綿骨針を含む	3/44	0/7	0/10	0/20	0/36	0/29
Ｈ類：長石・石英のみ	1/44	1/7	1/10	1/20	5/36	0/29

※たとえば１つの土器片中に雲母とチャートをともに含めば、それぞれで１点ずつ集計しているので、縦列の合計は総観察点数より多くなる。

る。このほかＥ類が２点、Ｈ類が１点存在している。

赤彩土器の壷については、Ｆ類（写真２－８）が 36 点中 17 点と最も多いが、Ａ類が 16 点、Ｅ類（写真１－６）が 15 点と同程度に存在している。このほかＨ類が５点、Ｃ類・Ｄ類が各１点存在している。また、同時期の赤色顔料が塗布されていない土師器の甕には、黒色光沢粒と腐り礫が含まれていた（写真１－５）。

以上のように、古館Ⅱ遺跡では、坏にはＡ類・Ｆ類が多いものの、壷にはこれらに加えＥ類も多く存在している。器種ごとで、使用される材料の傾向に多少の差がみられる。また、他の遺跡と比較してみると、腐り礫を含む土器および何らかの有色砂粒を含む土器が多く存在しており、このことを当遺跡出土土師器の特徴として考えて良いだろう。

③千苅遺跡

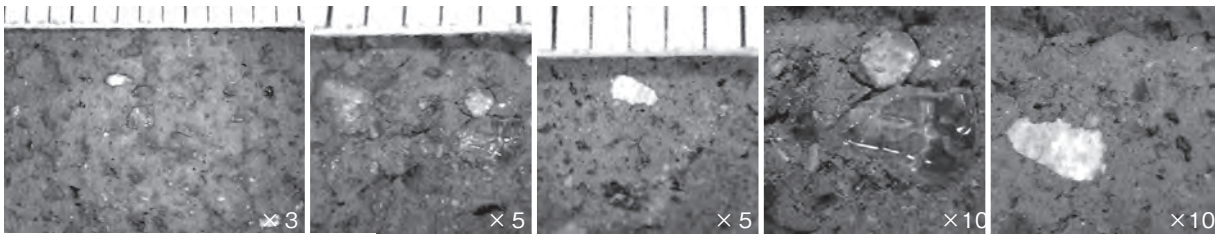
当遺跡では、８～９世紀に帰属する赤彩土器（８世紀後半～９世紀前半が主体）の壷 29 点、皿１点、甕または鉢を１点、比較資料として赤色顔料が塗布されていない土師器の坏５点、甕５点、高台皿２点を観察した。赤彩土器の壷では、Ａ類が 29 点中 27 点と最も多く、Ｄ類（写真２－ 11）が 12 点、Ｃ類（写真２－ 10）が９点と続く。このほかＦ類が３点、Ｂ類・Ｅ類が各１点存在している。赤彩土器の皿については、雲母を多量に含んでおり、他の土師器と比べ異質である（註 11）。

赤色顔料が塗布されていない土師器については、坏ではＡ類・Ｃ類・Ｆ類が存在し、甕ではＡ～Ｅ類が存在している（写真２－９・12）。

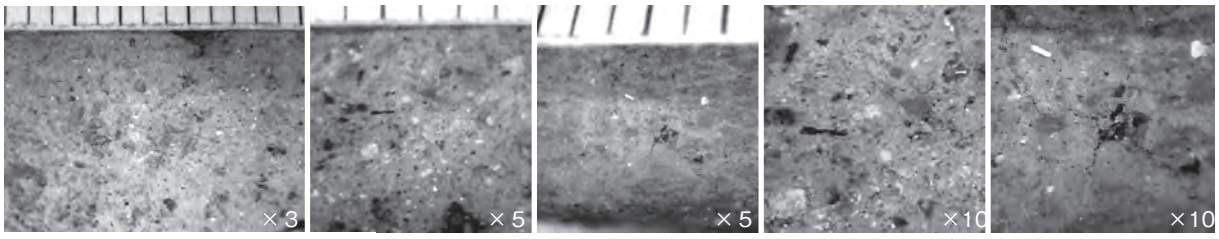
以上のように、千苅遺跡でも、Ａ類が多いことは他の遺跡と同様である。そして、十分な観察点数を得られていないが、含まれる砂粒の種類という点では、赤色顔料が塗布されたものとされていないもので、およびそれぞれの器種ごとで、使用される材料が大きく異なっていたということはなさそうである。また、他の遺跡と比較してみると、頁岩・チャートを含む土器および火成岩または凝灰岩を含む土器が多く存在しており、このことを当遺跡出土土師器の特徴として考えて良いだろう。

（ｄ）小結

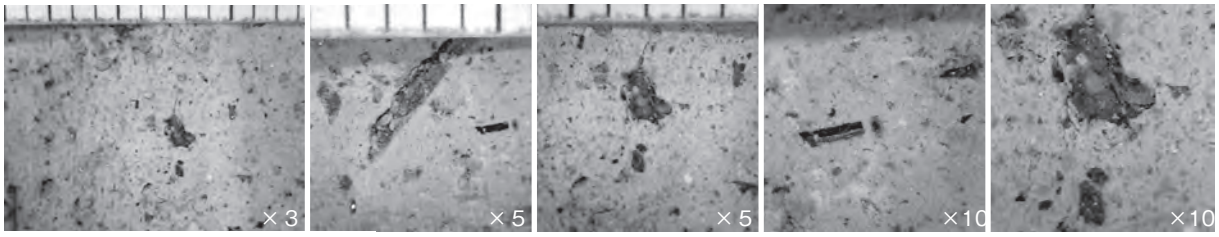
以上、赤彩土器を中心に古代土師器の胎土観察を行ったが、表５に示すように、遺跡ごとで土器に使われる材料の傾向が異なっている。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡では海綿骨針を含む土器、古館Ⅱ遺跡では腐り礫を含む土器と何らかの有色砂粒を含む土器、千苅遺跡では頁岩・チャートを含む土器と火成岩・凝灰岩を含む土器が多くみられる。また、土器胎土は１遺跡内での器種による違いよりも、遺跡間での違いの方が顕著のように見え、赤彩土器を含む当時の土師器生産は、特定の集落で一括生産し各地に供給されるようなものではなく、各集落単位でおこなわれていたことが想定される。



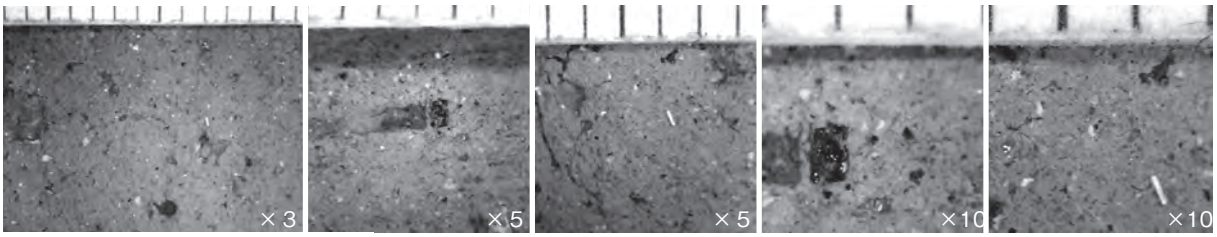
1．石田Ⅰ・Ⅱ遺跡　第 10 図 - 171（5～6 世紀 坏 非赤彩、A1- 類）



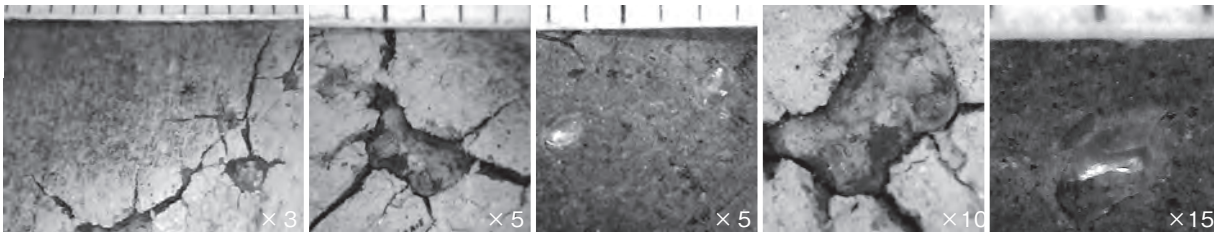
2．石田Ⅰ・Ⅱ遺跡　第 10 図 - 172（5～6 世紀 坏 赤彩、AG0 類）



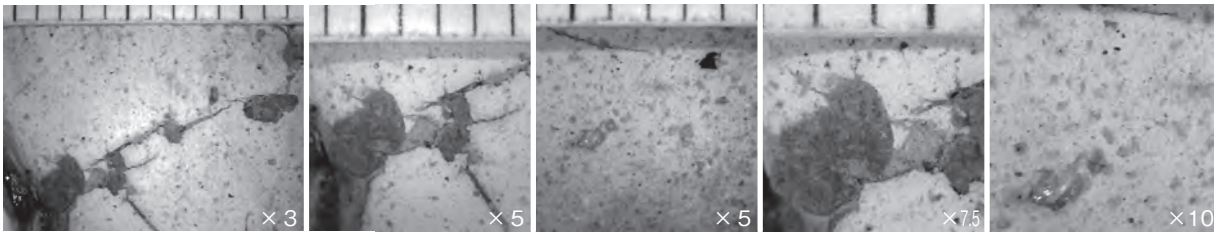
3．石田Ⅰ・Ⅱ遺跡　第 11 図 - 176（5～6 世紀 甕 赤彩、AE0 類）



4．石田Ⅰ・Ⅱ遺跡　第 11 図 - 178（5～6 世紀 甕 非赤彩、A0 類）

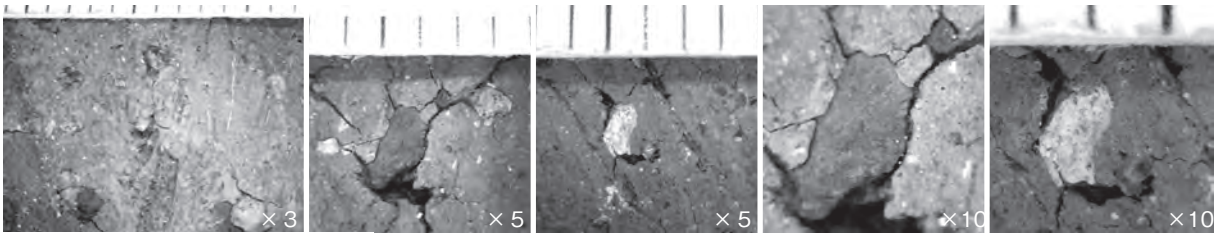


5．古館Ⅱ遺跡　図版 86 - 36（7～8 世紀 甕 非赤彩、AE2- 類）

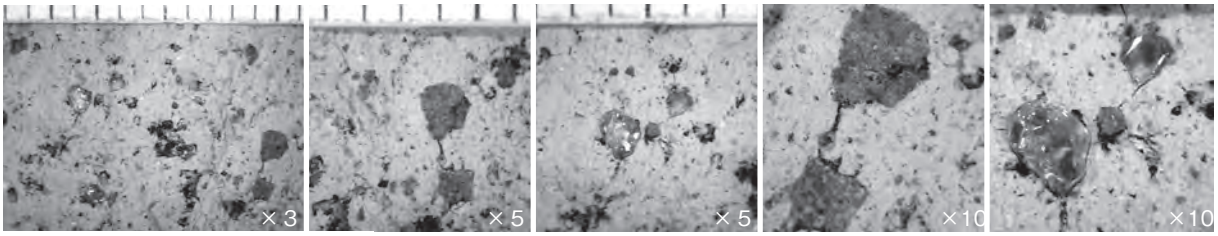


6．古館Ⅱ遺跡　図版 86 - 39（7～8 世紀 壺 赤彩、AE1+ 類）

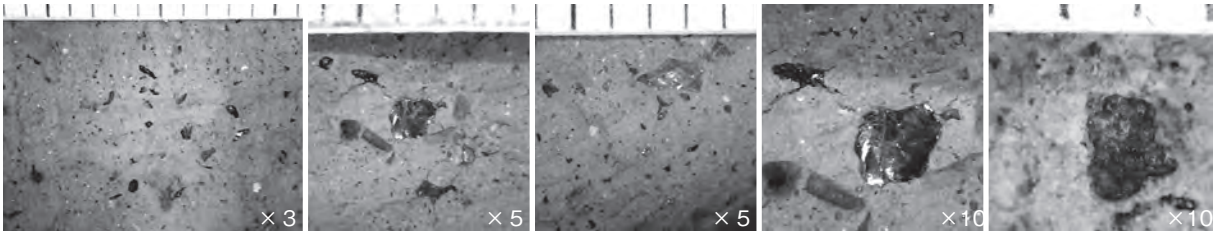
写真1　土器胎土写真(1)



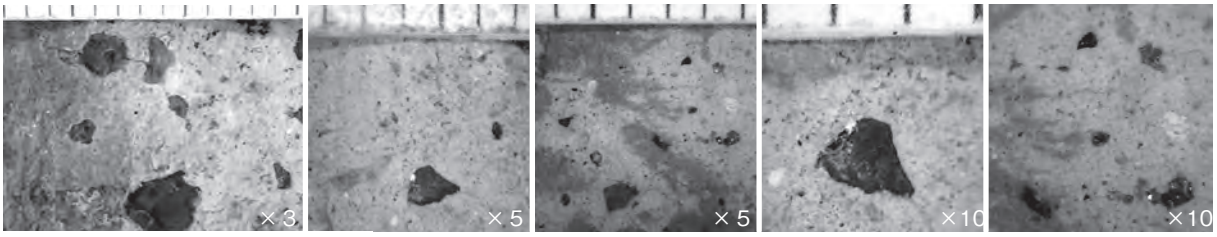
7．古館Ⅱ遺跡　図版 114 - 256（8世紀前半 坏 赤彩、F1+ 類）



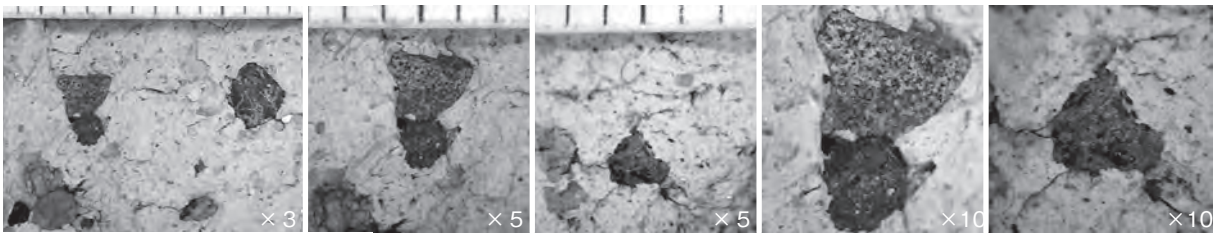
8．古館Ⅱ遺跡　図版 115 - 264（8世紀 壷 赤彩、AF1- 類）



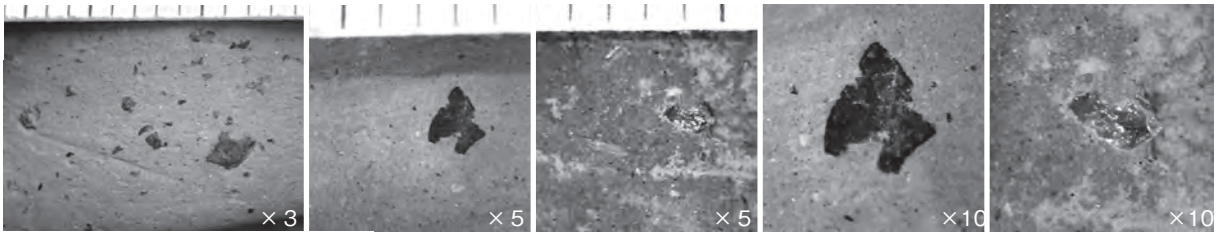
9．千苅遺跡　図版 78 - b156（8～9世紀 甕 非赤彩、ABC1- 類）



10．千苅遺跡　図版 93 - b496（8～9世紀 壷 赤彩、AC1+ 類）



11．千苅遺跡　図版 121 - b1152（8～9世紀 壷 赤彩、ADF1- 類）



12．千苅遺跡　図版 123 - b1213（8世紀 坏 非赤彩、AC0 類）

写真２　土器胎土写真(2)

表６　土器胎土観察表

石田Ⅰ・Ⅱ遺跡

報告書：米田寛 2015 『石田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第632集,（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒・混和材									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	頁岩・チャート	結晶片岩	火成岩	腐り礫	その他有色砂粒	石英	長石	海綿骨針
1	第10図-169	A1-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	0.5多		(0.5)		(1.0)			1.0s×0～1 0.5	(1.0) 0.5	
2	第10図-170	A0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	＜0.5							(2.0) 0.5	(1.0) 0.5少	
3	第10図-171	A1-	5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/8 橙	(0.5) ＜0.5							(2.0) 1.0s×0～1 0.5	(1.0) 0.5	(0.5)
4	第10図-172	AG0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	(1.0) ＜0.5							(1.0) 0.5	0.5	0.5少
5	第11図-176	AE0	2.5Y7/2 灰黄	10YR7/4 にぶい黄橙	0.5					(2.0) (1.0) 0.5少	(0.5)	(1.0) 0.5	0.5少	
6	第11図-177	AE0	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	0.5	(0.5)	(0.5)		(3.0) (1.0)	0.5少	(0.5)	(1.0) 0.5	(3.0) (2.0) (1.0) 0.5	
7	第11図-178	A0	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	0.5		(1.0)			(2.0)		(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(0.5)

古館Ⅱ遺跡

報告書：菊池利和・光井文行ほか 1985 『古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第103集,（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒・混和材									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	頁岩・チャート	結晶片岩	火成岩	腐り礫	その他有色砂粒	石英	長石	海綿骨針
1	図版86-30	AF0	N2/0 黒	5YR5/6 明赤褐	＜0.5						0.5少	＜0.5極少	＜0.5	
2	図版86-36	AE2-	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	＜0.5					2.0s×0～1 1.0 ×0～1 0.5少		(2.0) 1.0s×0～1 0.5	0.5少	
3	図版86-37	AE1+	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5					(2.0) 1.0b×0～1 0.5少		(2.0) (1.0) 0.5少	(1.0)	
4	図版87-39	AE1+	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5				(2.0) (1.0)	(2.0) 1.0b×0～1 0.5少		(1.0) 0.5少	(1.0)	
5	図版88-57	AE1+	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	＜0.5					(2.0) 1.0b×0～1 0.5少			(0.5)	
6	図版88-60	A0	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5					(2.0) (1.0)		0.5極少	0.5	
7	図版114-256	F1+	N2/0 黒	10YR6/3 にぶい黄橙	△		(1.0)			0.5極少	(2.0) 1.0b×0～1 0.5少	0.5	1.0s×0～1 0.5	
8	図版115-262	AE0	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5				(1.0)	0.5少	0.5極少	0.5	0.5	
9	図版115-264	AF1-	2.5Y7/2 灰黄	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5					0.5極少	1.0s×0～1 0.5	1.0s×0～1 0.5	(1.0) 0.5少	
10	図版116-273	AEF0	N3/0 暗灰	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5					0.5少	(3.0) 0.5少	0.5	0.5少	
11	図版116-274	AF0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5					△	(2.0) (1.0) 0.5少	0.5	(1.0) 0.5	

千苅遺跡

報告書：村上絵美・高木晃ほか 2016 『千苅遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第652集,（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒・混和材									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	頁岩・チャート	結晶片岩	火成岩	腐り礫	その他有色砂粒	石英	長石	海綿骨針
1	図版78-b137	A0	N2/0 黒	7.5YR7/6 橙	＜0.5	(＜0.5)			(1.0)		(0.5)	＜0.5	＜0.5	(0.5)
2	図版78-b138	AF0	N3/0 暗灰	10YR7/4 にぶい黄橙	＜0.5少			(0.5?)			0.5少	(＜0.5)	＜0.5多	
3	図版78-b142	AF0	N2/0 黒	7.5YR7/6 橙	＜0.5		(1.0)		(1.0)		(2.0) (1.0) 0.5少	＜0.5少	＜0.5多	
4	図版78-b143	A0	N3/0 暗灰	10YR7/4 にぶい黄橙	＜0.5							(1.0) ＜0.5	＜0.5少	
5	図版78-b156	ABC1-	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	＜0.5	(1.0) (0.5) ＜0.5	(3.0) 1.0s×0～1		(2.0)		(0.5)	1.0s×0～1 0.5	(1.0) 0.5	
6	図版79-b163	AD1-	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	＜0.5	(＜0.5)	(0.5)		(1.0) 0.5少			1.0s×0～1 0.5	0.5	
7	図版79-b164	A0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	＜0.5	(1.0) (0.5)	0.5極少				(1.0)	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	
8	図版86-b323	A0	N2/0 黒	10YR7/4 にぶい黄橙	(3.0) ＜0.5		△		(1.0)		0.5極少	0.5	(0.5) ＜0.5	
9	図版86-b327	AE1-	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/3 にぶい黄橙	＜0.5	(0.5)	(1.0)			(2.0) 1.0s×0～1 0.5	(1.0) (0.5)	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	
10	図版86-b328	A1-	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	＜0.5	(0.5)					(1.0) 0.5極少	(2.0) 1.0s×0～1 0.5	0.5	
11	図版86-b330	ADF1-	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5		(1.0)	(1.0)	(3.0) (2.0) (1.0) (0.5)		1.0s×0～1 0.5少	1.0s×0～1 0.5	(1.0) 0.5	
12	図版86-b331	ADF1-	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5		(3.0)	△	(3.0) 1.0s×0～1		1.0s×0～1 0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5少	
13	図版93-b473	AB0	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	0.5	(1.0) 0.5	(2.0) 0.5極少	(0.5)			(2.0) (0.5)	0.5	(2.0) (1.0) 0.5	(0.5)
14	図版93-b496	AC1+	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	＜0.5		(3.0) (2.0) 1.0b×0～1 0.5少	△			(2.0)	(1.0) 0.5	0.5少	
15	図版101-b702	A0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	＜0.5	(0.5)	(0.5)		(1.0)		(1.0)	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	
16	図版121-b1149	AC1-	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5		(2.0) 1.0s×0～1 (0.5)		(2.0) (1.0)		(2.0) (1.0)	1.0s×0～1 0.5	(2.0) (1.0) 0.5	
17	図版121-b1150	A1-	2.5Y8/3 淡黄	10YR7/4 にぶい黄橙	＜0.5		(1.0)	△	(2.0) (1.0)		(2.0) (1.0)	1.0s×0～1 0.5	1.0s×0～1 0.5	
18	図版121-b1151	AD1-	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5		(1.0)		(2.0) 1.0s×0～1		(2.0) (1.0)	(1.0) 0.5	(2.0) (1.0) 0.5	
19	図版121-b1152	ADF1-	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	＜0.5		(1.0) (0.5)		(2.0) 1.0s×0～1		(3.0) (2.0) 1.0s×0～1 (0.5)	(2.0) (1.0) 0.5	1.0s×0～1 0.5	
20	図版123-b1212	AC0	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	＜0.5	(＜0.5)	0.5少				0.5極少	(2.0) 0.5	0.5	
21	図版123-b1213	AC0	N3/0 暗灰	10YR6/3 にぶい黄橙	＜0.5少		(1.0) 0.5少				0.5極少	0.5少	(1.0) (0.5)	
22	図版123-b1214	AD1-	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	＜0.5		(0.5)		(2.0) 1.0s×0～1 (0.5)		0.5極少	1.0s×0～1 0.5	0.5	
23	図版123-b1215	AC1-	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y7/3 浅黄	＜0.5少		(1.0) 0.5少		(1.0)			1.0s×0～1 0.5	(2.0) (1.0) 0.5	

６．顔料製作と土器焼成実験

本節では、ローカルな資源による赤色顔料の生成実験とその生成物による土器テストピースへの塗布・焼成実験結果とその成果を報告する。ただし、今回は県内各地の顔料資源の採取や電子顕微鏡観察を実施していないため、考古資料の塗布顔料の産地や原材料同定に至る成果ではない。

（ａ）製作実験

ベンガラ塗布試料の焼成実験は酸化鉄を主成分とする赤色顔料の製作、テストピース塗布・焼成実験を行い、顔料の発色とその条件、製作工程復原を行った。なお、実験に際し辻広美の成果（辻2013）を参照し、ローカルな試料に限定して行った。製作実験目的は、考古資料に塗布された顔料との比較試料の作成、発色、器面色調との相関関係の検討、産地同定に繋がる原材料の抽出である。一部の成果について公表し、今後の赤彩土器理解のための一助としたい。

①酸化鉄を含む試料の選定

次の試料を各産地で採取した。

a) 北上市和賀仙人産出の赤鉄鉱石（鏡鉄鉱石）
b) 北上市和賀仙人産出の赤鉄鉱石（表面が赤褐色を呈する）
c) 北上市和賀仙人産出の赤鉄鉱石表面付着の黄褐色土（リモナイト）
d) 紫波町赤沢産出の赤鉄鉱石風化赤土（ラテライト）
e) 盛岡市湯沢赤湯地区産出の赤土（ラテライト）

a) ～ c) は和賀仙人鉱山跡の遠平鉱床の同一地点での表採試料、d)・e) は造成斜面地採取試料である。なお水田底面などに形成される沼鉄については時間的制約から今回検討していない。

②－１ベンガラ製作実験の条件と方法

赤鉄鉱石試料は荒割りして破片を擦り合わせて粉末化し、ラテライトは１㎜と 0.42㎜メッシュのフルイ試料を準備し、それぞれ水簸を行った。水簸は 500ccの水で約 20g の試料を攪拌し、1 時間後に上澄み試料と沈殿物に分け、上澄みを乾燥させて残留物を水簸試料とした。次に準備した水簸試料を焼成した。予備実験として 1000° C に達する簡易ガスバーナーで 10 ～ 15 分焼成し、試料の色調変化をみた。最も発色の良い資料はｃ) のリモナイトであった。そのため、木材燃料による焼成をリモナイト中心に行うことにした。七輪を重ねて簡易的な小型窯とし､その中に試料と炭を充填して着火し、温度上昇を温度計で確認しながら４時間焼成した。

②－２ベンガラ製作実験結果

ｉ）和賀仙人産出の鏡鉄鋼石燃焼実験

条件：七輪内に炭を充填し、鉄鉱石を３個設置。七輪内の温度が上昇したところで、送風孔から空気入れで圧縮空気を送風し続ける。上部を植木鉢で覆い、ドーム状施設とした。温度は 800 ～ 900 度に達した。

結果：鏡鉄鉱が溶けて暗赤褐色となった。一部の資料に水を掛けたら鮮やかな赤褐色となったが、1日経過して極暗赤褐色となった。600 ～ 900℃で赤褐色､900℃以上で紫色あるいは極暗褐色を呈した。本実験は温度が上昇しすぎた可能性が考えられる。黒色酸化鉄（マグネタイト）が生成され、水を掛けて冷やしたときに表面だけ赤色酸化鉄（ヘマタイト）が生成されたが、剥がれ落ちて黒色酸化物が残ったと考えられる。なお、鏡鉄鉱資料は焼成すると赤褐色が点状に形成された。試料を細砕・煮沸または焼成・水簸の工程を得て塗布可能なベンガラが生成されるが、実験試料は非常に硬くて細かく分割するのが困難であった｡山の鉱石だと小粒度に生成する作業だけでなく採取自体に労力を費やす。これを始原材とすると、沼鉄や赤土に比べて相対的に作業コストが高くなってしまうため、選択され

ないと考える。

ⅱ）和賀仙人産出の赤鉄鉱石の水簸実験

条件：赤色の濃い赤鉄鉱石２個を擦り合わせて粉末状の試料を作成した。粉末状の橙色の試料約 20g と水 200ccをコップで攪拌し、30 分放置して上澄みを回収・乾燥させた。

結果：辻論文（辻前掲）と同様の結果が得られた。水簸前と水簸後では明らかな色調変化が見られ、橙色→浅黄橙色へと明るくなった。考古資料には加熱処理による脱水痕があり、粒度が揃っていることから水簸を行っているとされる（辻前掲）。目的とする色調の顔料抽出方法として水簸の有効性を再認識できた。

ⅲ）赤土の水簸実験

条件：紫波町赤沢産と盛岡市湯沢産の赤土を 0.42㎜のフルイに掛けて水簸を行った。

結果：水簸前と水簸後では明るさに差が生じたが、赤色が鮮やかになったというよりも脱色して橙色になり、結果として明るくなった。水簸後の色調から、赤土資料でもベンガラとして利用可能と思われたが、後にこの試料を塗布して焼成したテストピースでは発色も悪く器面に固着しなかったので不適格と考える。この橙色の色調は８世紀後半以降の壺胴部塗布資料中に多い。

ⅳ）和賀仙人産リモナイト水簸試料と赤土水簸試料の燃焼実験

条件：水簸後の資料をそれぞれガスバーナーで 15 分間焼成し、焼成資料を乳鉢で磨り潰した。

結果：焼成前資料と比べて深い赤色となった。発色は赤鉄鉱石水簸試料のほうが良かった。バーナー直火が当たる範囲は、黒色～灰色酸化鉄（マグネマイト）となったが、直火が当たらない範囲で、700 ～ 900℃程度の温度帯ができて、酸化焼成が進み赤色酸化鉄（ヘマタイト）の色調を得たと考える。どちらの資料も考古資料と類似の色調が得られた。

③－１テストピースの焼成実験

発色の良い水簸試料が、ｃ）リモナイトとｄ）ラテライトだった。この２試料と市販の鉛含有ベンガラをテストピースに塗布することとした。テストピースは、北上山地の花崗岩風化土の上位に堆積した粘土を水簸および 0.2㎜メッシュフルイに通して砂粒をほぼ除去し、沈殿した粘土を乾燥させて試料とし、粘土:砂（Φ 1㎜）＝７:３の比率で製作した。これらをほぼ４～５㎝角、厚さ５～８㎜度に切り分け、生渇き状態で、ケズリ・ナデ・ハケ・ミガキ調整のピースをそれぞれ複数個作成し、１～２週間日陰干しして焼成直前に天日干しした。顔料は、乳鉢で磨り潰してパウダー状とし、次のア）～エ）の混合物を塗布した。

上段左：ハケ、上段右：ケズリ、下段：ミガキ

ア）顔料＋水、イ）顔料＋水＋粘土、ウ）顔料＋ニカワ、エ）顔料＋ニカワ＋粘土

土器器面への固着を高める固着剤として、ドベ（粘土＋水）とニカワを試した。なお、ニカワは小樽市忍路土場遺跡出土縄文時代赤色顔料の分析結果で、ニカワ塗りの漆工芸品が確認されていることから対象とした。

焼成方法は覆い焼きと小型窯焼きである。覆い焼きはキャンプ場に申請し、薪、稲藁、泥パックによる覆い焼き、小型窯は２個の七輪を重ねて密閉し温度計を挿入できるようにした。覆い焼きでの焼

成実験はｄ)のラテライト焼成試料、七輪窯ではラテライト焼成資料、市販のベンガラ、リモナイト焼成資料をテストピースに塗布し焼成した。

③－２テストピース焼成実験結果

覆い焼きでは、藁を敷き詰めて周りに薪燃料、中央にテストピースを並べ、藁をかぶせて泥でパックし簡易的な窯の形状とした。焼成途中で火回りの悪い範囲に酸素が届くよう修正したが、キャンプ場の都合上焼成時間が５時間程度だった。結果は、全体的に焼成不良であった。原因はいくつかあるが、①覆いの下部から酸素供給される配置にしていなかったことで、内部温度が上がらず、炭素が吸着して黒色化したテストピースも発生した。②底部に藁、その上に太薪としたため、燃焼が進むと藁が灰になって試料が低い位置に押し下がり、薪の燃焼熱が伝わらない状態となった。覆い焼きの温度は放射型温度計による測定で上部では 450° C 程度を記録したが、生焼けの試料もあったことから全体的な温度は上昇しなかった。③試料上に藁を寝せて設置したため空気の流れが悪く、窯内の温度が上昇しなかった。土器に立てかけるように設置して空気の流れを良くすべきであった。いくつかのピースが辛うじて焼成良となったが、覆い焼き実験は知識･経験不足を示す結果となった。この失敗から、理解できたことを列記すると、

ａ）東北北部の古墳時代土器の素地は白～黄褐色に焼き上がる土器が多く見受けられるが、これと同様に焼き上がったのは酸化炎にあまり触れないが温度上昇の確認できた範囲に設置したピースである。

ハケ調整後にｃ）和賀産とｄ）赤沢産を塗布、
焼成後にｄ）は固着せず

ミガキ調整後にｄ）赤沢産を重ね塗りしたが固着弱い

左側に顔料塗布後にミガキ有
（筋状に光沢面形成）

ピース左側に顔料塗布のみ
（光沢なく、一部剥がれやすい）

b）覆い焼き試料の顔料塗布面はほぼすべて固着してなかった。短時間低温焼成では固着困難である。素地を白色に焼き上げて顔料を固着させるには、還元状態を長時間保ち、ピース内の石英や長石等のケイ素の融解が進むまでじっくり待つことが求められる。また、固着剤を工夫することが求められる。

この成果をもとに小型窯焼成を行い、上記の固着剤の工夫と、燃焼時間と温度について再検討した。小型窯焼成では６時間以上の焼成で窯内温度を 450 ～ 550℃に保った。還元炎焼成する方法が思いつかなかったので、酸化炎焼成せざるをえず、テストピースはほぼ赤褐色に焼き上がるので、色調変化観測は重視せず、顔料の固着と器面調整種類ごとの差の観察を目的とした。

テストピースに顔料が固着したのは、塗布後にミガキ調整して光沢を持った資料と市販の鉛丹資料である。それ以外は半分程度固着したものと器面に乗っているだけで剥がれ落ちたものなどがある。ケズリ、ハケ、ミガキ、ナデのそれぞれ器面調整資料を用意したが、調整方法と固着度との相関関係は特になかった。しかし、塗布後に光沢が出るほど密着させるようにミガキを加えた資料と加えない資料とでは、明らかに塗布後ミガキを加えた資料の固着が強かった。この成果は既に認識されている顔料の器面固着を促進する技術的特徴（高橋静前掲、本論４節）と一致する。

一方、焼成前と焼成後の顔料の彩度上昇は、鉄系ベンガラでは視覚的に確認できなかったが、市販鉛丹では焼成前の茶褐色系から焼成後に赤褐色となった。

（b）実験成果

・和賀仙人産のような良質な鉄鉱石からベンガラ製作するよりも、近傍の沼地や河川で酸化鉄を入手する方が作業コストを抑えられる。
・赤土資料は水簸によって明るくなったが、橙色～浅黄橙色となった。８世紀後半の考古学資料によくみられる色調に類似する。
・顔料塗布後のミガキが、器面への固着度を向上させたことを実験試料でも確認できた。

７．赤色顔料塗布資料のＸ線回折分析結果

（a）試料

Ｘ線回折装置を利用し、一部の考古資料の顔料始原材を非破壊分析で確認した。測定は岩手県工業技術センターに於いてＸ線回折装置ブルカーエイエックスエス D8 DISCOVER を使用し、素形材技術部瀬川晃児主任専門研究員の指示のもと機材を稼働した。なお、分析結果の解釈は米田が行った。

資料は大型の壺・坏だと分析装置に入らないので、破片資料の分析を行った。その目的は、赤色顔料の始原材を判別することで、鉄系酸化物（赤色酸化鉄：ヘマタイト、褐色酸化鉄：マグヘマイト、黒色酸化鉄：マグネタイト、黄色酸化鉄：ゲーサイト等）、水銀朱、鉛丹を候補とした。考古資料は装置に入る資料を厳選して非破壊で行った。また、集落の主体時期と地域を異にし、顔料塗布面の厚さや色調に差がある資料群を有する以下３遺跡から抽出した。問題点としてＸ線が土器胎土（石英、長石等）や顔料層のドベに含まれる鉱物にも反射しノイズが多くなることで明瞭な鉄系酸化物の反射を判別できないサンプルも存在する。下記 11 点の資料について分析を実施した。

①５世紀末～６世紀主体の資料（奥州市石田Ⅰ・Ⅱ遺跡）

報文№ 517：10R4/6 赤色；ア類（５～６世紀）、№ 577：10R5/6 赤色；ア類（５～６世紀）、
№ 641：2.5YR4/6 赤褐色；イａ類（６世紀）、№ 191：2.5YR4/6 赤褐色；イａ類（７世紀後半～８世紀前半）

②７世紀後半～８世紀前半資料（花巻市古館Ⅱ遺跡）

報文図 115-262：5YR5/6 明赤褐色；イｂ類（７～８世紀）、図 116-274：5YR5/6 明赤褐色；イａ類（７～８世期）、

図 90-76：10R4/6 赤色；ア類（7 ～ 8 世紀）、図 92-86：10R4/4 赤褐色；ア類（7 ～ 8 世紀）

③ 8 世紀後半～ 9 世紀資料（北上市千苅遺跡）

報文№ b 331：（口縁部）5YR4/6 赤褐；イ b 類（胴部）5YR6/6 橙；ウ類（8 c 9 世紀中葉～後葉）、

№ b 496：色調 5YR5/6 明赤褐；ウ類（9 世紀初頭）、№ b 991：2.5YR3/6 暗赤褐；イ a 類（8 世紀後半）

（b）分析結果

11 点のうち、4 点の結果をグラフに示す。非破壊測定のため、土器器面の石英、斜長石、カリ長石の反射が顕著であったが、測定した考古資料はすべて鉄系酸化物の反射が確認された。

ヘマタイトは 33°・36° 付近に高強度、24°・49° 付近にも反射が認められる。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡№ 517 と№ 641、古館Ⅱ遺跡図 90-76・図 92-86・図 116-274、千苅遺跡 b991 に認められる。

石田Ⅰ・Ⅱ№ 641（6 世紀）はヘマタイトの反射があり、マグヘマイトは不明である。№ 191（7 世紀～ 8 世紀）はノイズに埋没し明瞭な反射が認められなかった。

古館Ⅱ遺跡資料は 4 点とも顔料面に厚みがあり、赤褐色で、器面がモッタリした印象である。丁寧に塗り重ねられた結果と考えられる。測定結果は 3 点が類似の波形で図 92-86 をその典型として示す。33° と 36° 度付近の高強度と 55° にヘマタイト反射が認められる。ただし 24° と 49.5° はノイズに埋没している。

千苅遺跡資料は顔料色調の差が著しく、口縁部の縦位条線が鮮やかな赤褐色、胴部が橙色や明赤褐色や暗赤褐色の資料もある。そのなかで暗赤褐色の b 991 を選定した。b 991 は千苅遺跡報文においてＸ線回折分析を実施しており（報文資料番号 2036 = b 991）、今回再測定してみた。報文と同様にヘマタイトとマグヘマイトの両者の反射が確認され、報文が粉末資料、再測定資料が非破壊資料との違いはあるが、鉄系酸化物に関する反射はよく似ている。

（c）成果

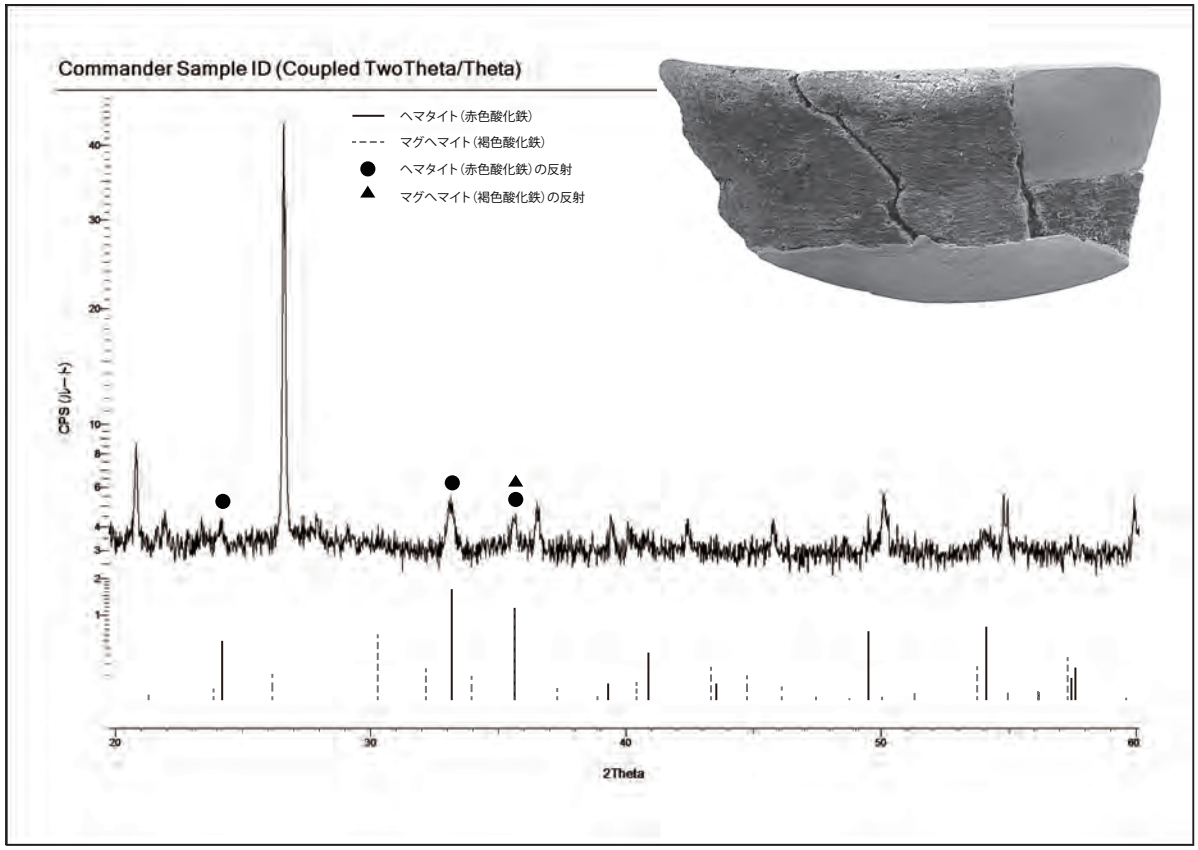
鉄系酸化物の反射が認められた。赤色顔料候補として赤色酸化鉄（ヘマタイト）と褐色酸化鉄（マグヘマイト）が想定されるが、顔料中にマグヘマイトが混在する場合、その割合によって明赤褐色や暗赤褐色の発色を有すると考える。したがって、千苅遺跡 b 991 のようなやや暗い赤褐色の色調ではヘマタイト以外の顔料鉱物が混入している可能性を指摘できる。4 節において、古代人が求める色調が深い赤色から次第に赤褐色～明赤褐色～橙色へと明るい色調に変化していくことが判明したが、古い時期にヘマタイトの鮮やかな色調に拘っていたものが、新しい時期のベンガラ製作ではマグヘマイトの色調で生成されても積極的に利用した可能性があると考える。ただしＸ線回折分析では別鉱物の反射と重なりが多く判読し難いため、次回は 1 試料のＸ線照射時間を延ばすなどの改善をしたい。

8．まとめと課題

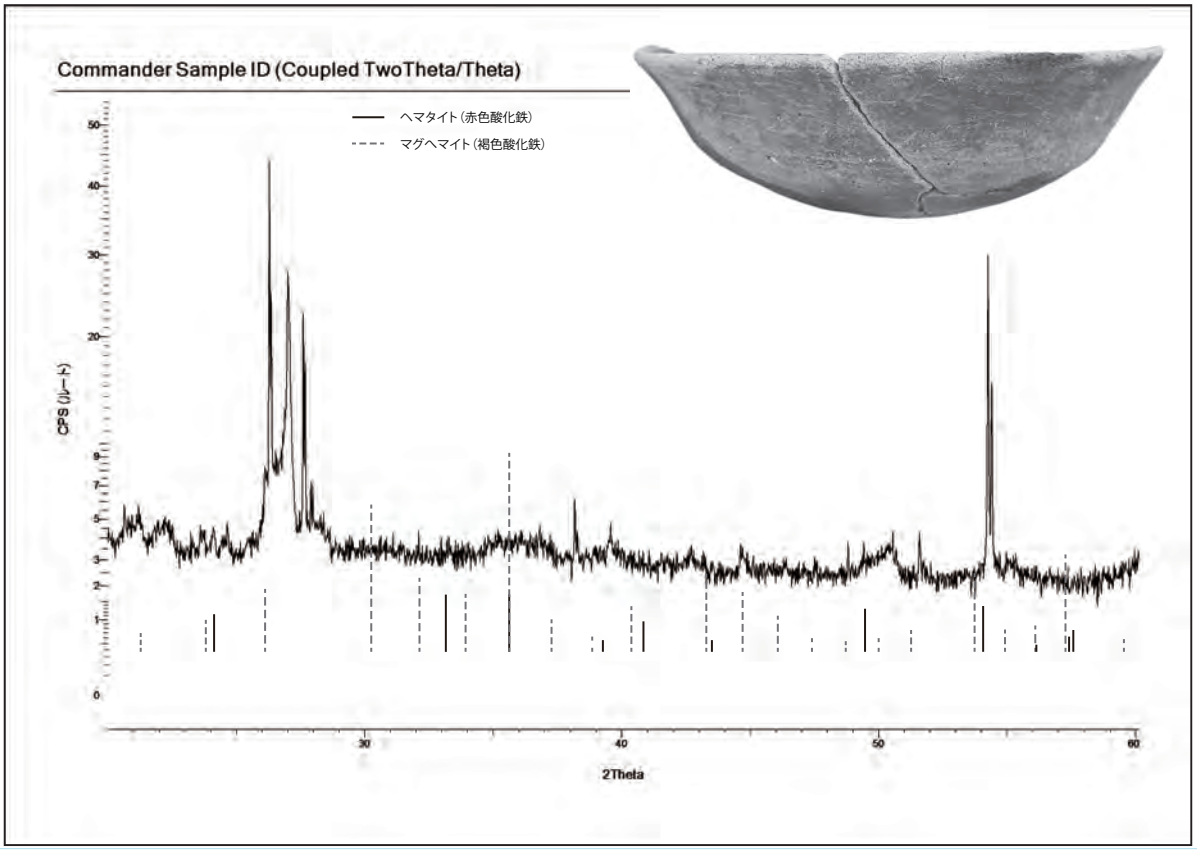
各節でまとめられた成果を総括する。県内の赤彩土器文化は､少なくとも 9 世紀まで継続しており、顔料は鉄系酸化物を主成分とする。赤彩土器は小地域ごとの技術で製作されており、顔料塗布面を厚く塗り重ねる地域もあれば、薄く塗る地域もあり、赤色の濃淡にも個性がある。また時期によっても色調に差がある。赤色の色調は古い時期から赤（4 節ア類）→赤褐～明赤褐（4 節イ類）→橙（4 節ウ類）へと次第に移行していくことが判明した。また、胎土についても内陸部と沿岸部では異なり、内陸部でも花巻市域と北上市域と奥州市域ではそれぞれ異なることが判明した｡これらの成果からは、赤彩土器が特定の地域で一元的に製作されて他地域へ供給される体制を想定できない。それぞれの地域において土器製作技術と赤彩土器文化が受け継がれてきた結果と考える。

さて、課題は山積した。以下列記する

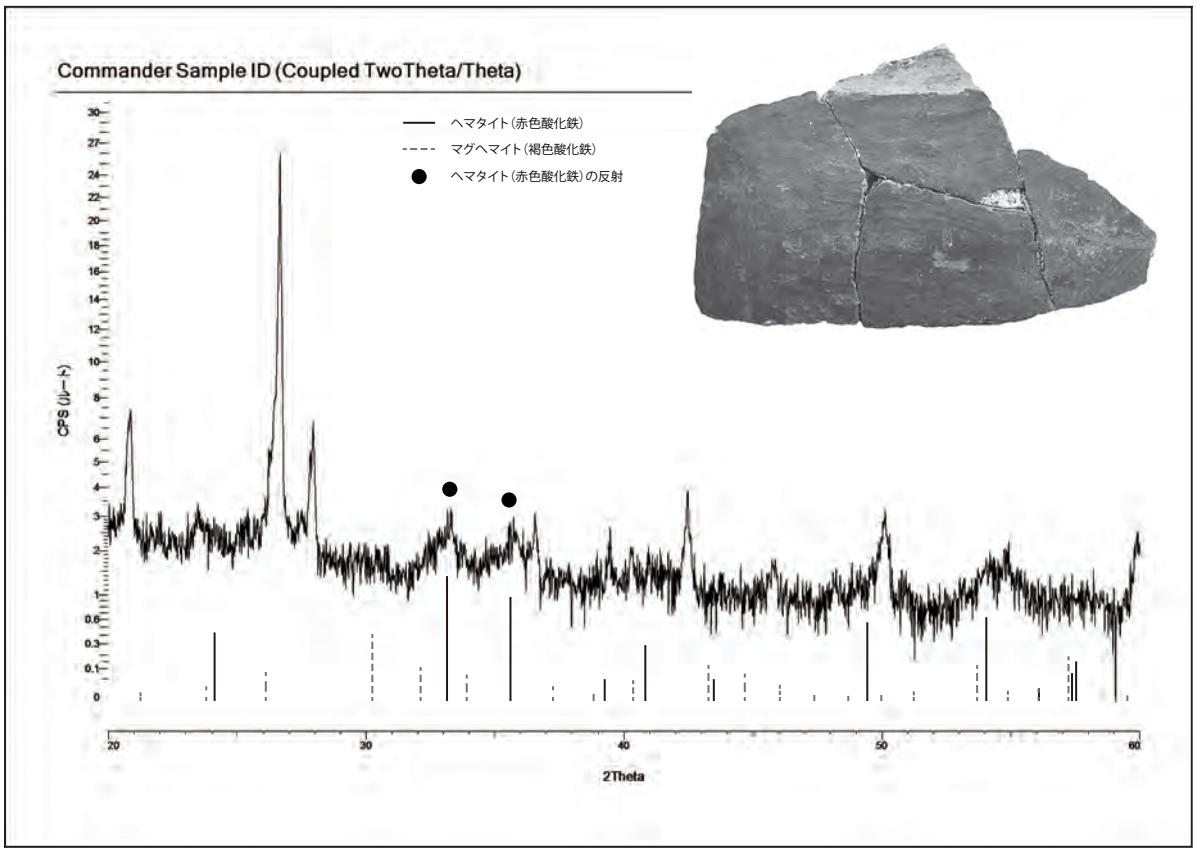
奥州市石田I･Ⅱ遺跡　No.641



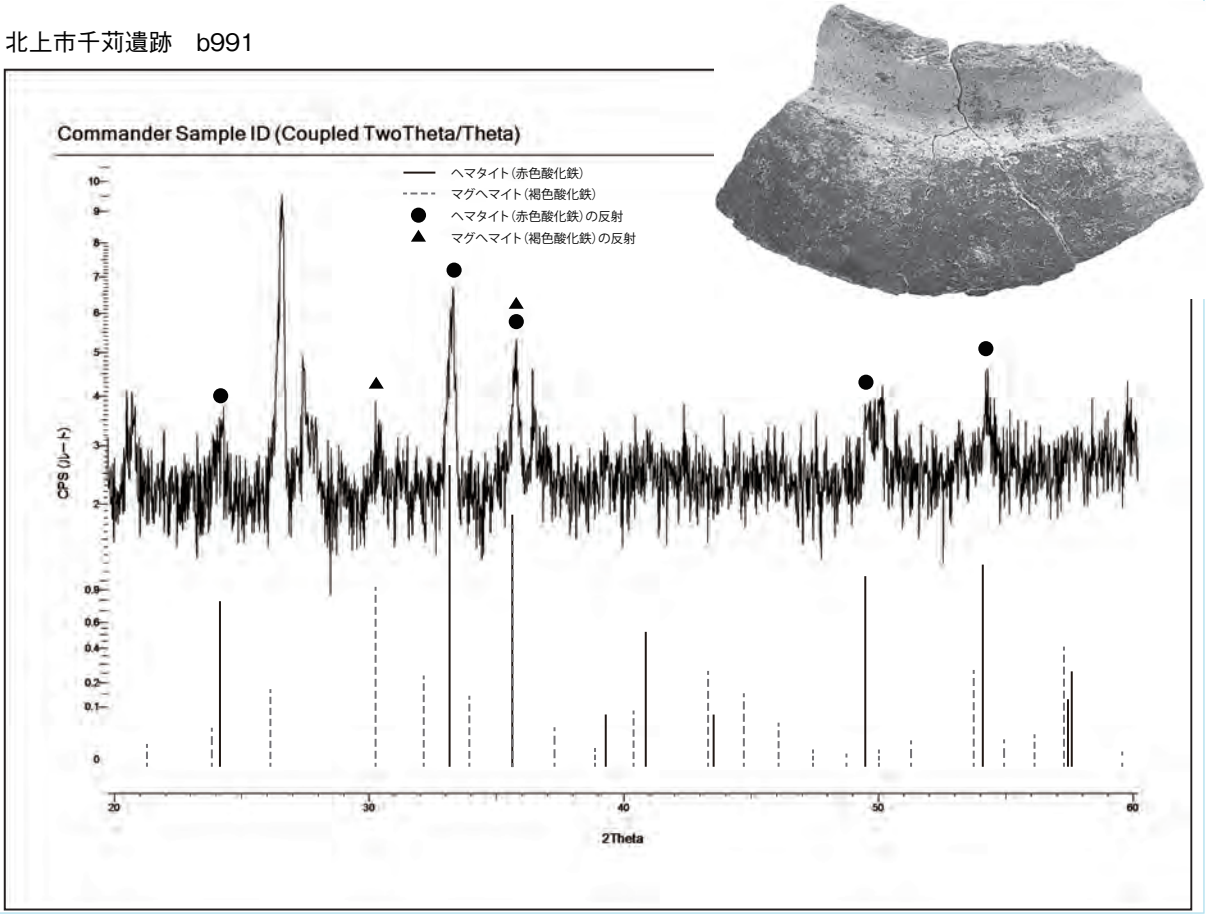
奥州市石田I･Ⅱ遺跡　No.191



花巻市古舘Ⅱ遺跡　図92-86



北上市千苅遺跡　b991



・８世紀後半以降の壺は、北上市域を中心とする和賀地域で圧倒的な物量を製作しており、北上市域の遺跡から赤彩壺が各地へ搬入された可能性について引き続き追求したい。
・県内出土資料の一部は、鉄系酸化物が赤色顔料始原材であると判明したが、産地や種別の特定には至っていない。製作実験を継続しつつ電子顕微鏡観察と成分分析を行う必要がある。また、赤彩壺の中には漆容器として使用方法が確認された資料があり、壺の内容物の分析も必要である。
・遺跡分布の把握において、県内資料を網羅的に扱ったつもりであるが、時間不足から相当量の未検索資料が存在すると考えられる。読者に依頼するかたちとなってしまうが、そうした資料の存在をご指摘いただければ幸いである。来年度以降に本論で分布論のみ取り扱った宮古市沼里遺跡、山田町沢田Ⅲ遺跡、山田町間木戸Ⅰ遺跡、北上市中村遺跡、秋田県東成瀬村トクラ遺跡などの報告書が刊行される予定であり、資料蓄積が一層進むであろう。それを待って再度検討を行いたい。

最後になりましたが、本稿執筆に際し、多くの方々と関係機関の御教示、御支援をいただきました。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。
瀬川晃児　高木 晃　阿部勝則　丸山直美　川又 晋　佐藤あゆみ　松政里奈　中島康祐　佐藤 剛
宇田川浩一　加藤朋夏　赤星純平　杉本 良　君島武史　高橋麻依子　平野 修　高橋千晶

註

⑴千苅遺跡では報告書掲載分だけでも 30 点あり、不掲載の破片資料も多数存在する。中村遺跡（報告書印刷中）も同様で、焼成遺構からも多量に赤彩土器片が出土している。高木　晃氏、丸山直美氏ご教示による。
⑵現地説明会における公表資料の観察成果である。
⑶この赤彩壺を報文で非赤彩の赤褐色土器として報告したが、今回の検討で顔料の塗布状況を確認できたので訂正する。
⑷本時期と考える赤彩坏が北海道札幌市 K39 遺跡から出土している。K39 遺跡資料を石田Ⅰ・Ⅱ遺跡報文総括において５世紀後半～６世紀の１号竪穴建物資料に類似すると捉えたが、K39 遺跡の同一層準出土の甕がむしろ 47 号竪穴建物の甕に類似すると考えるので訂正する。
⑸読者は一連の編年案を概観したとき岩手県沿岸部の米田・佐藤編年が古く遡っている印象を受けるだろう。米田・佐藤編年は須恵器年代にほぼ立脚せず、宮城県北部・沿岸部の佐藤編年との整合性を意図し、傾斜編年を避けたものである。本論で取り扱った７世紀以降の栗囲土器様式圏内には複数の小様式圏が形成されているが、同様式圏内で傾斜編年が成立するとすれば、その要因を求めなければならない。本稿ではこの問題を棚上げし、年代幅を広くすることで対応した。
⑹北上市域古代土器焼成遺構の調査成果（君島 2007 等）が蓄積されている。来年度報告書刊行の中村遺跡でも多数の焼成遺構が調査された。
⑺筆者は以前同様の検討を試みた（高橋静 2007）。その中で、赤彩土器の編年と赤彩文様の分類を試み、壺の赤彩文様は塗布だけのものから条線が施されるものへと移行する可能性を示唆した。また、赤色顔料の色調や質感、塗布後の器面調整は、地域によって特色がある可能性を指摘した。塗布後の器面調整は、器面に光沢のある資料が花巻市域で特徴的に見られた。これは、赤色顔料を器面にしっかりと密着させるため、赤色顔料塗布後にミガキ調整が施された可能性を考えた。
⑻土器の器面が摩耗している資料もあり、本来の色調と質感を留めていない資料もある。そのため、現状の観察であるが、相対的な色調や質感の違いを表すことは可能と考える。
⑼赤色顔料の色調観察は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修 2001）を用いて行った。
⑽ 2007 年の論考では、「ドベ（泥質分）と水分の割合」と記載したが、ドベ含有物は「泥質分」ではなく「粘土」の表現が相応しく、ドベが示す意味の中に水分も含まれるので、ドベの表記をやめて単純に「粘土と水分」に変更する。
⑾千苅遺跡報文においても、赤彩皿は弥生土器の可能性が指摘されていた。検討した結果、顔料色調と胎土が千苅遺跡の８世紀後半資料とは異質で、むしろ千苅遺跡弥生土器と類似すると判明したため、弥生土器と判断する。
⑿土器胎土を観察し評価する上での作業内容の詳細、および表６として提示した土器胎土観察表の記述内容については、 旧稿（河本 2011）を参照されたい。
⒀どのような特徴を有する砂粒をどの岩石・鉱物や混和材と認定したかについては、旧稿(河本2015)を参照されたい。また、今回は 2.5mm 以上の砂粒を一定量含む土器は認められなかったので、表４で示した基準で全ての土器を分類できた。

引用・参考文献

＜報告書＞　※岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを「岩文振埋」と略す。「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報

告書」は省略して集数を記載
秋田県教育委員会 1992『富ヶ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡　田久保下遺跡　富ヶ沢１号課～４号塚　第２分冊』秋田ふるさと村建設事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書
秋田県埋蔵文化財センター 2016『トクラ遺跡 現地見学会資料』
岩手県教育委員会 2009「釜石市麓山遺跡発掘調査報告書」『岩手県内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書第 128 集
岩文振埋 1986『古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第 103 集
岩文振埋 1988『石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第 130 集
岩文振埋 1989『夏本遺跡発掘調査報告書』第 134 集
岩文振埋 1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』第 287 集
岩文振埋 2006『中田遺跡発掘調査報告書』第 478 集
岩文振埋 2014『沢田遺跡発掘調査報告書』第 626 集
岩文振埋 2015『石田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第 632 集
岩文振埋 2015『間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書』第 640 集
岩文振埋 2015『津軽石大森遺跡発掘調査報告書』第 641 集
岩文振埋 2016『千苅遺跡発掘調査報告書』第 652 集
雄物川町郷土資料館 2004『耳取遺跡・釘貫遺跡』雄物川町文化財調査報告書第６集　雄物川町教育委員会
金ケ崎町教育委員会 2014『石田遺跡』岩手県金ケ崎町文化財調査報告書第 71 集
北上市教育委員会 2015『立花南遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 116 集
北上市教育委員会 2016『江釣子古墳群』北上市埋蔵文化財調査報告第 120 集
栗原市教育委員会 2008『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第７集
栗原市教育委員会 2014『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第 17 集
栗原市教育委員会 2015『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第 19 集
北海道埋蔵文化財センター 1989「第４分冊　Ⅶ - ２漆工品」『忍路土場遺跡・忍路５遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集
北海道大学埋蔵文化財調査室 2011『K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』
野田村教育委員会 1987『古舘山―昭和 45 年三日市場遺跡発掘調査報告書（遺物編）―』野田村文化財調査報告書
阿部正光・赤沢靖章・佐藤敏幸 1987「瀬峰町泉谷館跡・清水山Ⅰ遺跡発掘調査報告略報」『瀬峰町の文化財』第６集　宮城県瀬峰町教育委員会
＜論文・研究報告＞
宇部則保 2007「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　ix．青森県南部～岩手県北部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
宇部則保 2013「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』2　八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
河本純一 2011「泉南地域における縄文土器胎土の時期的変化」『大阪文化財研究』38 財団法人大阪府文化財センター
河本純一 2015「県内出土の縄文土器胎土について - 肉眼による胎土分類からの検討 -」『紀要』34（公財）岩文振埋
君島武史 2007「古代集落から検出される焼成遺構－立花南遺跡の再検討を元に－」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』４号
酒井宗孝 2004「稗貫・遠野地区」『岩手県土師器集成（４～８世紀)』集落遺跡検討会
佐藤敏幸 2007「第Ⅱ章　東北･北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　vi．宮城県北部･沿岸部」『古代東北･北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
集落遺跡検討会 2004『岩手県土師器集成（４～８世紀)』
杉本　良 1998「岩手県北上盆地における蝦夷（エミシ）集団の動態」『考古学研究』45 － 1　考古学研究会
杉本　良 2001「赤彩球胴甕再考（１)」『北上市立博物館研究報告』13 号　北上市立博物館
杉本　良 2002「赤彩球胴甕再考（２）- 分布とその傾向 (和賀川流域編)-」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』２　北上市立埋蔵文化財センター
高橋静歩 2007「東北地方北部の赤彩土師器から蝦夷集団の動向を探る」『岩手考古学』19　岩手考古学会
高橋千晶 2007「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係 vii . 岩手県南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
高橋千晶 2016「胆沢周辺の集落遺跡と墳墓」『アテルイと東北古代史』高志書院
辻　秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
辻　広美 2013『古代遺跡出土ベンガラの材料科学的研究』博士論文　岡山大学大学院自然科学研究科
平野　修 2013「東京都多摩市上っ原遺跡（多摩市№１遺跡）出土の東北系土師器について」『東京考古』31　東京考古談話会
八木光則 2007「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　viii . 岩手県中部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
米田　寛･佐藤　剛 2016「岩手県域の太平洋沿岸中部地域における６世紀から８世紀の土器様相について」『紀要』35 （公財）岩文振埋

表７　赤彩土器観察表

※器面調整の表現：ナデ→ナ,ヨコナデ→ヨコナ,ハケ→ハ,ミガキ→ミ,ケズリ→ケ,黒色処理→黒

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤彩特徴　(口唇部：唇　口縁部：口　頸部：頸　胴部：胴　底部：底)						胎土分類	極少量含有物	備考
							赤色顔料塗布		色調分類	質感	その他	黒斑・スス・コゲ			
				外面	内面		外面	内面							
石田Ⅰ・Ⅱ	1号竪穴	4	坏	ナ	ナ	5c後～6c初	(口～底)塗布	(口～底)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑小	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	10号竪穴	166	坏	ナ	ミ	5c～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布	イa	クⅡb	器面摩耗	内外面スス	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	11号竪穴	169	坏	ミ,ケ	ミ	5c～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け	外面黒斑中	A	堆積岩・凝灰岩	
石田Ⅰ・Ⅱ	11号竪穴	170	坏	ミ,ヨコナ	ミ	5c～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け	外面黒斑小	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	11号竪穴	172	坏	ミ,ヨコナ	ミ,ヨコナ	5c～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑小	AG		
石田Ⅰ・Ⅱ	11号竪穴	173	坏	ミ,ケ,ヨコナ	ミ,ヨコナ	5c～6c	(口～胴)塗布	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	イa	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑中	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	11号竪穴	174	坏	ミ,ヨコナ	ミ,ヨコナ	5c～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	イa	クⅡb	器面摩耗		A		
石田Ⅰ・Ⅱ	11号竪穴	176	甕	ヨコナ	ヨコナ,ナ	5c～6c	(頸～胴)塗布	(口～胴)塗布	ウ	クⅡb	器面摩耗		AE		
石田Ⅰ・Ⅱ	12号竪穴	179	坏	ケ,ミ,ヨコナ		6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	イa	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け	内外面スス黒色処理？	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	13号竪穴	190	高坏	ナ	ミ,黒	7c後～8c	(坏部～脚部)塗布	無	ア	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け	外面黒斑小	H		
石田Ⅰ・Ⅱ	13号竪穴	191	坏	ミ	ミ	7c後～8c	(口～底)塗布	(口～底)塗布	イa	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け	外面黒斑大	A		内外面に光沢有
石田Ⅰ・Ⅱ	16号竪穴	244	壺	ミ,ナ	ナ	7c後～8c	(頸～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		A		
石田Ⅰ・Ⅱ	17号竪穴	274	坏	ヨコナ	ヨコナ	8c前	(口～底)塗布	(口～底)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		H	黒色光沢粒	
石田Ⅰ・Ⅱ	17号竪穴	275	坏	ナ,ヨコナ	ミ	8c前	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	イa	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑小	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	17号竪穴	277	坏	ナ,ヨコナ	ナ,ヨコナ	8c前	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	外面スス	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	17号竪穴	278	鉢？	ナ	ナ	8c前	無	(胴～底)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		A		
石田Ⅰ・Ⅱ	18号竪穴	296	高坏	ヨコナ	ヨコナ,ケ	7c後～8c前	(脚部)塗布	無	ア	クⅡb	器面摩耗	内面スス	H	黒色光沢粒	外面光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	21号竪穴	327	坏	ミ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け		A	海綿骨針	内外面に光沢有
石田Ⅰ・Ⅱ	21号竪穴	328	坏	ミ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け	外面スス	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	21号竪穴	330	坏	ヨコナ,ナ,ケ	ヨコナ,ミ	5c後～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布、塗布後ミガキ	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑小	A		内面光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	21号竪穴	334	坏	ミ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		A		内外面に光沢有
石田Ⅰ・Ⅱ	24号竪穴	358	坏	ミ,ヨコナ	ミ,ヨコナ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		A	海綿骨針	外面に光沢少し

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤彩特徴　(口唇部：唇　口縁部：口　頸部：頸　胴部：胴　底部：底)		胎土分類				極少量含有物	備考
							赤色顔料塗布		色調分類	質感	その他	黒斑・スス・コゲ		
				外面	内面		外面	内面						
石田Ⅰ・Ⅱ	26号竪穴	425	坏	ヨコナ,ハ,ナ	ミ	5c後～6c	(胴)塗布	(胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		A		内外面に光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	32号竪穴	486	坏	ヨコナ,ミ,ケ	ヨコナ,ミ,ケ	5c後～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑大、内外面スス	A	堆積岩	
石田Ⅰ・Ⅱ	32号竪穴	488	坏	ナ,ヨコナ	ナ,ヨコナ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		A		外面に光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	32号竪穴	489	坏	ヨコナ,ケ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑大	A	堆積岩?	内外面に少し光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	32号竪穴	491	壺	ヨコナ	ヨコナ	5c後～6c	(昏～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	内面に小	A	海綿骨針?	
石田Ⅰ・Ⅱ	32号竪穴	493	壺	ミ	ミ	5c後～6c	(胴～底)塗布	(胴～底)塗布、塗布後ミガキ	ア	クⅡb	器面摩耗	無し	A		内外面に光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	34号竪穴	516	坏	ヨコナ,ミ	ミ	5c後～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑中	A		内外面に光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	34号竪穴	517	坏	ヨコナ,ミ	ヨコナ,ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け	外面黒斑中	D?	黒色光沢粒	内外面に光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	34号竪穴	518	坏	ヨコナ,ケ	ヨコナ,ミ	5c後～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡb	器面摩耗	内面黒斑中	AC		
石田Ⅰ・Ⅱ	34号竪穴	522	坏	ヨコナ,ミ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	外面スス	A	海綿骨針	内外面に光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	34号竪穴	523	坏	ヨコナ,ナ	ヨコナ,ミ	5c後～6c	焼成時に顔料消失？	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け	外面スス	A	堆積岩	
石田Ⅰ・Ⅱ	34号竪穴	524	坏	ナ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗、強く塗付け		H	黒色光沢粒	内外面に光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	34号竪穴	528	坏	ミ,ナ	ミ	5c後～6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡb		外面黒斑中	A		剥落が537と類似 内外面に光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	34号竪穴	537	壺	ヨコナ,ナ	ナ	5c後～6c	(昏～底)塗布	(口～底)塗布	ア	クⅡb	強く塗付け	外面黒斑大	H	黒色光沢粒	外面に光沢 剥落が528に類似
石田Ⅰ・Ⅱ	35号竪穴	554	坏	ミ,ナ	ナ	7c後～8c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		A		
石田Ⅰ・Ⅱ	40号竪穴	577	坏	ミ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布、塗布後ミガキ	(口～胴)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡb			A		内外面に光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	46号竪穴	601	坏	ナ	ナ	7c	(口～胴)塗布、塗布後ミガキ	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗		A		
石田Ⅰ・Ⅱ	47号竪穴	625	坏	ミ	ミ	6c	(口～胴)塗布、塗布後ミガキ	(口～胴)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑大	A	雲母?	
石田Ⅰ・Ⅱ	47号竪穴	626	坏	ヨコナ,ミ	ミ	6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	内外面黒斑ススス	AG		
石田Ⅰ・Ⅱ	47号竪穴	632	坏	ミ	ミ	6c	(口～底)塗布	(口～底)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	内外面黒斑ススス	AG	雲母	外面に光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	47号竪穴	633	坏	ミ	ミ	6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑ススス	A	海綿骨針	
石田Ⅰ・Ⅱ	47号竪穴	635	坏	ミ,黒	ミ,黒	6c	(口～底)塗布、塗布後ミガキ	(口～底)塗布、塗布後ミガキ	ア	クⅡb		外面黒斑大	A		内外面に光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	47号竪穴	639	壺	ヨコナ	ヨコナ	6c	(昏～頸)塗布	(口～頸)塗布	ア	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑小	A		

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤彩特徴　(口唇部：唇　口縁部：口　頸部：頸　胴部：胴　底部：底)		胎土分類	極少量含有物	備考
							赤色顔料塗布		色調分類	質感	その他	黒斑・スス・コゲ			
				外面	内面		外面	内面							
石田Ⅰ・Ⅱ	47号竪穴	641	壺	ヨコナ	ヨコナ	6c	(唇～頸)塗布	(口～頸)塗布	イａ	クⅡｂ	器面摩耗	外面黒斑小	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	12号溝	668	坏	ヨコナ,ナ	ミ	5c～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗、強く塗付け		A		内面光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	12号溝	669	壺	ヨコナ	ヨコナ	5c～6c	(口～頸)塗布	無	ア	クⅡｂ	器面摩耗		A		
石田Ⅰ・Ⅱ	59号竪穴	685	坏	ヨコナ,ナ	ミ,黒	5c後～6c	(口～胴)塗布	無	ア	クⅡｂ	器面摩耗	外面黒斑中	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	59号竪穴	687	坏	ヨコナ	摩耗	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗、強く塗付け		A		
石田Ⅰ・Ⅱ	61号竪穴	717	坏	ミ,ケ	ミ	7c後～8c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗、強く塗付け	外面に小	A	海綿骨針	
石田Ⅰ・Ⅱ	63号竪穴	722	坏	ナ,ミ,黒？	ミ	6c	焼成時に顔料消失？	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗		A	腐り礫	
石田Ⅰ・Ⅱ	63号竪穴	723	坏	ナ	ミ	6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布、塗布後ミガキ	ア	クⅡｂ	器面摩耗	外面に中	A		内面に光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	63号竪穴	724	坏	ナ,ヨコナ	ミ	6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布、塗布後ミガキ	ア	クⅡｂ	器面摩耗	外面に中	A	安山岩?	
石田Ⅰ・Ⅱ	68号竪穴	766	坏	ヨコナ,ミ	ヨコナ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗		A	凝灰岩?	
石田Ⅰ・Ⅱ	69号竪穴	768	坏	ミ,ケ	ミ	5c後～6c	(口～底)塗布、塗布後ミガキ	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡｂ		底部黒斑小	A	海綿骨針	内外面に光沢 黒色付着物
石田Ⅰ・Ⅱ	69号竪穴	772	坏	ミ	ミ	5c後～6c	(口～底)塗布、塗布後ミガキ	(口～底)塗布、塗布後放射状ミガキ	ア	クⅡｂ	器面摩耗	外面スス	A	海綿骨針	内外面に光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	69号竪穴	773	坏	ヨコナ,ミ,ケ	ヨコナ,ナ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗		A		外面に光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	73・74号竪穴	814	坏	ミ	ミ	6c？	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗、強く塗付け		A		
石田Ⅰ・Ⅱ	75号竪穴	817	坏	ミ	ミ	7c後～8c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗		A	凝灰岩?	
石田Ⅰ・Ⅱ	75号竪穴	818	坏	ミ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗	外面黒斑小	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	75号竪穴	819	坏	ミ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布、塗布後ミガキ	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗		A	海綿骨針	外面に光沢
石田Ⅰ・Ⅱ	76～78号竪穴	823	坏	摩耗	摩耗	7c後	焼成時に顔料消失？	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗	外面黒斑小	A		
石田Ⅰ・Ⅱ	遺構外	836	坏	ナ,ミ	ミ	7c後～8c	焼成時に顔料消失？	(口～底)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗	内外面黒斑小	AF	海綿骨針	
石田Ⅰ・Ⅱ	遺構外	837	坏	ミ	ミ	5c後～6c	(口～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ	器面摩耗	外面黒斑大	A	海綿骨針	内外面に光沢少し
石田Ⅰ・Ⅱ	遺構外	850	壺	ナ	ナ,ミ	7c後～8c	(唇～胴)塗布	(口～胴)塗布	ア	クⅡｂ		内外面スス	A		
金ケ崎石田	SI02	4	坏	ミ,ケ	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布、塗布後ミガキ	無	ア	クⅡｂ			A		
金ケ崎石田	SI02	5	坏	ミ,ヨコナ	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	ア	クⅡｂ			A		

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤彩特徴　(口唇部：唇　口縁部：口　頸部：頸　胴部：胴　底部：底)						胎土分類	極少量含有物	備考
							赤色顔料塗布		色調分類	質感	その他	黒斑・スス・コゲ			
				外面	内面		外面	内面							
金ケ崎石田	SI02	6	坏	ミ,黒	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	ア	クⅡb			A		外面ミガキ→赤彩→黒色処理
金ケ崎石田	SI02	11	壺	ミ	ハ	7c後～8c前	(胴～底)塗布、塗布後ミガキ	無	ア	クⅡb			A		
金ケ崎石田	SI02	12	壺	ヨコナ,ナ	ハ	7c後～8c前	(口～頸)塗布	(口～頸)顔料付着	ア	クⅡb	器面摩耗		A		13と同一個体？
金ケ崎石田	SI02	13	壺	ハ,ミ	ハ	7c後～8c前	(口～頸)塗布	無	ア	クⅡb			A		12と同一個体？
金ケ崎石田	SI04	26	壺	ハ	ハ	7c後～8c前	(頸～胴)塗布	無	ア	クⅡb		外面黒斑小	A		
金ケ崎石田	SI15	45	脚付鉢	ミ,口縁上部黒	ミ,黒	7c前	(胴)太横位条線	無	ア	クⅡb			A		支脚4本
熊堂	ＳＩ01	1	坏	ハ→ミ	ハ→縦ミ	7c後～８c前	(口～底)塗布	無	イa	クⅡb		外面黒斑小	E	堆積岩?	
熊堂	B区溝	10図-1	壺	ミ	ハ,ヨコナ	7c後～８c前	(頸)塗布 (口～頸)太縦位条線 (胴)塗布 (底)顔料付着	無	イa	カⅡb		胴部黒斑小	E	堆積岩?	
法領		13図-1	坏	ハ→ミ	ミ,黒	8c後	(口～底)塗布	無	イb	クⅡb		外面黒斑小	E	堆積岩?	
古館Ⅱ	A07住	83-3	壺	ミ	ヨコナ	8c	(口～頸)塗布、塗布後ミガキ	(口～頸)顔料付着	イb	クⅠb			H	凝灰岩・不明有色粒	
古館Ⅱ	A07住	83-6	坏	ミ	ミ,黒	8c？	(口～胴)塗布	無	イa	クⅠb			AF		
古館Ⅱ	C05住	86-30	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	イb	クⅡb			AF		
古館Ⅱ	C05住	86-35	壺	ナ,ミ	ナ	7c後～8c前							E	不明有色粒	非赤彩土器 胎土観察用
古館Ⅱ	C05住	86-37	壺	ミ,ナ	ナ,ハ	7c後～8c前	(胴)塗布	無	ア	カⅡa		外面黒斑中	AE		
古館Ⅱ	C05住	87-39	壺(	ナ,ミ	ナ,ハ	7c後～8c前	(頸～胴)塗布 塗布後ミガキ	無	イb	ケⅡb			AE	不明有色粒	
古館Ⅱ	C05住	88-57	壺	ミ	ナ,ミ	7c後～8c前	(頸～胴)塗布、塗布後ミガキ	(頸)塗布、塗布後ミガキ	ア	カⅡb			AE		
古館Ⅱ	C05住	88-60	壺	ヨコナ,ミ	ミ	7c後～8c前	(唇～頸)塗布、塗布後ミガキ	(唇～頸)塗布、塗布後ミガキ	ア	カⅡb			A	腐り礫	
古館Ⅱ	C21住	90-76	坏	ミ	タテミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布、塗布後ミガキ	無	ア	カⅡb			F		
古館Ⅱ	C21住	91-82	壺	ミ,ヨコナ	ナ,ヨコナ,ハ	7c後～8c前	(唇)塗布 (口～頸)太縦位条線 (胴)塗布、塗布後ミガキ	(口～頸)顔料付着	ア	キⅡa			EF		
古館Ⅱ	C21住	91-84	壺	タテミ	ナ,ミ	7c後～8c前	(唇～胴)塗布、塗布後ミガキ	(口～頸)塗布、塗布後ミガキ	イa	クⅡb		外面黒斑大	F		
古館Ⅱ	C21住	92-86	壺	ミ	ナ	7c後～8c前	(胴)塗布、塗布後ミガキ	無	ア	カⅡa			AEF		
古館Ⅱ	C21住	92-87	壺												非赤彩土器
古館Ⅱ	D16住	94-101	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	ア	カⅡb		外面黒斑小	AF		

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤彩特徴　(口唇部：唇　口縁部：口　頸部：頸　胴部：胴　底部：底)						胎土分類	極少量含有物	備考
							赤色顔料塗布		色調分類	質感	その他	黒斑・スス・コゲ			
				外面	内面		外面	内面							
古館Ⅱ	D16住	94-106	壺	ミ	ナ	7c後～8c前	(頸)2本組太縦位条線 (胴)塗布、塗布後ミガキ	無	イa	カⅡa			AE		
古館Ⅱ	D16住	94-107	壺	ナ,ハ, ヨコナ,ミ	ナ,ヨコナ	7c後～8c前	(口～胴)塗布	(口～頸)塗布	ア	キⅡb	器面摩耗		AEF		
古館Ⅱ	D16住	95-108	壺	ハ	ナ	7c後～8c前	(胴)塗布	無	ア	カⅡb	器面摩耗		EF		
古館Ⅱ	D16-2住	96-120	高坏	ハ,ナ	ミ,黒	7c後～8c前	(坏部～脚部)塗布	無	イa	キⅡb	器面摩耗		EF		
古館Ⅱ	D16-2住	98-131	壺												非赤彩土器 胎土観察用
古館Ⅱ	D16-2住	99-137	壺	ナ	ナ	7c後～8c前	(胴)塗布	無	イb	カⅡb	器面摩耗		E		
古館Ⅱ	D16-2住	99-140	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	イb	キⅡb			A		
古館Ⅱ	D17-1住	100-148	坏	ミ	ミ,黒	8c	(口～胴)塗布	無	イb	カⅡa	器面摩耗		AF		
古館Ⅱ	D17-1住	100-154	坏	ケ→ナ	ミ,黒	8c	(口～胴)塗布	無	イb	ケⅡb	器面摩耗		A		
古館Ⅱ	D17-2住	102-162	壺	ハ,ミ	ナ,ハ	7c	(胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イb	ケⅡb			DF		
古館Ⅱ	D17-2住	102-163	壺	ミ	ナ	7c？	(胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イa	キⅡb			AF		
古館Ⅱ	D17-3住	103-172	壺	ミ	ナ	7c～8c	(胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イa	カⅡb	器面摩耗	外面スス	H		
古館Ⅱ	D17-4住	104-183	壺	ミ,ヨコナ	ナ	8c前	(頸)太縦位条線 (胴)塗布、塗布後ミガキ	(頸)顔料付着	ア	カⅡa			H		
古館Ⅱ	D22住	105-195	壺	ミ,ナ	ナ,ハ,ミ	7c後～8c前	(昏～胴)塗布、 塗布後ミガキ	(口～頸)塗布、 塗布後ミガキ	ア	カⅡa			F		内面黒色付着物、 カマド付近出土
古館Ⅱ	E07住	106-197	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	イa	クⅡb			A		
古館Ⅱ	E07住	106-198	高坏	ヨコナ	ミ,黒	7c後～8c前	(脚部)塗布	無	イa	クⅡb			A		
古館Ⅱ	E07住	107-208	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(胴)塗布	無	イb	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑小	A		
古館Ⅱ	E07住	107-209	坏												非赤彩土器 胎土観察用
古館Ⅱ	E07住	107-210	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(胴)塗布	無	イb	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑小	AE		
古館Ⅱ	E07住	107-211	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(胴)塗布	無	イa	クⅡb	器面摩耗		A		
古館Ⅱ	E07住	107-213	壺	ヨコナ	ヨコナ	7c後～8c前	(頸)塗布	無	ア	カⅡb	器面摩耗		F		
古館Ⅱ	E16-1住	110-227	壺	ハ,ミ, ヨコナ	ハ,ナ, ヨコナ	7c後～8c前	(昏)塗布 (口～頸)点文様、 4本組細縦位条線 (胴)塗布、塗布後ミガキ	(口～頸)点文様、 4本組細縦位条線	イb	クⅡb	器面摩耗	内面黒斑小	E		
古館Ⅱ	E16-1住	110-229	壺	ミ,ヨコナ	ナ,ハ	7c後～8c前	(頸)太縦位条線 (胴)塗布、塗布後ミガキ	(胴)顔料付着	イa	カⅡa			H		

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤彩特徴　(口唇部：唇　口縁部：口　頸部：頸　胴部：胴　底部：底)						胎土分類	極少量含有物	備考
							赤色顔料塗布		色調分類	質感	その他	黒斑・スス・コゲ			
				外面	内面		外面	内面							
古館Ⅱ	E16-1住	110-230	壺	ナ→ミ	ナ	7c後～8c前	(胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イａ	カⅡａ	器面摩耗	外面黒斑小	AF		229と同一個体？
古館Ⅱ	E16-1住	111-236	甕												非赤彩土器 胎土観察用
古館Ⅱ	E18住	114-253	坏												非赤彩土器
古館Ⅱ	E18住	114-256	坏	ハ→ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	ウ	クⅡｂ	器面摩耗	外面黒斑小	F	堆積岩・腐り礫	
古館Ⅱ	E18住	115-262	壺	ハ→ミ, ヨコナ	ナ	7c後～8c前	(頸)太縦位条線 (胴)塗布、塗布後ミガキ	(胴)顔料付着	イｂ	カⅡａ			AE	凝灰岩・酸化粒	
古館Ⅱ	E18住	115-264	壺	ナ	ナ	8c	(胴)塗布	無	イａ	キⅡａ	器面摩耗		AF	腐り礫・酸化粒	
古館Ⅱ	E18住	115-268	壺	ミ	ナ	8c	(胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イａ	カⅡａ		内外面黒斑小	A		
古館Ⅱ	E18住	116-272	坏	ミ	ミ,黒	8c	(胴)塗布	無	ウ	クⅡｂ			A		
古館Ⅱ	E18住	116-273	坏										AEF	土器片?	非赤彩土器
古館Ⅱ	E18住	116-274	壺	ミ	ナ	8c	(頸)2本組太縦位条線 (胴)塗布、塗布後ミガキ	無	イａ	カⅡａ			AF		
古館Ⅱ	E18住	116-275	坏	ミ	ミ,黒	8c	(胴)塗布	無	イｂ	クⅡｂ			H	不明有色粒	
古館Ⅱ	E18住	116-277	坏	ハ→ミ	ミ,黒	8c	(胴)塗布	無	イａ	カⅡａ	器面摩耗		A		
古館Ⅱ	E18住	116-278	壺	ナ→ミ	ナ	8c	(胴)塗布	無	イａ	カⅡａ	器面摩耗、 赤彩筆跡？	内面黒斑中	F		
古館Ⅱ	F15-1住	118-292	壺	ミ	ナ	7c後～8c前	(胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イａ	カⅡａ			F		二次被熱
古館Ⅱ	F17住	126-378	壺	ミ	ナ	8c後～9c	(胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イａ	カⅡａ			E		
古館Ⅱ	F17住	126-384	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c後～9c	(口～頸)太縦位条線	(口～頸)顔料付着	イａ	カⅡａ			A		
古館Ⅱ	D23	129-410	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	イａ	カⅡａ	器面摩耗		A		
古館Ⅱ	表彩	130-425	坏	ミ	ミ	7c後～8c前	(口～胴)塗布	無	ウ	クⅡｂ	器面摩耗		EF		
古館Ⅱ	D23	130-426	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(胴～底)塗布、 塗布後ミガキ	無	イｂ	カⅡａ		外面黒斑小	A		
古館Ⅱ	F18	130-428	坏	ミ	ミ,黒	7c～8c	(口～胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イａ	カⅡａ			A		
古館Ⅱ	F18	130-429	坏	ミ	ミ,黒	7c後～8c前	(胴～底)塗布	無	イｂ	クⅡｂ			A		
古館Ⅱ	F18	137-494	壺	ヨコナ	ヨコナ	7c後～8c前	(唇)塗布 (口～頸)太縦位条線	(口～頸)顔料付着	イａ	キⅡａ			AF		
古館Ⅱ	F17	137-495	壺	ミ	ケ,ナ	7c後～9c前	(唇～胴)塗布、 塗布後ミガキ	(口)塗布	イａ	キⅡａ		外面スス	H		

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤彩特徴　(口唇部：唇　口縁部：口　頸部：頸　胴部：胴　底部：底)						胎土分類	極少量含有物	備考
							赤色顔料塗布		色調分類	質感	その他	黒斑・スス・コゲ			
				外面	内面		外面	内面							
古館Ⅱ	E17	137-496	壺										AEF		非赤彩土器？
古館Ⅱ	F17	137-497	壺	ハ	ハ,ナ	7c～8c	(胴)塗布	無	イb	カⅡa	器面摩耗	内面黒斑大	F		
古館Ⅱ	E19	137-498	壺	ミ	ナ	7c～8c	(胴)塗布、 塗布後ミガキ	無	イa	カⅡa			F		
古館Ⅱ	E17	137-499	壺	ミ,ヨコナ	ナ,ハ	7c～8c	(頸)太縦位条線 (胴)塗布、塗布後ミガキ	無	イa	カⅡa			ACE		
古館Ⅱ	A07	137-500	壺	ヨコナ,ミ	ミ	7c～8c	(唇～頸)塗布、 塗布後ミガキ	(唇～頸)塗布、 塗布後ミガキ	イa	クⅡb		内外面黒斑ス	E		焼土遺構出土
間木戸Ⅴ	地点3	VP039	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c後～９c	(口～頸)3～4本組細縦位条線	(口～頸)3～5本組の細縦位条線	イa	クⅡb			A		
津軽石大森	26号竪穴	238	壺	ハ,ヨコナ	ヘラナ, ハ,ヨコナ	7c後～８c 前	(唇)塗布　(口～頸)太縦位・横位条線　(胴)塗布	(唇)塗布 (口～頸)太縦位	イa	クⅡb		外面黒斑少、ス ス	H	黒色光沢粒	
千苅	SI09	b133	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c後～9c	(頸)細縦位条線	(頸)細縦位条線	イa	クⅡb			A		
千苅	SI09	b134	壺	ハ	ハ,ナ	8c後～9c	(頸)細縦位条線 (胴)塗布	(頸～胴)顔料付着	イa	クⅡa	強く塗付け		A	流紋岩	b133と同一個体？
千苅	SI10	b163	壺	ナ	ナ	8c後～9c	(胴)塗布	無	イb	クⅡa	強く塗付け	内面黒斑小	A	雲母・チャート・安山岩・凝灰岩	
千苅	SI10	b164	壺	ハ→ナ	ナ	8c後～9c	(胴)塗布	無	ア	キⅡb			A	雲母・チャート・酸化粒	
千苅	SI13	b195	壺	ミ	ナ,ハ	8c後～9c	(胴)塗布	無	イa	キⅡb	塗布後ミガキ	外面黒斑大	A		
千苅	SI24	b313	壺	ハ→ヨコナ	ハ→ヨコナ	8c後～9c	(唇)塗布 (口～頸)5本組細縦位条線	(口～頸)5本組の細縦位条線	イb	クⅠa	顔料砂粒混		AE		顔料に砂粒混入
千苅	SI27	b330	壺	ハ→ヨコナ	ハ	8c後～9c	(唇)塗布 (口～頸)5本組細縦位条線	(口～頸)5本組の細縦位条線	イb	クⅠa	顔料砂粒混		ADF	堆積岩・結晶片岩	顔料に砂粒混入
千苅	SI27	b331	壺	胴部ミ, 口縁ヨコナ	ナ	8c後～9c	(頸)細縦位条線 (胴)塗布	(頸)細縦位条線	(口)イb (胴)ウ	クⅠa	顔料砂粒混		ADF	堆積岩	顔料に砂粒混入
千苅	SI31	b397	壺	ハ→ヨコナ	ハ→ヨコナ	8c後～9c	(唇)塗布　(口)5本組細縦位条線　(胴)塗布	(口)細縦位条線	イa	クⅡb		内外面スス	AD		被熱痕あり
千苅	SI33	b426	甕or鉢	ナ,ミ,ヨコナ	ナ	8c後～9c	(唇～口)顔料付着 (胴)塗布	無	イa	クⅡa		内面黒斑小	A	凝灰岩・腐り礫・海綿骨針	
千苅	SI39	b473	皿？	ナ		弥生	全面塗布	全面塗布	イa	クⅡb			AB	堆積岩・結晶片岩・凝灰岩・海綿骨針	弥生土器と判断
千苅	SI39	b496	壺	ハ,ヨコナ	ハ,ヨコナ	8c後～9c	(口～頸)細縦位条線	(口)横位条線？ (頸)顔料付着	ウ	クⅡb	器面摩耗		AC	酸化粒	
千苅	SI40	b523	壺	ハ,ヨコナ	ナ,ヨコナ	8c後～9c	(胴)塗布	無	ウ	クⅡb	器面摩耗		A	堆積岩?	
千苅	SI59	b701	壺	ハ,ナ,ミ	ナ,ハ	8c後～9c	(唇)塗布　(口～頸)5本組細縦位条線　(胴)塗布	無	イb	カⅡa	塗布後ミガキ	内外面黒斑中	AC		
千苅	SI59	b702	壺	ハ,ナ, ミ,ヨコナ	ナ,ハ	8c後～9c	(口～頸)4本組細縦位条線 (胴)塗布	(口～頸)4本組の細縦位条線	イb	クⅠa	器面摩耗		A	雲母・堆積岩・流紋岩・酸化粒	顔料に砂粒混入
千苅	SI68	b795	壺	ナ,ミ, ハ→ヨコナ	ナ,ヨコナ	8c後～9c	(胴)塗布	(口)顔料付着	イb	キⅡa	強く塗付け		ACD		

遺跡名	遺構	掲載番号	器種	器面調整		時期	赤彩特徴　(口唇部：唇　口縁部：口　頸部：頸　胴部：胴　底部：底)						胎土分類	極少量含有物	備考
							赤色顔料塗布		色調分類	質感	その他	黒斑・スス・コゲ			
				外面	内面		外面	内面							
千苅	SI76	b860	壺	ハ→ミ	ナ	8c後～9c	(胴)塗布	無	イb	クⅡb	塗布後ミガキ？	外面ススa	CD		内面還元色 被熱痕あり
千苅	SI76	b861	壺	ハ→ヨコナ	ハ→ヨコナ	8c後～9c	(唇)塗布 (口～頸)4本組細縦位条線	(口～頸)4本組の 細縦位条線	イa	クⅠa			D		b860と同一個体
千苅	SI80	b906	壺			8c後～9c	(口～頸)細縦位条線？ (胴)塗布	無	イb	キⅡa					
千苅	SI87	b959	壺	ハ,ナ, ヨコナ	ナ	8c後～9c	(胴)塗布	無	イb	キⅡb	器面摩耗		AC		
千苅	SI89	b974	壺	ミ,ヨコナ	ナ,ヨコナ	8c後～9c	(口～頸)細縦位条線 (胴)塗布　(底)顔料付着	無	イb	クⅡb	器面摩耗	外面黒斑大	AD		
千苅	SI89	b975	壺	ハ	ハ	8c後～9c	(胴)塗布 (底)顔料付着	無	ウ	クⅡb	器面摩耗	内面ススa	AC		
千苅	SI91	b991	壺	ナ,ハ, ヨコナ	ハ,ヨコナ	8c後～9c	(口～頸)4本組 細縦位条線　(胴)塗布	無	イa	キⅡa	器面摩耗	内面ススa	A		カマド煙出部出土
千苅	SK127	b1062	壺	ナ	ナ	8c後～9c	(胴)塗布 (底)顔料付着	無	イa	キⅡb			ACD		
千苅	SK128	b1063	壺	ハ→ヨコナ	ナ,ハ	8c後～9c	(唇)塗布　(口～頸)4本組 細縦位条線　(胴)塗布	(口)顔料付着	ウ	キⅠa	器面摩耗		AC		
千苅	SX28	b1104	壺	ミ,ヨコナ	ナ,ヨコナ	8c後～9c	(頸)細縦位条線 (胴)塗布	(頸)細縦位条線	ウ	キⅡa	塗布後ミガキ		AB		焼成遺構出土
千苅	SX72	b1149	壺	ミ,ヨコナ	ナ,ヨコナ	8c後～9c	(唇)塗布　(口～頸)塗 布(条線？)(胴)塗布	(口～胴)顔料付着	ウ	カⅡa	塗布後ミガキ	内面黒斑小　外面ススa	AC	安山岩・凝灰岩・酸化粒	焼成遺構出土
千苅	SX72	b1150	壺	ヨコナ	ヨコナ	8c後～9c	(唇)塗布 (口)顔料付着	(口～頸)細縦位条線	イa	クⅠa	顔料砂粒混		A	堆積岩・安山岩・酸化粒	焼成遺構出土
千苅	SX72	b1151	壺	ミ,ヨコナ	ナ,ヨコナ	8c後～9c	(胴)塗布	(口～頸)細縦位条線 (胴)顔料付着	ウ	キⅡa	塗布後ミガキ		AD	堆積岩・酸化粒	焼成遺構出土
千苅	SX72	b1152	壺	ミ	ハ,ナ	8c後～9c	(胴)塗布	無	イb	キⅡb	塗布後ミガキ		ADF	堆積岩・不明有色粒	焼成遺構出土
千苅	SX132	b1225	壺	ハ,ミ,ヨコナ	ハ,ヨコナ	8c後～9c	(唇)塗布　(口～頸)4本組 細縦位条線　(胴)塗布	(口～頸)4本組の 細縦位条線	イa	クⅡb		内面ススa	AD		焼成遺構出土
千苅	遺構外	b1290	壺	ハ	ナ	8c後～9c	(胴)塗布 (底)顔料付着	無	イb	クⅡb	器面摩耗		AD		

東北地方北部出土の施釉陶磁器

－城柵遺跡における性格の検討－

村　田　　淳

本稿は、日本考古学協会弘前大会で報告した東北地方北部の施釉陶磁器の集成結果を基に出土量が豊富な城柵遺跡における施釉陶磁器の性格について検討を加えるものである。城柵５遺跡を分析した結果、陸奥側の胆沢城跡では主に饗給儀礼用として、出羽側の秋田城跡・払田柵跡では生産に関わるものとして使用されたものであると考えることができた。

はじめに

筆者は2016年度の日本考古学協会弘前大会において、東北地方北部３県（岩手県･青森県･秋田県）の施釉陶磁器出土遺跡の集成を行った（村田2016）。今後はその集成結果を基に遺跡の種別毎に出土陶磁器の意味について明らかにしていきたいと考えているが、まず本稿ではこの地域に所在する５つの城柵遺跡を対象として検討を行う。今回対象を城柵遺跡に絞った理由としては、当地方で施釉陶磁器の出土が確認された遺跡の種別には城柵・集落・寺院・祭祀跡・城館があるが、城柵遺跡はこのなかでも出土量と種類が豊富でありその他の遺跡よりも分析が可能と考えられるためである。また、城柵遺跡はその出土量から各地域における施釉陶磁器の流通の中心と考えられ、これらの分析がその他の遺跡の検討の基盤にもなるものと考えたためである。

なお､本稿では国産陶器（緑釉陶器・灰釉陶器）、輸入陶磁器（白磁・青磁）を一括して施釉陶磁器として検討を加えているが、施釉陶磁器には種々の差異が存在しており、特に東日本おいて灰釉陶器は各地で多量に出土することから検討材料としては不向きとの指摘がある（高橋2015）。しかし、城柵遺跡といえども出土量は他地域と比べて決して多くないことから、今回は施釉陶磁器として一括して分析し、種別毎の傾向がみられた場合は各遺跡で触れることとする。時期については前稿で９～11世紀を４期に区分したものを用いるが（村田2016）、各城柵でも遺構の変遷においてローマ字表記が使用されており、混乱が生じる可能性がある。したがって今回は前稿のⅠ期を９世紀前半（猿投窯黒笹14号窯式併行段階）、Ⅱ期を９世紀後半（黒笹90号窯式併行段階）、Ⅲ期を10世紀前半（折戸53号窯式併行段階）、Ⅳ期を10世紀後半～11世紀（東山72～百代寺窯式併行段階）と表記する。ただし、城柵遺跡においては10世紀後半以降の陶磁器はほとんど出土しないことから９世紀前半～10世紀前半までの陶磁器及び出土遺構を対象とする。

１．陸奥側（岩手県）の城柵遺跡

胆沢城跡、志波城跡、徳丹城跡の３遺跡がある。いずれも９世紀初頭に造営が開始された城柵であり、基本構造には画一性がある。それは低地に立地、平面プランが方形、外郭線が溝を伴う築地塀で構築され櫓状建物が設置されているという点である。以下では造営開始年代の古い順にみていく。

（１）胆沢城跡（第１～４図、第１表）

胆沢城跡は岩手県内陸南部の奥州市水沢区佐倉河に所在する。胆沢扇状地の北東隅、北上川と胆沢川の合流地点付近の低位段丘上に立地している。延暦21年（802年）に征夷大将軍坂上田村麻呂によって造営された陸奥国の鎮守府であり､平成25年度までに100次に及ぶ発掘調査が実施されている。外郭線は一辺約670ｍの築地塀で囲まれた方形プランで、北辺と南辺ではそれぞれ門が確認されている。政庁域は城内のやや南寄りに位置しており、一辺約90ｍの一本柱の板塀で囲まれている。政庁

域内には正殿や脇殿といった建物が整然と配置されている。また、南門のさらに南側に他の城柵では確認されていない前門（殿門）が検出されている。政庁と外郭線の間には官衙域が広がっており、北方官衙・北方東官衙・東方官衙・東方南官衙・南方官衙・西方官衙が確認されている。検出された遺構・遺物から北方官衙は物資搬入に関わった官衙、東方（南）官衙は儀式を執り行った官衙、南方官衙は府庁厨屋と考えられている。また、城内中央には北上川へと注ぎ込む九蔵川が流れており、物資の運搬に利用されていたと考えられる。

機能していた期間は出土土器の年代観から10世紀中頃までの約150年間と考えられており、政庁地区の遺構の重複関係もふまえて３期６小期の変遷が示されている。大まかに各期をみると、Ⅰ期は創建期にあたる９世紀前葉～中葉、Ⅱ期は政庁正殿や外郭南門建物が改修される９世紀中葉～後葉、Ⅲ期は東方官衙地区で建物が増加し機能が重視された９世紀末～10世紀中葉となる。正殿等の主要建物はⅡ期に一部が掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられ、さらに瓦葺きとなる。門もⅠ期は棟門であったものがⅡ期には八脚門に改修され、さらに前述の政庁前門が設置されている。

出土遺物も豊富であり、施釉陶磁器の他に文字関連遺物（墨書・刻書土器、木簡、題箋、漆紙文書、硯）、瓦、漆紙文書、木製品（食器類等）、鉄製品、鉄生産関連遺物（羽口・鉄滓）等多岐にわたる。施釉陶磁器は計測可能な個体数で約170点、破片数ではそれ以上となる。器種も豊富であり、緑釉陶器では碗（稜碗・輪花碗・陰刻花文碗含む）、皿（稜皿・段皿・陰刻花文皿含む）、小壷、三足盤、香炉蓋、合子、灰釉陶器では碗（陰刻花文碗含む）、皿、長頸瓶、平瓶、小瓶（壷）、唾壷、白磁は碗、稜碗、青磁は碗、皿、蓋がある。東北地方北部の出土遺跡のなかでは質・量ともに群を抜いており、陸奥側における施釉陶磁器の流通・使用の中心地であったと考えられる。

施釉陶磁器の出土地点を政庁域に近い地区からみると、推定内城東地区（第32次調査、以下「調査」を省略）、政庁北辺区画地区（第49次）、東方官衙南地区（第43・45次）、渋田地区（第85次）、外郭南門地区（第23次）、北方官衙東地区（第39次）、二月地区（第73次）、外郭内西方地区（第42次）、四月地区（第89次）、外郭内南西地区（第37次）、東辺外郭線地区（第28次）、東辺外郭線北館地区（第27次）、北館地区（第71・74次、註１）となっている。出土遺構は多い順に土坑23基・溝10条・掘立柱建物８棟・井戸３基等となっており他に整地層や遺物包含層からの出土も多い。出土地点の分布をみると、調査地点が城内南東地区に集中しているため偏りはあるが、政庁の南～東側で多く北～西側ではほとんど出土していないという傾向が見て取れる。政庁域でも推定範囲の半分以上を調査しているが、施釉陶磁器は現在のところ北辺区画地区で出土した緑釉陰刻花文碗１点のみである。これに対して政庁の周辺をみると、東方官衙南地区では約110点、隣接する渋田地区では約20点、北方官衙（東）地区及び隣接する二月地区では６点、西方官衙地区と推定される四月地区では９点となっており、政庁及び城内北～西側の地区と比較すると東方官衙南地区が圧倒的であり、南東部でも出土量は多い。このような分布状況を見る限り、胆沢城跡では施釉陶磁器は政庁ではなく、官衙域でも東方官衙南地区を中心とした範囲で使用されたものと考えられる。続いて具体的な様相について、出土量の多い東方官衙南地区及び渋田地区を例としてみていく。

南地区を含む東方官衙地区では庇付の掘立柱建物、柵列、道路側溝と考えられる溝、多数の土坑群が検出されている（第２・３図）。また、東方官衙南地区では第43次調査区の北側（以下、地区北部とする）で焼土･炭化物を含む遺物包含層（第３層）が広範囲に拡がっていることが確認されており、施釉陶磁器の大半はこの第３層及び周辺の土坑群から出土している。出土した国産陶器はほぼ全てが猿投窯産黒笹14～90号窯式、白磁は刑窯、青磁は越州窯製品であり９世紀代に属する。土坑の堆積土は遺物包含層と同様の土質であり、人為堆積の様相を示すことから廃棄用の土坑と考えられる（第

３図断面図）。施釉陶磁器の出土状況は詳細に記載されていないが、底面や堆積土中位に意図的に設置されたものではないと考えられる。また、陶磁器には二次被熱により釉が変色・発泡しているものがあり、出土層中に焼土や炭化物を含むことから、土器や木製品等他の製品とともに焼却された後に一括廃棄されたものと考えられる。土坑内及び遺物包含層からは施釉陶磁器の他に多量の土器類（土師器･須恵器･須恵系土器）と少量の鉄製品･硯（円面硯）､希少遺物として遺物包含層第 3b 層から「具注暦」、SK830 から「孝経」漆紙文書が出土している。土器類は坏・碗等の供膳具が主体であり、鍋・甕等煮炊具はごく少数である。また、供膳具でも高台付の器種が多く、大型の器形も認められる。なお、この地区で出土した陶磁器には「手擦れ」、いわゆる使用による摩滅の痕跡は認められず（伊藤他 1984・村田 2010）、日常的に使用されたものではないと考えられる。このような器種組成は、出土した地区で饗宴や給食が行われていたことを示すものと考えられ（山中 1994）、施釉陶磁器もその行為の中で使用されたものであると推定できる。

東方官衙地区は、建物が増加する９世紀後半～ 10 世紀前半においては東西棟の庇付掘立柱建物が整然と配置されており、建物周辺から出土する土器の組成が供膳具主体であることから、これらの建

第１図　胆沢城跡出土地点分布図

第１表　胆沢城跡出土地点一覧表

地区名	次数	遺構名	遺構種別	器種・点数	産地・型式	特記事項
推定内城東地区	32次	SK434土坑	土坑	灰釉　瓶1		胎土灰白色
政庁北辺区画地区	49次	SX1006	不明遺構	緑釉　陰刻花文碗1	猿投　黒笹14～90	土坑状の遺構
東方官衙南地区	43次	SK829	土坑	灰釉　不明1		
		SK830	土坑	緑釉　輪花碗1	猿投　黒笹14	
		SK841	土坑	緑釉　碗2 灰釉　碗1 青磁　皿	猿投　黒笹14 猿投　黒笹14 越州	
		SK843	土坑	緑釉　碗4・稜碗1・輪花碗1 灰釉　碗5・小瓶1	猿投　黒笹14～90 猿投　黒笹14・折戸53	
		SK844	土坑	緑釉　碗1・稜碗1・香炉蓋1 灰釉　皿2	猿投　黒笹90 猿投　黒笹14	
		SK846	土坑	緑釉　碗5・輪花碗2・皿1 灰釉　皿2・不明1	猿投　黒笹14・90 猿投　黒笹14	
		SK854	土坑	緑釉　碗 灰釉　碗・平瓶		小破片で数量不明、文章記載
		SK855	土坑	灰釉　平瓶1		
		SK864	土坑	灰釉　碗1・長頸瓶1	猿投　黒笹90	
		SD802	溝	緑釉　陰刻花文段皿1 灰釉　不明1 青磁　鉢1	 越州	
		SB827建物	掘立柱建物	灰釉　不明1		
		北端地区2層	遺構外	緑釉　碗1・稜碗1		
		北端地区3a層	遺構外	緑釉　碗1・皿1・段皿1・瓶1・合子1・香炉蓋1 灰釉　碗1・皿1・瓶1 白磁　皿1 青磁　碗1	猿投　黒笹14～90 猿投　黒笹14～90 刑窯Ⅰ-1 越州	
		北端地区3b層	遺構外	緑釉　碗3・皿1 灰釉　碗2・短頸壷1 白磁　稜碗1 青磁　碗1	猿投　黒笹14 猿投　黒笹14 刑窯Ⅰ-1 越州	
東方官衙南地区	45次	SK891	土坑	灰釉　瓶1 白磁　碗1 青磁　碗1	 刑窯Ⅰ-1 越州	
		SK903	土坑	緑釉　皿1 灰釉　碗1	畿内 猿投　黒笹14	
		SK906	土坑	灰釉　碗1	猿投　黒笹14	
		SK921	土坑	緑釉　不明		
		SD890	溝	緑釉　不明1	畿内	
		SD896	溝	緑釉　碗 灰釉　碗		文章記載
		SD920	溝	緑釉　稜碗1・輪花碗1・小鉢1 灰釉　碗1 青磁　不明2	畿内　9世紀後半 猿投　黒笹90	
		SX892	溝	緑釉　碗1		文章記載
		SB895建物	掘立柱建物	緑釉　輪花碗2	猿投　黒笹90	文章記載
		SB915建物	掘立柱建物	緑釉　碗1	畿内	文章記載
		SB923建物	掘立柱建物	緑釉　不明 灰釉　不明		
		SB923B建物	掘立柱建物	緑釉　蓋1・碗・稜皿 灰釉　碗		蓋以外は文章記載
		SB926建物	掘立柱建物	緑釉　不明		
		SA900	柱列	緑釉　皿1 灰釉　碗1		
		Ⅱ層	遺構外	緑釉　碗7・手付瓶・皿 灰釉　碗3・皿1・瓶1 白磁　碗1 青磁　碗1・蓋1	 刑窯Ⅰ-1 越州	
渋田地区	85次	SK3298	土坑	緑釉　碗1	洛北　黒笹14併行	
		SK3300	土坑	緑釉　小壷1		
		SK3305	土坑	緑釉　輪花碗1・碗1 灰釉　瓶1	猿投　黒笹14 猿投	
		SK3307	土坑	緑釉　碗1 灰釉　皿1	猿投　黒笹14 猿投　黒笹14	
		SD920	溝	緑釉　碗1 緑釉　碗3・碗?3・香炉蓋1	洛北　黒笹14併行 猿投　黒笹90	
		SI3287	竪穴遺構	緑釉　碗3	猿投　黒笹14	
		包含層	包含層	緑釉　輪花碗1	猿投　黒笹14	
		遺構外	遺構外	灰釉　碗1	猿投　黒笹90	
外郭南門地区	23次	SD115溝	溝	灰釉　瓶1		
北方官衙東地区	39次	SE573	井戸	緑釉　碗1	京都？	
		SB590B建物	掘立柱建物	緑釉　不明		
		SB604	掘立柱建物	緑釉　陰刻花文碗1		
二月地区	73次	SK3167	土坑	青磁　皿1		
		SK3169	土坑	灰釉　碗1		
		SK3182	土坑	灰釉　皿1		
外郭内西方地区	42次	SE772井戸	井戸	緑釉　不明1		
四月地区	89次	遺構外	遺構外	緑釉　碗1 灰釉　碗5・長頸瓶1・小壷1 白磁　碗1	京都？　黒笹90併行 猿投・東濃　黒笹14～90 刑窯Ⅰ-1	
外郭内南西地区	37次	整地層	整地層	灰釉　皿1・長頸瓶1	猿投	
		SD473溝	溝	灰釉　皿1	猿投　折戸53	
東辺外郭線地区	28次	SE330	井戸	緑釉　皿1	猿投　黒笹90	
		SD352溝	溝	灰釉　碗1・段皿1	猿投　折戸53?	
		黒褐色盛地層	整地層	灰釉　碗1・皿1	猿投　折戸53～東山72	
東辺外郭線北館地区	27次	SD263溝	土坑	緑釉　陰刻花文碗2 灰釉　陰刻花文碗1		
北館地区	74次	旧表土	遺構外	灰釉　碗1・瓶1	猿投　黒笹90	
北館地区	71次	SD3110	溝	灰釉　輪花碗1	東濃　百代寺	年代的に新しい為今回は除外

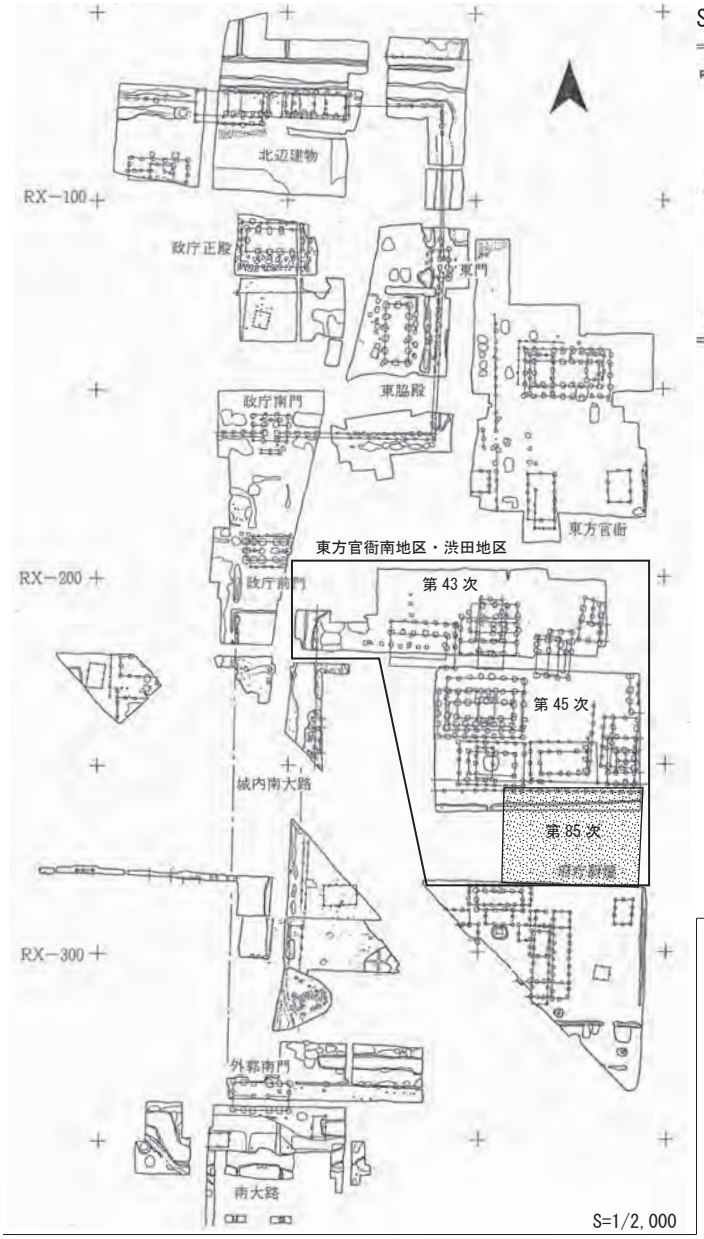
物で饗給儀礼が執り行われていた官衙域であると考えられている。このような性格の地区において出土した施釉陶磁器は、使用痕が認められないこともふまえると、他の土器類とともに掘立柱建物内で行われた饗給儀礼の際に使用されたものと考えられる。ただし、須恵器や須恵系土器に比べて施釉陶磁器の絶対数が少ないことから、儀礼に使われてはいたものの土器類全体における割合は低く、土器類の補完的役割を果たしていたものと考えられる。また、二次被熱の痕跡があり意図的に廃棄されたと考えられる出土状況であることから、役目を終えた時点で焼却され、他の器物とともに土坑内やその周囲に廃棄されたものと考えられる。

東方官衙南地区では、6棟の掘立柱建物と1条の柱列の柱穴掘り方埋土からも施釉陶磁器の細片が出土している。関東地方では掘立柱建物の構築直前に地鎮の為に柱穴内に施釉陶器や皇朝十二銭を埋納している事例が報告されており、胆沢城跡でも同様の行為が行われていた可能性がある。北方官衙東地区（第39次調査区）でも2棟の掘立柱建物から施釉陶磁器が出土しており、このうちSB590B建物の柱穴は底面に礫を敷いており、施釉陶器も意図的に埋納している可能性がある。ただし、東方官衙南地区においては掘り方埋土に焼土や炭化物が多量に含まれていることから、周辺で施釉陶磁器を焼却した際にできた廃棄土を掘り方埋土に使用した為に混入した可能性も考えられる。

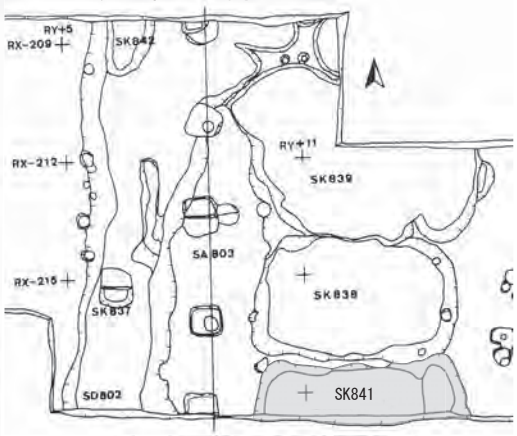
続いて渋田地区についてみていく。府庁厨屋地区に含まれるが、第45次調査区と一部重複する第85次調査区では土坑と竪穴建物から施釉陶磁器が出土している。陶磁器が出土したSK3305は堆積土中に多量の炭化物を含み、さらにその周辺の土坑や竪穴建物からは炭化物の他に羽口や鉄滓、漆膜付土器が出土している。このような状況から、渋田地区では鍛冶や漆に関連する生産活動が行われたものと推測されている（奥州市2006）。施釉陶磁器は9世紀前半のものが大半で、東方官衙南地区よりも時期的に古いものが多い。このことから、東方官衙地区が整備される以前にはこの地区で生産活動が行われており、陶磁器類はこれらの生産活動に伴って使用されたものと考えられる。ただし、施釉陶磁器は小破片が多く出土状況からその内容を読み取ることはできなかった。

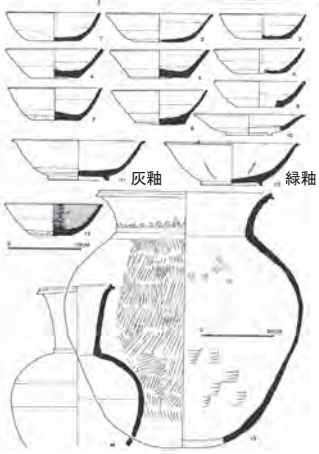
ここで施釉陶磁器の種別による使い分けの有無についてみておく。第43・45次調査区での内訳を例にみると、緑釉陶器61点、灰釉陶器39点、輸入陶磁器13点となっており、緑釉陶器の出土量が最も多い。器種は碗・皿類の供膳具が9割以上であり、これは全種別に共通する。他地域でも遺跡の官衙的性格の指標とされる緑釉陶器の出土が最も多い点は、この地区で饗給儀礼が行われていたという推定を補強するものといえる。ただし、灰釉陶器も全体の3割近く出土しており、出土状況からは厳密な種別の使い分けは認められない。このことは、都城や関東地方の官衙遺跡と異なり胆沢城跡においては儀礼に際して陶磁器の種別の選択性は強くなかったことを示しているものと考えられる。なお、他の出土地点を見ても緑釉陶器が優勢な点は同じであるが、灰釉陶器や輸入陶磁器も一定量出土しており、胆沢城跡全体で同様の傾向であったと考えられる。

以上、胆沢城跡における施釉陶磁器の用途について検討を加えてみた。遺構内で使用が明らかになるような出土状況は無くあくまで状況証拠からの論証にはなったが､少なくとも胆沢城跡では儀礼用、地鎮用、生産活動に伴う使用という3つの用途があったと考えられる。また、緑釉陶器の出土量が最も多いが、灰釉陶器や輸入陶磁器も一定量出土しており他地域で見られるような種別の選択性は認められない。これは胆沢城跡では都城や他地域の官衙と同様に饗給儀礼は行われていたものの、いわゆる「律令的土器様式」のように使用する食器について厳格な規範があったわけではないことを示しているものといえる。なお、これ以外の地区は出土量が少なく具体的な様相は不明であるが、溝や土坑からの出土が多いことから意図的な廃棄あるいは後世の流れ込みのいずれかの可能性を考えておきたい。

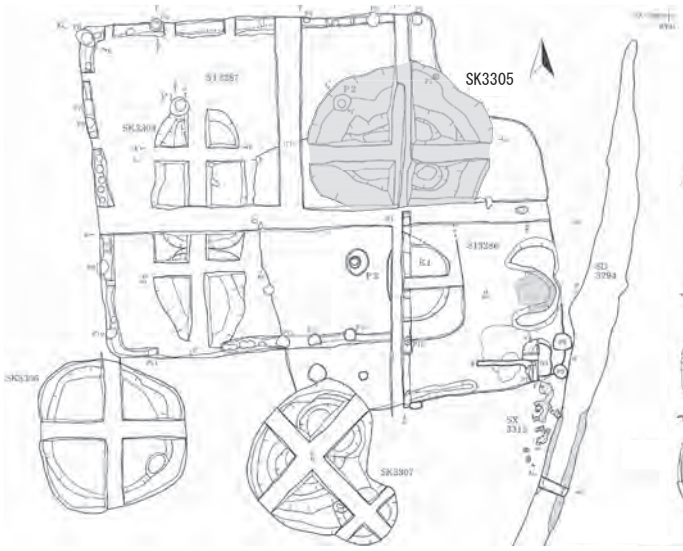


SK841 土坑（第 43 次調査）





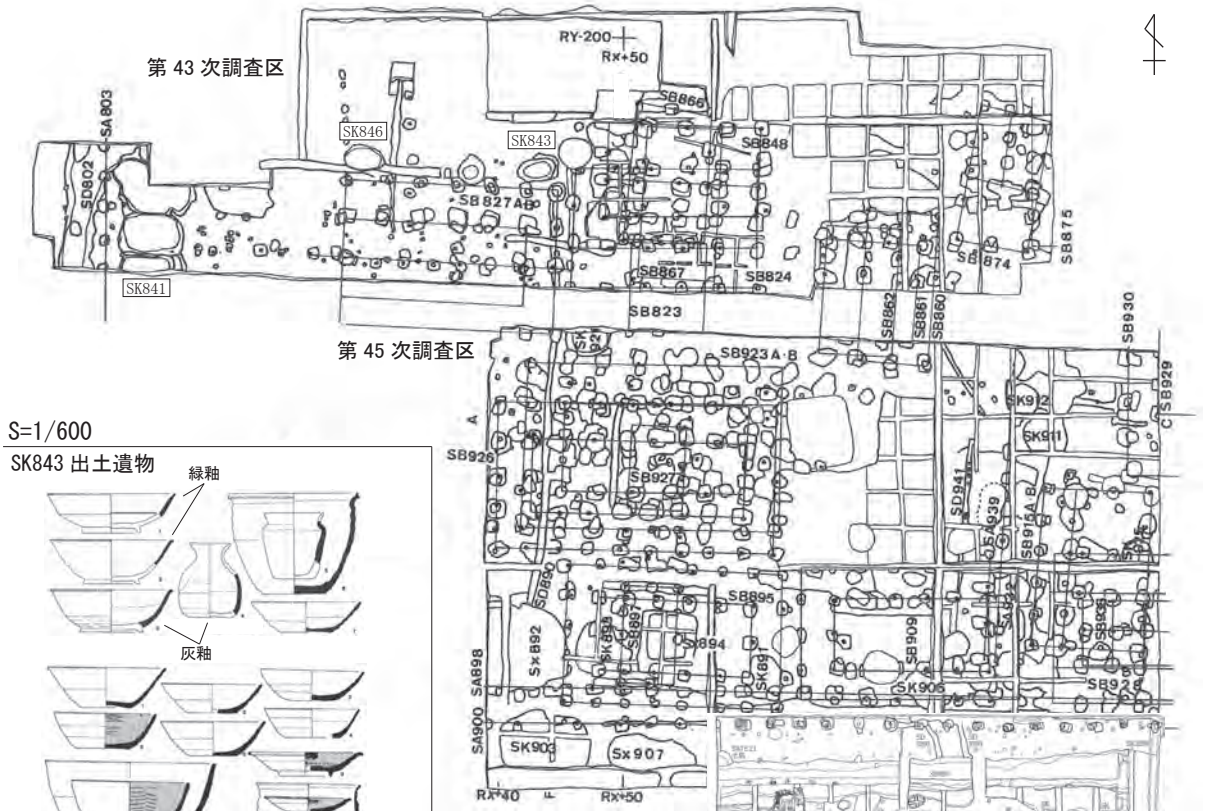
SK3305（第 85 次調査）



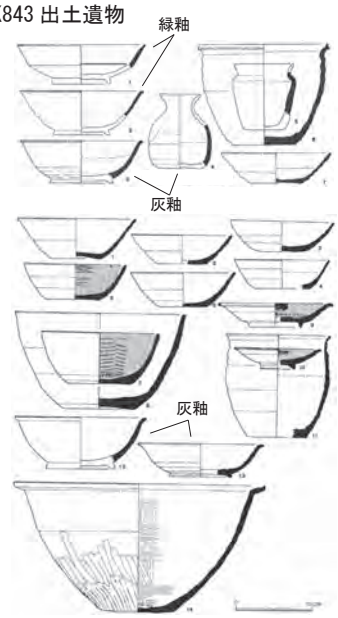
※縮尺…SK841＝1/200、SK3305＝1/120
遺物＝1/10、陶磁器＝1/6

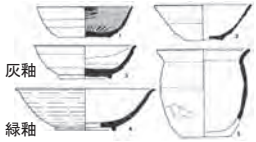
第２図　胆沢城跡東方官衙南地区・渋田地区(1)

第 43・45・85 次調査区遺構配置図



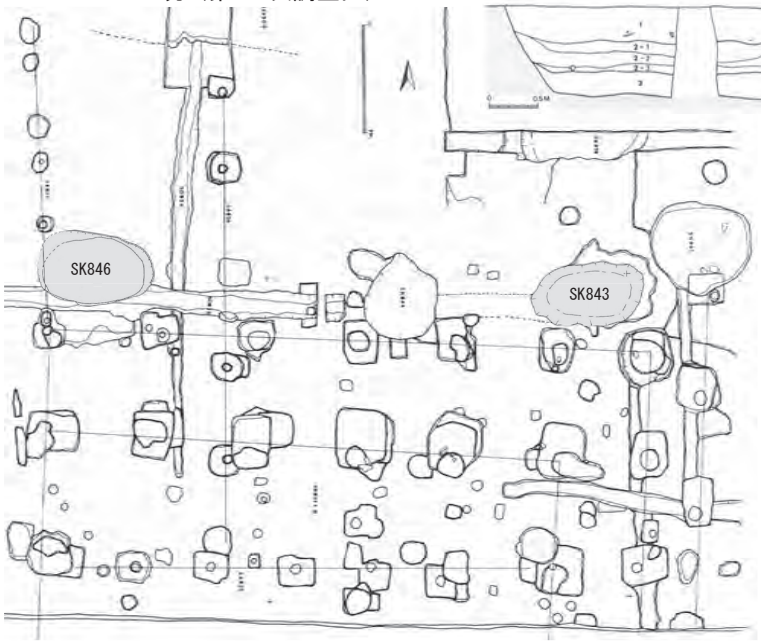
SK843 出土遺物



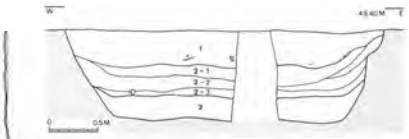


3b 層出土漆紙文書

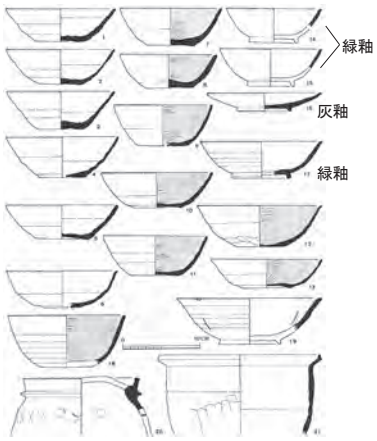
SK843・846 土坑（第 43 次調査区）



SK843 断面図

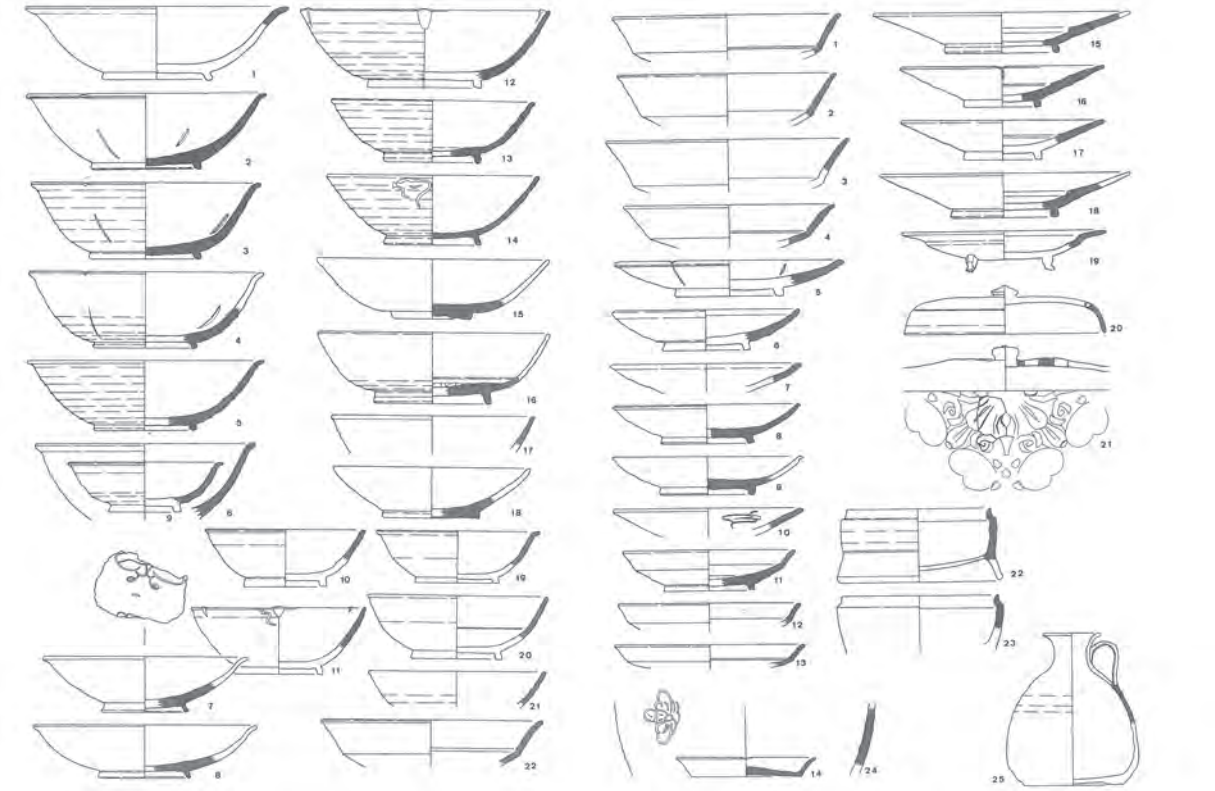


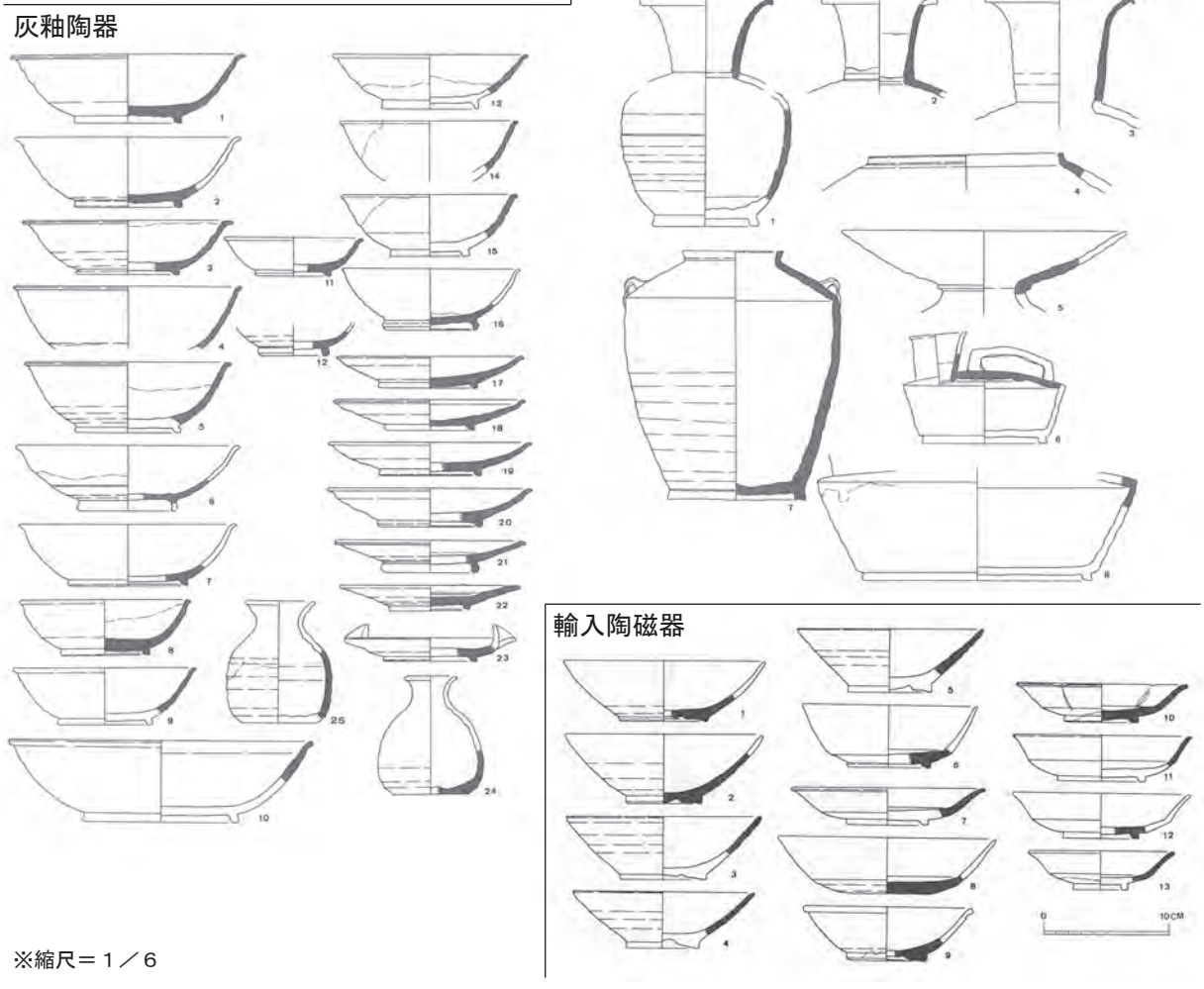
SK846 出土遺物



※縮尺…遺構＝1/200、断面図＝1/80、遺物＝1/10

第３図　胆沢城跡東方官衙南地区・渋田地区(2)





第４図　胆沢城跡第43次調査出土陶磁器

（２）志波城跡（第５図、第２表）

志波城跡は岩手県内陸中部の盛岡市太田地内に所在し、北上川と雫石川が合流する地点から西側約５km にあたる雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。胆沢城跡に続いて延暦 22 年（803 年）に造営が開始されているが、雫石川の氾濫の影響もあって直に徳丹城跡へと移転しており、城柵として機能していた期間は約 10 年と短い。平成 26 年度までに 110 次にわたる発掘調査が実施されている。城域の北側が雫石川の流路変更による浸食によって削られており全形は不明であるが、外郭は方形に巡っており、築地塀の一辺が 840 m、さらにその外側を巡る大溝が一辺約 930 mと城柵遺跡のなかで最大規模を誇る。政庁域は城内のやや南寄りに位置しており、一辺約 150 mの築地塀で囲まれている。城内では東方官衙、南東官衙、南西官衙の３地区の官衙域が確認されている。政庁域では正殿や脇殿が確認されているが、存続期間が短い為建て替えが確認された建物の数は少ない。

施釉陶磁器の出土地点は、政庁南方地区（第 27 次調査）、郭内北東部（第 23 次）、外郭北西部（第 55 次）の３地点で、国産陶器１～２点の出土である。政庁域の西側に２地点あるが集中域は見られない。志波城跡でも儀礼の場と考えられる官衙域は確認されているが、その範囲からは出土していない。

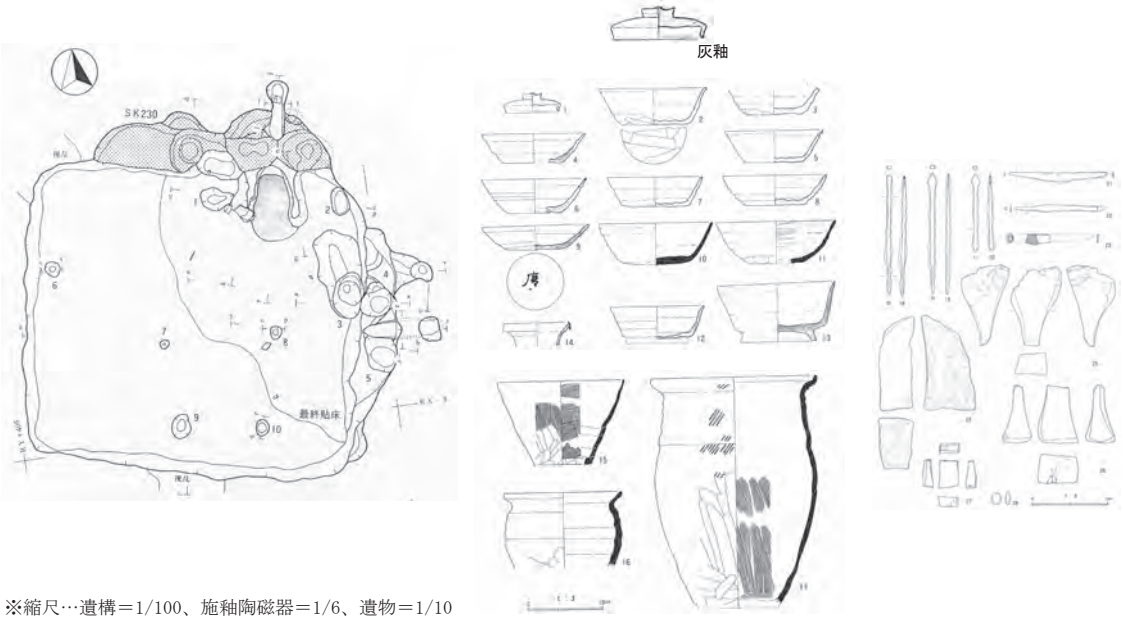
出土遺構は全て竪穴住居であり、郭内北東部 SI414 竪穴住居からは９世紀前半代の土器、鉄鏃、砥石とともに灰釉陶器の蓋が出土している（第５図）。城内で検出された城柵期の竪穴住居は兵舎や工房と考えられており、兵舎であれば鎮兵が使用したもの、工房であれば胆沢城跡と同じく生産活動に伴うものと考えられる。しかし、残る２軒の竪穴住居は９世紀後半代のものであり、城柵機能時の竪穴住居は SI414 の１例のみであることから詳細は不明である。

（３）徳丹城跡（第６図、第３表）

徳丹城跡は岩手県内陸中部、紫波郡矢巾町大字西徳田に所在し、北上川右岸の平坦な低位段丘上に立地する。雫石川の氾濫による水害をこうむる志波城跡に替わって弘仁３年（812 年）に文屋綿麻呂によって造営された律令制最後の城柵である。これまでに 69 次にわたる発掘調査が実施されており、外郭線は一辺約 350 mの方形プランで平面規模が５つの城柵のなかで最少であることが判明している。区画施設も北辺及び東辺の一部と南門両翼は築地であるが、その他は丸太材の木柵塀である。政庁は城内のほぼ中央に位置し、板塀で区画された一辺約 76 mの方形プランである。政庁域では正殿・脇殿等の建物、鍛冶工房と考えられる竪穴住居や井戸などが検出されている。城内では北東官衙、南東官衙、南西官衙の３地区の官衙域が確認されている。建物の重複関係及び築地崩壊土出土の須恵器坏の年代観から、９世紀中葉まで機能していたと考えられる。なお、本遺跡では徳丹城に先行する官衙の存在も確認されており、「別将」墨書土器をはじめ徳丹城期よりも古い時期の遺物が非常に豊富である。徳丹城期の遺物は先行官衙期よりも少ないが、木製品は豊富であり特に胄（井戸の水桶に転用）・琴・柱脚等希少な器種が出土している。

施釉陶磁器の出土地点は外郭北門地区（第 27 次）と外郭南西地区（第 24 次）の２地点のみであり、いずれも外郭線上の調査区で検出された区画溝から出土している。また、志波城跡と同じく官衙域からは現在のところ出土していない。出土した陶磁器は外郭北門地区 SD145 出土の灰釉陶器瓶１点（破片数４点）と外郭南西地区 SD133 出土の越州窯産青磁碗１点であり、９世紀前半の製品である。いずれも城柵機能時に使用されたものと考えられるが、SD145 の共伴遺物は先行官衙期もしくはそれより古い時期のものが主体であり、使用状況の推定はできない（第６図）。外郭南西隅を区画する SD133 では城柵機能時の遺物も共伴しているが、施釉陶磁器を意図的に埋納あるいは廃棄したような状況は認められないことから周辺からの流れ込みにより遺構内に堆積したものと考えられる。

SI414 竪穴住居（第 23 次調査）



※縮尺…遺構＝1/100、施釉陶磁器＝1/6、遺物＝1/10

第５図　志波城跡出土地点分布図

第２表　志波城跡出土地点一覧表

地区名	次数	遺構名	遺構種別	器種・点数	産地・型式	特記事項
政庁南方地区	27次	SI424竪穴住居	竪穴住居	灰釉　碗1・蓋1		文章記載
郭内北東部	23次	SI414竪穴住居	竪穴住居	灰釉　蓋1	東濃？	
外郭北西部	55次	SI442竪穴住居	竪穴住居	緑釉　碗1・壷1	猿投　黒笹90	

２．出羽側（秋田県）の城柵遺跡

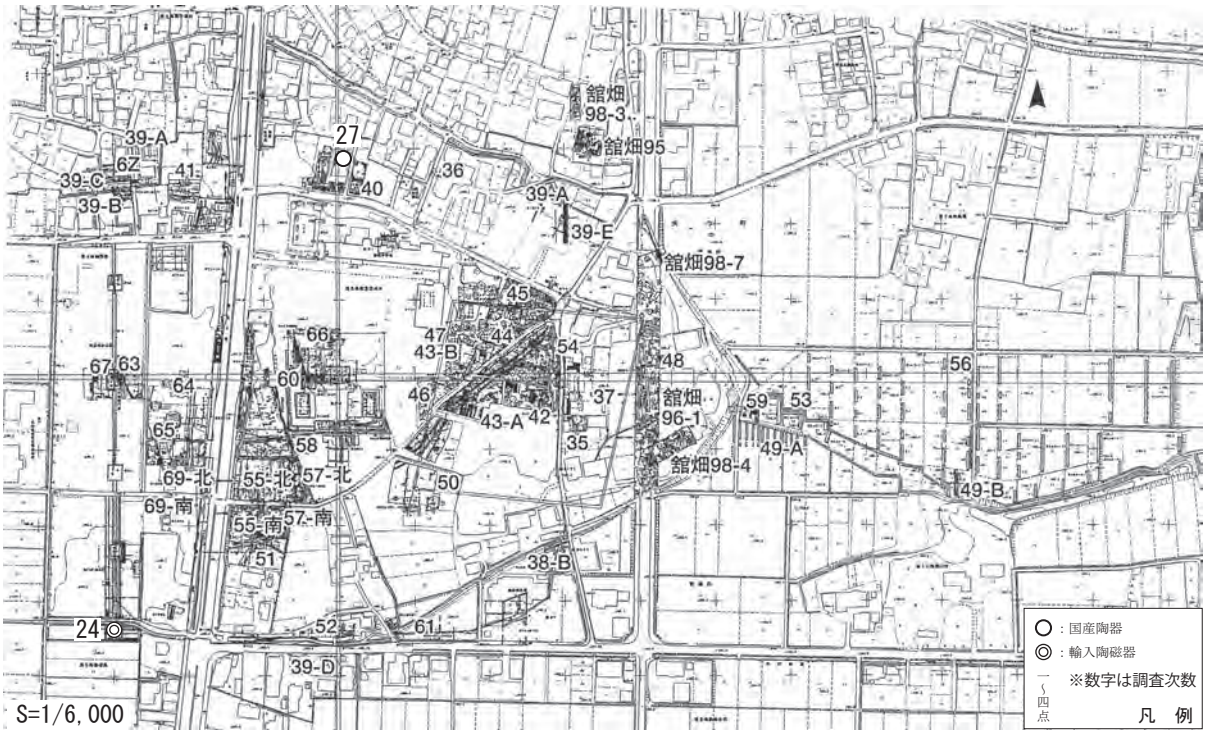
秋田城跡と払田柵跡の２遺跡がある。造営開始時期が大きく異なることもあって立地や平面プランは大きく異なるが、最も外側の区画施設に材木塀が採用されていること、城内で鍛冶工房等の生産施設が継続して操業している点は共通する。なお、出羽側の城柵では城内に生産関連施設が継続的に構築されているのに対し、陸奥側の城柵では短期的なものを除いて生産関連施設はほとんど確認できないことから、これは出羽側の城柵の大きな特徴といえる（伊藤 2007）。

（１）秋田城跡（第７・８図、第４表）

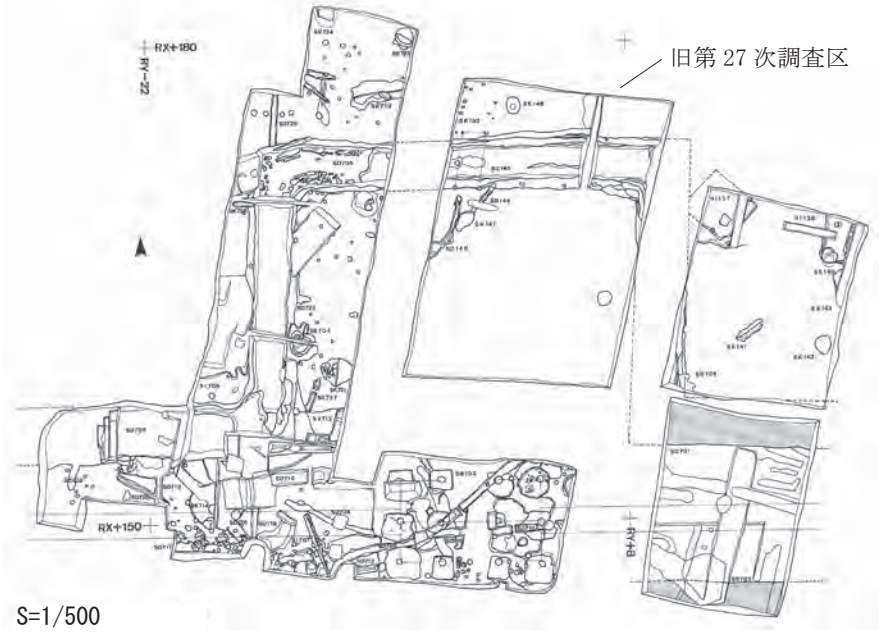
秋田城跡は秋田県沿岸中央部、秋田平野の西部にあたる秋田市寺内地内に位置する。旧雄物川の河口の右岸、高清水と呼ばれる標高 30 ～ 50 ｍの独立低丘陵上に立地している。文献上の初見は『続日本紀』天平５年（733 年）12 月 26 日条「出羽柵遷置於秋田村高清水岡」という記述であり、当初は出羽柵として遷置されたことがわかっている。その後天平宝字４年（760 年）に秋田城と改称され、一次は出羽国府も移され日本海側の行政の中心的役割を担っていた。しかし、立地・気候条件の悪さから延暦 23 年（804 年）に国府としての機能は河辺府に遷され、その後も天長７年（830 年）の地震や元慶２年（878 年）の元慶の乱等の被害を被っている。その後文献上の記述は少なくなるが、平成 27 年度まで 106 次に及んだ発掘調査により８世紀前半から 10 世紀中葉までの遺構・遺物が確認され、200 年以上機能していたことが判明している。施釉陶磁器は９世紀前半から 10 世紀前半のものが出土しているが、主体となるのは９世紀代である。城域は高清水丘陵の平坦部の地形に沿って東西約 550 ｍ、南北約 550 ｍの逆Ｌ字状の平面プランをした外郭線によって囲まれており、城内の中央部には東西 94 ｍ、南北 77 ｍに囲われた政庁域が確認されている。城内は地番によって地区分けがされており、政庁域から東側は官衙域及び生産施設域として利用された大畑地区、西側は大規模倉庫群が検出された焼山地区、城外東側は奈良時代の水洗厠屋が検出された鵜ノ木地区が拡がっている。なお、建物の重複関係等から政庁は６期、外郭線は５期の変遷が考えられている。区画施設の変遷をみると、政庁域はⅢ期（８世紀末）以降築地塀から一本柱柵列に、外郭線も同時期に築地塀から材木塀へと構造が変化している。

出土遺物は豊富であり、施釉陶磁器の他に文字関連遺物（墨書・刻書土器、硯）、瓦、塼、石製品（石帯・砥石等）、金属製品、木製品（食器類等）、鉄生産関連遺物（羽口・鉄滓）、漆関連遺物等多岐にわたる。施釉陶磁器は約 80 点出土しており、秋田県内では出土量が最も多い。器種は、緑釉陶器には碗（稜碗・輪花碗含む）と皿（段皿含む）、灰釉陶器には碗、皿（段皿含む）、壷・瓶、多嘴壷、三足盤、白磁には碗と托、青磁には碗と壷があるが、胆沢城跡よりもバリエーションは少ない。

施釉陶磁器の出土地点を政庁域に近い地区からみると、政庁域（第 40 次）、大畑地区中央部（第 72・75・79・80 次）、大畑地区（第 54・60・84・87・88 次）、大畑地区南部（第 74 次）、南外郭線（第 17・24・44 次）、焼山地区（第 89・104 次）、鵜ノ木地区（第７・39・42・63・67・69・91 次）、城内西大路地区（第 93 次）となっている。城内は比較的広範囲で調査が行われているが、政庁域東側の大畑地区と城外東側の鵜ノ木地区に集中し、政庁域、焼山地区、外郭線上では少ない。また、城内北側の地区では外郭線地区を含めて現在のところ出土していない。政庁域では第 40 次調査出土の京都産緑釉稜碗１点、焼山地区でも４点出土しているのみである。出土遺構は多い順に竪穴建物（工房・

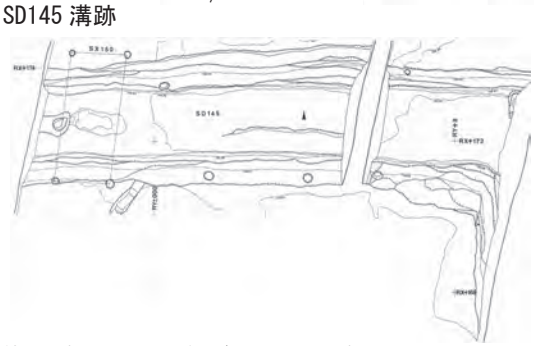


第 40 次調査区遺構配置図（旧第 27 次調査区含む）

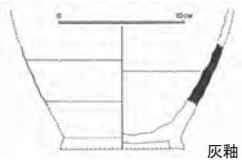


S=1/500

SD145 溝跡



※S=1/5



※縮尺…遺構＝1/200、施釉陶磁器＝1/6、遺物＝1/10

第６図　徳丹城跡出土地点分布図

第３表　徳丹城跡出土地点一覧表

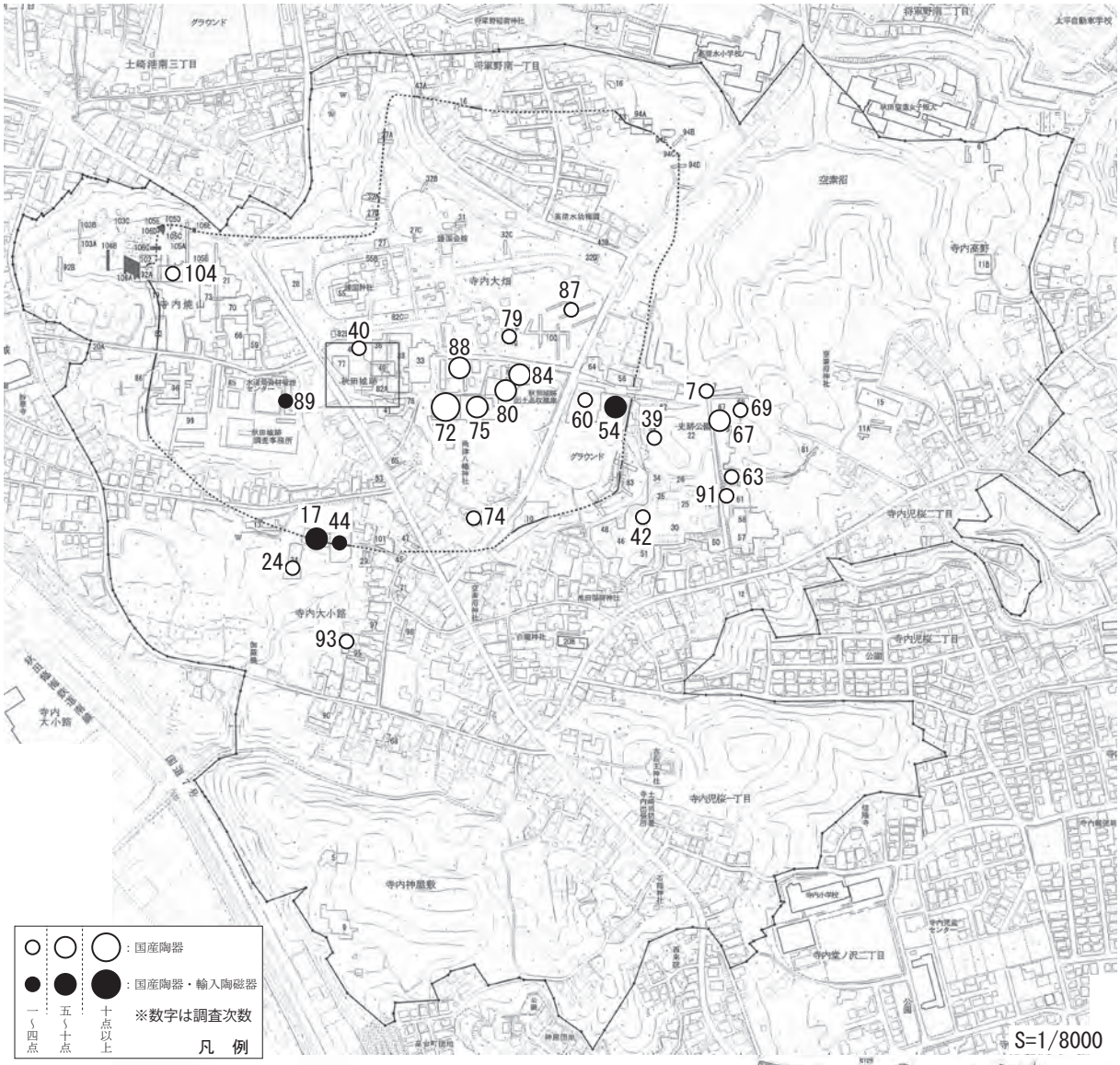
地区名	次数	遺構名	遺構種別	器種・点数	産地・型式	特記事項
外郭北門地区	27次	SD145溝	溝	灰釉　瓶1	猿投　黒笹14	破片数は４点
外郭南西地区	24次	SD133	溝	青磁　碗1	越州Ⅱ-2	

住居）11 軒・土坑（土取り穴含む）７基・溝４条・掘立柱建物３棟となっているが、遺構外からの出土が最も多い。続いて具体的な様相について、大畑地区を例としてみていく。

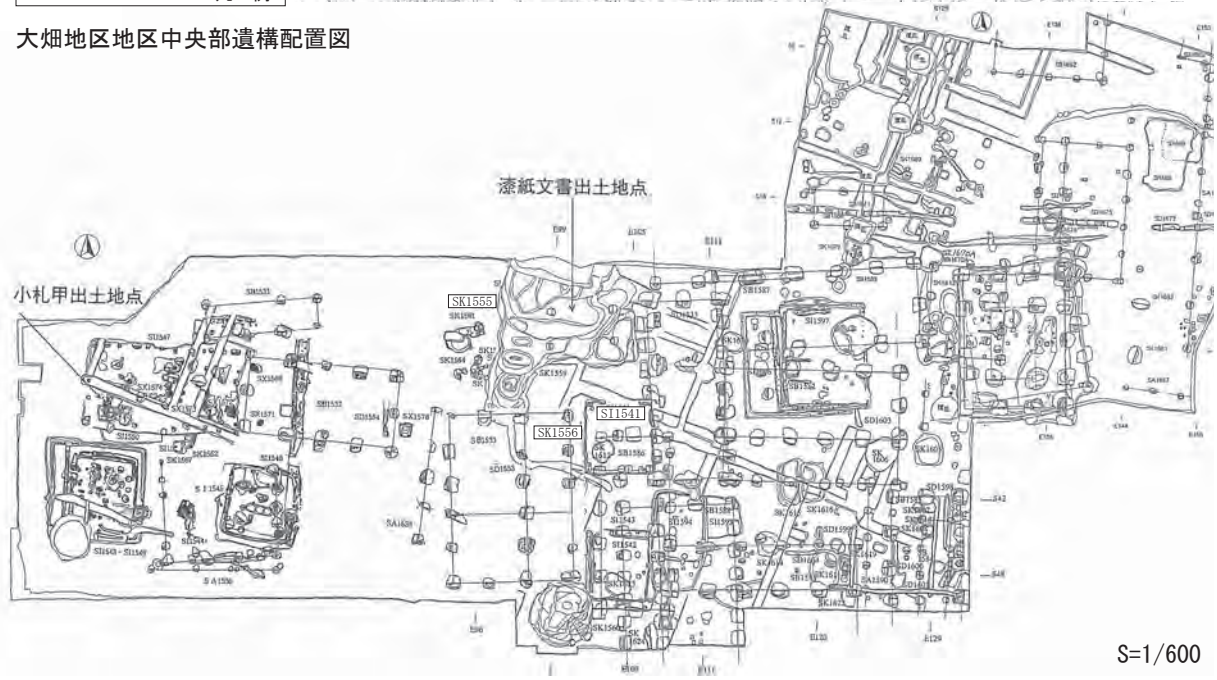
大畑地区は城内東部、外郭東門から政庁に至る間の地区であり、これまでの調査で掘立柱建物群、竪穴建物群､鍛冶工房群等の遺構群が検出されている。遺物としては竪穴建物 SI1547 から非鉄製小札、廃棄土坑から多量の漆紙文書（「死亡帳様文書」･「戸籍」等）や漆付土器、墨書土器が出土している。中央部と東部では若干の相違はあるが、８世紀前半～９世紀前半は竪穴住居群を主体とする居住域、９世紀前半～中頃には鍛冶工房が構築され生産域として利用される。９世紀後半以降は掘立柱建物群が形成されるが､再度居住域としても利用されている。大畑地区では竪穴住居５軒､竪穴状工房１軒､掘立柱建物３棟、土坑５基、溝４条から施釉陶磁器が出土している。数的には中央部の遺構のほうが多いが、いずれも１～４点程度の出土である。産地の記載が無いが、筆者の判断によると国産陶器は京都・猿投窯・篠窯、白磁は刑窯、青磁は越州窯産の製品と考えられる。年代的には、国産陶器は京都と猿投窯産は９世紀後半よりも前半に属する製品が多い印象である。出土遺構のうち、９世紀第２四半期の操業と考えられる SI1670 は４回にわたり建て替えが行われた竪穴状工房であり（SI1670･B･C･C'）、施釉陶磁器が出土した SI1670B では２枚の床面から計９基の鍛冶炉が検出されている（第８図）。出土した陶磁器は９世紀中葉頃の灰釉陶器碗・皿であるが、堆積土上層からの出土であり意図的な設置や廃棄といった状況は確認できない。共伴遺物のうち、土器類は赤褐色土器と須恵器が主体で、土師器は少量である。器種は坏・皿といった供膳具が主体で、蓋も一定量出土している。この他、文字関連遺物（墨書土器・須恵器坏転用を含む硯類）、鉄生産関連遺物（羽口・鍛造剥片）、漆関連遺物（漆容器として使用された坏・甕）が出土している。また、９世紀中葉に使用された竪穴住居の廃絶後に掘削された廃棄土坑 SK1555・1556 等からも施釉陶磁器が出土している（第８図）。このうち SK1555 は窪地として残った SK1559 を利用した廃棄土坑であり､SI1670B と同じく文字関連遺物･鉄生産関連遺物・漆関連遺物（漆紙文書含む）が出土している。

大畑地区中央部では鍛冶工房からの出土は１軒のみであるが、周辺の廃棄土坑からも施釉陶磁器と鉄生産関連遺物が共伴して出土していることから、施釉陶磁器は鉄生産関連施設で使用され、役目を終えた時点で土坑内に廃棄されたものと考えられる。また、漆関連遺物の出土量が多いことから周辺に存在すると想定される漆関係の工房で使用されていた可能性も考えられる（註２）。使用方法については想定となるが、施釉陶磁器の出土が意図的な設置（埋納）状況ではないこと、器種も碗・皿・段皿といった供膳具であることから、建物構築時の地鎮ではなく生産開始前または終了時などに行われた儀式（祭祀）に使用されたものであったと考えておきたい。なお、大畑地区では９世紀後半の庇付の掘立柱建物も検出されており、これらの建物は周辺での文字関連遺物の出土も多いことから生産関連施設を管理する官衙施設と考えられている（伊藤 2006）。また､「厨」と書かれた墨書土器が多いことから地区内では給食を伴った儀礼が行われていた可能性もある。ただし、施釉陶磁器の出土量が胆沢城跡東方官衙南地区に比べて少ない点は注意が必要である。

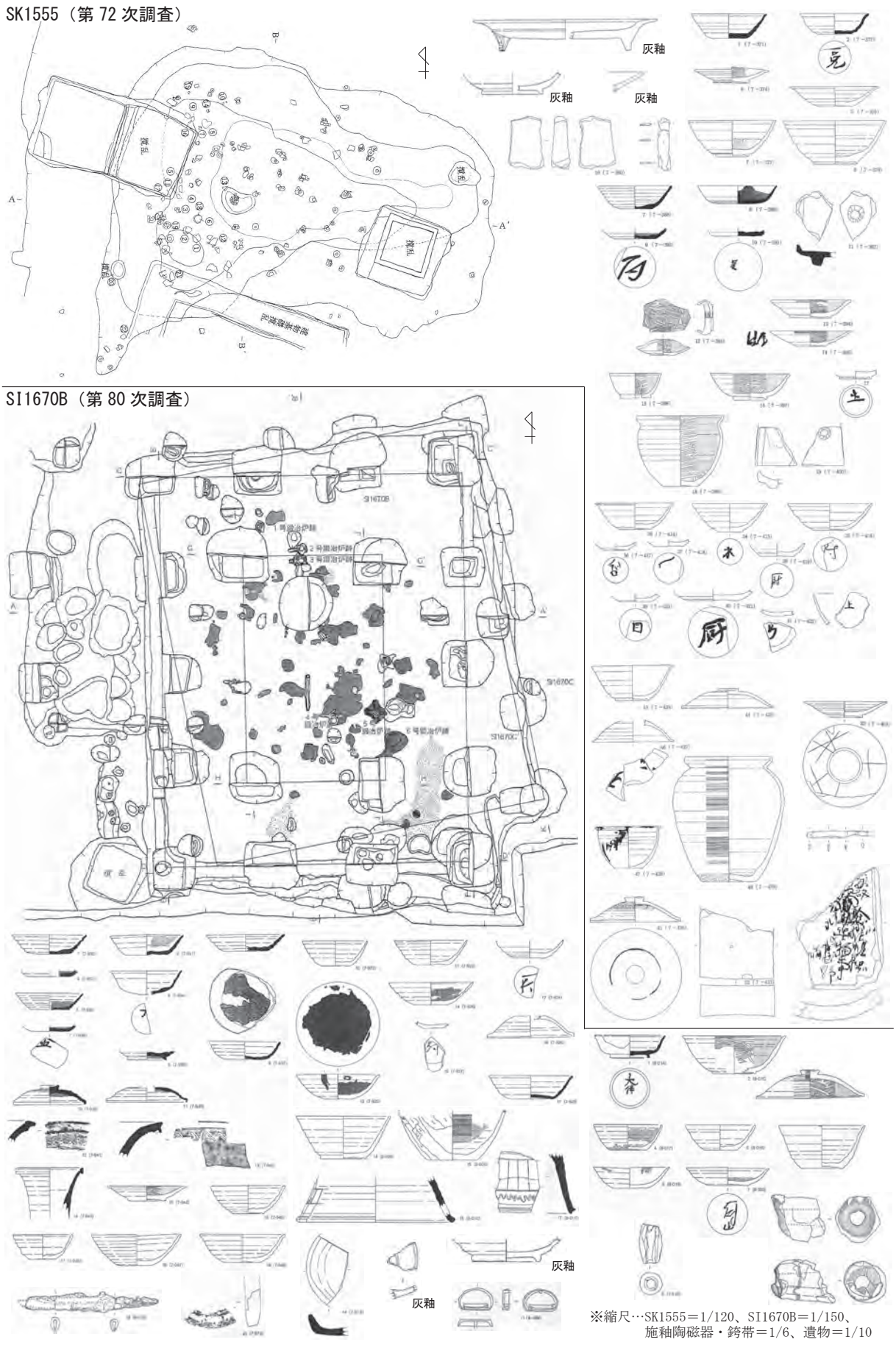
この他、大畑地区では３棟の掘立柱建物からも施釉陶磁器が出土している。事例が少なく、しかも第 75 次調査区 SB1582 は柱の抜き取り部分からの出土であることから根拠としては弱いが、秋田城跡でも胆沢城跡と同じく建物構築直前に地鎮の為の陶磁器埋納を行っていた可能性も考えられる。



大畑地区地区中央部遺構配置図



第７図　秋田城跡出土地点分布図



第８図　秋田城跡大畑地区中央部施釉陶磁器出土遺構

第４表　秋田城跡出土地点一覧表

地区名	次数	遺構名	遺構種別	器種・点数	産地・型式	特記事項
政庁域	40次	遺構外	遺構外	緑釉　稜碗1	京都	
大畑地区中央部	72次	SI1541	竪穴住居	緑釉　碗1	京都	淡（黄）緑色釉、削り出し高台
		SK1555	土坑	灰釉　碗1・皿1・三足盤1	猿投　黒笹90	
		SK1556	土坑	緑釉　碗1 灰釉　碗1・段皿2	京都 猿投　黒笹90	淡（黄）緑色釉、削り出し高台
		遺構外	遺構外	灰釉　碗1・段皿1	猿投　黒笹90	
大畑地区中央部	75次	SI1543	竪穴住居	緑釉　碗1	京都	淡緑色釉、削り出し高台
		SK1559	土坑	緑釉　碗1 灰釉　碗1	猿投　黒笹14～90 猿投　黒笹14？	
		SB1582	掘立柱建物	緑釉　輪花碗1	京都	
		SD1598	溝	灰釉　不明1		小破片、文章記載
		SD1599	溝	灰釉　碗1		
		遺構外	遺構外	緑釉　段皿1 灰釉　段皿2		同一個体か
大畑地区中央部	79次	遺構外	遺構外	灰釉　皿1		
大畑地区中央部	80次	SI1670B	竪穴状工房	灰釉　碗2		
		SB1665	掘立柱建物	緑釉　碗1		濃緑色釉
		遺構外	遺構外	灰釉　碗1・皿1		
大畑地区	54次	SI1046	竪穴住居	灰釉　瓶1		
		SB1001	掘立柱建物	灰釉　皿1		
		遺構外	遺構外	灰釉　碗2・瓶1 白磁　碗1	邢窯	
大畑地区	60次	SI1217	竪穴住居	緑釉　碗1		
		遺構外	遺構外	灰釉　段皿1		
大畑地区	84次	SK1778	土坑	灰釉　皿1	猿投　黒笹90	底部外面に墨書「祥館」
		SD1767	溝	灰釉　皿1		
		遺構外	遺構外	緑釉　皿1 灰釉　碗4・皿1・段皿1		碗1点は漬け掛け
大畑地区	87次	遺構外	遺構外	緑釉　碗1	猿投	
				灰釉　碗2		
大畑地区	88次	SI1900	竪穴住居	緑釉　碗1		遺構外出土の灰釉碗は漬け掛け
		SK1916	土坑	緑釉　碗1		
		SD1897	溝	灰釉　壷1		
		遺構外	遺構外	緑釉　皿1 灰釉　碗1	猿投　黒笹90	漬け掛け
大畑地区南部	74次	遺構外	遺構外	緑釉　段皿1 灰釉　碗1		淡緑色釉、胎土硬質
南外郭線	17次	SI205	竪穴住居	灰釉　皿1		
		遺構外	遺構外	緑釉　碗1・皿1 灰釉　碗2		
		不明	不明	白磁　托1	邢窯	白磁托は報告書に実測図無い為、秋田市史から引用
南外郭線	24次	SI370	竪穴住居	灰釉　碗1		
南外郭線	44次	SI846	竪穴遺構	青磁　碗1	越州	
		遺構外	遺構外	灰釉　碗1		刷毛塗り、輪高台
焼山地区	89次	SI1956	竪穴住居	青磁　壷1	越州	
		遺構外	遺構外	灰釉　段皿1		
焼山地区	104次	SG2287土取り穴	土取り穴	灰釉　皿1		
		遺構外	遺構外	灰釉　瓶1		
鵜ノ木地区	7次	黒色砂層	遺構外	灰釉　皿1		鵜ノ木地区
鵜ノ木地区	39次	遺構外	遺構外	灰釉　皿1		
鵜ノ木地区	42次	遺構外	遺構外	緑釉　稜碗1	篠窯？　石作1？	黄緑色釉、須恵器質
鵜ノ木地区	63次	遺構外	遺構外	灰釉　蓋1		
鵜ノ木地区	67次	SK1479	土坑	灰釉　皿1		
		SE1473	井戸	灰釉　皿1		
		遺構外	遺構外	灰釉　碗1・皿1 灰釉　多嘴壷1	猿投　8世紀末？	灰釉多嘴壷は69次調査出土破片と接合、内容物分析
鵜ノ木地区	69次	遺構外	遺構外	緑釉　輪花碗1 灰釉　皿1		緑釉輪花碗の胎土硬質
鵜ノ木地区	91次	SI1975	竪穴住居	灰釉　蓋1		
城内西大路地区	93次	遺構外	遺構外	灰釉　碗2・皿1		碗1点は漬け掛け

ここで施釉陶磁器の種別の使い分けの有無についてみておく。大畑地区での内訳をみると、緑釉陶器 14 点、灰釉陶器 37 点、白磁１点となっており、器種は壷・瓶類３点を除いて全て供膳具である。胆沢城跡と同じく供膳具が主体であるが､灰釉陶器が全体の約７割を占めており比率が大きく異なる。このことは、生産活動に伴って使用される陶磁器類の主体は灰釉陶器であり、胆沢城跡の儀礼用のものよりも種別と用途の結びつきが強かったことを示しているものと考えられる。

以上、秋田城跡における施釉陶磁器の用途について推定を試みた。胆沢城跡と同じく状況証拠からの論証にはなるが、生産関連施設及びその周辺からの出土が多いことから、饗給儀礼用としてより生産活動に伴う使用が主体であったと考えられる。また、灰釉陶器の比率が高いことから胆沢城跡よりも種別の選択性が強かった可能性がある。後述する払田柵跡ではまた異なる比率を示すが、秋田城跡

に限って言えば生産関連施設での儀式には灰釉陶器を用いるという一定のルールが働いていたことを示すものといえる。最後に大畑地区に次いで出土量の多い鵜ノ木地区についても簡単に触れておきたい。鵜ノ木地区では 12 点の施釉陶磁器が出土している。この地区でも灰釉陶器皿類が主体であるが、尿瓶と考えられる灰釉陶器多嘴壷といった珍しい器種も出土している。出土状況をみると大半のものは遺構外出土であり、廃棄あるいは後世の流れ込みによるものと考えられる。土器類も含め遺構間・地区間での接合等を行う必要があり証明することは非常に難しいが、仮に大畑地区から持ち込まれたものであったとすれば、秋田城跡では基本的に施釉陶磁器は大畑地区でのみの使用されていたという範囲の絞り込みができる可能性もある。

（２）払田柵跡（第９・10 図、第５表）

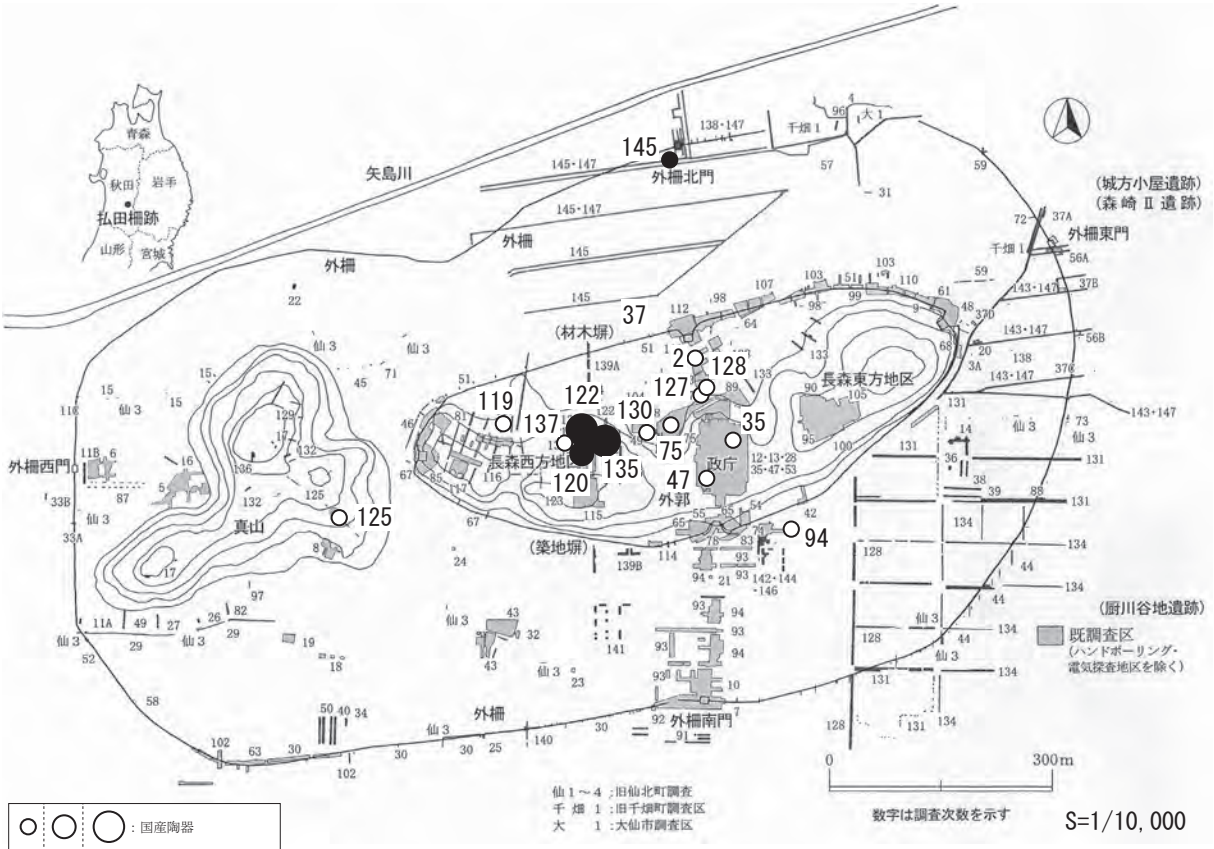
払田柵跡は秋田県内陸南部、横手盆地北側の仙北平野中央部にあたる大仙市払田及び仙北郡美郷町本堂城回に所在する。遺跡は真山・長森という二つの小丘陵を中心として南側を丸子川、北側を川口側と矢島川という小河川によって区切られた沖積低地上に位置する。払田柵という名称は、他の城柵と異なり文献上には記録が無いことから地名をとって名付けられたものである。造営に関する記事は無いが、平成 27 年度まで 149 次にわたって実施された発掘調査によって外柵を伴う東北地方最大級の城柵遺跡であること、また第 73 次調査区で出土した外柵材木塀の年輪年代測定の結果（西暦 801 年）により外柵の設置年代及び払田柵の創建年代が９世紀初頭になることが判明している。このことから、研究者によって「河辺府」・「雄勝城」・「第二次雄勝城」に比定する説が出されている。

払田柵跡の外周は外柵と呼ばれる東西1370ｍ、南北780ｍが材木塀で囲まれた楕円形プランであり、外柵内には東側に位置する長森の周囲東西 765 ｍ、南北 320 ｍを築地塀で囲んだ外郭線、さらに長森の中央部には板塀で囲まれた政庁域が存在する。外柵まで含めると区画施設が三重となるが、これは他の城柵ではみられない特徴である。なお、外郭線までの規模では志波城跡のほうが大きいが、外柵までを含めると東北地方の古代城柵のなかでは最大級の規模を誇っている。

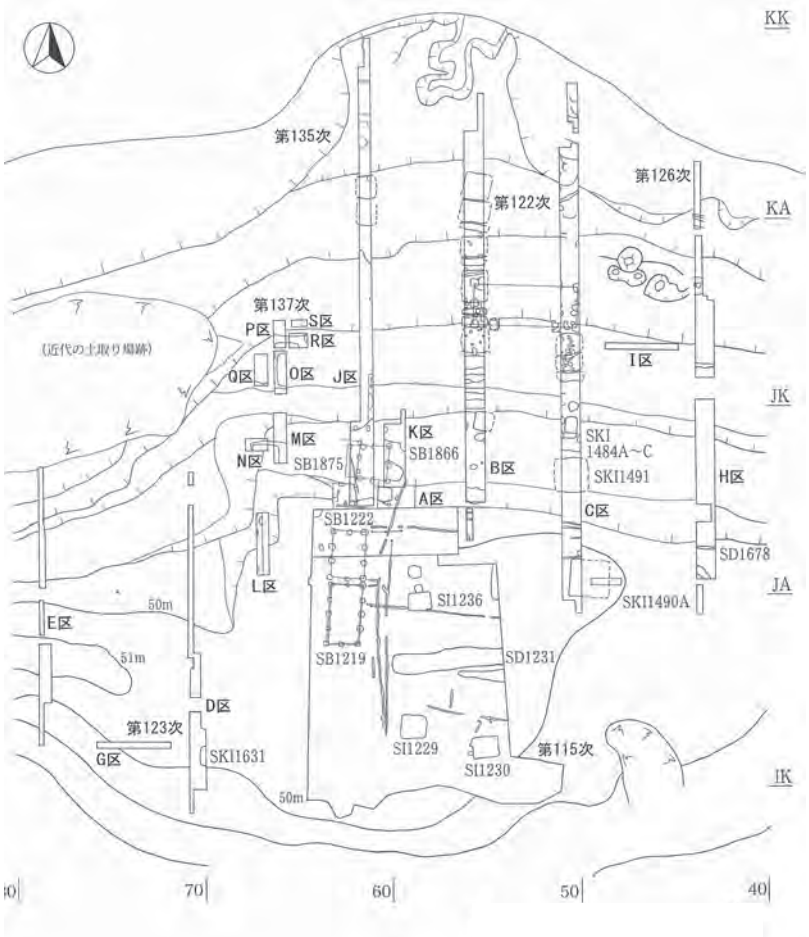
払田柵跡が機能していた期間は、外柵材木塀の年輪年代測定結果及び出土土器の年代観から９世紀初頭～ 10 世紀後半の約 200 年間と考えられている。出土遺物と遺構の重複関係から政庁は５期、外郭線は４期の変遷が示されており、政庁域は政庁Ⅲ期（10 世紀前葉）に最大となり東西 64 ｍ、南北 76 ｍの方形プランとなる。区画施設はⅠ期には一部に築地塀が使用されているが、基本的には板塀である。外郭線もⅡ期（９世紀後半）になると築地塀から材木塀へと変化している。なお、外柵は政庁Ⅰ期（９世紀前半）にのみ設置されたものであり、Ⅱ期以降は囲いが長森周辺の外郭線と政庁域の二重となって真山が囲いの外に出る。また、他の城柵では外郭線内に作られていた官衙域が外柵と外郭線の間に置かれているが、外柵が無くなった後も東方官衙域は９世紀初頭～ 10 世紀前半、南西官衙域は 10 世紀初頭～後半まで機能していたことがわかっている。

出土遺物は、文字関連遺物（墨書土器、木簡、硯、漆紙文書）、鉄製品、木製品（食器類等）、鉄生産関連遺物（羽口・金床石・鉄滓）等豊富であり、かつ希少遺物として渤海産と考えられる線刻土器もある（第10図）。施釉陶磁器は約70点出土しているが、小破片が多く器形復元が可能な個体は少ない。器種は、緑釉陶器では碗（輪花碗・稜碗含む）、小碗、皿（段皿含む）、手付瓶、蓋、花文香炉蓋、灰釉陶器では碗、皿、長頸瓶（壷）、平瓶、白磁は碗、青磁は皿（輪花皿含む）がある。

施釉陶磁器の出土地点を政庁に近い地区からみると、政庁域北東地区（第 35 次）、政庁域西前殿脇（第 47 次）、長森北方地区（第 75・127・128・130 次）、政庁西側地区（第 120・122・135・137 次）、外郭西門東側地区（第 119 次）、外郭南門地区（第 94 次）、外柵北門地区（第２・145 次）、真山丘陵

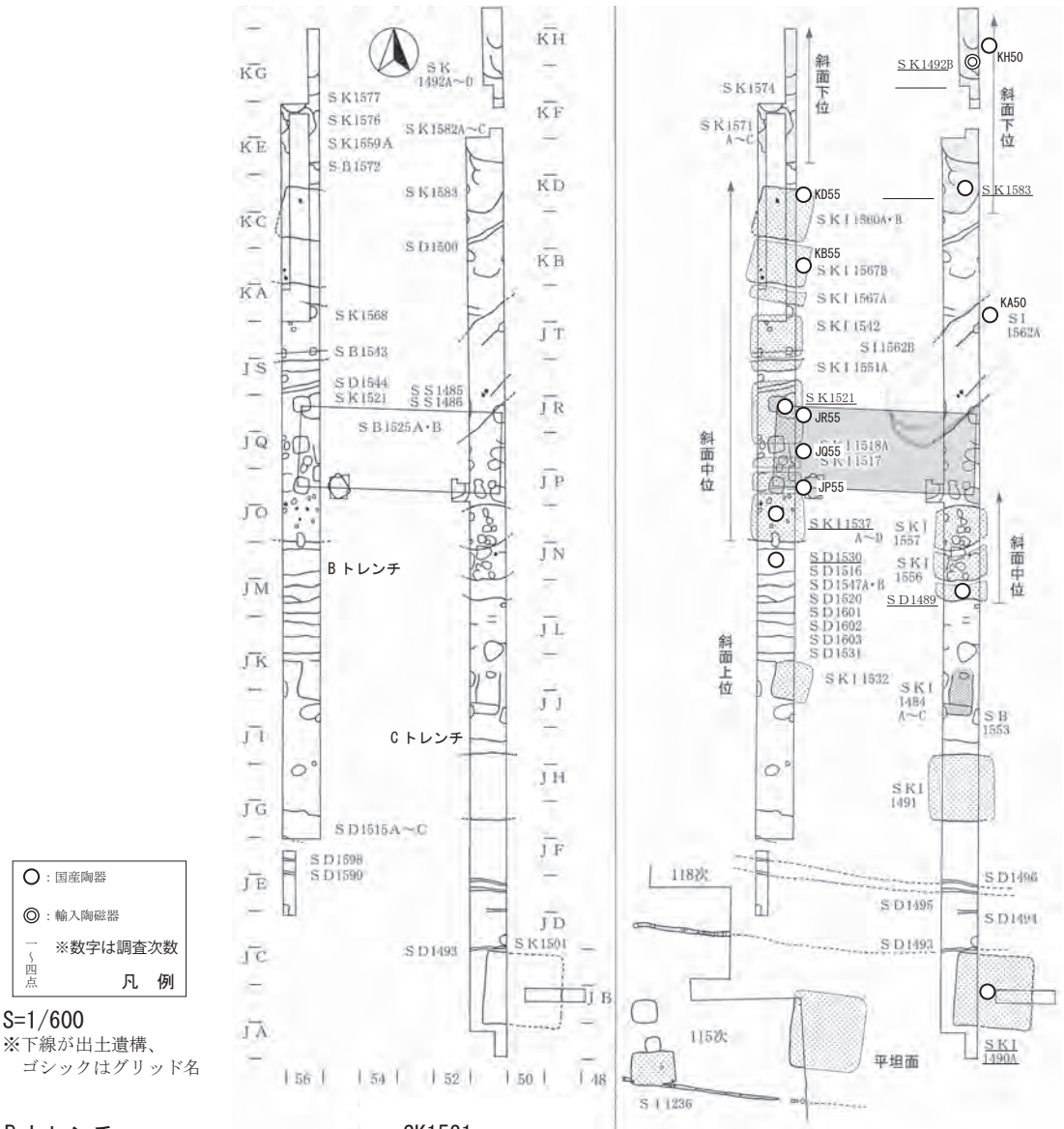


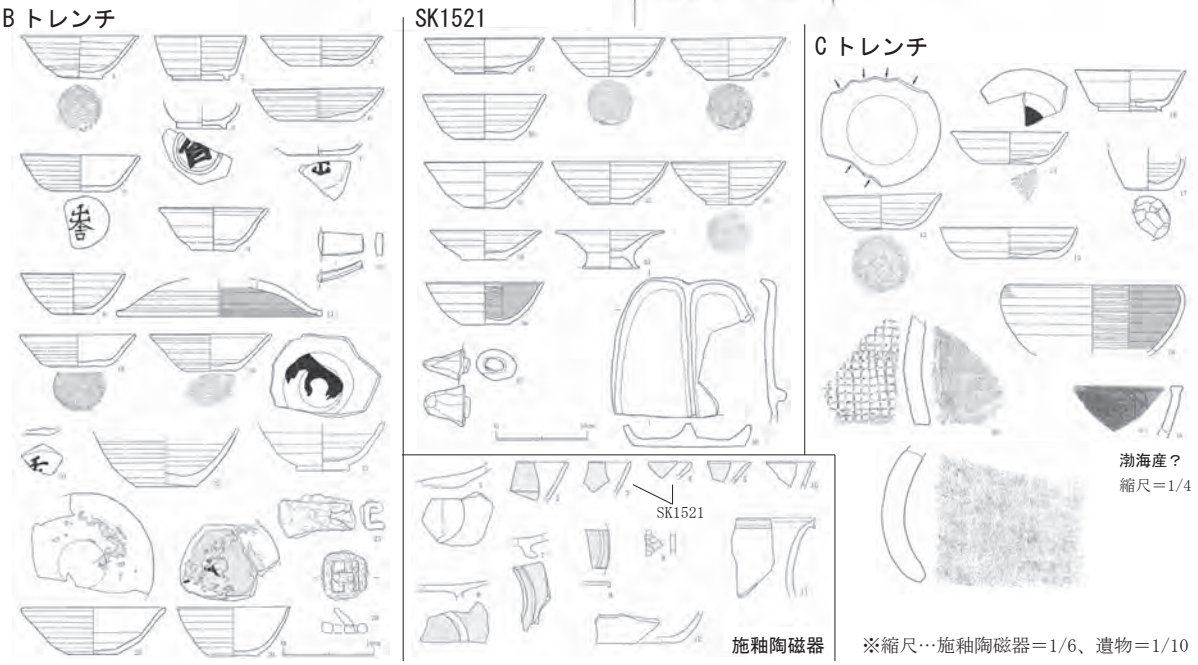
長森西方地区（第 120・122・135・137 次）遺構配置図



S=1/1,200

第９図　払田柵跡出土地点分布図





第 10 図　払田柵跡第 122 次調査出土地点分布図

第５表　払田柵跡出土地点一覧表

地区名	次数	遺構名	遺構種別	器種・点数	産地・型式	特記事項
政庁域北東地区	35次	SX326	土坑	灰釉　瓶1	尾北　黒笹90併行	破片数6点
政庁域西前殿脇	47次	遺構外	遺構外	緑釉　皿1	猿投　折戸53？	黒笹90か
長森北方地区	75次	遺構外	遺構外	緑釉　碗1	東濃　大原2	448集に文章記載
長森北方地区	127次	遺構外	遺構外	灰釉　長頸瓶1		産地・年代記載無
長森北方地区	128次	SL1736河川跡上位撹乱	遺構外	緑釉　不明1		448集に文章記載
長森北方地区	130次	遺構外	遺構外	灰釉　碗1	猿投　黒笹90	
外郭北門地区	2次	盛土整地層	整地層	緑釉　小碗1	洛西　9C後半	448集に文章記載
長森西方地区（政庁西側地区）	120次	A2区遺物包含層	遺物包含層	緑釉　皿1・段皿1・小碗1・碗1	猿投　黒笹90	
		A1・2区遺物包含層	遺物包含層	灰釉　皿1・長頸壷1・平瓶1	猿投　黒笹14	
		A2区表土	遺構外	青磁　輪花皿1	越州　皿Ⅰb か坏Ⅰ1-2	
長森西方地区（政庁西側地区）	122次	SKI1490A	竪穴建物	緑釉　碗1	猿投　黒笹90	
		SKI1537	竪穴建物	灰釉　瓶2	猿投　黒笹90	
		SK1492B	土坑	青磁　皿？1	越州	
		SK1521	土坑	緑釉　碗2 緑釉　碗1・皿2	洛西　9C後半 猿投　黒笹90	
		SK1583・遺物包含層	土坑・遺物包含層	緑釉　皿1	猿投　黒笹90	
		SD1530	溝	緑釉　蓋1・花文香炉蓋1	猿投　黒笹90	
		SD1489	溝	灰釉　長頸瓶1	猿投　黒笹14	
		Bトレンチ整地層	整地層	緑釉　碗1	洛西　9C後半	この他産地不明の無釉陶器1点
		Bトレンチ遺物包含層	遺物包含層	緑釉　碗4・輪花碗1・稜碗2・段皿1	猿投　黒笹90	
		Cトレンチ遺物包含層	遺物包含層	緑釉　碗1・段皿2 灰釉　長頸瓶1・瓶1	猿投　黒笹90 猿投　黒笹14・90	
長森西方地区（政庁西側地区）	135次	SKI893A	土坑	緑釉　不明2		小破片多数、産地・年代記載無
		SK1858	土坑	緑釉　不明1		
		SKI1892A	竪穴遺構	灰釉　不明1		
		SKI1896	竪穴遺構	灰釉　碗2		
		遺物包含層	遺物包含層	緑釉　不明3 灰釉　不明4 青磁　不明4	越州	
長森西方地区（政庁西側地区）	137次	SKI1924	竪穴建物	緑釉　不明		産地・年代記載無
				灰釉		
外郭西門東側地区	119次	H2トレンチ整地層	整地層	緑釉　手付瓶1	猿投　黒笹90	破片数6点、焼成前穿孔
外郭南門地区	94次	SD1041	溝	灰釉　皿1	東濃　虎渓山1	無高台皿
		遺物包含層	遺物包含層	灰釉　皿1	東濃　光ヶ丘1	
		不明	不明	灰釉　瓶2	東濃　光ヶ丘1	448集に文章記載
外柵北門地区	145次	SKP2061	柱穴	灰釉　皿1	猿投　黒笹90	
		SL2040河川跡	遺構外	白磁　碗1	Ⅳ類	
真山丘陵部	125次	6aトレンチ崩落土	遺構外	灰釉　碗1	猿投　黒笹14	

部（第 125 次）となっている。長森北方・西方地区での出土が多いが、政庁域では２点、外郭南門地区では１点、外柵北門地区では２点、真山丘陵部では１点とその他の地区での出土量は少なく、外柵と外郭の間の地区では官衙域を含めても出土は確認されていない（註３）。出土遺構は多い順に土坑６基・竪穴建物５軒・溝２条等となっているが、長森西方地区を除いてほとんどが遺構外からの出土である。続いて具体的な様相について、長森西方地区を例としてみていく。

長森地区は、政庁を中心に北方地区・東方地区・西方地区に分けられる。北方地区では政庁北門から長森裾部までの道路や仮設的な鍛冶工房が検出されている。東方地区では創建期から終末期までの掘立柱建物や竪穴建物と区画用の板塀が検出され、７期の変遷が考えられている。性格については政庁Ⅱ～Ⅳ期の脇殿と同規模の大型掘立柱建物が検出され、墨書土器（「厨」・「官」等）や漆紙文書が出土していることから実務官衙域と考えられている。西方地区は丘陵北側の平坦面から緩斜面部において古代に整地による地業によって段状地形となっており、この範囲で９世紀第４四半期から 10 世紀前半代の鍛冶工房と考えられる竪穴建物や掘立柱建物群が検出されていることから、生産活動域と考えられる。西方地区では、特に第 122 次調査区にあたる北側斜面中位で施釉陶磁器が多量に出土している。この北側斜面中位部分では、標高 43 ～ 45 ｍの急斜面部に竪穴式、標高 45 ～ 47 ｍの緩斜面部に掘立柱式の鍛冶工房と大型の掘立柱建物・土坑群が検出されている。鍛冶工房は造り替えと床面の嵩上げを繰り返して約 30 ｍの範囲で 13 棟重複している状況が確認されており、この地区が鉄生産の場所として長く使用されていたことを示している。出土状況をみると遺構内としては工房である竪穴建物と土坑が主で、遺構外出土のものもほとんどが竪穴建物の直上の遺物包含層からの出土である。

出土地点と遺構内・遺物包含層から共伴した鉄生産関連遺物（羽口・金床石・鍛造剥片）の存在から、この地区で出土した施釉陶磁器は生産に関連して使用されたものと考えられる。なお、出土した施釉陶磁器は小破片が多く（第 10 図）、具体的な使用状況を読み取ることはできないが、ここでは秋田城跡と同じく生産開始前・終了時などの儀式用であったと考えておきたい。

ここで施釉陶磁器の種別の使い分けの有無についてみておく。長森西方地区での内訳をみると、緑釉陶器 32 点、灰釉陶器 16 点、青磁５点となっており、緑釉陶器は供膳具、灰釉陶器は壷・瓶類が多い。緑釉陶器が灰釉陶器の約２倍出土しており、器種も灰釉陶器では壷・瓶類が主体である等、胆沢城跡や秋田城跡とはまた異なる組成を示す。同じ生産に関わる使用でも秋田城跡では灰釉陶器主体であったが、払田柵跡では緑釉陶器のほうが多く、様相が異なる。

以上、払田柵跡における施釉陶磁器の用途について検討を加えた。鍛冶を中心とした生産関連施設及びその周辺からの出土が多く、秋田城跡と同じく生産活動に伴う使用が主体と考えられるが、緑釉陶器の比率が高いなど大きく異なる点もある。この点は両遺跡では工房の操業時期に差があることから時期差の可能性もあるが、同じ生産活動に伴う使用であっても払田柵跡では陶磁器の種別に強い指向性がなかったことを示すものとも考えられる。なお、払田柵跡では胆沢城跡・秋田城跡と異なり掘立柱建物からの出土は無く、建物構築時の地鎮用としての使用は無かったと考えられる。

おわりに

最後に各城柵の状況に簡単に触れてまとめとしたい。まず陸奥側であるが、胆沢城跡では施釉陶磁器は東方官衙南地区で多量に出土している。使用痕がほとんど認められず、共伴土器も含めて供膳具主体であることから、施釉陶磁器は他の土器類とともに饗給儀礼に使用されたものと考えられた。ただし、共伴土器との数量関係から儀礼に使用された土器類のなかでの比率は低く、種別も混在していることから行われた儀礼は都城のような厳格な規範に基づくものではなかったと考えられる。この他、掘立柱建物の柱穴から出土していることから建物構築時の地鎮用、生産関連施設周辺から出土していることから生産活動に伴った使用もあったと考えられる。なお、志波城跡と徳丹城跡では出土量が少なく具体的な様相は不明であるが、どちらも短期間で廃絶していることを考慮すると、この２つの城柵では施釉陶磁器はほとんど使用されなかったと考えられる。

出羽側の城柵では、秋田城跡・払田柵跡ともに城内の鍛冶・漆関連工房といった生産関連施設及びその周辺から出土していることから生産活動に伴った使用が主体であると考えられた。使用方法としては意図的な設置・埋納といった出土状況ではないことから、地鎮ではなく生産開始または終了時の儀礼に用いたものと想定される。なお、秋田城跡では灰釉陶器の比率が非常に高いのに対して払田柵跡では緑釉陶器のほうが多く、同じ出羽側の城柵、同じく生産活動に伴うものといっても細かい内容には差異があることも確認された。

以上、城柵遺跡を対象として検討を行ったところ、施釉陶磁器は饗給儀礼用、地鎮用、生産活動に伴う儀式用として用いられたものであることがわかった。ただし、その用途の主体は陸奥側と出羽側では大きく異なり、陸奥側（胆沢城跡）では饗給儀礼用、出羽側（秋田城跡・払田柵跡）では生産活動に伴う使用であったと考えられる。また、廃棄土坑や焼土・炭化物を含む遺物包含層から出土していることから、これらの城柵では施釉陶磁器は最終的には意図的に廃棄されていたことも判明した。このような廃棄状況は、城柵遺跡において施釉陶磁器は日常什器として使用されたものではなく、役目を終えた後は転用されることも貴重品として伝世することも無く廃棄されていたことを示しているといえる。

今回は出土量の多い遺跡を対象とした為ある程度の傾向を読み取ることができたが、このような状況が城柵以外の遺跡でも確認できるかどうかについては次稿で検討を加えていきたい。

註

1．第 71 次調査 SD3110 出土の灰釉陶器輪花碗は猿投窯産百代寺窯式（11 世紀）に属することから今回は対象から除外した。

2．調査区内では漆関係の工房と明言できるものは無く調査区外に存在すると想定されているが、漆紙文書が出土した SI154 等の竪穴住居についてはカマドを持たないことから工房の機能も有していた可能性を考えておきたい。

3．払田柵跡では、城内全域の広範囲でトレンチによる遺構・遺物の確認調査が実施されている。

引用・参考文献

伊藤武士　2006 『秋田城跡　最北の古代城柵』同成社

2007 「九世紀の城柵」『九世紀の蝦夷社会』高志書院

伊藤博幸ほか　1984 「胆沢城東方官衙南地区出土の施釉陶器」『考古学雑誌』第 70 巻第 1 号　日本考古学会

秋田県教育委員会　2004 『払田柵跡　第 122 ～ 124 次発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第 379 集

2008 『払田柵跡　第 137・138 次発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第 447 集

2009 『払田柵跡Ⅲ　－長森地区－　【本編】』秋田県文化財調査報告書第 448 集

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所　2014 『払田柵跡　－発掘調査のあゆみ－』

秋田市教育委員会　1999 『秋田城跡　秋田城跡発掘調査概報　平成 10 年度』

2016 『秋田城跡調査事務所年報 2015　秋田城跡』

奥州市教育委員会　2006 『胆沢城跡　平成 16 年度発掘調査概報』

2016 『胆沢城跡　第 92 次・94 次・94 次補足・100 次調査概報』

川井正一ほか　1997「茨城県域における施釉陶磁器の検討(3)」『研究ノート』第６号　財団法人茨城県教育財団

高橋千晶　2006 「城柵の終末　胆沢城を中心として」『古代末期から中世前期の居館と宗教』2006 年岩手考古学会第 35 回研究大会資料集

高橋照彦　2015 「都と地方の土器」『官衙・集落と土器１　－宮都・官衙と土器－』第 18 回古代官衙・集落研究会報告書

奈良文化財研究所　2015 『官衙・集落と土器１　－宮都・官衙と土器－』第 18 回古代官衙・集落研究会報告書

西野　修　2008 『志波城・徳丹城　古代陸奥国北端の二城柵』同成社

2016 「胆沢城・志波城・徳丹城」『アテルイと東北古代史』高志書院

松本太郎　2013 『東国の土器と官衙遺跡』六一書房

水沢市教育委員会　1982 『胆沢城跡　昭和 56 年度発掘調査概報』

1984 『胆沢城跡　昭和 58 年度発掘調査概報』

1985 『胆沢城跡　昭和 59 年度発掘調査概報』

村田　淳　2010 「岩手県出土の初期貿易陶磁集成」『岩手考古学』第 21 号　岩手考古学会

2016 「東北地方北部の施釉陶磁器」『第Ⅱ分科会　北東北９・10 世紀社会の変動　研究報告資料集』日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会

盛岡市教育委員会　1982 『志波城跡　昭和 56 年度発掘調査概報』

1999 『志波城跡　平成 10 年度発掘調査概報』

矢巾町教育委員会　1985 『徳丹城跡　昭和 59 年度発掘調査概報』

2010 『徳丹城跡　第 69 次発掘調査』

山中敏史　1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

図版出典

第１図　奥州市教委 2016 から転載、加筆　　第２図　奥州市教委 2006、水沢市教委 1984、高橋 2006 から転載、加筆

第３図　水沢市教委 1984・1985 から転載、加筆　　第４図　村田 2016 から転載

第５図　盛岡市教委 1982・1999 から転載、加筆　　第６図　矢巾町教委に 1985・2010 から転載、加筆

第７図　秋田市教委 2016、伊藤 2006 から転載、加筆　　第８図　秋田市教委 1999 から転載

第９図　秋田県教委 2008・秋田県教育庁 2014 から転載、加筆　　第 10 図　秋田県教委 2004 から転載、加筆

下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡出土掻器の変形過程について

村　木　　敬

筆者がかつて調査及び整理した下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡では、後期旧石器時代後半から縄文時代草創期にかけての複数の石器集中区を確認した。その結果、岩手県だけでなく東北地方の後期旧石器時代後半期の様相を明らかにすることができた。報告書中では各石器群の概略だけをまとめ、個別の石器について整理するまでには至らなかった。ここではそこで考察できなかった縄文時代草創期に属する掻器を中心に検討し、変形過程を捉えていきたい。

1．はじめに

本稿では 下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡から出土した縄文時代草創期に属する掻器を観察し、変形過程及びその要因を抽出することを目的とする。

まず、当該石器群の概要を簡単に記載しておく。本遺跡で確認できた当該期に属する集中区は、石器集中区１・14 の２箇所あり、尖頭器石器群に分類している。それらの石器集中区は遺跡内での行動が異なり、石器集中区１では尖頭器の調整、石器集中区 14 では石器生産及びそのほかの生産活動を行っている。ここでは後者のみを扱い進めていく。

石器集中区 14 からは石器 600 点が出土している。器種組成は、尖頭器、掻器、彫器、細石刃、剥片、チップ類からなる。石器材料組成は、頁岩が約半数を占め、珪質頁岩、玉髄質頁岩（玉髄・半透明頁岩と呼称されているもの）がそれぞれ約 1/4 からなる。これらを組み合わせた器種・石器材料組成表は第１表の通りである。器種と石器材料との関係であるが、尖頭器と掻器は共に頁岩、珪質頁岩、玉髄質頁岩を用いており、組成比も概ね類似している。

2．掻器

掻器は 16 点出土しており、ここで対象とする掻器は９点である。各項目に対する計測は第１図に従っており、計測値は第２表にまとめている。

（1）分析

平面形状：刃部が交差する端部を中心に見ていくと左右非対称の刃部形状であることを確認でき、以下の２種類に分けられる。分類は報告書中と同様であり、第１図の通りである。

Ⅰ：やや直接的な縁辺が交わるように加工を施すＶ字形状。

Ⅱ:直線的な縁辺部とやや弧状を呈する下縁が接するように加工を施し交わる端部を尖らせる形状。

この平面形状を規模と合わせて見ていくと、両形状は規模の大小に関わらず存在しているものの、Ⅰには規模の大きなもの、Ⅱには規模の小さなものが多く認められる傾向にある。

端部の位置：打面を上にして水平に配置させ、末端部へ垂線を下ろし、そこから開いた刃部が交わる端部までの角度（ａ°）を計測している。打面が存在しないものについては裏面の状況から垂線を想定している。角度は３～ 43° の範囲に収まり、10° 以下と 30° 以上に二分される。前者は剥片末端に端部の位置が近く、後者は末端から大きく離れることが捉えられる。

端部交差角：両側縁に認められる二次加工が施されている刃部が交わる端部の角度（ｂ°）を計測している。角度は 70 ～ 96° の範囲にあり、90° 前後に集中している。基本的に一定した交差角度を作出しており、特に差は見出せない。

刃部の長さ：長短２辺ある刃部について交差する端部から収束するまでの長さ（①・②）を計測している。短辺をａ、長辺をｂで表している（以下の分析でも同様に呼称している）。ａ（①）は 12 ～ 37mm、ｂ（②）は 30 ～ 101mm の範囲に収まる。ａの短辺は概ね同じような規模であるが、ｂの長辺では５・６が他よりも長い傾向にある。

刃部の深さ：縁辺部から二次加工の末端部までの長さ（③）を計測している。これは二次加工の頻度を想定しているものである。ａは１～ 14mm、ｂは１～ 19mm の範囲に収まる。数値で見ていくと差は見出せないものの、６・７・８などでは縁辺が全体的に深くなる傾向が認められる。

刃部の厚さ：長短の刃部の厚さ（④）を計測している。これは上記と同様、二次加工の頻度を想定しているものである。ａは１～ 8mm、ｂは１～ 11mm の範囲に収まる。数値に差を見出せないことから、素材剥片に規定されるものと思われる。

（２）素材剥片・剥片剥離技術

素材となる剥片はやや厚手の縦長剥片である。それに伴う剥片剥離技術は周縁方向と単設方向からの剥離が認められている。この剥離技術の差は、石核形状の差異が想定され、前者は両面体状、後者がサイコロ状を呈するものと思われる。ただし、前者の石核に伴う石器製作では、尖頭器の製作工程との関連が想定されるが、出土資料からはその関連について確認できていない。さらに接合資料と石核が少ないため、この点については判然としない。

（３）石器材料

利用している材料は、頁岩・珪質頁岩・玉髄質頁岩である。基本的に石器集中区の組成と変わらないものの、やや珪質頁岩の割合が高い。石器材料による平面形状の差は認められない。

（４）搬入・搬出工程

石器は製品、未製品、石核を搬入している。遺跡内では製作を行い、使用後に不要なものを廃棄している。そして、遺跡外へと製品、欠損品、石核を搬出している。欠損品を搬出しているということは、欠損品が搬入されているとも考えられる。この様相は尖頭器と大きく変わること無く、当該石器群の主要な石器に該当するものと思われる。

（５）小結

上記の分析から本石器について簡単にまとめておく。

本石器は製作直後の使用段階で欠損する可能性が非常に高いものであったと思われる。これらのなかには、欠損後に基部側の上半部が遺跡外へと持ち出されたり（９）、反転させて再利用をしている例（６）が確認できる。後者に認められる刃部再生作業は、主に刃部長辺で行われている。

各資料のうち完成品の形状は、欠損後に廃棄されている接合状況からみていくと１・２である。石材の規模に規定されるが、概ねこのような形状になるものと思われる。そして、これらは共通して素材剥片の形状が概ね確認できる。また、端部の位置は角度もなく、刃部加工は長さ・深さ・厚さ共に計測した数値は低い。ただし、刃部の厚さについては素材となる剥片に規定されていることから３のような例外も存在する。

反対に、刃部位置、刃部の長さ・深さなどの数値が大きくなるのであれば、変形した可能性を示唆できる。この条件に該当するものが第２図の下段にまとめた５～８の４点である。特に、端部の位置と刃部の長さの数値は他と比べて大きい。これらは欠損後に最低でも斜線部内に加工を施し、それぞれの平面形状へと変形したものと考えられる。

このように見ていくと、変形される平面形状の違いは、残存部位の長さに起因するものと想定される。部位が長ければ端部の位置は製作当初に近い位置にある。ただし、縁辺の修正が大きくなること

から、刃部が長くなる。反対に部位が短ければ端部の位置が大きく振れ、刃部は素材剥片を横断するように形成される。これらのことをまとめると、第２図のように完成品と変形後の形状に分類できる。

３．使用痕分析

ここでは当該石器の機能以外に使用部位を特定するために二次加工が施されている箇所に対して使用痕を観察している（註１）。一般的に掻器の機能は、基本的に皮鞣しに用いられていたと考えられている（堤 2011）。しかしながら、対象以外の掻器（10・11）についても同様の観察を行うことにより当該石器との機能差の抽出を試みている。さらに、それらの使用部位を特定することで、変形過程における使用部位の変化が捉えられるものと仮定した。

観察の結果、全ての石器からは使用痕跡が確認できなかった。刃部は基本的に未使用に近く、使用部位を特定できないとのことであった。このことから刃部再生ないし形状変更が頻繁になされた可能性が高い。これについては使用痕が刃部深くに形成されていないことからも想定できる。

４．まとめ

以上、縄文時代草創期の掻器について簡単ではあるものの概観した。刃部の変形過程は報告書中でも示唆した通り、従来の概念（榊 1988、Frison1968、Dibble1995）と大きく変わるものではないものと思われる。しかしながら、今回の検討によって変形過程の要因が捉えられたことから最後にまとめておく。

完成品と変形後の平面形状差からは、刃部再生よりも使用時の欠損の方が形状変化の大きな要因となる可能性がある。特に、対象とした掻器は、比較的厚さのない縦長剥片を素材に用いているため使用に対して耐久度合いが低いことからも、これを裏付ける要因となろうか。そして、残存部位の長さによって、それらはその後の平面形状が規定されると想定できる。その変形過程を把握するためには、分析項目の中でも刃部位置や刃部の長さが有効であることが考えられる。

このように掻器の変形過程の要因を捉えることができたのは大きな成果と言える。ただし、現段階では下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡に限ったことであるため、今後は当該期の遺跡に伴う資料を概観することで、変形過程及び使用についてより解釈を深めていきたい。さらに、本石器の機能や端部作出の意図などについては判然としないことから、これらについては今後の課題としておきたい。

註

(1)　使用痕分析については東北大学鹿又喜隆氏にご協力を頂き観察を行っている。

参考文献

鹿又喜隆　2013「御子柴・長者久保石器群における石器機能研究」『歴史』第 121 輯

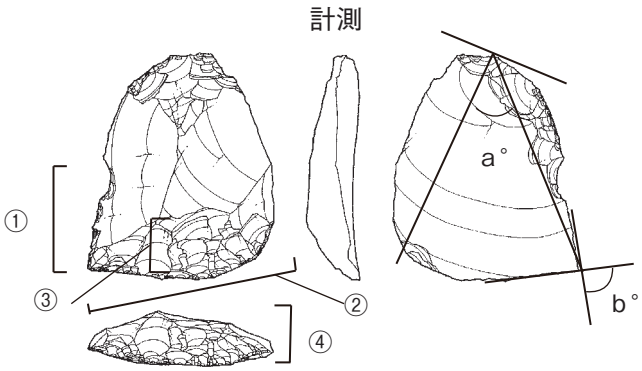
榊　剛史　1998「変形論の意義と適用範囲」『旧石器考古学』56　旧石器談話会

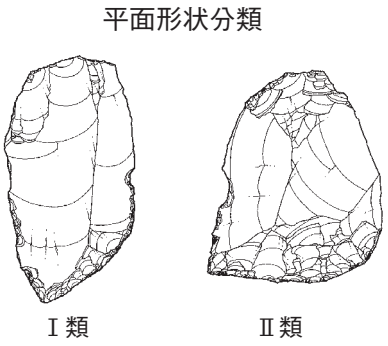
堤　隆　　2011『最終氷期における細石刃狩猟民とその適応戦略』雄山閣

村木　敬　2013『下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文埋報 608 集

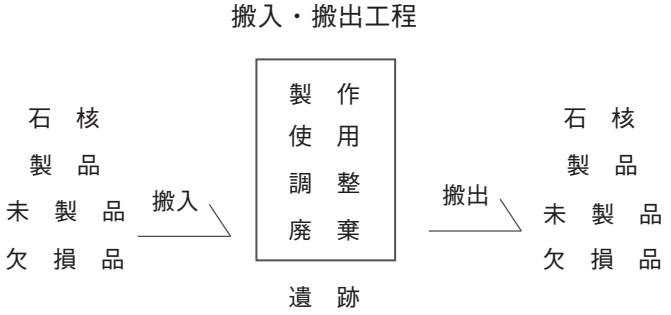
George C.FRISON　1968「A Functional Analysis of Certain Chipped Stone Tool」
『American Antiquity.vol.33,No2』

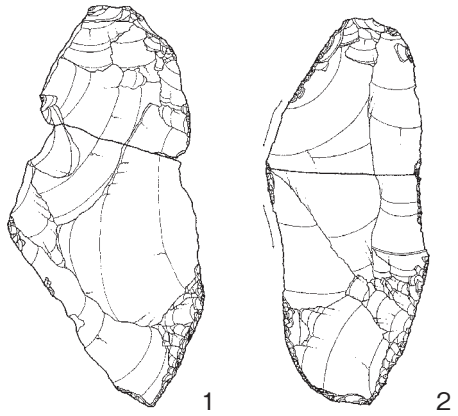
Harold L.DIBBLE　1995「Middle Paleolithic Scraper Reduction Background, Clarification,and Review of the Evidence to Date」『Journal of A rchaeological Method and Theory.vol.2,No4』

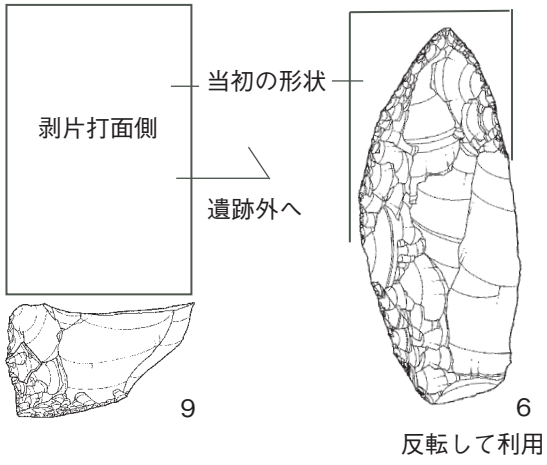


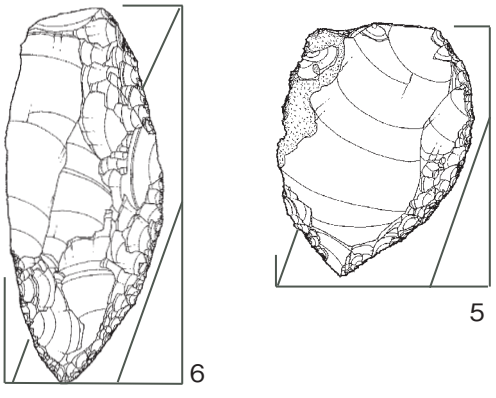


a° ：端部の位置
b° ：端部交差角
① ：刃部の長さ・短辺
② ：刃部の長さ・長辺
③ ：刃部の深さ
④ ：刃部の厚さ



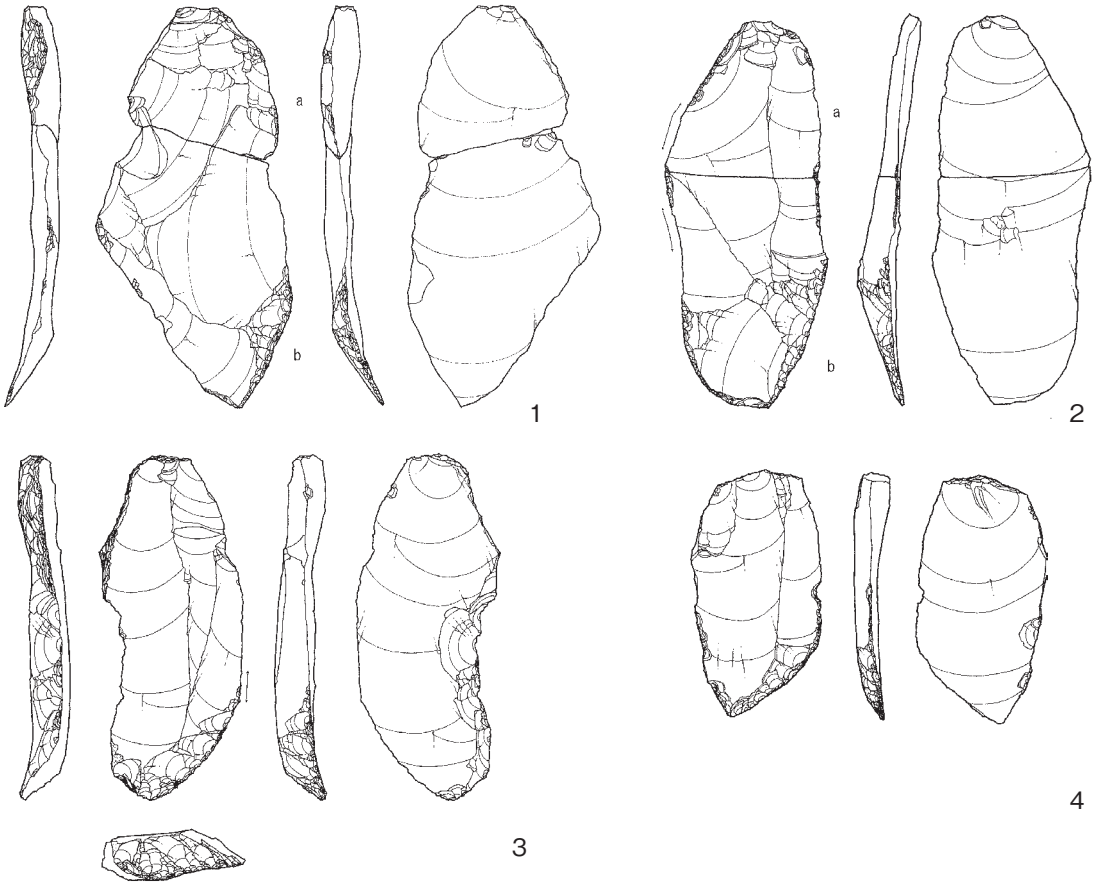




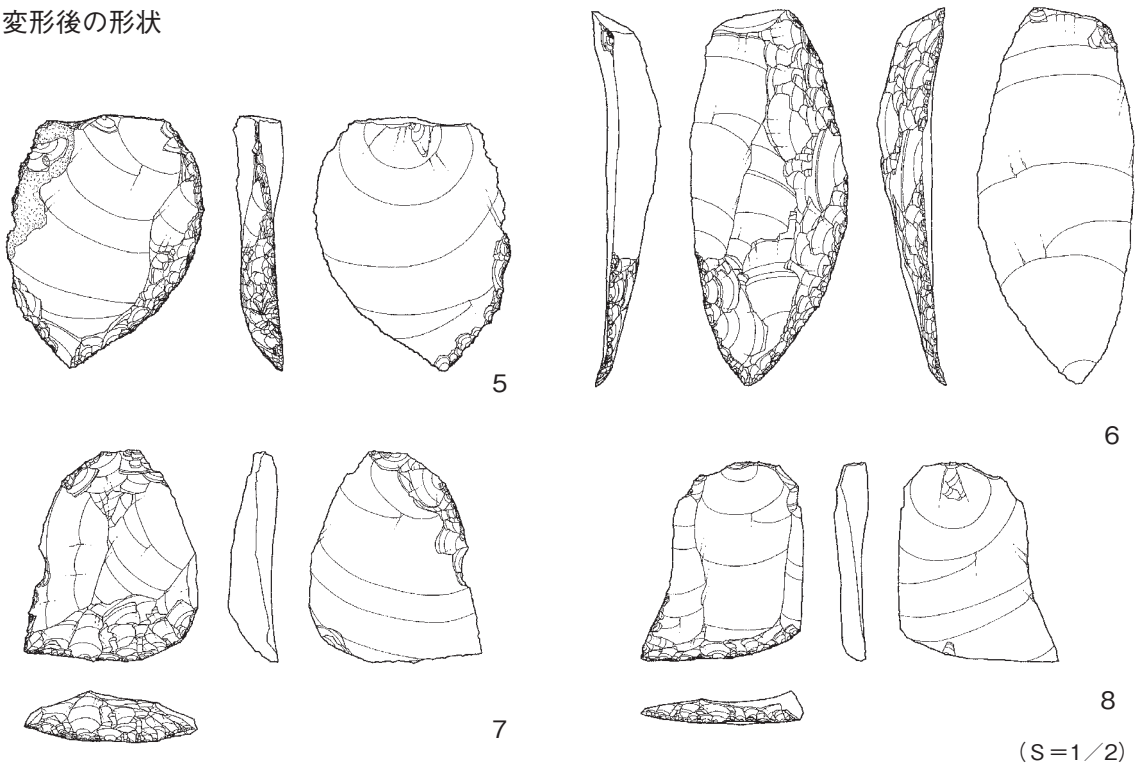


第１図　計測・分類・形状変形想定図 (1)

当初の形状

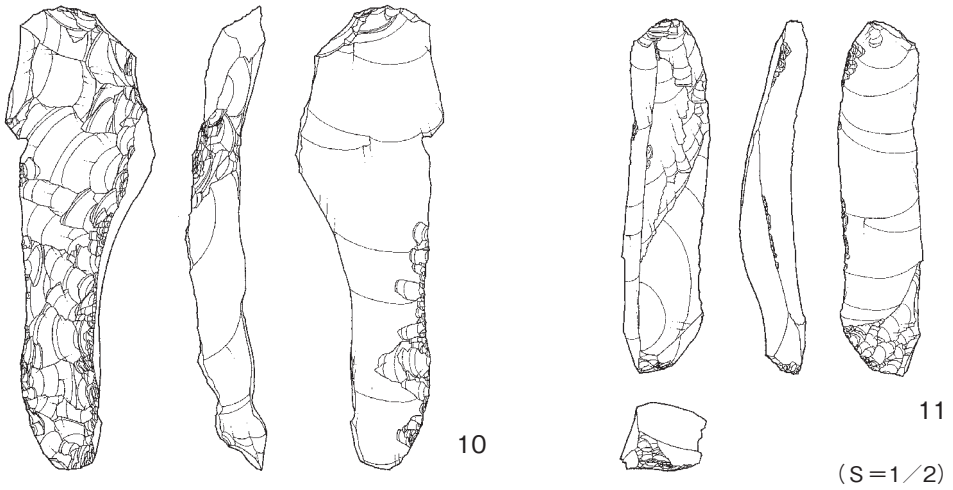


変形後の形状



（S＝1／2）

第２図　形状変形想定図 (2)



第３図　平面形状の異なる掻器

第１表　器種・石器材料組成表

	Po	Scr	Gr	Pi	Rf	Bl	Fl	ch	Mb	Hs	Gs	As	Ax	Re	Ref	計
sh	11	6			4	1	202	74					1		7	306
ssh	4	6	1		3	1	63	64	5							147
sshc	3	4			2		82	45								136
rsh								1								1
tu										3					1	4
qt				1												1
dac										1						1
an										1	1			1		3
san												1				1
計	18	16	1	1	9	2	347	184	5	5	1	1	1	1	8	600

第２表　石器分析一覧

No	長さ	幅	厚さ	重さ	石器材料	平面形状	端部位置 a°	端部交差角 b°	刃部長さ (a・b)	刃部深さ (a・b)	刃部の厚さ (a・b)
1	105.6	50.5	11.4	36.39	sh	Ⅰ	6	85	12・40	1～2・1～9	1～2・1～5
2	101.5	41.8	10.1	31.82	sh	Ⅱ	8	96	36・43	1～3・1～19	1～1.5・2～10
3	91.5	37.5	13.6	38.38	sh	Ⅰ	12	94	13・38	5～8・1～10	8・2～9
4	65.4	(34.7)	9.4	15.57	sshc	Ⅰ	3	88	29・42	2～3・1～7	1～1.5・1～6
5	67.2	51.8	13.4	37.22	ssh	Ⅰ	7	92	24・71	2～6・2～9	1～2・2～8
6	99.8	40.9	17.6	50.17	sh	Ⅰ	8	70	37・101	1～14・3～19	3～7・3～11
7	55.7	45.7	13.4	26.61	ssh	Ⅱ	43±1	83	25・48	2・6～16	1～3・5～11
8	52.7	42.5	8.9	14.86	ssh	Ⅱ	30±2	63	20・43	1～8・3～9	0.5～2・3～5
9	(30.1)	(47.7)	(10.5)	10.52	ssh	Ⅰ	-	90	30・30～	1～5・13～	1～5.5・7～11
10	122.3	39.3	21.0	55.49	sshc	-	-	-	-	-	-
11	93.5	22.7	17.7	26.04	ssh	-	-	-	-	-	-

県内出土の縄文土器胎土について（３）

河　本　純　一

当紀要の 34・35 号にて、岩手県内における縄文土器の胎土研究を進めるための基礎作業として、県央部・県南部の数遺跡から出土した土器の胎土観察をおこなった（河本 2015・2016a）。今回もその作業の一環として、県北部および沿岸部に所在する３遺跡から出土した縄文土器の胎土を観察し、県央部・県南部との比較検討などから、縄文時代の土器作りにおける製作流儀の様相について考察した。

１．はじめに

前号までに、県央部・県南部の遺跡から出土した縄文土器について、極めて断片的ではあるが、その胎土の様相を探ってきた。その結果、中期の土器胎土には土器片や凝灰岩を含むものが多く、後期の土器胎土には雲母を含むものが多くなるという傾向が、県内の広範囲にわたって認められることを指摘した。これについて、各遺跡が立地する地質条件の違いよりも、材料の選択という点をも含む土器の製作流儀が広範囲にわたって共有されており、各時期の製作流儀の違いが土器胎土に反映された結果ではないかと考えた。

土器胎土は一般的にその製作地を推定するために注目されることが多いが、このように過去における土器の製作流儀を明らかにし、そしてその製作流儀の広がりから集団間の関係性を考える手掛かりをも提供している。そこで今回は、このような製作流儀の広がりを確認することも視野に入れつつ、これまで扱ってこなかった県北部および沿岸部で出土した土器について、胎土観察をおこなった。

（国土地理院「八戸」S=1/200,000　2013 年 6 月 1 日発行を縮小・加筆）

第１図　胎土観察をおこなった各遺跡の位置

２．観察資料

今回は、二戸市に所在する米沢遺跡、一戸町に所在する野尻Ⅲ遺跡、野田村に所在する平清水Ⅱ遺跡の３遺跡（第１図）から出土した土器で、報告書（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001、2002、2004）に実測図が掲載されているものの一部を観察資料とした。観察した土器およびその観察結果は、附表１・２に示した。

３．観察方法および胎土分類

（１）観察方法

ニコン社の携帯型実体顕微鏡ファーブル（倍率 20 倍）を用いて土器胎土を観察した（註１）。観察の際には、土器の断面だけでなく、器表面も観察し、総合的に土器の胎土を評価している。断面だけでは、観察面積が少なく、含まれる砂粒･混和材の種類･大きさ･量を評価するのが難しいからである。

（２）胎土分類

今回は、土器に含まれる砂粒・混和材の種類および大きさによる分類を設けた。

a）砂粒・混和材の種類（第１表）

観察した土器の胎土に含まれていた主な砂粒としては、黒色光沢粒（角閃石または輝石）･雲母･軽石･

第１表　砂粒・混和材の種類による胎土分類

分類	特徴
A類	黒色光沢粒（角閃石または輝石）を一定量含む土器。
B類	雲母を一定量含む土器。
C類	軽石を一定量含む土器。
D類	頁岩・チャートを一定量含む土器。
E類	結晶片岩を一定量含む土器。
F類	火成岩を一定量含む土器（凝灰岩を含む土器についても当分類に含める）。
G類	上記以外の有色砂粒を一定量含む土器。
H類	海綿骨針を一定量含む土器。
I類	上記のような特徴的な砂粒・混和材を含まず、ほぼ無色鉱物（石英・長石）だけからなる土器。

※ 黒色光沢粒と雲母をともに含めばAB類、軽石とチャートをともに一定量含めばCD類と、上記の分類記号を足し合わせた分類を適宜設定し、土器胎土観察表に記載している。
なお、一定量とは、観察した土器片中にその砂粒・混和材が不偏的に含有されており、少なくとも2cm^{2}中に1粒は0.5mm以上でその存在が認められる量を指す。

第２表　砂粒・混和材の大きさによる胎土分類

分類	特徴
２－類	2.0mm～2.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
１＋類	1.5mm～2.0mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.0mm以上のものはほとんど含まれていない。
１－類	1.0mm～1.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。1.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
０類	1.0mm未満の砂粒・混和材で構成されている、および肉眼ではそれらを確認できない土器。

チャート・結晶片岩・火成岩（花崗岩・斑糲岩など）・凝灰岩・石英・長石があり、砂粒以外にも海綿骨針・植物質などの存在が確認できた。

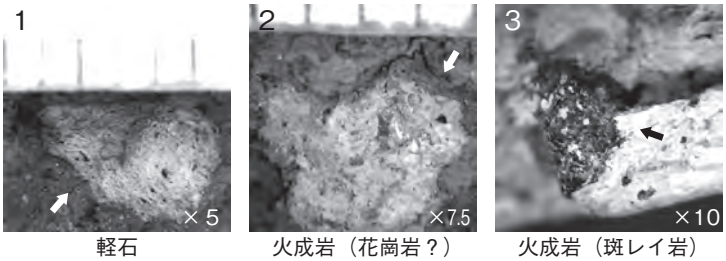
今回は、これらの砂粒・混和材のあり方に基づき第１表に示すＡ～Ｉ類という、含まれる砂粒・混和材の種類による分類を設けた。

b）軽石・火成岩について（写真１）

旧稿（河本 2015）において、どのような特徴を有する砂粒をどの岩石・鉱物または混和材と認定したかを記している。ただし、今回取り扱う軽石および火成岩については、その際扱った土器の胎土には含まれていなかったこともあり、その分類基準を示せていないので、ここでどのような特徴をもってこの両者と分類したか簡単に記しておく。

軽石（写真１－１）白色またはやや黄色味がかった白色で、塊状を呈する。多孔質であることを特徴とし、繊維状の構造がみられることもある。また、角閃石か輝石と思われる黒色光沢粒が内部にみられることもある（註２）。

火成岩（写真１－２・３）黒色光沢粒および石英・長石が分離せずに岩片状をなしているもの。軽石と異なり気孔はみられない。写真１－２のように、石英および黒色光沢粒を僅かに含み、白色を呈する長石の部分が多いものは、花崗岩と考えたが、流紋岩や凝灰岩の可能性も考えられる。写真１－３のように、長石を僅かに含むものの、その大部分が黒色光沢粒からなるものは、斑糲岩と考えた。



軽石　　火成岩（花崗岩？）　　火成岩（斑レイ岩）

写真１　軽石および火成岩と分類した砂粒

c）砂粒・混和材の大きさ（第２表）

含まれる砂粒・混和材の大きさについて、第２表に示す０～2-類という分類を設けた。

今回は2.5㎜以上の砂粒を一定量含む土器は認められなかったので、第２表で示した基準で全ての土器を分類できた。

４．観察結果

（１）米沢遺跡

早期中葉および中期中葉～後期初頭の資料計 41 点を観察した。ここでは、比較的まとまった観察点数を得ることのできた、早期中葉（寺の沢式期）、中期末葉（大木 10 式期）～後期初頭の様相について述べる。

早期中葉の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・軽石・火成岩・海綿骨針を確認できた。第３表に示したように、Ａ類とした黒色光沢粒を含む土器が 16 点中 12 点と最も多く、次に多いものはＣ類（軽石を含む土器、写真２－１）であり７点存在している。このほかＨ類（海綿骨針を含む土器、写真２－２）が４点、Ｆ類（火成岩を含む土器）・Ｉ類（ほぼ石英・長石だけからなる土器）が各３点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うものの２種類が存在している。胎土観察した 16 点のうち、前者が５点、後者が 11 点と、石英が主体となるものが多い傾向がみられる。

含まれる砂粒･混和材の大きさは第２図に示したが、０類が 56.3%、1- 類が 37.5%、1+ 類が 6.3%と、1㎜以下のものが多く認められる。

中期末葉～後期初頭の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・軽石・結晶片岩・火成岩・海綿骨針を確認できた。Ａ類が 23 点中 20 点と最も多く、Ｈ類が９点、Ｂ類（雲母を含む土器、写真２－４）が８点と続く。このほかＣ類・Ｇ類（その他の有色砂粒を含む土器）が各４点、Ｆ類が２点、Ｅ類（結晶片岩を含む土器、写真２－３）が１点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの３種類が存在している。石英を主体とするものが 23 点中 11 点、長石を主体とするものが 10 点と、どちらかが顕著に多いといったことは認められなかった。ただし、雲母を含む土器は８点中７点が後者であり、伴う無色鉱物は長石主体であることが多い。

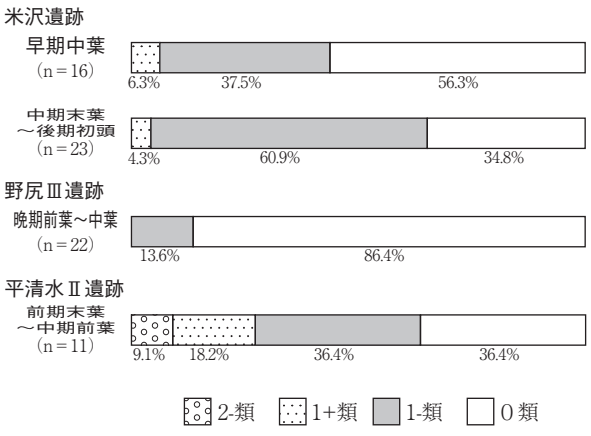
含まれる砂粒･混和材の大きさは、０類 34.8%、1- 類 60.9%、1+ 類 4.3%と、1㎜前後のものが多く認められる。

いずれの時期もＡ類が多いことは

第３表　砂粒・混和材の含有状況

胎土＼遺跡・時期	米沢遺跡 早期中葉	米沢遺跡 中期末葉～後期初頭	野尻Ⅲ遺跡 晩期前葉～中葉	平清水Ⅱ遺跡 前期末葉～中期前葉
Ａ類：黒色光沢粒を含む	12/16	20/23	12/22	10/11
Ｂ類：　雲母　を含む	0/16	8/23	1/22	0/11
Ｃ類：　軽石　を含む	7/16	4/23	0/22	0/11
Ｄ類：頁岩・チャートを含む	0/16	0/23	0/22	6/11
Ｅ類：結晶片岩を含む	0/16	1/23	7/22	1/11
Ｆ類：火成岩 を含む	3/16	2/23	0/22	1/11
Ｇ類：その他有色砂粒を含む	0/16	4/23	0/22	0/11
Ｈ類：海綿骨針を含む	4/16	9/23	2/22	0/11
Ｉ類：長石・石英のみ	3/16	0/23	6/22	0/11

※たとえば１つの土器片中に雲母と軽石をともに含めば、それぞれで１点ずつ集計しているので、縦列の合計は総観察点数より多くなる。



第２図　含まれる砂粒・混和材の大きさ

共通しているが、A類以外の胎土に注目すると、早期中葉ではC類の存在が目立つ一方、中期末葉～後期初頭ではC類以外にもB類・H類が多くみられる。このように、同一の遺跡においても、時期ごとで使用される土器の材料は異なっている。また、他の遺跡と比べると、時期を問わずC類とH類が多く、軽石および海綿骨針を含む土器の多いことが当遺跡の特徴である。

（2）野尻Ⅲ遺跡

晩期前葉～中葉（大洞B式～大洞C1式期）の資料計22点を観察した。土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・結晶片岩・海綿骨針を確認できた。A類（写真２－６）が22点中12点と最も多く、E類（写真３－７・８）が７点、Ⅰ類が６点と続く。このほかH類（写真２－５、３－８）が２点、B類が１点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの３種類が存在している。長石と石英の量がほぼ同じ程度のものが22点中14点と多く、石英を主体とするものが22点中６点、長石を主体とするものが２点存在している。ただし、結晶片岩を含む土器７点のなかに、石英を主体とするものが認められなかった点は、前述した雲母を含む土器にも石英を主体とするものが見られなかったことと同様である。何故このような現象が見られるのかについては、今後検討する必要があろう。

含まれる砂粒･混和材の大きさは、0類が86.4%、1-類が13.6%と1㎜以下のものが多く認められる。

他の遺跡と比べると、E類が多く、結晶片岩を含む土器の多いことが当遺跡の特徴である。

（3）平清水Ⅱ遺跡

前期末葉～中期前葉（円筒下層d1式～円筒上層b式期）の資料計11点を観察した。土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・チャート・結晶片岩・火成岩を確認できた。A類（写真３－９）が11点中10点と最も多く、次に多いものはD類（頁岩・チャートを含む土器、写真３－11・12）であり、６点存在している。このほかE類（写真３－10）・F類が各１点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、長石を主体として石英が少量伴うものの２種類が存在している。胎土観察した11点のうち、前者が７点、後者が４点であり、石英と長石の量が同じ程度のものが多い。

含まれる砂粒・混和材の大きさは、0類が36.4%、1-類が36.4%、1+類が18.2%、2-類が9.1%と1㎜以上のものが多く認められる。

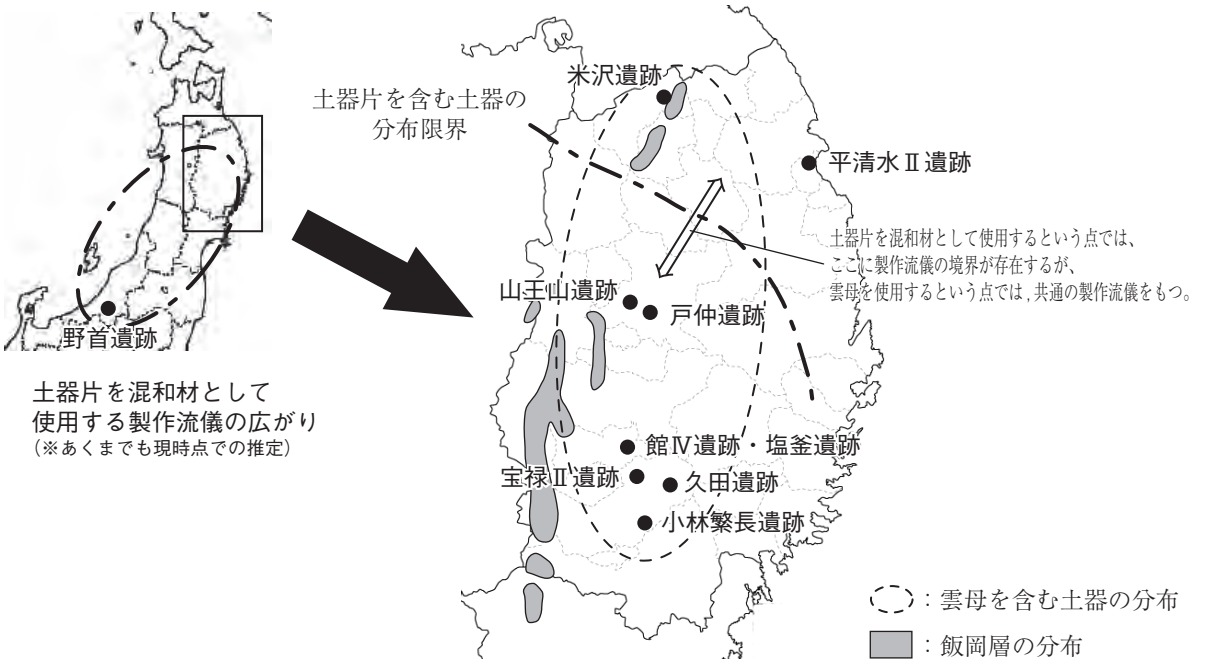
他の遺跡と比べると、D類が多く、チャートを含む土器の多いことが当遺跡の特徴である。

５．小考

（1）今回の観察結果について

米沢遺跡では、時期を問わず海綿骨針を含む土器が一定量みられた。岩手県内における海綿骨針を含む土器の研究は、井上雅孝によってなされており、その中で海綿骨針を含む土器材料（粘土）の採取地として、飯岡層（第３図）を候補として推定されている（井上1995）。米沢遺跡はこの飯岡層の極めて近くに位置しており、海綿骨針が土器胎土中に認められたことは、この遺跡が立地する地質条件によるものと考えられる。

一方､中期末葉～後期初頭では雲母を含む土器が一定量みられた｡これは早期中葉には見られなかった傾向である。岩手県内における雲母を含む土器の様相についてはまだ不明な部分が多いが､旧稿(河本 2016a・b）までの検討で、県央部から県南部にかけて、中期中葉には土器胎土中に雲母が含まれ



第３図　使用材料から見た製作流儀の共有範囲

ることは少なかったが、中期後葉以降に増え始め、後期後葉にかけて一定量存在することが分かっている。米沢遺跡で出土した中期末葉～後期初頭の土器に、雲母を含む土器が一定量存在することからは、土器の材料に雲母を使用するという製作流儀が広く共有されていた可能性が想定される。

以上のように、海綿骨針については地質的な要因、雲母については人為的な要因で土器胎土に含まれたことが考えられ、土器胎土中の砂粒・混和材が、単純に地質条件を反映しているわけではなく、様々な人為的な理由でもってそこに存在していることを考慮に入れる必要があるだろう。

また、平清水Ⅱ遺跡から出土した資料について、胎土と型式学的な特徴との関係について注意すべきものがあったので、ここで述べることとする。観察№３（報文の第161図-652）は報文にて大木7a式？とされており、円筒下層式・円筒上層式が主体となる当遺跡の中では、型式学的に異系統なものと考えられる。土器胎土をみると、チャートを含まず結晶片岩を含んでおり、含まれる砂粒がチャートを主体する当遺跡の土器の中では異質なものである。このように観察№３は、胎土と型式学的特徴がともに異質であり、他地域からの搬入品である可能性が考えられる。

一方、観察№７（報文の第162図-656）は報文にて五領ヶ台Ⅰａ式とされ、型式学的に異系統なものと考えられる。しかし、土器胎土をみると、他の多くの土器と同様にチャートを含んでおり、材料は異質なものではない。おそらくは、平清水Ⅱ遺跡にて集落を営んだ集団が、関東または北陸地方のモチーフを取り入れてこの土器を製作したものと考えられる。

このように、同一の遺跡から出土した異系統の土器が全て搬入品というわけではなく、また異系統の中でもより遠方にモチーフを求めるべきものが、その遺跡内で製作されている可能性が高いことも注意すべきだろう。

（２）土器片を含む土器、雲母を含む土器について - 県央部・県南部との比較から -

県央部・県南部では中期前葉～末葉にかけて、土器胎土中に土器片を含むものが一定量存在している。中期の土器において、胎土に土器片が観察されるものは、十日町市に所在する野首遺跡など遠く新潟県下の遺跡でその存在が確認されている（西田 2008、十日町市博物館 2016）。岩手県と新潟県

の間に位置する山形県や宮城県での状況を確認できていないが、土器片を混和材として使用する製作流儀が広域にわたって共有されている可能性も考えられよう。山形県や宮城県で出土した土器を実見し、その検証作業をおこなうことは今後の課題として、まず今回観察をおこなった米沢遺跡・平清水Ⅱ遺跡の中では、胎土に土器片を含むものの存在は確認できなかった。

つまり、土器片を混和材に使うか否かという製作流儀の境界が県央部から県北部・沿岸部にかけての間に存在していることが明らかとなった。では、この境界線をもって土器作りの文化が大きく異なっていたかというと、必ずしも常にそうだったとは言い切れない。確かに中期中葉以前ならば、この境界線と同様に、出土する土器型式にも大木式・円筒式と、南北で顕著な違いが存在するため、土器作りの文化が大きく異なっていたと言えよう。しかし、中期末葉になると、多少の型式学的な地域差を有していたとしても、岩手県内を広く大木10式と括れうる程度に類似した文様の土器が分布しており、少なくとも中期中葉までのような明確な差は存在しない。そして、胎土についてみても、この時期はまだ土器片を混和材に用いるか否かという点では大きく異なるが、雲母を含む材料で土器を製作しているという点では共通性を持っている。しかも、この雲母を含む土器は、今回観察した県北部の米沢遺跡から県南部の久田遺跡・宝禄Ⅱ遺跡にかけて、伴う無色鉱物が石英主体となることはなく、長石を伴うことが多いという共通性も持っている。このことから、雲母を含む現象が各地での偶然の一致というわけではなく、土器製作者が互いに共通した材料選択をしていたことが考えられよう。

このように土器型式の展開と合わせて考えるならば、中期中葉から中期末葉にかけて、土器の南北差が消失していく現象は、視覚的に捉え易い文様だけでなく、材料選択という土器作りの最初期段階をも含む製作流儀の共有からも起因しているものと言えよう。そして、このような製作流儀の共有化からは、以前よりも強い結び付きを持つようになったという、集団間関係の変化が生じている可能性が考えられる。

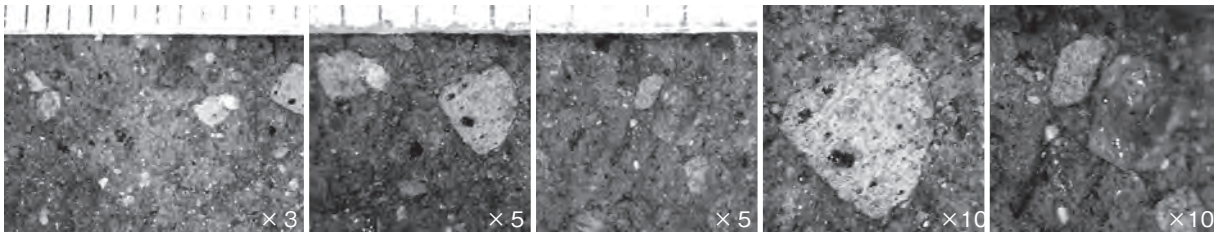
6．おわりに

今回は、県北部および沿岸部における土器胎土の様相を具体的に提示し、型式学的な検討や県央部や県南部との比較を通して、様々な問題を提起した。未解決な部分が多く残っているが、これらは今後さらに土器胎土のデータを蓄積するとともに、型式学的特徴や空間的分布状況など、別の分析視座をも加味しつつ検討していきたい。

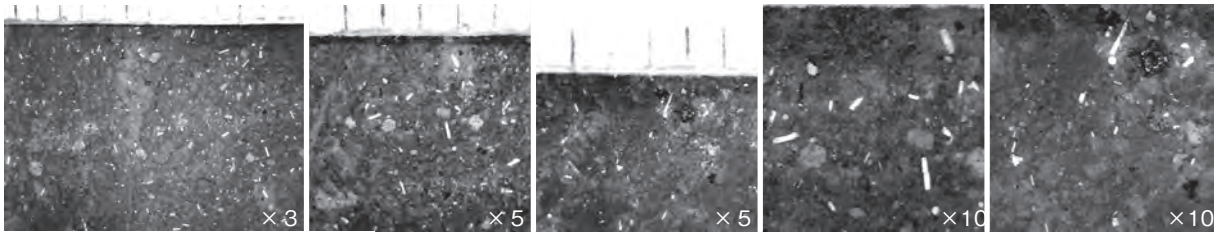
註

(1) 土器胎土を観察し評価する上での作業内容の詳細、および附表１・２として提示した土器胎土観察表の記述内容については、旧稿（河本 2011）を参照されたい。

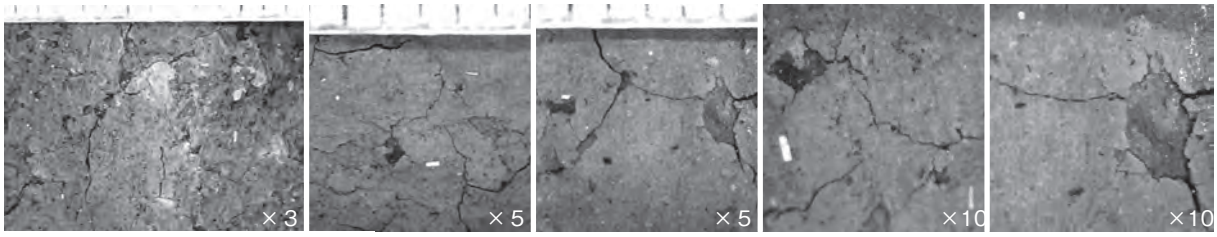
(2) 岩石学的には、軽石は火成岩に分類されるものであり、さらにここで記す分類基準では軽石質凝灰岩にも相当する可能性がある。そのような点で、今回提示した分け方は岩石学的な正確さには欠いている。しかし、このように分けることにより、今回取り扱う米沢遺跡の土器胎土の特徴を明確に示せることから、あえてこのように分類した。



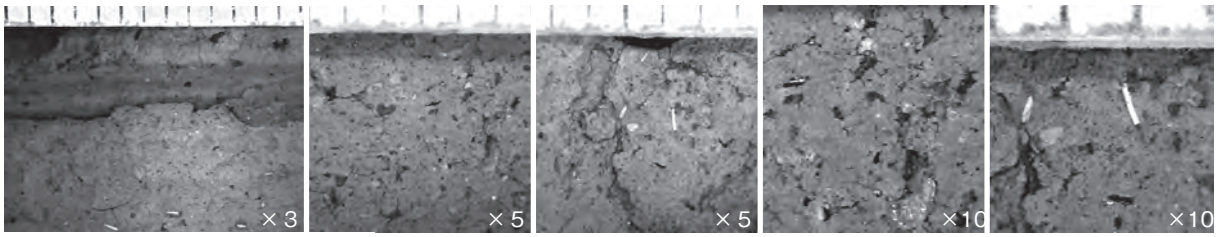
1．米沢遺跡　第 81 図 - 158（早期中葉、AC1- 類）



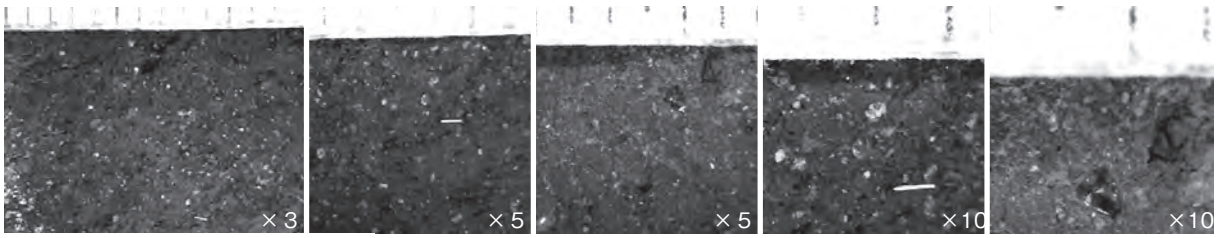
2．米沢遺跡　第 82 図 - 175（早期中葉、AH0 類）



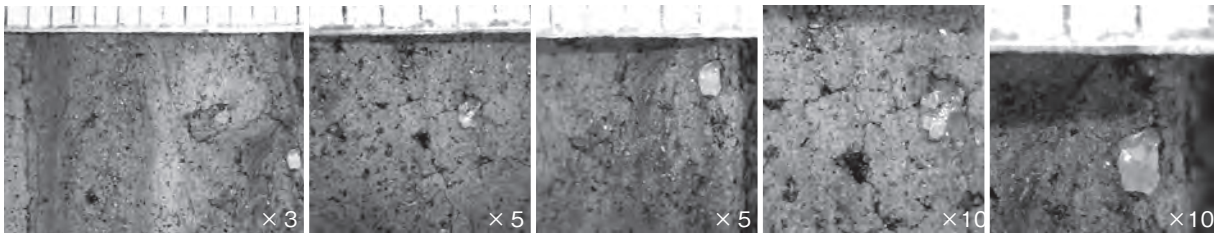
3．米沢遺跡　第 91 図 - 305（中期末葉、EGH1- 類）



4．米沢遺跡　第 92 図 - 324（後期初頭、ABH1- 類）

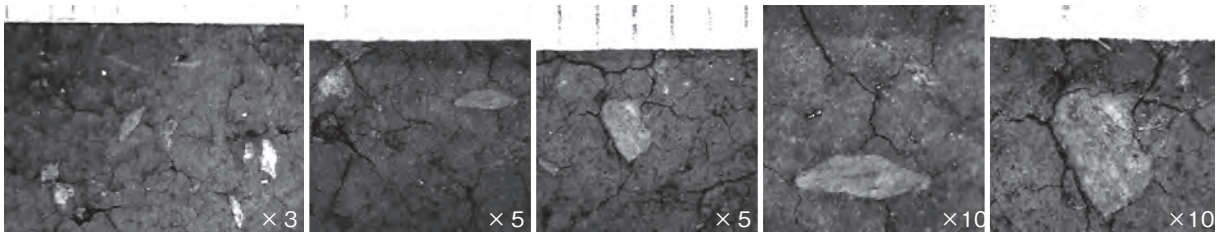


5．野尻Ⅲ遺跡　第 20 図 - 169（晩期前葉、AH0 類）

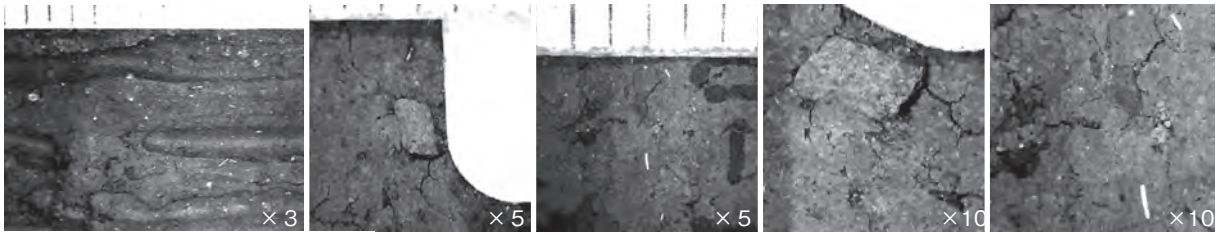


6．野尻Ⅲ遺跡　第 20 図 - 173（晩期前葉、A0 類）

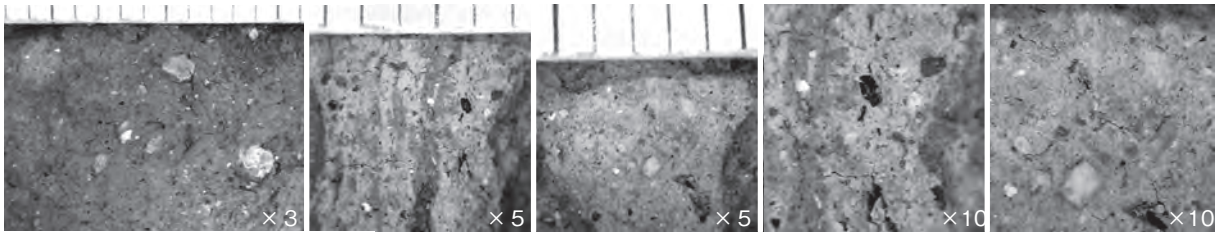
写真２　縄文土器の胎土写真（１）



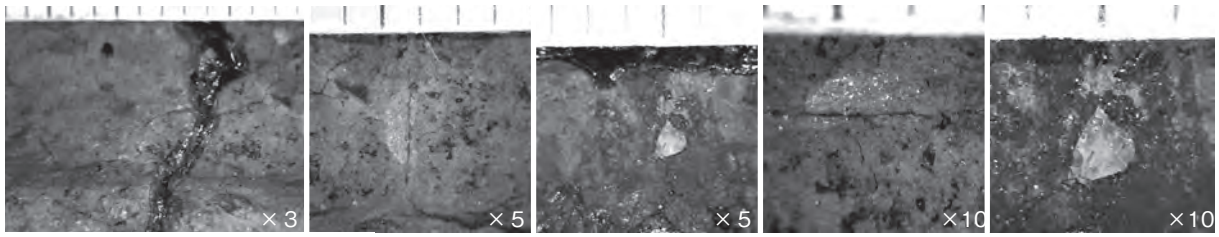
7．野尻Ⅲ遺跡　第 21 図 - 180（晩期前葉、E1- 類）



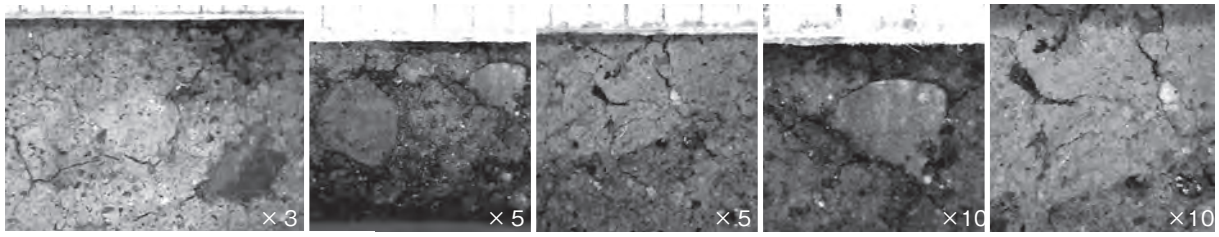
8．野尻Ⅲ遺跡　第 21 図 - 184（晩期前葉、EH1- 類）



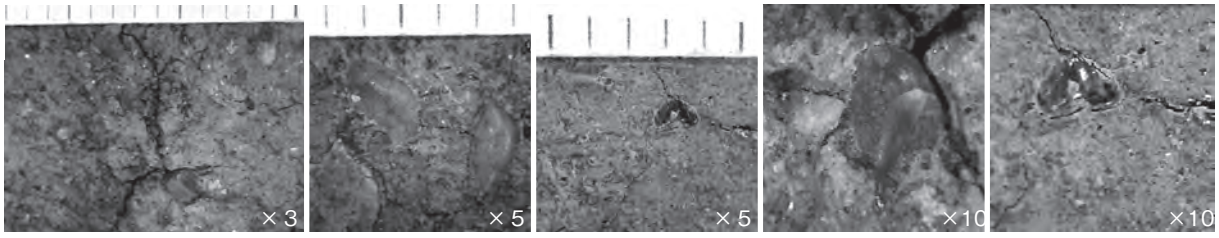
9．平清水Ⅱ遺跡　第 161 図 - 650（中期前葉、A1- 類）



10．平清水Ⅱ遺跡　第 161 図 - 652（中期前葉、AE0 類）



11．平清水Ⅱ遺跡　第 162 図 - 656（中期前葉、AD1+ 類）



12．平清水Ⅱ遺跡　第 162 図 - 658（中期前葉、D2- 類）

写真３　縄文土器の胎土写真（２）

附表１　土器胎土観察表（１）

米沢遺跡

報告書：工藤徹・齋藤麻紀子 2002『米沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第376集,（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒・混和材										
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	軽石	頁岩・チャート	結晶片岩	火成岩	その他有色砂粒	石英	長石	海綿骨針
1	第81図-156	ACH1-	2.5Y5/3 黄褐	2.5Y3/1 黒褐	0.5		0.5少				(2.0) (1.0) (0.5)	1.0s×0～1 0.5	(3.0) 0.5極少	0.5
2	第81図-157	A0	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y3/1 黒褐	0.5		(0.5)				(2.0)	0.5	△	(0.5)
3	第81図-158	AC1-	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y4/1 黄灰	0.5少		(3.0) (2.0) 1.0s×0～1 0.5			△	(0.5)	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5極少	(0.5)
4	第81図-159	ACH0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	0.5		(1.0) 0.5				(2.0)	(1.0) 0.5	0.5	0.5少
5	第81図-160	A0	2.5Y5/3 黄褐	2.5Y4/1 黄灰	(1.0) 0.5		(0.5)			(1.0)		0.5	(2.0) 0.5少	(0.5)
6	第81図-161	AH1-	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	0.5		△			(1.0)		1.0s×0～1 0.5	(1.0) 0.5少	0.5少
7	第81図-162	I0	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y4/1 黄灰	(0.5)		(2.0)			(1.0)		(1.0) 0.5	△	(0.5)
8	第81図-165	I1-	2.5Y3/2 黒褐	2.5Y3/2 黒褐	(0.5)			(1.0)		(2.0)		1.0s×0～1 0.5	(1.0)	(0.5)
9	第81図-166	I0	2.5Y4/2 暗灰黄	10YR3/2 黒褐	(0.5)		(0.5)	(1.0) (0.5)				0.5	(0.5)	
10	第81図-167	CF1-	N2/0 黒	N2/0 黒	△		(2.0) 1.0s×0～1 0.5少			0.5	(3.0)	1.0s×0～1 0.5少	△	0.5極少
11	第81図-168	AC1-	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y3/1 黒褐	0.5		(3.0) (2.0) 1.0s×0～1 0.5極少	△		△		0.5	△	0.5極少
12	第81図-169	AC0	2.5Y3/1 黒褐	10YR6/4 にぶい黄橙	0.5		(1.0) 0.5			△	(0.5)	(1.0) 0.5	0.5	0.5極少
13	第81図-170	AF0	10YR3/2 黒褐	10YR3/1 黒褐	0.5少		(3.0) (2.0) (0.5)			0.5少		0.5少	△	(0.5)
14	第81図-173	A0	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y4/1 黄灰	0.5		(0.5)			△		0.5少	(4.0) 0.5	(0.5)
15	第81図-174	ACF1+	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y3/1 黒褐	0.5		(6.0) (3.0) (2.0) 1.0b×1 0.5少			0.5少	(0.5)	0.5少	(0.5)	
16	第81図-175	AH0	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y4/1 黄灰	0.5少		(1.0)					0.5少	(1.0) 0.5少	0.5多
17	第90図-301	AG0	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	0.5	(0.5)		(3.0) (0.5)		(3.0) (2.0) (1.0) 0.5極少	(6.0) (2.0) 0.5少	△	(1.0) 0.5	0.5極少
18	第90図-302	A0	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/2 灰黄褐	0.5			(1.0)	0.5極少		(3.0) (2.0) (0.5)	0.5少	(2.0) 0.5少	
19	第91図-303	AFG0	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y3/1 黒褐	0.5			(0.5)		(4.0) (1.0) 0.5	(2.0) (1.0) 0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5少	
20	第91図-304	A0	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	0.5			(2.0) 0.5極少		△		(2.0) (1.0) 0.5	(2.0) (0.5)	
21	第91図-305	EGH1-	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	＜0.5極少	(0.5)		(0.5)	1.0s×0～1 0.5	(2.0) (0.5)	(3.0) 0.5少	(1.0) 0.5	(2.0) 1.0s×0～1 0.5	0.5
22	第91図-306	B1-	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y3/1 黒褐	△	1.0s×0～1 0.5						△	△	
23	第91図-307	A1-	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	0.5少		(2.0)					△	(2.0) 1.0s×0～1 0.5	(0.5)
24	第91図-308	BH1-	N2/0 黒	10YR3/2 黒褐	△	1.0s×0～1 0.5多							0.5少	0.5少
25	第91図-309	AH1-	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	0.5		(2.0) (1.0) (0.5)		(0.5)	(2.0) (1.0)	△	1.0s×0～1 0.5	△	0.5
26	第91図-310	AH0	5Y2/1 黒	2.5Y4/1 黄灰	0.5		△	(2.0)		(1.0)	(1.0) (0.5)	(1.0) 0.5	0.5少	0.5
27	第91図-311	AB0	2.5Y3/1 黒褐	10YR2/1 黒	0.5	(1.0) 0.5					(1.0)	0.5少	(1.0) 0.5	(0.5)
28	第91図-312	ABH0	10YR5/4 にぶい黄褐	2.5Y5/4 黄褐	0.5	0.5				(1.0)	(1.0) (0.5)	△	0.5	0.5

米沢遺跡 続き

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒・混和材									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	軽石	頁岩・チャート	結晶片岩	火成岩	その他有色砂粒	石英	長石	海綿骨針
29	第91図-313	AG1-	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y6/3 にぶい黄	0.5多			(0.5)			1.0s×0～1 0.5	1.0s×0～1 0.5	(2.0) (1.0) 0.5極少	
30	第91図-314	A1-	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y4/1 黄灰	0.5少		(2.0)				(1.0) 0.5極少	1.0s×0～1 0.5	(1.0) (0.5)	(0.5)
31	第91図-315	AG0	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR3/1 黒褐	0.5			△			(1.0) 0.5少	(1.0) 0.5	0.5少	(0.5)
32	第91図-316	AB0	10YR5/4 にぶい黄褐	2.5Y5/2 暗灰黄	0.5	(1.0) 0.5							0.5少	(0.5)
33	第91図-317	AC1-	10YR4/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	0.5		1.0s×0～1 0.5				(2.0)		(1.0) 0.5少	(0.5)
34	第91図-318	A0	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y7/3 浅黄	0.5		(1.0)	△			(2.0)		0.5	0.5極少
35	第91図-319	AC1-	10YR4/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	0.5少		1.0s×0～1 0.5極少				△		0.5少	(1.0) 0.5極少
36	第91図-320	ABH1-	7.5YR4/4 褐	7.5YR4/3 褐	0.5少	1.0s×0～1 0.5	△	(0.5)				(3.0) (0.5)		(2.0) 1.0s×0～1 0.5	0.5少
37	第91図-321	AB1-	10YR5/3 にぶい黄褐	2.5Y5/2 暗灰黄	0.5少	1.0s×1 0.5多								(2.0) 1.0s×0～1 0.5	0.5極少
38	第92図-322	AC1-	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y5/2 暗灰黄	0.5少		1.0s×0～1 0.5	△			(1.0) (0.5)	(1.0)	0.5		△
39	第92図-323	ACFH1-	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	0.5		(1.0) 0.5少	(1.0)			(2.0) 1.0s×0～1 0.5少		(1.0) 0.5	(0.5)	0.5
40	第92図-324	ABH1-	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	0.5	0.5					△	(0.5)	(0.5)	1.0s×0～1 0.5	0.5
41	第92図-325	AH1+	5YR4/6 赤褐	10YR4/4 褐	0.5少	0.5極少					△		0.5少	(3.0) (2.0) 1.0b×0～1 0.5	0.5

野尻Ⅲ遺跡

報告書：菅原靖男・村木敬 2001『野尻Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第389集,（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒・混和材									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	軽石	頁岩・チャート	結晶片岩	火成岩	その他有色砂粒	石英	長石	海綿骨針
1	第19図-164	A0	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	＜0.5少	(＜0.5)	(1.0) 0.5極少		(0.5)				0.5極少	0.5極少
2	第19図-165	A0	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	＜0.5少	(＜0.5)			(1.0)			0.5極少	0.5少	0.5極少
3	第20図-166	AE0	2.5Y4/1 黄灰	5YR5/4 にぶい赤褐	＜0.5	(＜0.5)		(0.5)	0.5	(3.0)			0.5	0.5少
4	第20図-167	A0	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	＜0.5少				△		(0.5)	0.5	0.5	
5	第20図-168	I0	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y4/1 黄灰	＜0.5極少							＜0.5極少	＜0.5少	
6	第20図-169	AH0	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y6/2 灰黄	＜0.5少		△					0.5	0.5	0.5
7	第20図-170	AE1-	2.5Y2/1 黒	7.5YR5/3 にぶい褐	0.5	△			1.0s×0～1 0.5	(2.0)	(2.0) (1.0)	0.5少	0.5少	(0.5)
8	第20図-171	I0	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	△						(0.5)	(0.5) ＜0.5多	0.5	
9	第20図-172	I0	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	＜0.5極少						(0.5)	＜0.5多	(0.5)	
10	第20図-173	A0	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR6/3 にぶい黄橙	＜0.5少	(＜0.5)					(0.5)	0.5 ＜0.5	0.5極少	
11	第21図-180	E1-	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	＜0.5極少				1.0s×1 0.5			△	0.5少	(0.5)
12	第21図-182	E0	10YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	0.5少	(0.5)		(2.0) (1.0)	(2.0) (1.0) 0.5少			△	△	
13	第21図-184	EH1-	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	＜0.5極少	(0.5)		△	1.0s×0～1 0.5少		(2.0)	0.5	1.0s×0～1 0.5少	0.5
14	第21図-185	I0	10YR2/1 黒	10YR2/1 黒	＜0.5極少	(1.0) 0.5極少		(0.5)	(1.0)			0.5	(0.5)	
15	第21図-186	I0	2.5Y3/1 黒褐	10YR6/4 にぶい黄橙	＜0.5極少							0.5少 ＜0.5多	(0.5)	
16	第21図-187	A0	2.5Y5/3 黄褐	10YR4/2 灰黄褐	＜0.5少	(＜0.5)						0.5 ＜0.5		
17	第22図-202	A0	10YR4/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	＜0.5				(1.0) 0.5極少			(0.5) ＜0.5少	＜0.5少	(0.5)

附表２　土器胎土観察表（２）

野尻Ⅲ遺跡　続き

No.	資料番号	胎土分類	色調 内面	色調 外面	色調 黒色斑状粒	含有砂粒・混和材 雲母	含有砂粒・混和材 輝石	含有砂粒・混和材 頁岩・チャート	含有砂粒・混和材 結晶片岩	含有砂粒・混和材 火成岩	含有砂粒・混和材 その他有色緻粒	含有砂粒・混和材 石英	含有砂粒・混和材 長石	含有砂粒・混和材 海綿骨針
18	第22図-203	A1D	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5	<0.5少			(0.5)			0.5少	0.5極少	
19	第22図-204	E0	2.5Y2/1 黒	2.5Y3/1 黒褐	<0.5極少	(0.5)			(1.0) 0.5少		(3.0)	0.5極少	0.5極少	
20	第22図-205	A0	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	<0.5			(2.0) (1.0)				0.5少	0.5少	
21	第22図-206	I0	10YR4/2 灰黄褐	2.5Y6/3 にぶい黄	<0.5極少			△				0.5少	0.5少	
22	第22図-207	A1D	2.5Y3/1 黒褐	10YR3/2 黒褐	<0.5少				0.5				(0.5)	

平清水Ⅱ遺跡

報告書：金子昭彦 2004「平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第449集、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調 内面	色調 外面	色調 黒色斑状粒	含有砂粒・混和材 雲母	含有砂粒・混和材 輝石	含有砂粒・混和材 頁岩・チャート	含有砂粒・混和材 結晶片岩	含有砂粒・混和材 火成岩	含有砂粒・混和材 その他有色緻粒	含有砂粒・混和材 石英	含有砂粒・混和材 長石	含有砂粒・混和材 海綿骨針
1	第161図-650	A1-	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐	<0.5	(0.5)		(0.5)		(2.0)		0.5少	(2.0) 1.0s×0～1 0.5多	
2	第161図-651	A1-	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	<0.5	(0.5)		(0.5)		△		0.5	1.0s×0～1 0.5	
3	第161図-652	A1D	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y5/2 暗灰黄	<0.5			(1.0)	(1.0) 0.5少		(2.0)	0.5	0.5少	
4	第161図-653	A0	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y6/3 にぶい黄	<0.5							0.5極少	0.5	
5	第161図-654	AD1+	10YR5/3 にぶい黄褐	5Y3/1 オリーブ黒	<0.5少			(5.0) (4.0) 1.0s×0～1 0.5少				0.5少	0.5	
6	第161図-655	A1D0	2.5Y6/2 灰黄	5Y4/1 灰	<0.5少			(5.0) (4.0) (2.0) (1.0) 0.5少				0.5極少	0.5	
7	第162図-656	AD1+	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y5/2 暗灰黄	<0.5	(0.5)		(5.0) (3.0) (2.0) 1.0s×0～1 0.5少				(1.0) 0.5	(2.0) (1.0) 0.5	
8	第162図-657	AD1F1-	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5少	(<0.5)		(2.0) 1.0s×0～1 0.5少	(1.0) 0.5			0.5少	0.5	
9	第162図-658	D2-	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y4/3 オリーブ褐	(<0.5)			(6.0) (4.0) (3.0) 2.0s×0～1 1.0 ×0～1 0.5	(3.0)			0.5	(1.0) 0.5少	(0.5)
10	第162図-659	AD1-	10YR5/3 にぶい黄褐	5Y4/1 灰	<0.5少			(4.0) (3.0) 1.0s×0～1 0.5	△			0.5	0.5	
11	第162図-660	A0	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/2 灰褐	<0.5							0.5	(1.0) 0.5	

参考文献

井上雅孝　1995「海綿骨針を含む続縄文土器について - 胎土から見た後北 C2・D 式土器の一視点 -」『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集刊行会

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001『野尻Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 389 集

2002『米沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 376 集

2004『平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 449 集

河本純一　2011「泉南地域における縄文土器胎土の時期的変化」『大阪文化財研究』38 財団法人大阪府文化財センター

河本純一　2015「県内出土の縄文土器胎土について - 肉眼による胎土分類からの検討 -」『紀要』34（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

河本純一　2016a「県内出土の縄文土器胎土について（２）」『紀要』35（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

河本純一　2016b「立花地区出土縄文土器の胎土観察（１）- 塩釜遺跡・館Ⅳ遺跡 -」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』5 北上市立埋蔵文化財センター

十日町市博物館　2016『土器づくりの考古学』

西田泰民　2008「混和材」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

三閉伊日記に描かれた鉄山跡

佐々木　清　文

１．初めに

三閉伊日記は、江戸時代の終わりごろの嘉永七年(1854)に盛岡藩の藩士長沢文作と大矢文治が大目付大森佐左衛門より野田通りに出張を命ぜられた際の出張旅行記である。嘉永六年の三閉伊一揆の翌年、三月より五月まで、城下盛岡を出立して沼宮内、尾呂部を経て野田、宮古、大槌代官所の管内を検分、大迫に至るまでの記録である。その旅の主目的は万諸金の取立ての立ち合い及び、南部弥太郎への御料地引受渡の立ち合いとされている。

日記の特徴として、通過地点の町屋の数や小字地名がその土地の呼び名で書かれていることなどを解説本の序文で森ノブ氏(岩手古文書学会会長)が説明されている。絵図や旅程表が添えられ、その中で鉄山に関連する記載もいくつか見られる。室場付近の砂鉄切流しの図や平庭鉄山、小国なかたい鉄山、大被鉄山の図も見られる。これらの鉄山跡は現在、遺跡として保存されている。現在の遺跡状況を三閉伊日記に描かれた鉄山の様子に照合してみた結果を報告する。

また、三閉伊日記の解読者平船圭子氏のあとがきによると、三閉伊日記は、解読者の父佐々木晃氏(岩泉町の郷土史､特に製鉄史研究家)の旧友の太田和夫氏(元東京都副知事)の所蔵されていたものが、郷土のために役立てるようにと贈られたもので､昭和63年に完訳され岩手古文書学会から発刊された。原本は現在、岩手県立博物館に所蔵されている。また三閉伊日記中には、平船圭子氏が曾祖母の叔父であった斎藤三平(盛岡藩士)の名や曾祖父の妹リョウの名が出てきて大変懐かしかったことが書かれており、江戸時代が身近に感じられるとともに、昭和中ごろまであまり変わらなかった山間地の情景が浮かんで来る。なお、三名とも既に鬼籍に入られている。

２．鉄山の関連記事と絵図及び現地の状況

鉄山関連の絵図を中心にして、そこに描かれている建物の配置や形状・広さなどを想定し、現在の遺跡の状況から推測される配置や広さとの照合を試みた｡三閉伊日記の訳文を筆者の解釈した記述で、絵図の前後にある関連記事と共に載せた。

なお、三閉伊日記に記載された里は、小里(小道)を使っており１里＝６町=360歩としている。広辞苑では1里=36町＝3.9273㎞、昔は300歩、すなわち今の６町の定めとあり、それだと小里は、１里＝６町=0.65455㎞となる。

３月25日

１．府金より10里(約6.5㎞)ばかり進んで、岩洞沢という所に着く。ここは八戸、福岡、沼宮内の３つの地境なそうだが、山の尾根や沢を境としていて特に目印の塚も見えない。

１．椛の木は家が５軒あり、ここより八戸領の葛巻村になる。

(略)

１．葛巻　ここは所高1,500石の村で、町の中に90軒ほどの家がある。この内酒屋が３件と１ヶ寺である。昔、葛巻善右衛門がここに居住していたので、今も旧主の号を尊称して葛巻と呼んでいる。

(１)「平庭鉄山」

１．葛巻の代官所は軽米にあって、毎年春秋に支配地を検分するという。

当時は回村のみで、その諸収入を代金として村々から出すとのこと

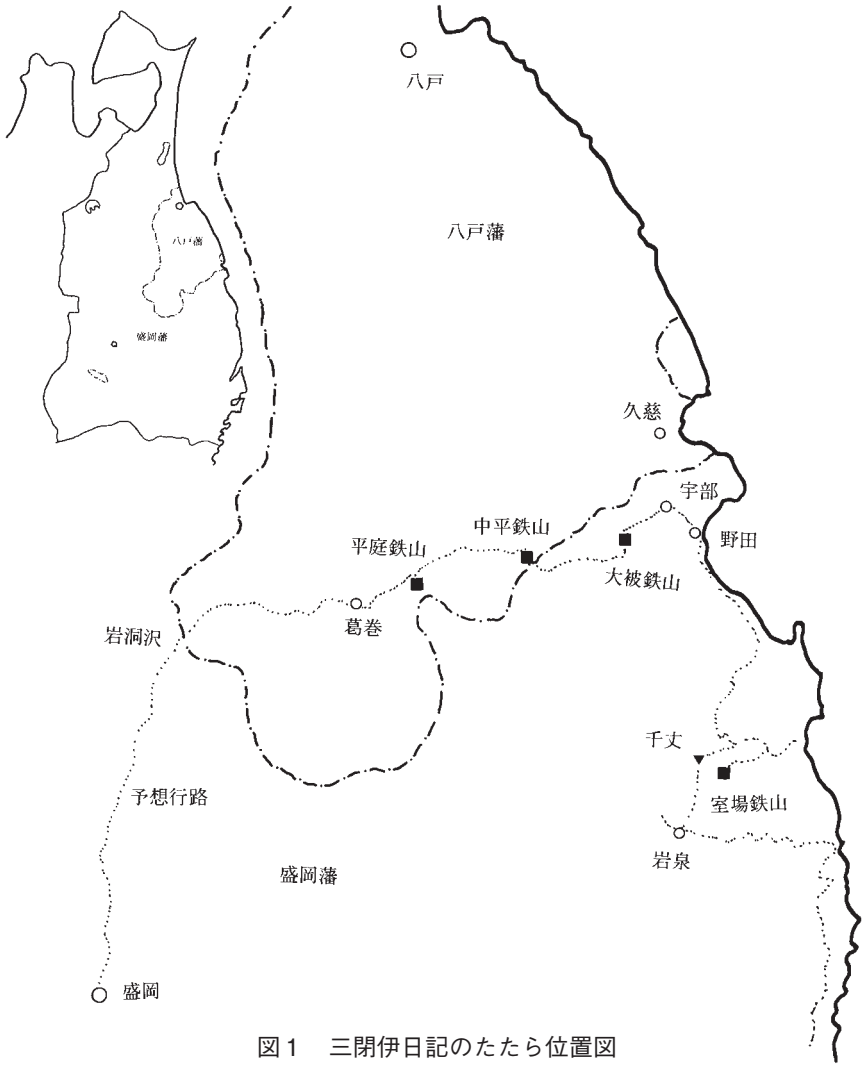


図１　三閉伊日記のたたら位置図

今日は未の刻(14時ころ)に葛巻町秋田屋甚蔵の所に泊まる。ここの若者どもは普段遊興に暮らし、毎年２回ずつは八戸湊に行って散財するようで、小国、平庭の二つの鉄山があるため、そのうるおいがいいようである。

３月26日

１．江刈川は家が７軒あり、葛巻よりここまで10里(約6.5㎞)である。

１．江刈川から少し行って平庭鉄山がある。

この鉄山は葛巻の某氏に任せてあったが、去年八戸候がお買い上げになってから休山しているとのこと。

【絵図の解説】

絵図の道は、元町川の西側にあり、元町川に沿って上流(北)に向かっている。東から沢が合流する対岸の高台に平庭鉄山が位置している。

沢と元町川に沿って柵列が続き、中央付近に門がある。柵は山側には続かない。門の少し奥に高殿らしい寄棟造りの大きな建物がある。門を入ってすぐ右側には切妻風の建物がある。

高殿と沢の間には高殿から張り出すような施設の屋根が並び、そこで柵が途切れ、奥の沢沿いに片流れ屋根の長い建物がある。また、高殿の沢と反対側には通路のような空間を挟んで、長屋または倉庫風の片流れ屋根の長い建物があり、その奥には切妻風の建物が２軒横向きに建っている。

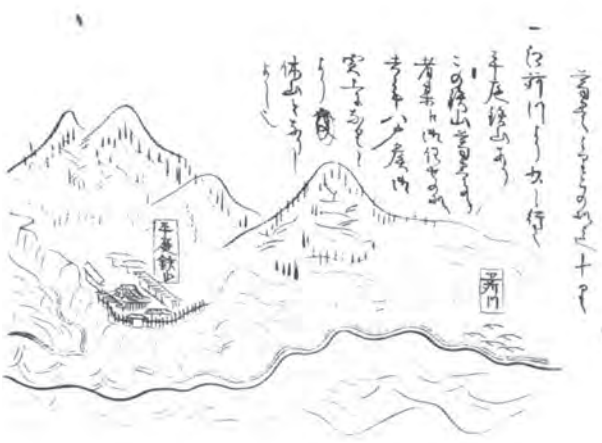


図２　平庭鉄山絵図

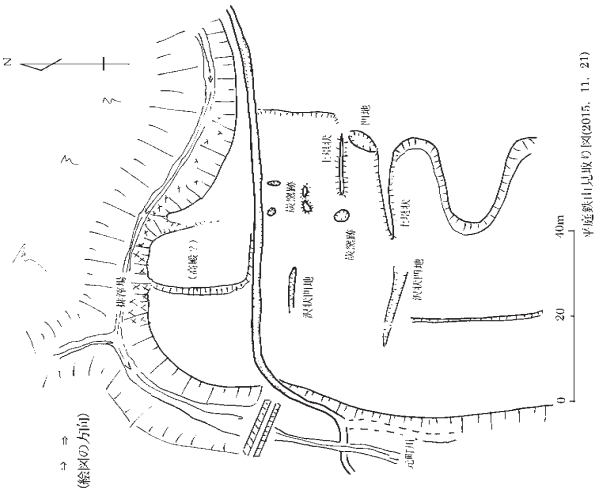


図３　平庭鉄山跡見取り図（↑絵図の方向↑）

長屋風の建物の後ろ(南)側は空間があるようでもあるが、建物までの範囲は、高殿の大きさの２倍、奥行き３倍ほどである。高殿の大きさを玉川鉄山などに合わせ、12m×14mとすると、絵図の敷地は24m×42m(1,008㎡)程の範囲となる。また、高殿は隅が丸いか直角かは不明である。

【現地の見取り図解説】

見取り図を絵図と同じ方向にしてみると、元町川の対岸に街道があり、そこから見た絵図と対比される。排滓場の位置から高殿の位置は絵図と同じ場所のようである。手前の一段低い平場に門や切妻風の建物があり、高殿の道を挟んだ平場に長屋風の建物、さらに奥に切妻風の小さな建物があったようである。高殿の東側は、沢の浸食で崩れた可能性もあるが、沢沿いにある長い建物は土塁らしい範囲に収まりそうである。柵の範囲と土塁で囲われた面積は2,000㎡ほどあり、南側にも平坦地はあるが、絵図では特に利用されている様子はない。

排滓は東側から流れて来る沢と道路が狭まる付近まで確認される。流出滓や炉壁が主で、椀形滓や羽口片は見られない。この鉄山内では大鍛冶や鍛冶等の加工を行っていたかどうかは不明である。

(２)「小国中平鉄山」

１．小国は家数30軒余りである。

１．ここから少し登って左に入り、坂道をまた登って、道の右に鉄山がある。小国なかたい鉄山という。もっとも、砂鉄を掘る山は30里(約19.6㎞)程北にあり、久慈の山から掘ってきて、ここで吹くそうである。久慈の山は薪不足のためなそうだ。

１．関からここまで７里(約4.6㎞)程である。

１．ここから徐々に小国山を越える難所になる。登り詰めて、尾根筋に沿って八戸領との境となる。(木売内泊)

【絵図の解説】

道は北東から流れて来る沢沿いにある。正面中央に門があり、そこから両側に柵が設けられている。柵は西から南北を囲むように続くが東側には見られない。門の左に高殿らしい寄棟の大きな建物がある。門を入って右側にある切妻の建物は日払所と注記されている。高殿らしき建物から広場を挟んで塀際に、長屋または倉庫のような片流れ屋根の建物がある。日払所の反対側奥には、入母屋風の屋根で、縁側の付いた家があり、その右奥には小屋のような建物が３軒ある。入母屋風の建物から少し離れた、斜面際には支柱で補強した塀または柵がある。

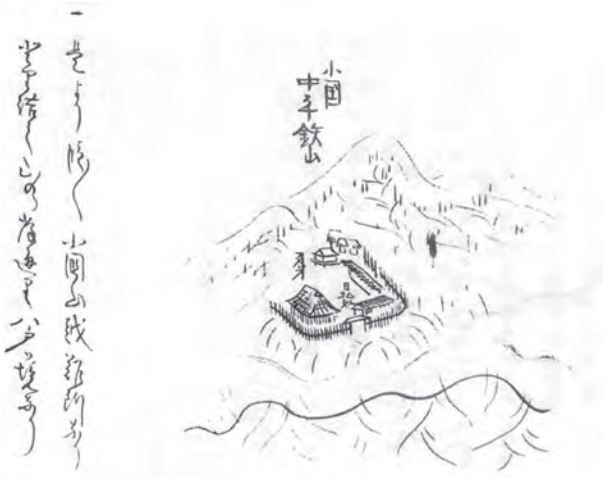


図４　小国中平鉄山絵図

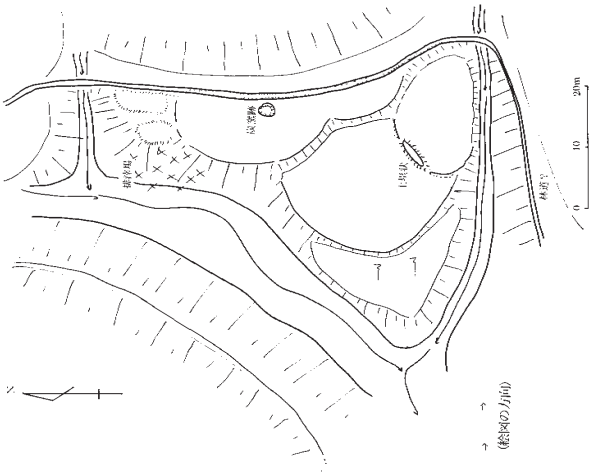


図５　中平鉄山跡見取り図（↑絵図の方向↑）

門を中心に、柵で囲われた範囲は、高殿の大きさを基準にすると南北・東西とも2.5倍ほどのように見える。仮に高殿の大きさを12m×14mとすると、30m×35m(1,050㎡)程になる。また、高殿の隅は丸みを帯び丸打ちの可能性もあるが、確定できない。

【現地の見取り図解説】

中平鉄山の前を通る街道は、沢の東側に沿っていたようである。絵図と方向を合わせてみると、排滓場の位置から高殿の位置は炭窯跡の窪みの北西付近と思われるが、絵図の入母屋風の建物や柵の位置は、現在の林道かその奥の山際になり、近接しすぎている。絵図全体の描き方が、南東方向にずれているのかもしれない。また南西側の平坦地は現状では約１ｍ低くなっているが結構広く感じた。しかし、絵図には描かれていない。上の平坦地の面積だと400㎡くらいしかなく、不自然であり、段差を考えず絵図を少し右に回転させると良さそうである。

沢の南斜面には、旧道があり、中平鉄山跡よりは低いレベルではあるが、絵図のような展望が認められる。高殿跡付近から沢にかけては大きな塊となった炉壁や鉄滓が多量にみられるが、鍛冶滓や羽口片は周辺で確認できなかった。

(３)「大被(おおひらぎ)鉄山」

３月27日　昨夜より大雨で車軸を流す程である。

１．下戸鎖は馬継の場所で家が19軒ある。ここは八戸領境から３里(約２㎞)隔たっている。木売内より下戸鎖迄７里(約4.6km)、ここから宇部迄15里(約9.8㎞)である。

１．白石峠に登ると、東海(太平洋)が眼下に見える。この尾根筋が下戸鎖と宇部の村堺である。そこから難渋する下り坂を進み、左側に大被鉄山がある。

１．大被鉄山の砂鉄は細野の端神から掘るとのことである。

是より山の中を次第に下っていく。坂の名を長坂という。

１．木売内から宇部迄の里数は近いけれども大風雨のため未の下刻(15時ころ)到着

【絵図の解説】

地図の道は、ナメリ川に沿って(北へ)下り、左岸にある大被鉄山の門に向かっているように見える。沢には「この沢水宇部に入る」、道には「ウベ道」とあり、左上には「大被ヲ鉄山」とある。

門の両側に柵があり、入って左手に高殿と思われる寄棟の建物がある。右側に３軒、後ろに２軒の小屋があり、小屋の後ろはすぐ崖になっている。門の左側には切妻の建物が２軒連なり、広場を挟んで高殿の後ろ左にも切妻の長い建物があり、後ろに小さな建物が２軒、間隔を置いてある。また、広

場を囲う様に、奥には入母屋風で、玄関と縁側が付く建物がある。さらに奥には切妻の長い建物がある。高殿の大きさを基準とすると東西が３倍、南北が５倍の広さのようである。高殿の大きさを12m×14mとすると36m×70m(2,520㎡)程となる。また､高殿の隅が丸みを帯びているようにも見えるが、丸打ちと断定できない。門のすぐ左手の建物が小国中平鉄山の例から日払い所の可能性もある。

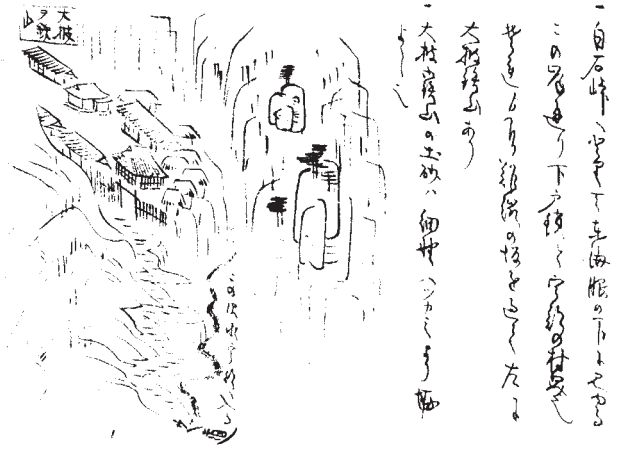


図６　大被鉄山絵図

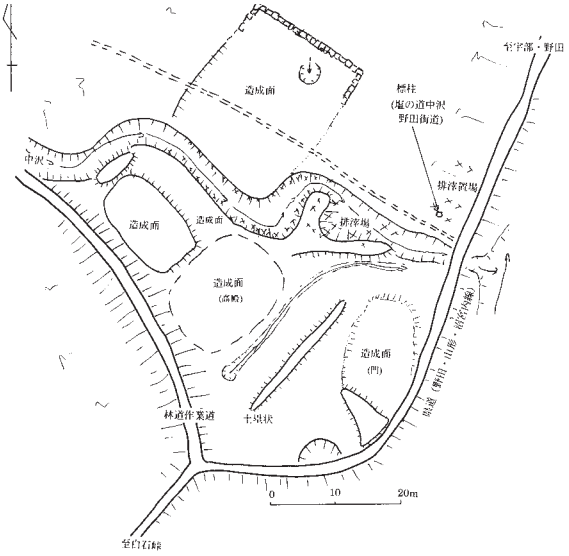


図７　大被鉄山跡見取り図（↑絵図の方向↑）

【現地の見取り図解説】

現在の道路(県道29号　沼宮内山形野田線、沼宮内野田街道)は白石峠から沢沿いに下り、大被鉄山の東側を巻くようにナメリ川沿いに通じている。大被鉄山の手前から西に向かって林道作業道が作られている。また、絵図には描かれていないが、鉄山の北側には中沢という沢が流れていて、本流と合流する手前が大きな排滓場になっている。中沢入口北側には｢塩の道中沢　野田街道｣という標柱が立っており、その周囲にも鉄滓が多く堆積している。

排滓場の位置から中央の造成面が高殿位置と思われ、北西の造成面が広場となり、その端に入母屋風の建物があったようである。高殿の東側の造成面は建物が建つのに十分な広さはあるが、途中にある土塁状の施設や湧水が気になる。また高殿後ろ側の建物も排滓場との間に位置すると、空間が狭すぎるような気がする。絵図が正確に描かれているとすれば、空間配置に無理が生じる。

また、中沢の対岸(北側)にも造成面が形成され、北側は石垣で補強されている。排滓はこの造成面付近まで沢の両側に見られ、南側には鍛冶滓も混じる。嘉永六年の一揆で破壊された後に再建されたので、以前は沢の北側にも高殿をはじめとする施設があった可能性もある。しかし両側から排滓した結果というより、沢を埋めるほどの排滓が堆積していたと考えたほうがよさそうである。中沢の南側の面積は1,600㎡ほど、北側の造成地は400㎡ほどの広さである。

(４)｢室場御鉄山｣

４月２日

１．これより閉伊坂という難所の坂を越える。

雪が深いため、馬で行くのが困難である。ここは南部の閉伊坂と土地の人は言っている。この坂を登ると山の上は平坦となり、そこは板橋という。

(略)

１．七滝、中室場、菅窪を検分した。

1．中室場から少し東北の方に、室場御鉄山がある。

1．鉄砂のある所を探してみると、その辺に白い砂ばかりで鉄砂とは見えないけれども、これを水に入れて、加減しながら樋に流せば、自然に鉄砂が沈んで、ただの白い砂は流れて分かれる。このように流すため、数十里先の山々に堰を廻して、自然に山の上に水を導く。これを切流しという。切流しを懸けた水は田に用いると稲に悪いので、用水にする沢などは田地の差支えになると言って、鉄砂を掘らせないとのこと。

1．切流しの堰のように山の上に水を上げれば、たいていの所は新田開発ができそうに思えるので、さっと絵に描いた。

(略)

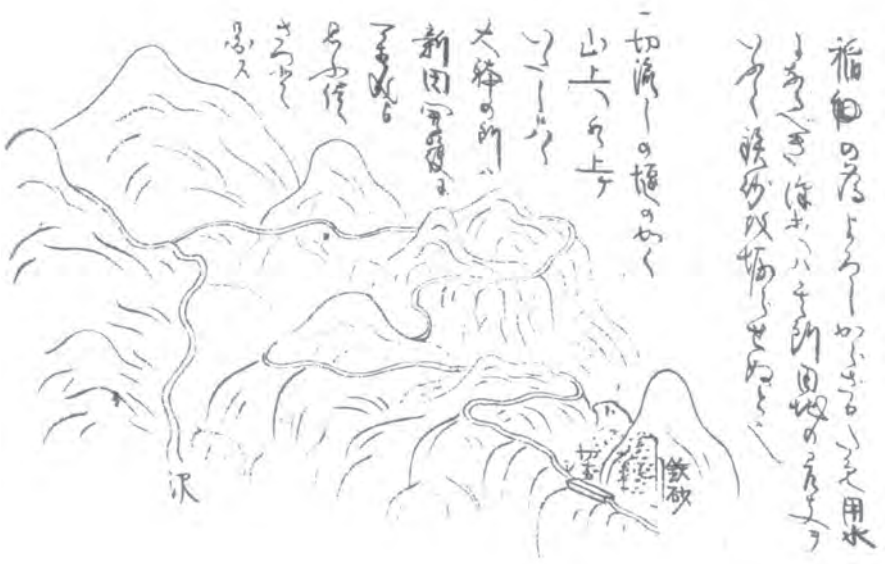


図８　室場鉄山切流しの絵図

【絵図の解説】

高い山の左側の沢の途中から水路を設けて、山腹を延々と水路で運ばれた水が、近くの山頂付近から切流し場に導かれ鉄砂を流している。切流し場には「鉄砂」と書かれた崖状の表現、「切ナガシ」と書かれた箱状の施設が見られる。

この旅行記では、七滝から室場をとおり菅窪に戻ったような記載なので、七滝方面から見た絵図と思われる。現在の沢の大きさや周辺の地形から見ると沢は松前沢ではなく、その南側の支流ヒルハタ沢と思われる。図の中の高い山は県道173号(田野畑岩泉線)の上室場と沢中間の峠の東250m付近のピーク(592.4m、図９の２)と思われるので、現在の大谷地付近の小さな峠から(株)甘竹田野畑の工場後ろの尾根付近(図９の１)から見て書いたようである。東に流れ下る寺地沢の標高430m付近(450m付近から上流でヒルハタ沢となる)から水路を引いているようで、鉄山集落の南西750m付近の住宅の裏側の切通し付近(図９の４)が切流しの場所に相当すると思われる。

但し、現在の地形図上は山の頂をぐるりと迂回するような水路の痕跡は見られない。この付近の山腹には、水路跡を利用したような林道作業道が等高線に沿うようにあるが、水路跡と断定はできない。風化花崗岩を削って作った宅地は、かつての切流し場だった可能性もあるが、現在住んでる人には言い伝え等が残っておらず断定できない。

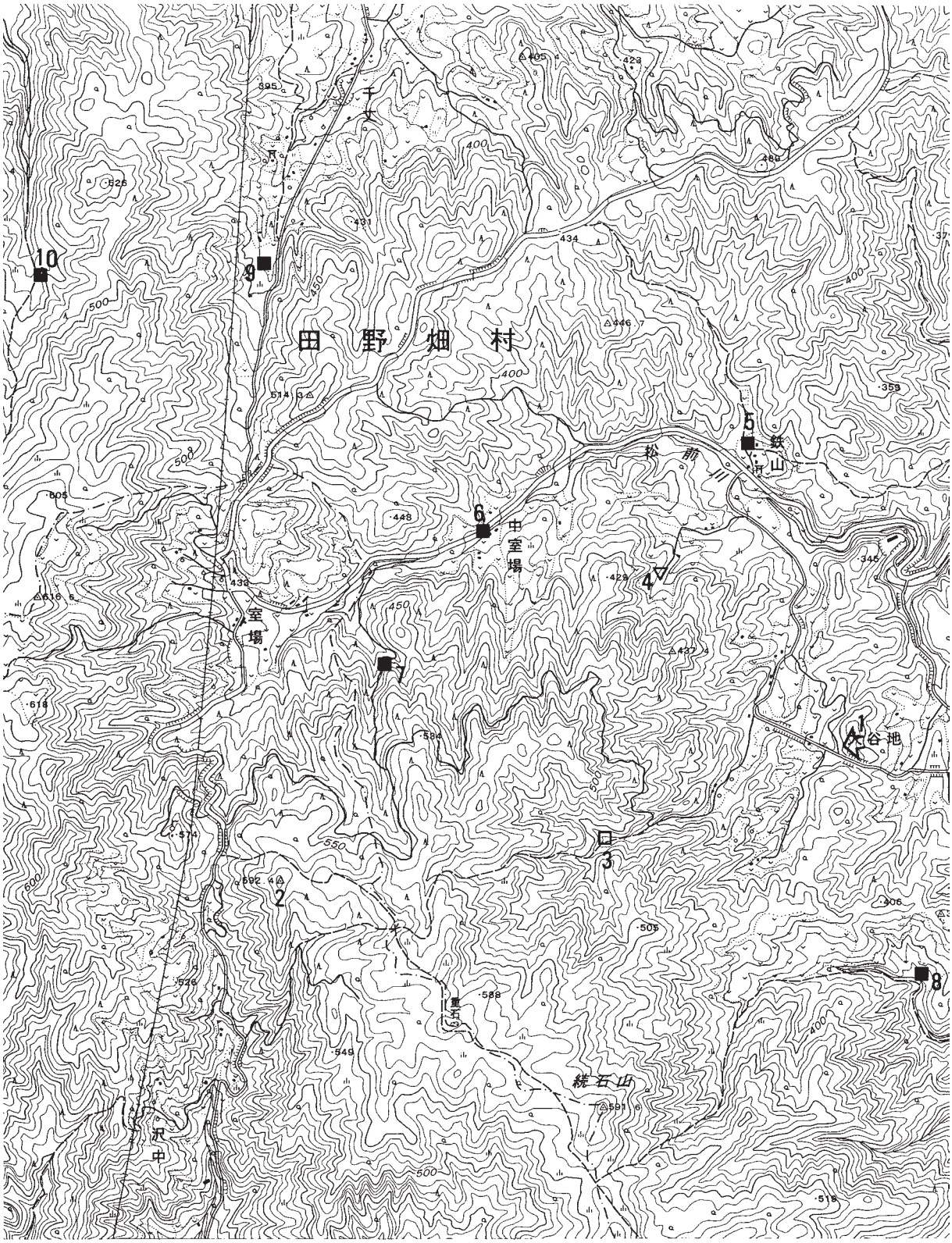


図９　室場鉄山跡周辺地形図

1：25,000 地形図　岩泉（いわいずみ）

NJ-54-13-1-4（盛岡１号 -4）

1　絵図の位置　　6　中室場鉄山跡

2　ピーク　　7　室場製鉄遺跡

3　取水場所　　8　目名瀧澤鉄山跡

4　切流し（想定）　9　千丈鉄山跡

5　室場鉄山跡　　10　小谷元鉄山跡

４月25日
１．沼袋より西の方に行く
１．ナツタケという坂がある。
１．千丈という所の山に切流し場の堰があって、室場鉄山で用いているとのことである。
１．上室場に家２軒、沼袋からここまで10里（約5.6㎞）
（以下略）
【解説】
千丈付近にも水路跡と思われる等高線に沿った段差や、切流しの露頭や、風化不足で取り残された花崗岩の礫塊が点在するところがあったが、現在下閉伊グリーンロードの工事で、ほとんど形跡が失われている。しかし、こちらも耕作地や牧草地など切流し後の跡地を利用していると見られる所が多く、北方には小谷元鉄山跡、三澤鉄山跡などもある。

３．絵図と現地の状況の比較

これまで、三閉伊日記に描かれた、たたら関係の絵図と現地踏査で作成した見取り図をもとに比較検討してみた。平庭鉄山・小国中平鉄山は八戸領、大被鉄山は盛岡領であるが、どちらの鉄山の構成も類似している。門があり、そこから両側に柵が設けられるが、柵は諸施設を全部囲っているわけではなく、途中で途切れている。平庭鉄山跡で、土塁状のものが現地では見られたが、絵図にはない。

絵図には高殿があり、門の近くに日払い所があり、倉庫のような建物の他に小屋や入母屋風の建物や縁側のある建物もある。また、絵図には描かれていないが、現地には他にも整地あるいは造成面があり、同時期かどうかわからないが、何らかの目的で活用されていたと思われる。高殿の構造も隅が丸い丸打ちの可能性があるが明確ではない。

また、どちらの遺跡にも鉄池は見られず、排滓場の沢に降りる通路もなく、高殿からシナ鉄を運び出して分割したとすれば、高殿内か広場で行ったと思われる。

排滓場の遺物は、平庭・小国中平鉄山跡は共に製鉄に関連したものだけで、鍛冶の関連遺物は見られないので、別の場所に銑鉄やシナ鉄を運んで精錬を行った可能性が考えられる。大被鉄山跡では鍛冶関連遺物も見られ、鉄山内で精錬も行っていたと思われる。

切ナガシについては、八戸藩でも文政十一年（1828）に久慈の滝山鉄山を作った時には、続き山の大渡に切流しを作って効率よく砂鉄を集めている（註１）。また、天保四年 (1833)久慈の宇根取では、百姓たちの苦情から剪流方法による砂鉄採取をやめ、土場取としている（註２）。割沢鉄山手代小松屋貫平手控の『萬帳』（註３）では、砂鉄を掘る所は「鉄口」と呼んでおり、水で選別することは書かれているが、「切流し」の用語は使われていない。このほかにも八戸藩では金浜で、盛岡藩では普代浜で砂鉄を採取した記載があり、砂鉄の採取は切ナガシだけではないことがわかる。

現在、松前沢流域で水田が作られている中で、下流の七滝集落付近の面積が大きい。大谷地付近と寺地沢の中・下流に小規模な水田跡が見られるが、多くは休耕田になっている。

４．各遺跡の時代背景

平庭鉄山は天保十四年（1843）に大黒屋又兵衛平庭鉄山開発と出てくる（註４）。その後嘉永五年（1852）に小国・平庭鉄山切流しによる用水汚濁につき、葛巻村鉄山師大黒屋又兵衛・舛田屋徳兵衛が普請金を出している。また、徳兵衛は久慈から相馬請戸に向け鉏を積み出している（註５）。さらに安政四年（1857）には、繋鉄山の支配人を仰せ付けられ、名字帯刀御免になり、安政六年（1859）に繋鉄山を藩に

献上し、江刈鉄山を開発すとある。文久三年(1863)には遠別鉄山の開発を行っている(註6)。

平庭鉄山の操業期間は天保一四年(1843)～嘉永六年(1853)の10年間だった可能性がある。

このほかにも、田代村(葛巻)の三井屋籐兵衛が大野鉄の払い下げを受け、鍋や鎌を作り秋田に販売する独占権を握っていたなど、大々的な取引をしていた(註7)鉄山関連の豪商がいた。

なお、平庭周辺にも花崗岩が分布するが、平庭・中平・あるいは繋鉄山の砂鉄の採掘場所は花崗岩地帯ではなく、長内川流域になる深田から荒津前一帯のドバの可能性が高い。繋鉄山や平庭鉄山などの原料砂鉄の供給も中平鉄山と同様と思われる。

大被鉄山は、小川村金枡屋儀助が経営していたが、嘉永六年(1853)五月の大百姓一揆で襲撃を受け破壊されてしまった。その後、室場鉄山の支配人岩泉の中村半兵衛により再建された(註8)ので、この絵図が書かれたのは再建間もない時期と思われる。

盛岡・八戸の両藩は、寛文四年(1664)に南部藩４代藩主の急逝後に成立したこともあり、製鉄技術の導入から改良については共通し、盛岡・八戸に分かれた後も技術交流が行われている。

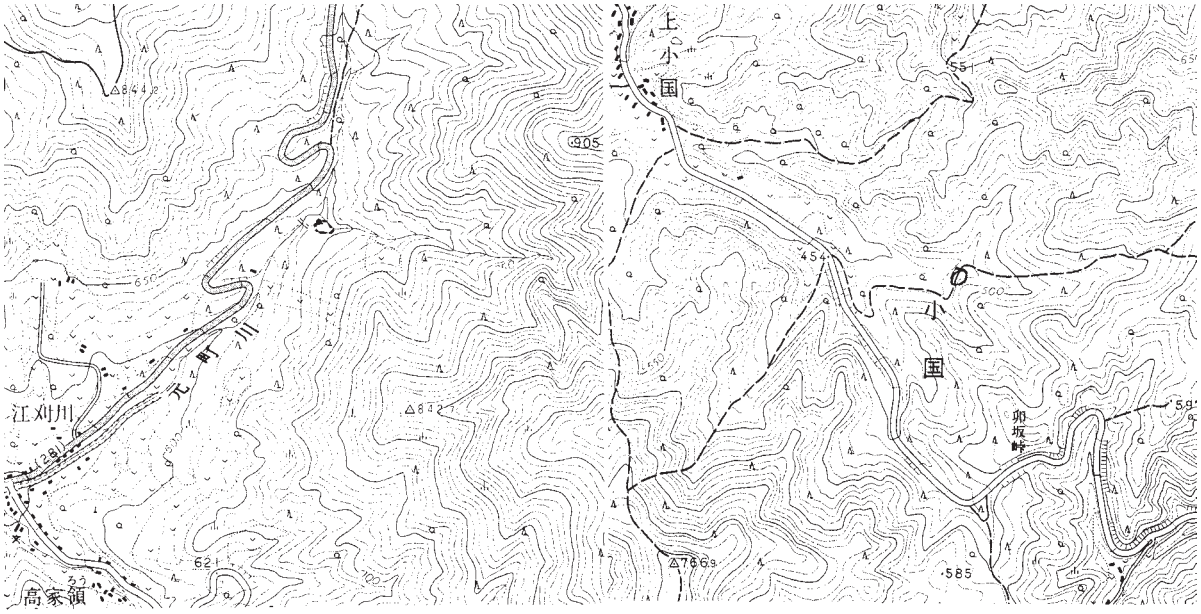
幕末頃の両藩の鉄山経営形態は、盛岡藩は御手山名義の藩直営で、実質的には豪商等の鉄山支配人が実態を担っていた。八戸藩は豪農・豪商による実質的民営であった。しかし、出資者は必ずしも自藩領の鉄山にのみ出資しているのではなく、盛岡領の室場鉄山や木子地鉄山でも盛岡の商人から八戸の商人に経営が代わるなど現実的な対応がなされていた。これらの商人の中には、鉄を他国に運ぶ廻船業も営むなど広い行動範囲と情報網を持つ商人たちがいた。

野田の中野勘左衛門が発明したとされる水車フイゴの発明も八戸・盛岡両藩に広がり、製鉄技術に両藩の違いはあまりないと思われる。しかし製鉄原料の砂鉄を花崗岩の風化したマサから採集していたほかに、八戸藩領ではドバと呼ばれる段丘砂鉄の利用が古くからおこなわれていた。そのため八戸領では赤水が鉱毒水として訴えの対象になっている。ドバ砂鉄とマサ砂鉄による製品の品質にどれだけの違いがあったかは不明であるが、盛岡領の鍛冶屋からは八戸藩の延鉄の方が評判が良かったようである(註9)。

三閉伊日記中の室場鉄山付近の切流し水路の表現は多少オーバーではあるが、山腹に作られた水路を利用して、切流しを行っていること、その跡地が水田として利用できるという着眼は正確である。実際の水田面積は現在の基準では決して広いとは言えないが、当時の厳しい自然状況から、谷あいに開かれた小さな水田も貴重な存在だったと思われる。水路跡のあったと思われる付近の山には花崗岩の風化した巨礫が目立ち、表土が薄く、過去に表土が失われた形跡を示すところもある。マサ土は崩壊しやすいので、既に崩落して水路の痕跡が残っていないことも考えられる。

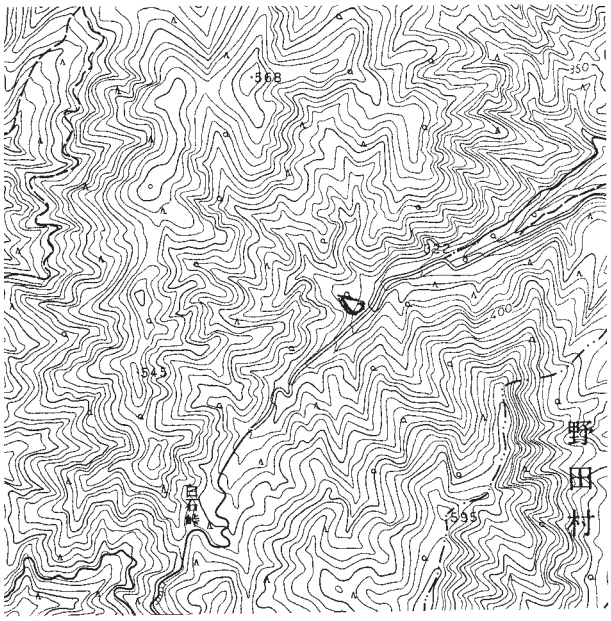
高炉製鉄が行われるようになった明治以降もたたら製鉄は行われ、砂鉄の掘削願いや許可の記録もあり、田野畑村でも掘削が行われ、その人工改変地形の痕跡はカナホッパという名称で残っている。それは、必ずしも水路を近くまで引き込んで切流した様な地形ではなく、数メートルから十メートルくらいの溝が連続しており、水路まで掘削土を運んで水で洗って砂鉄を分離したようである。その周辺には、風化が進んでいない花崗岩の巨礫が残されている。現在その痕跡は、風化花崗岩地帯の各地で見られ、杉の木が生えているところが多い。カナホッパという呼び方は、砂鉄を掘った場所だけでなく、砂金を掘った場所にも使われ、水流の近くに礫が数mの畝状の連続する地形として残されている。

田野畑村で最初に開田したのは七滝地区で、小野寺敏さん(元村議)の父親が70年前(昭和20年頃)に大変な苦労をして行い、その時の水路跡が七滝地区にかすかに残っている(写真e)。それよりも90年も昔の嘉永七年の痕跡が明瞭に残っているところは極めて少ないようである。



平庭鉄山（ひらにわてつざん）跡
1：25,000 地形図　安家森（あっかもり）
NJ-54-18-8-4（八戸 8 号 -4）

小国中平鉄山（おぐになかたいてつざん）跡
1：25,000 地形図　端神（はしかみ）
NJ-54-18-8-2（八戸 8 号 -2）



大被鉄山（おおひらぎてつざん）跡
1：25,000 地形図　岩瀬張（いわせばり）
NJ-54-18-8-1（八戸 8 号 -1）

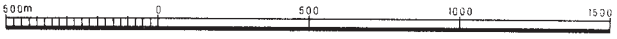


図 10　平庭鉄山跡・小国中平鉄山跡・大被鉄山跡位置図

５．まとめ

江戸時代の製鉄を描いた図やたたらの技法を伝える書は、たたらの本場ともいえる中国地方には比較的多く残されているが、南部鉄器に代表される鉄産業地の南部領にはきわめて少ない。軽米町淵沢家の「御鉄山日記」や岩泉町早野家文書の「萬帳」が技術や経営を伝える手控え書として残され、貴重な存在である。製鉄の状況を描いた大槌町小林家の製鉄絵巻や岩泉町佐々木家の４合吹き掛図、そのほかに絵馬なども残っているが、操業の様子が部分的にわかるものの、建屋を伴わない表現が多く、鉄山の全貌を描いているのは三閉伊日記だけと言ってもいい。

三閉伊日記は、土地の記録と共に風景を記録した旅行記であるが、その土地の特徴を的確にとらえて記録している。山や谷は強調して描かれていることが多いが、かえってその特徴があらわされており、背景の山容が現地形とよく似ている。現地の見取り図を作成してみて、建物の配置や全体の広さが大体適切と言えそうである。

また､鉄山は「カコイ」と呼ばれ､山内に自由に出入りできないように柵で囲われていたというイメージがあったが、実際はそれほど厳重に区画されて管理されていたのではないことが明確になった。

北上山地には近世以降の製鉄遺跡が100か所以上あると言われているが、同時に操業されたのではないことは確かである。江戸時代後期の八戸藩では大野六鉄山(大谷、玉川、葛柄、金取、水沢、繋、滝など時により入れ替わっていた)、盛岡藩では五鉄山(室場、割沢、翁沢、板橋、北(田名部))と呼ばれているが、代表する鉄山が同時に稼働していたわけではない。実際は２・３の鉄山が同時に稼業していて、砂鉄原料の確保や労働者の補充に苦労している。

現在過疎化が急速に進み、かつての鉄山跡の集落も消滅しているところがあるが、今なお多くの遺跡が山野に眠っているのは確かである。今後これら多くの遺跡が調査される機会があった際に、この報告がいくらかでも参考になれば幸いである。

最後に、文献等の照会に協力をいただいた菊池正則氏、カナホッパ等を一緒に歩いて解説していただいた小野寺敏氏、菊地純一氏、佐々木哲夫氏に感謝申し上げます。

註１　種市町史編纂委員会,2001:『種市町史第３巻資料編３ P219』, 種市町.
註２　種市町史編纂委員会,2001:『種市町史第３巻資料編３ P312』, 種市町.
註３　平船圭子編：2006, 早野家文書『萬帳』, 岩泉町立図書館.
註４　森嘉兵衛:1994,『陸奥鉄産業の研究』, 森嘉兵衛著作集第３巻, 法政大学出版局.
註５　八戸勘定書日記
註６　八戸勘定書日記、『大野村誌第二巻資料編 p430』
註７　森嘉兵衛:1966,『近世山村構造変質の研究』.
註８　森嘉兵衛:1975,『九戸地方史下巻 p504 』, 九戸地方史刊行会.
註９　森嘉兵衛:1975,『九戸地方史下巻 p560 』, 九戸地方史刊行会.

写真ａ　平庭鉄山跡遠景

写真ｂ　中平鉄山跡遠景

写真ｃ　大被鉄山跡遠景

写真ｄ　大被鉄山跡遠景（北側から）

写真ｅ　七滝水路跡

写真ｆ　寺地沢流域遠景

軽米町大鳥Ⅰ遺跡墓壙出土の銭貨の成分分析

阿　部　勝　則

軽米町大鳥Ⅰ遺跡の墓壙から出土した銭貨３点の成分分析を行った。いずれも Cu-Sn-Pb 系（青銅）であるとの結果を得た。

１．はじめに

軽米町大鳥Ⅰ遺跡の調査で確認された RD51 墓壙は、遺構の形状や出土遺物から 16 世紀代の墓壙と推測された。RD51 墓壙からは、人骨のほか、副葬品として鉄製の内耳鉄鍋１個と手鎌１丁、漆被膜１枚（漆椀？）、緡銭１本が出土した。緡銭の枚数は 93 枚である（註１）。その後、筆者は中世の出土模鋳銭について報告する機会があり、本資料について改めて検討したことがある（註２）。その際、銭貨３点について、（株）日鐵テクノリサーチに拠る成分分析を行ったが、報告では紙数の制約があり、文章に拠る結果のみの提示に留まり、その根拠となる数値・図・写真などの分析データは掲載できなかった（註３）。少し時間が経ったが、今後、模鋳銭の成分分析について検討する資料を蓄積することを目的として、今回この銭貨３点の成分分析の結果を紹介する。

２．緡銭の特徴

緡銭１本を構成する銭貨 93 枚の内訳は、洪武通寶６枚、無文銭 87 枚で、すべて鋳写しで造られた模鋳銭と考えられる。全体に占める無文銭の割合が 93％と高く、また、輪銭（いわゆるリング銭）と呼ばれる粗悪な鐚銭（ビタ銭）が多く含まれる特徴がある。銭貨 93 枚の総重量は 46.7 ｇで、緡としての長さは、銭貨 93 枚の厚さの合計値から算出して、約 7.0㎝と推定される。

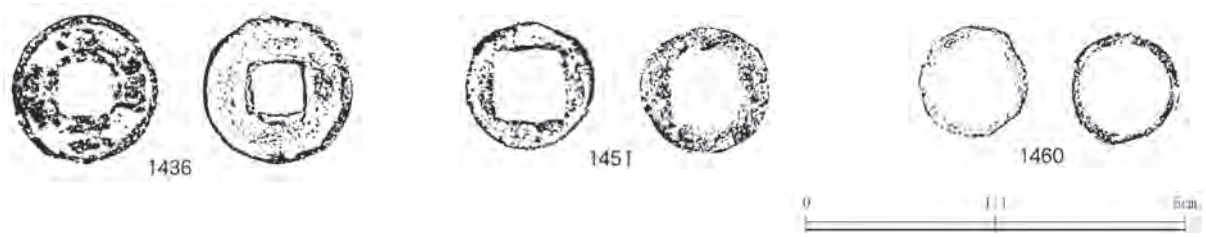
模鋳銭は、鋳写しによって大量生産されたと考えられている銭貨である。模鋳銭の形態的特徴と鋳写しの工程については、本澤 1998・永井 2001・嶋谷 2001 などに詳しい。本資料については、本澤 1998 の分類を基に次のように細分した（註４）。

・Ⅰ類：銭名を有する銭。不鮮明でも銭名が読みとれる有文銭。
・Ⅱ類：無文銭で、穿の形状が方形を呈する方形穿。
・Ⅲ類：無文銭で、穿の形状が隅丸方形に類似し、辺が張り出す隅丸胴張穿。
・Ⅳ類：無文銭で、穿の形状が円形になる輪銭（リング銭）。

鋳写しを繰り返すことで、Ⅰ類からⅣ類へと変化し、銭名は不鮮明になり、法量が小さくなることが指摘されている。本資料における法量の変化を例示する。外径は、Ⅰ類・Ⅱ類は 20㎜前後が多いが、Ⅲ類・Ⅳ類は 15 ～ 10㎜前後になる。穿辺の長さは、Ⅰ類・Ⅱ類は６～ 10㎜前後で、Ⅲ類・Ⅳ類は８～ 11㎜前後である。鋳写しを繰り返すことにより、外径は小さくなり、穿辺の長さは大きくなり、穿の角が取れることで、穿の形状が方形から隅丸方形、円形へと変化し、全体として輪の形状に近づいていく。厚さは、Ⅰ類は 0.5㎜以上が多いが、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類は 0.5㎜以下になる。重量は、Ⅰ類が 1.0 ｇ以上、Ⅱ類・Ⅲ類は 1.0 ｇ未満、Ⅳ類は 0.5 ｇ以下である。工程による分類では、銭貨 93 枚のうち分離した 40 枚の内訳は、Ⅰ類６枚（洪武通寶）、Ⅱ類７枚、Ⅲ類７枚、Ⅳ類 20 枚である。

分析試料は、Ⅰ類の洪武通寶（報告書掲載№ 1436、法量：外径 20.0㎜、厚さ 0.80㎜、重量 1.32 ｇ）・Ⅲ類の無文銭（同№ 1451、法量：外径 17.3㎜、厚さ 0.50㎜、重量 0.52 ｇ）・Ⅳ類の輪銭（同№ 1460、法量：外径 15.0㎜、厚さ 0.50㎜、重量 0.26 ｇ）の３点で、それぞれ鋳写しされた模鋳銭の各工程（Ⅰ→Ⅱ→

Ⅲ→Ⅳ）を示す分類の特徴を有する銭貨として、分析試料に選択したものである（註５）。



銭貨拓図

３．分析結果

３点とも Cu-Sn-Pb 系（青銅）との結果を得た。詳細は分析結果（Ｐ 131 ～ 134）を参照されたい。

４．おわりに

大鳥Ｉ遺跡墓壙出土の銭貨の成分分析の結果は、模鋳銭の可能性が高いと推測される（註６）。今後は､模鋳銭を外観･法量と成分から総合的に分類･識別し､他の事例との比較検討を進めたい（註７）。

註

⑴『大鳥Ｉ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 290 集。

⑵阿部 2000。発表資料では、緡銭１本を構成する銭貨について、概観・法量に拠る分類、二つの輪銭が連なった輪銭（掲載№ 1459）の状態、成分分析の結果について発表した。なお、無文銭に関する要旨は次のとおりである。岩手県では、銭名を有する銭の出土分布域に差があり、洪武通寶は馬淵川流域に多く、永楽通寶は北上川流域に多い。無文銭は馬淵川流域に多く、輪銭は洪武通寶に伴って出土していることから、出土分布域が重なる洪武通寶と無文銭は密接に係ると推測した。銭鋳型が確認されていない岩手県北の銭生産の様相として、洪武通寶の鋳写しの工程で無文銭が生産されていることを推論した。

⑶発表を成文化した記載内容は次の通りである。「今回、(株）日鐵テクノリサーチに依頼して、大鳥Ｉ遺跡出土の銭について、洪武通寶の名のある銭と無文銭と輪銭の三種類を選んで成分分析を行ってみました。分析方法は EPMA の定性分析で、いずれの銭も銅と錫と鉛の三元素からなる青銅銭（Cu-Sn-Pb）であることが判りました。」（阿部 2001.pp108）。

⑷阿部 2000。

⑸今回、№ 1436・1451・1460 の銭貨３点を実見し、法量を再計測した。報告書と異なる場合は本稿が優先する。

⑹嶋谷 2001 によれば、本銭の銅銭の成分比率は、銅（Cu）15（75%）・錫（Sn）4（20%）・鉛（Pb） 1 （５%）の配分からなる合金である。模鋳銭の成分比率は、銅の比率が高い Cu 系･鉛が入る Cu-Pb 系･錫が入る Cu-Sn-Pb 系に大別されており、生産地と消費地によっても銅銭の成分比率が異なることが指摘されている。大鳥Ｉ遺跡墓壙出土の銭貨の成分比率は銅 82 ～ 83%・錫５～８%・鉛３～６%の配分からなる Cu-Sn-Pb 系である。本銭と比較して銅の比率が高く、錫の比率が低い。

⑺嶋谷 2003 は、本銭と模鋳銭を識別する三大要素として、外観（裏面の平坦な状態）･法量（薄さ）･成分（本銭と異なる成分）を挙げ、識別には総合的な判断が必要であることを指摘する。この視点で出土銭貨を検討することが今後の課題である。

引用・参考文献

阿部勝則　2000「岩手県北の模鋳銭」『中世の出土模鋳銭－東北中世考古学会第６回研究大会資料集－』（pp27 ～ 32）

阿部勝則　2001「岩手県北の模鋳銭」『中世の出土模鋳銭』東北中世考古学会編、高志書院

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『大鳥Ｉ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 290 集

嶋谷和彦　2001「堺の模鋳銭と成分分析」『中世の出土模鋳銭』東北中世考古学会編、高志書院

嶋谷和彦　2003「模鋳銭の生産と普及」『戦国時代の考古学』小野正敏・萩原三雄編、高志書院

永井久美男　2001「模鋳銭の全国的様相」『中世の出土模鋳銭』東北中世考古学会編、高志書院

本澤慎輔　1998「東北地方に分布する鋳写しビタ銭について」『紀要』ⅩⅧ、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

調査・解析報告書

古銭の成分調査

（H0100001―C5HO）

大鳥Ⅰ遺跡出土古銭３種の成分分析を行った。その結果、いずれの調査試料とも Cu-Sn-Pb 系（青銅）の古銭であり、Zn は３試料ともに検出されなかった。一方、金属組成や微量元素濃度が３試料とも異なっていることから、同一材質・製造品とはいえなかった。

詳細は本文をご参照ください。

平成 12 年 10 月 26 日

（株）日鐵テクノリサーチ

１．目的

大鳥Ⅰ遺跡出土貨幣３点について、EPMA により成分分析を行う。

２．供試試料

№ 1436、№ 1451、№ 1460（報告書掲載番号）の３点。

３．調査内容

１）外観観察

装置：実体顕微鏡　SZ-40 型（オリンパス光学工業製）

２）EPMA 定性分析

装置：X 線マイクロアナライザー　JXA-8900 型（日本電子製）

条件：加速電圧；15 ｋ V

試料電流；0.10　μ A

ビーム径；40 μｍ　φ

４．調査結果

№ 1436

写真１に外観観察結果を、また写真２に露出した金属部分の反射電子像を示す。表面は緑紫色をおび錆化が進んでいるが、一部に金属質が露出している。写真２に示すように、金属組成は銅（Cu）を主体とする組織･鉛（Pb）と錫（Sn）を主体とする組織および鉛を主体とする組織の３相からなる。構成成分は表１に示すように、砒素（As）を若干含有する Cu-Sn-Pb 系（青銅）の古銭である。

No. 1451

写真１に外観観察結果を、また写真２に露出した金属部分の反射電子像を示す。表面は緑紫色をおび錆化が進んでいるが、一部に金属質が露出している。写真２に示すように、金属組成はNo. 1436 の古銭と同様の合金相で構成されているが、非常に細かな合金相組成を呈する。構成成分は表１に示すように、砒素（As）･銀（Ag）･アンチモン（Sb）を若干含有する Cu-Sn-Pb 系（青銅）の古銭である。

No. 1460

写真１に外観観察結果を、また写真２に露出した金属部分の反射電子像を示す。表面は緑紫色をおび錆化が進んでいるが、一部に金属質が露出している。写真２に示すように、金属組成はNo. 1436・1451 の古銭と同様の合金相で構成されているが、合金相が網目状に存在することが特徴的である。構成成分は表１に示すように、前記２種の古銭に比べ、砒素（As）・鉄（Fe）濃度が高いとともに、錫（Sn）と鉛（Pb）がほぼ同濃度の Cu-Sn-Pb 系（青銅）の古銭である。

表１　古銭の成分分析結果（EPMA；ｗｔ％）

	銅 Cu	錫 Sn	鉛 Pb	銀 Ag	鉄 Fe	砒素 As	アンチモン Sb	燐 P	硫黄 S
No.1436	83.6	8.3	6.5	nd	nd	0.9	nd	0.5	0.2
No.1451	88.0	5.6	3.1	0.4	nd	1.0	0.4	0.6	0.9
No.1460	82.4	5.2	6.4	nd	2.5	2.2	nd	0.6	0.4

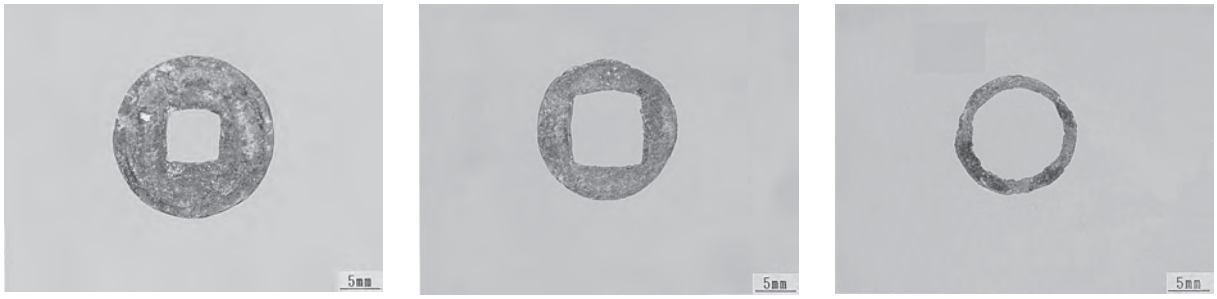
注）nd は「検出されず」を表す。

以上の結果、古銭３試料は成分構成ならびに金属組成が異なっていることから、同一材質・製造品とはいえない。

以上

調査・解析担当　伊藤　薫

(株) 日鐵テクノリサーチ　材料評価部
部長　山本　広一



No.1436　　No.1451　　No.1460

写真１　古銭の外観

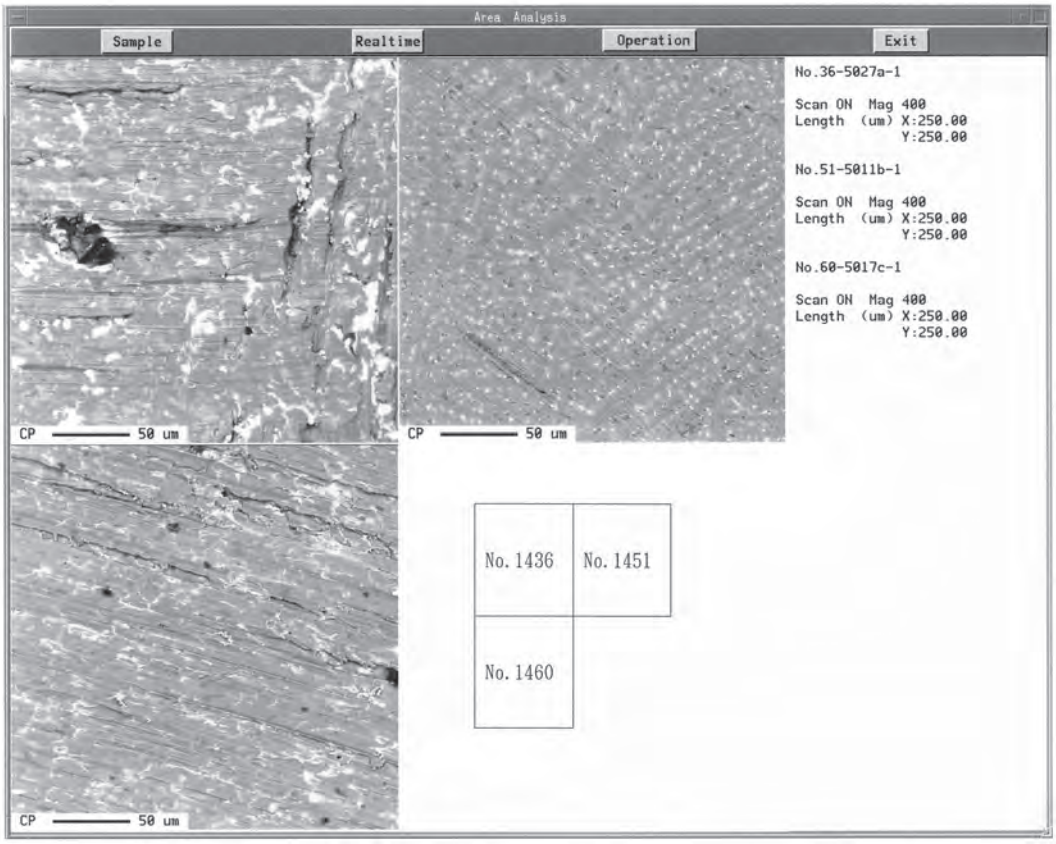


写真２　古銭の金属組成（反射電子像）

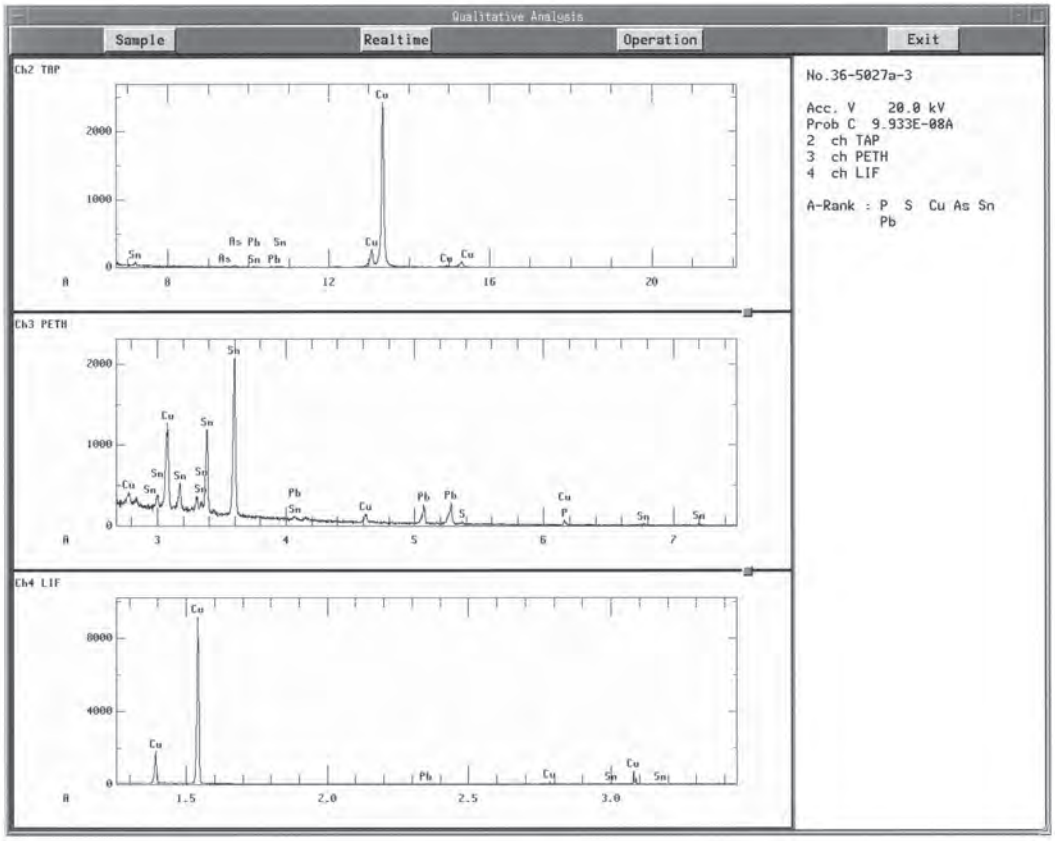


図１　No.1436 古銭の EPMA 定性分析結果

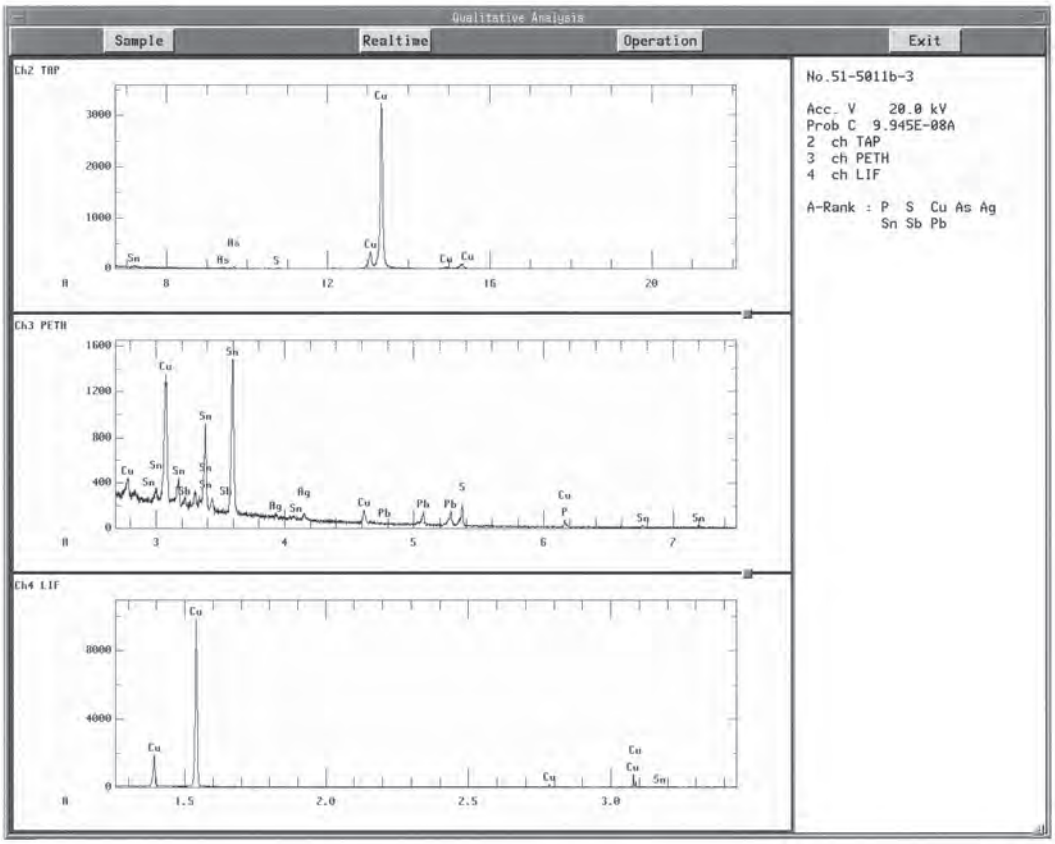


図２　No.1451 古銭の EPMA 定性分析結果

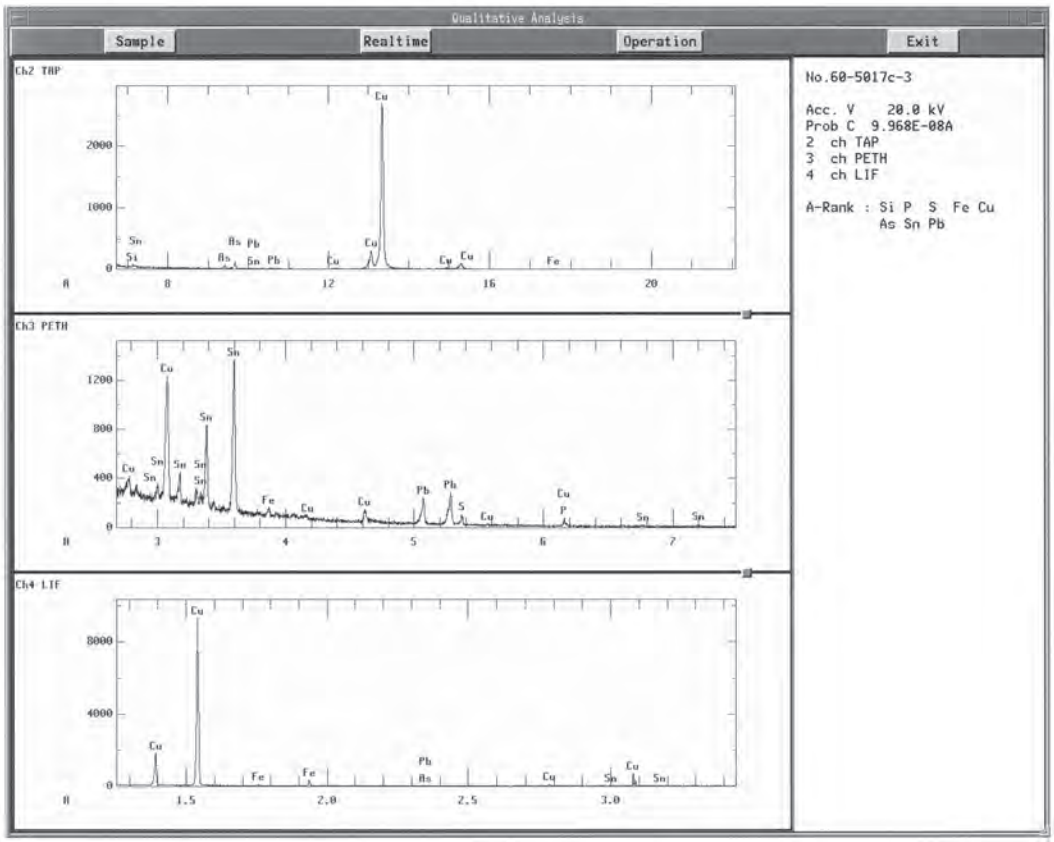


図３　No.1460 古銭の EPMA 定性分析結果

執筆者(五十音順)

阿部　勝則(あべ　かつのり)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子　昭彦(かねこ　あきひこ)　(公財)岩手県文化振興事業団博物館
河本　純一(かわもと　じゅんいち)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
((公財)大阪府文化財センターより派遣)
酒井　野々子(さかい　ののこ)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
佐々木あゆみ(ささき　あゆみ)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
佐々木清文(ささき　きよふみ)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
高木　　晃(たかぎ　こう)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
高橋　静歩(たかはし　しずほ)　花巻市博物館
村木　　敬(むらき　たかし)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
村田　　淳(むらた　じゅん)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
米田　　寛(よねた　ひろし)　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

紀要　第36号

(平成28年度)

印　刷　平成29年３月15日
発　行　平成29年３月24日

編集　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話　(019)638－9001
FAX　(019)638－8563
印刷　(有)小松茂印刷所
〒020-0025　岩手県盛岡市大沢川原二丁目５－37
電話　(019)623－6073

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2017

ISSN 0285-5712

BULLETIN OF THE RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURAL ARTIFACTS

VOL. 36

CONTENTS

Articles

A Study of the Rectangular Large-Sized House in the Early - Middle JomonPeriod,IwateArea
TAKAGI,Kou

Artifacts in Relation to Clay Figurines in the Tohoku Region of the Final JomonPeriod(2)
KANEKO, Akihiko

A Study of Red Colored Pottery from Kofun Period to Heian Period in Iwate Prefecture(1) -Mainly Materials in Ishida Ⅰ・Ⅱ Site,Furudate Ⅱ Site,Sengari Site-
YONETA,Hiroshi TAKAHASHI,Shizuho KAWAMOTO,Junichi SASAKI,Ayumi SAKAI,Nonoko

A Study of Glazed Ceramic Wares Excavated in North Tohoku Region
Analysis of Character of Ceramic Wares in Josaku Site
MURATA,Jun

Notes

A Study of Scraper Reduction from Orose Ⅰ・Ⅱ Site
MURAKI,Takashi

Pottery Paste of JomonWare Excavated in Iwate Prefecture(3)
KAWAMOTO, Junichi

A Study of Drawing Ironworks on Antiquarian Book “Sanheinikki”
SASAKI,Kiyofumi

Materials of Archaeological Reserch

The Component Analysis of Copper Coins from a Tomb in Otori Ⅰ Site in Karumai Town in Iwate Prefecture
ABE,Katsunori

AGENCY FOR CULTURAL PROMOTION
IWATE PREFECTURE
Mar. 2017